

佐久市埋蔵文化財報告書 第175集

まちづくり交付金事業 都市計画道路3.3.3号 原東1号線
埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市岩村田 弥生時代環濠集落・古墳・奈良集落の調査—

第1分冊

にし いっ ぼん やなぎ

岩村田遺跡群

西一本柳遺跡XIV

2010. 3

佐 久 市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書 第175集

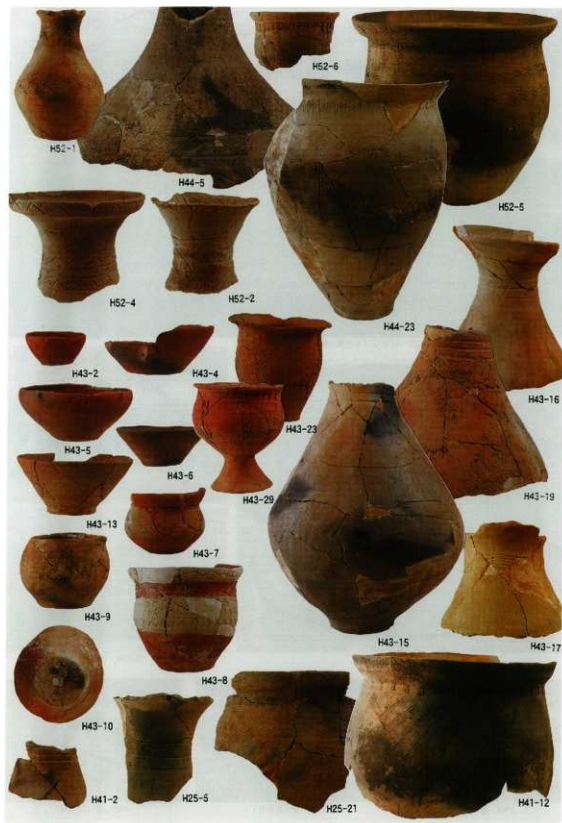
まちづくり交付金事業 都市計画道路3.3.3.号 原東1号線
埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市岩村田 弥生時代環濠集落・古墳・奈良集落の調査—

第1分冊
にし いっ ぼん やなぎ
岩村田遺跡群 西一本柳遺跡XIV

2010. 3

佐 久 市
佐久市教育委員会



弥生中期土器



西一本柳遺跡XIV 21~37グリッド全景(東より)



H41 完掘(南より)



上よりH50 炭化材・H29 完掘(南より)



H41 炉(北より)



H25 炉(北より)



H29 炉(北より)



H37号住居址



H9 完態(南より)



H9 炉(南より)



H9 ロームマウンド除去(南より)



H9 ロームマウンド切離(北西より)



H9 堀方(南より)



H3 完掘(南より)



H3 伊 炭化物層切開(西より)



H31 カマド(東より)



H31 カマド(南より)



H15 完掘(南より)



H15 完掘(北より)



F4とD8(南より)(白線はF8、左隣にF4)



D8 鉄滓(東より)



M11 完掘 (37グリッド北より)



M12 完掘 (北より)



M13 完掘 (22グリッドより南東を望む)



M11 遺物出土状況 (37グリッド 東より)



M13 遺物出土状況 (南より)



M14 セクション (東より)



M14 完掘 (21グリッドより西を望む)



M14 遺物出土状況 (南より)



北一本柳遺跡Ⅲ 75~83グリッド全景(東より)



H6 完照(南より)



H6-9. 高坪



H6-22. 壺



H31 壳燧(南より)



H33-9 鉄釘

H33-10 鉄釘



H31 P3柱痕プラン(北より)



H31 P3柱痕(北より)



H33 床下住居(西より)



H31 遺物出土状況(西より)



H33-9 鉄釘(東より)



北一本柳遺跡Ⅲ 38~48グリッド全景(東より)



H51 完瓦(南より)



H51 碓方(南より)



65



36 H51

35

4

19

3

7

9

68



H56 炭化材(北より)



H56 北壁の14壺(西より)



H56 完壺(北より)



19

21



1

16

14

23

H56



H61 遺物出土状況(北より)



H61 遺物出土状況(南より)



H61 遺物出土状況(東より)



H61 炭化豆(南より)



H61 堀方(北より)





D261 完器 (南より)



D263 遺物出土状況 (西より)



M17号溝址



M16 鉄鍔(南より) 手前はM17に切られる



M16 防備セクション(西より)



M16 防備(東より)



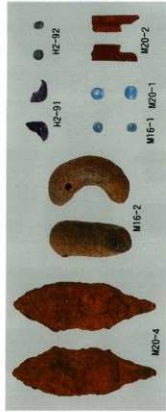
M16 防備(西より)



M17・M20 全層(東より)



M17・M20 セクション(東より)



北一本柳遺跡Ⅲ 鉄鍔・玉類



北一本柳遺跡Ⅲ 60～66グリッド全景(東より)



H113 11・12青磁碗(西より)



H113 完掘(西より)



11



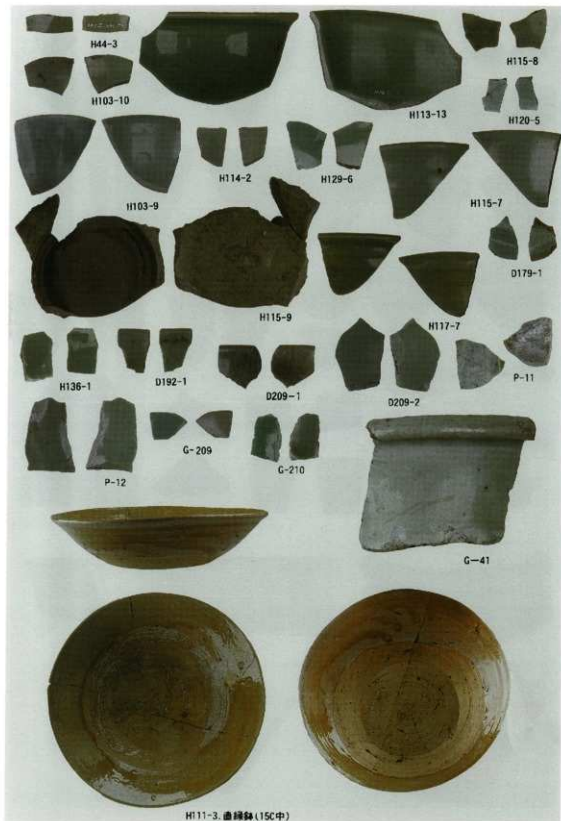
12

青磁碗 (H113-11・12)



H114-4 柄頭 (東より)

H117 光面 (北より)

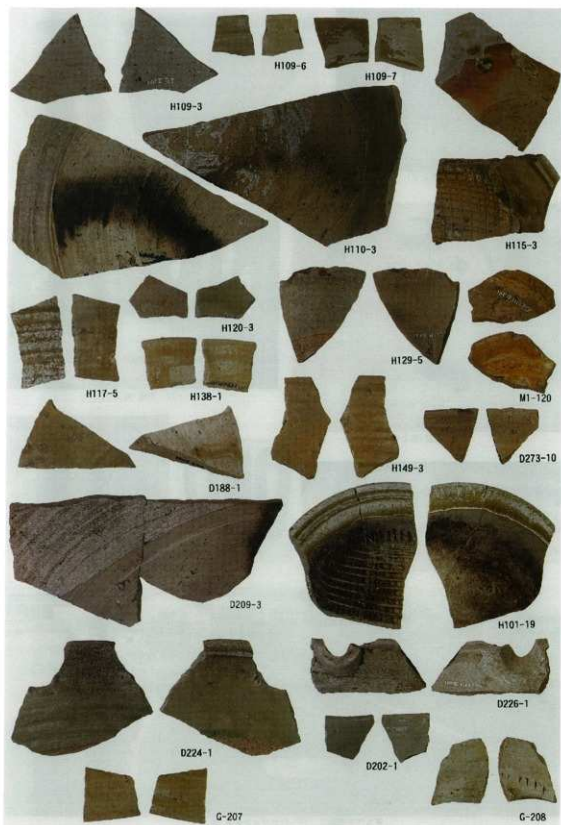


H111-3. 曲線鉢 (15C中)

北一本柳遺跡Ⅲ 青磁・白磁・古瀬戸



北一本柳遺跡Ⅲ 天目茶碗・茶壺・搦鉢・硯





H2 カマド(西より)



H 2



F3 完掘(東より)



F12 完掘(東より)



F5 完掘(北より)



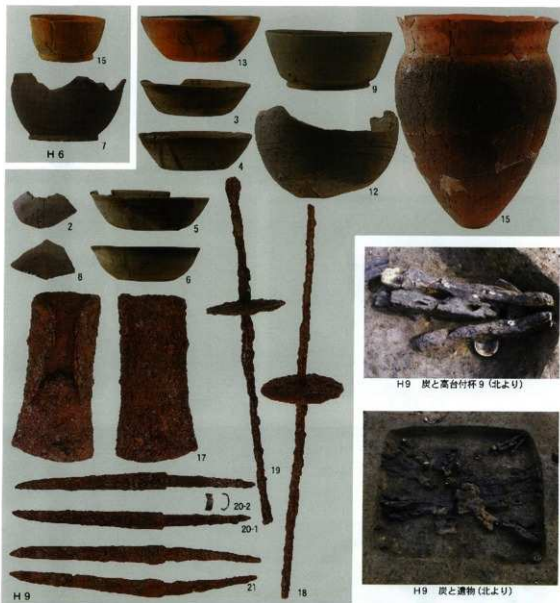
F5-1 (1:2)



F5-1青銅製口金物・F5P1出土状況(西より)



東大門先遺跡 II 13~17グリッド全景(南より)



H 9 炭と高台付杯 9 (北より)

H 9 炭と遺物 (北より)



東大門先遺跡Ⅱ 21~28グリッド全景 (北より)



D7 完掘 (北より)



D7 弥生前期壺

1



D6 完掘 (東より)



D6



東大門先遺跡Ⅱ 32～39グリッド全景 (西より)



H25 完掘 (南より 東側はH26堀方)



H26 完掘 (南より)



西八日町遺跡Ⅲ 18～28グリッド全景 (北西より)



西八日町遺跡Ⅲ 21～32グリッド全景 (東より)



西八日町遺跡Ⅲ 18～30グリッド全景 (西より)



H21 瓦甃 (南西より)



H21 カマド完甃 (東より)



H21 P4埋石 (東より)



H21 P12と銅物石 (南より)



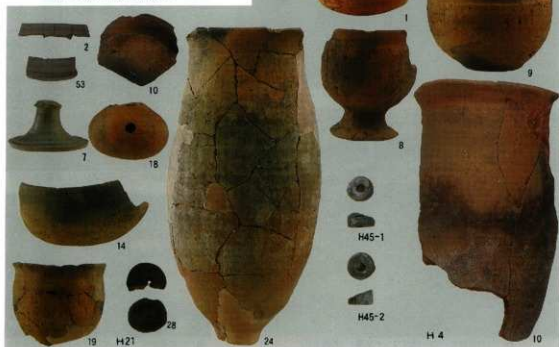
H4-21



H4 21管玉 (南より)



H4 管玉出土状況 (東より)





H29 完掘 (西より)



H5 完掘 (南より)



H29 カマド (南より)



H29 カマド煙道 (北より)



H5 カマド (南より)

H 5
・ H 29
・ H 52



H29

H 5

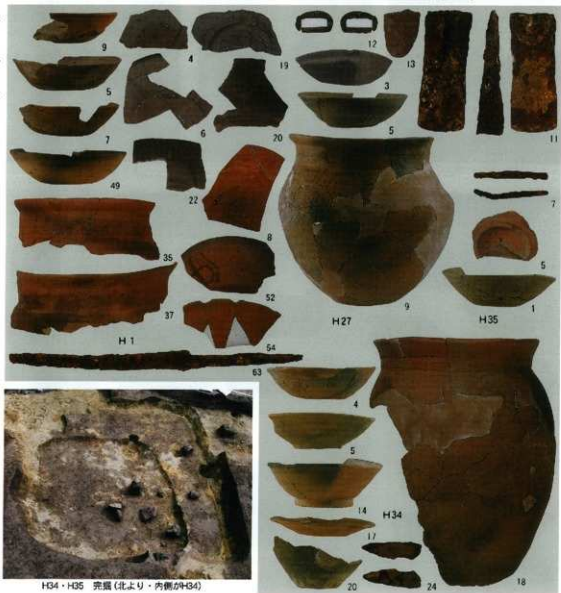
26



H1 遺物出土状況 (南より)



H27 瓦組 (南より)



H34・H35 瓦甕 (北より・内側がH34)



H20 遺物出土状況(南西より)



西八日町遺跡Ⅲ 墨書・刷書土器



西八日町遺跡Ⅲ 7～12グリッド全景 (南より)



西八日町遺跡Ⅲ 35～40グリッド全景 (東より)



西八日町遺跡Ⅲ 17・18グリッド全景 (北東より)



西八日町遺跡Ⅲ 13～16グリッド全景 (南より)



西八日町遺跡Ⅲ 4・5グリッド全景 (北より)



M11-12
1. 口輪 縄文→結付文
胴部 縄文→ヘラ捺線瓦文



4. 胴部 ヘラ捺線瓦文
ヘラ捺線瓦文
結付文



8. 口輪 ヘラ捺線瓦文
胴部 ヘラ捺線瓦文



12. 胴部 ヘラ捺線瓦文
胴部 縄文→ヘラ捺線瓦文



M11-19
2. 口輪 縄文→ヘラ捺線瓦文
胴部 縄文→ヘラ捺線瓦文
肩状文 瓦片文



6. 胴上部 縄文→ヘラ捺線瓦文
鳥瓦文 ヘラ捺線瓦文
胴中位下 ヘラ捺線瓦文



9. 口輪 縄文
胴部 縄文→ヘラ捺線瓦文



13. 胴部 縄文→ヘラ捺線瓦文



M14-16
3. 胴上部 鳥瓦文(波状文→列状文)
胴下部 ヘラ捺線瓦文、ヘラ捺線
瓦文、黒石山形文



6. 胴中位 ヘラ捺線瓦文
ヘラ捺線瓦文



10. 胴部 ヘラ捺線瓦文 ヘラ捺線瓦文



14. 胴・胴部 無文 ミガキ



7. 胴下部 縄文→ヘラ捺線瓦文



11. 胴中位 縄文→ヘラ捺線瓦文
ヘラ捺線瓦文→胴部赤色塗彩



15. 胴部 ヘラ捺線瓦文→ヘラ捺線瓦文

1~15 西一本傳遺跡 XIV



1. 口縁 縦筋状文 肩帯 横筋状文 赤色塗彩

H14-6



2. 口縁 縦筋状文 肩帯 横筋状文 赤色塗彩

H37-16



3. 肩帯 縦筋状文-横筋状文 赤色塗彩

H39-11



4. 口縁内面 縦筋状文 赤色塗彩
 碗形 横筋状文+赤色塗彩帯+横筋状文 赤色塗彩

H46-3



H30-13

5. 肩帯 (ハコ型縦筋文+ハコ型斜点文)
 矢羽状文+横筋文 赤色塗彩

H39-16



6. 口縁 縦筋文 赤色塗彩



7. 肩帯 ハコ型縦筋文-
 ハコ型斜点文

1~5・9 西一本塚遺跡文存
 7・8 北一本塚遺跡文



8. 肩帯 縦筋状文+ハコ型矢羽状文



9. 肩帯 縦筋状文+横筋状文

H19-15



1. 口縁 縄文→櫛形波状文
胴部 櫛形波状文



5. 口縁 縄文→波状山形文
胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形斜走文 (縦羽目)



9. 胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形斜走文



12. 胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形斜走文 (縦羽目)



2. 口縁 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形斜走文 (縦羽目)



6. 口縁 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形斜走文 (格子目)



10. 胴部 櫛形波状文



13. 胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文→櫛形波状文



3. 口縁 縄文
胴部 縄文→コ字走文



7. 口縁 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文



11. 口縁 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文



14. 胴部 櫛形波状文
胴部 ヘツ横波状文→ヘツ横波状文



4. 口縁 ヘツ横山形文
胴部 コ字走文→柵付文



8. 口縁 縄文→ヘツ横波状文
胴部 櫛形波状文
胴部 櫛形波状文



1~14 西一本博遺跡 XIV



1. 口縁～胴部 螺旋波状文 (横走)



2. 口縁～胴部 螺旋波状文
胴部 螺旋波状文



5. 口縁～胴部 螺旋波状文 (横列状)



3. 口縁～胴部 螺旋波状文 (不規則な波状文)



6. 口縁～胴部 螺旋波状文 胴部 螺旋波状文



8. 口縁 螺旋波状文
胴部 螺旋波状文



4. 口縁 螺旋波状文+螺旋波状文
胴部 螺旋波状文 胴部 螺旋波状文



7. 口縁～胴部 螺旋波状文
胴部 螺旋波状文

2・4・6・7 西一本塚遺跡文
1・3・5・8 北一本塚遺跡文

例 言

1. 本書は佐久市都市計画課が行う、まちづくり交付金事業 都市計画道路3.3.3号 原東1号線造成工事に伴う発掘調査報告書である。全長約1kmにおよび、西より西一本柳遺跡XIV・北一本柳遺跡III・東大門先遺跡II・西八日町遺跡IIIとして調査した。本書はそのうちの第1分冊『西一本柳遺跡XIV』の報告書である。
第I章発掘の概要、第II章遺跡の立地と環境、第III章基本層序は4遺跡を第1分冊に一括記載している。

2. 調査原因者 佐久市都市計画課

3. 調査主体者 佐久市教育委員会文化財課

4. 遺跡名および所在地

岩村田遺跡群	西一本柳遺跡XIV (INPXIV)	佐久市岩村田字上樋田
"	北一本柳遺跡III (IKPIII)	佐久市岩村田字北一本柳・西大門先
"	東大門先遺跡II (I IH II)	佐久市岩村田字東大門先
"	西八日町遺跡III (INCI II)	佐久市岩村田字西八日町

5. 調査期間及面積

発掘調査 平成18年(2006)4月5日～平成21年(2009)11月20日

整理期間 平成18年(2006)4月5日～平成22年(2010)3月31日

調査面積	開発面積	22,572㎡ (延長1,026m、幅員22m)
	西一本柳遺跡XIV	4,700㎡
	北一本柳遺跡III	7,700㎡
	東大門先遺跡II	2,730㎡
	西八日町遺跡III	2,650㎡
	調査面積	計17,780㎡

6. 発掘調査の担当は以下の通りである。

西一本柳遺跡XIV	須藤 隆司・森泉かよ子
北一本柳遺跡III	森泉かよ子・小林眞寿
東大門先遺跡II	森泉かよ子・林幸彦・佐々木宗昭
西八日町遺跡III	森泉かよ子・上原学

7. 本遺跡の整理調査は、森泉が行い、石器については須藤が担当した。編集・執筆は森泉が行った。なお、陶磁器類は(財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、漆製品については同じく白沢勝彦氏、国立歴史民俗博物館 長嶋正春氏、弥生前期の甕・炭化豆については中沢道彦氏にご教示いただいた。ここに記して御礼申し上げます。

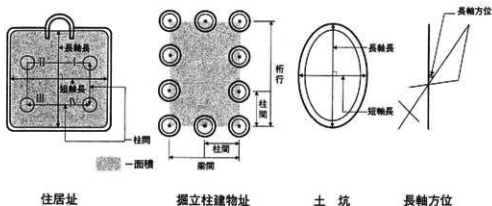
8. 本遺跡の出土遺物の保存処理・鑑定は以下の通りである。

金属製品・漆製品保存処理	株式会社 東都文化財研究所
樹種・種実鑑定・骨鑑定	バリノ・サーヴェイ株式会社

9. 本書及び本遺跡の出土遺物の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略号は以下の通りである。
 竪穴住居址・竪穴状遺構 (Ta) — H 掘立柱建物址—F 土坑—D 単独ピット—P
 溝址—M
2. 挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
 遺構—1/80 遺物—1/4 但し、石器は玉類・石鏃—原寸、打製石斧—1/3、
 敲石・磨石—1/4、大型品—1/6・1/8、鉄製品—1/2
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は1988年版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
5. 写真図版中の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。図版中の縮尺はほぼ挿図と同じであるが、異なるものもある。
6. 遺構の計測は下図に示した測定値である。
 竪穴住居の面積は床面積で、長軸長×短軸長で算出してある。
 長軸長と短軸長の差が1割を越えたものを長方形とした。



住居址

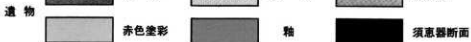
掘立柱建物址

土坑

長軸方位

7. 遺物一覧表の () は推定値、() 残存値、—は測定不可能であることを示す。
8. 本報告書挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

遺 構



目 次

巻頭図版	
例 言	
凡 例	
目 次	

第I章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査日誌	3
第4節 報告書の概要	5
第II章 遺跡の環境	7
第1節 自然環境	7
第2節 歴史的環境	7
第III章 基本層序	11
第IV章 西一本柳遺跡XIV遺構と遺物	15
第1節 竪穴住居址	15
1、弥生時代中期	15
2、弥生時代後期	37
3、古墳時代	66
4、奈良時代	84
第2節 堀立柱建物址	97
第3節 単独ピット	103
第4節 土坑	103
第5節 溝址	110
第6節 グリット	135
第V章 まとめ	136
第1節 弥生時代中期	136
第2節 弥生時代後期	140
第3節 古墳時代	142
第4節 奈良時代	142
遺構一覧表	136
遺物一覧表	161
付編1	
西一本柳遺跡XIVほかの自然化学分析 バリノ・サーヴェイ 千葉博俊他	187
I. 西一本柳遺跡XIVの自然科学分析	190
II. 北一本柳遺跡IIIの自然科学分析	200
III. 東大門先遺跡IIの自然科学分析	222
IV. 西八日町遺跡IIIの自然科学分析	236
付編2	
東大門先遺跡IID7出土弥生前期炭化豆 中沢道彦	250

西一本柳遺跡XIV

埴田目次

第1図	位置図	1	第45図	H37号住居址(2)	55
第2図	発掘区設定図	4	第46図	H37号住居址(3)	56
第3図	周辺遺跡分布図(1)	8	第47図	H38号住居址	57
第4図	周辺遺跡分布図(2)	10	第48図	H39号住居址(1)	59
第5図	基本層序模式図	12	第49図	H39号住居址(2)	60
第6図	西一本柳遺跡XIV全体図(1:500)	13	第50図	H39号住居址(3)	61
第7図	西一本柳遺跡XIV周辺遺跡聚穴住居址全圖 (1:1250)	14	第51図	H40号住居址(1)	62
聚穴住居址(弥生中期)					
第8図	H17・H21号住居址	15	第52図	H40号住居址(2)	63
第9図	H19号住居址(1)	16	第53図	H46号住居址(1)	64
第10図	H19号住居址(2)	17	第54図	H46号住居址(2)	65
第11図	H20号住居址(1)	18	第55図	H48号住居址	66
第12図	H20号住居址(2)	19	第56図	H49号住居址	67
第13図	H25号住居址(1)	21	第57図	H51号住居址	68
第14図	H25号住居址(2)	22	聚穴住居址(古墳)		
第15図	H27号住居址(1)	23	第58図	H 3号住居址(1)	69
第16図	H27号住居址(2)	24	第59図	H 3号住居址(2)	70
第17図	H28号住居址	25	第60図	H 4号住居址(1)	71
第18図	H29号住居址	26	第61図	H 4号住居址(2)	72
第19図	H41号住居址(1)	27	第62図	H11号住居址(1)	73
第20図	H41号住居址(2)	28	第63図	H11号住居址(2)	74
第21図	H42号住居址	29	第64図	H12号住居址	75
第22図	H43号住居址(1)	30	第65図	H15号住居址(1)	76
第23図	H43号住居址(2)	31	第66図	H15号住居址(2)	77
第24図	H44号住居址(1)	32	第67図	H16号住居址	78
第25図	H44号住居址(2)	33	第68図	H22号住居址(1)	79
第26図	H50号住居址	34	第69図	H22号住居址(2)	80
第27図	H52号住居址	35	第70図	H32号住居址	81
第28図	H53号住居址	36	第71図	H33号住居址	82
第29図	H54号住居址	37	第72図	H34号住居址(1)	83
聚穴住居址(弥生後期)					
第30図	H11号住居址(1)	38	第73図	H34号住居址(2)	84
第31図	H11号住居址(2)	39	聚穴住居址(奈良)		
第32図	H11号住居址(3)	40	第74図	H 5号住居址	85
第33図	H55号住居址	41	第75図	H18号住居址(1)	86
第34図	H 2号住居址(1)	42	第76図	H18号住居址(2)	87
第35図	H 2号住居址(2)	43	第77図	H10号住居址	88
第36図	H 6・H 7号住居址	44	第78図	H13号住居址	89
第37図	H 9号住居址(1)	46	第79図	H23号住居址	90
第38図	H 9号住居址(2)	47	第80図	H26号住居址	91
第39図	H14号住居址	48	第81図	H31号住居址(1)	92
第40図	H18号住居址	49	第82図	H31号住居址(2)	93
第41図	H24号住居址	50	第83図	H35号住居址	94
第42図	H30号住居址	51	第84図	H45号住居址	95
第43図	H36号住居址	52	第85図	H47号住居址	96
第44図	H37号住居址(1)	54	第86図	H56号住居址	96
			第87図	F 1・F 3・F 5号掘立 柱建物址	97
			第88図	F 2・F 9号掘立柱建物址	98
			第89図	F 4・F 6号掘立柱建物址、D 8号土坑	99
			第90図	F 8号掘立柱建物址	100

第91図	F10・F11号竪立柱建物址、 単独ピット(1)	101
第92図	単独ピット(2)	102
第93図	D4～D7・D9～D13号土坑	106
第94図	D14～D19号土坑	107
第95図	土坑出土遺物(1)	108
第96図	土坑出土遺物(2)	109
第97図	M3・M6号溝址	111
第98図	M11号溝址(1)	112
第99図	M11号溝址(2)	113
第100図	M11号溝址(3)	114
第101図	M11号溝址(4)	115
第102図	M11号溝址(5)	116
第103図	M13号溝址(1)	118
第104図	M13号溝址(2)	119
第105図	M14号溝址(1)	120
第106図	M14号溝址(2)	121
第107図	M14号溝址(3)	122
第108図	M10号溝址	123
第109図	M12号溝址(1)	124
第110図	M12号溝址(2)	125
第111図	M12号溝址(3)	126
第112図	M12号溝址(4)	127
第113図	M12号溝址(5)	128
第114図	M9号溝址(1)	129
第115図	M9号溝址(2)	130
第116図	M9号溝址(3)	131
第117図	M1号溝址	132
第118図	M2・M7号溝址	133
第119図	M4・M8号溝址	134
第120図	グリット出土遺物	135
第121図	編年図(1)	144
第122図	編年図(2)	145
第123図	編年図(3)	146
第124図	編年図(4)	147
第125図	編年図(5)	148
第126図	編年図(6)	149
第127図	編年図(7)	150
第128図	編年図(8)	151
第129図	編年図(9)	152
第130図	編年図(10)	153
第131図	編年図(11)	154
第132図	編年図(12)	155

西・本柳遺跡XIV

付表目次

第1表	岩村田遺跡群周辺調査遺跡一覧表	8
第2表	周辺遺跡一覧表	9
第3表	竪穴住居址一覧表(1)	156
第4表	竪穴住居址一覧表(2)	157
第5表	竪立柱建物址一覧表	157
第6表	土坑一覧表	158
第7表	溝址一覧表	158
第8表	単独ピット一覧表(1)	159
第9表	単独ピット一覧表(2)	160
第10表	H1(1)遺物一覧表	161
第11表	H1(2)～H3(1)遺物一覧表	162
第12表	H3(2)・H4(1)遺物一覧表	163
第13表	H4(2)～H9(1)遺物一覧表	164
第14表	H9(2)～H13(1)遺物一覧表	165
第15表	H13(2)～H16(1)遺物一覧表	166
第16表	H16(2)・H17・H19・H20(1)遺物一覧表	167
第17表	H20(2)・H22～H24(1)遺物一覧表	168
第18表	H24(2)～H27(1)遺物一覧表	169
第19表	H27(2)～H30(1)遺物一覧表	170
第20表	H30(2)～H34(1)遺物一覧表	171
第21表	H34(2)～H37(1)遺物一覧表	172
第22表	H37(2)～H39(1)遺物一覧表	173
第23表	H39(2)・H40(1)遺物一覧表	174
第24表	H40(2)～H43(1)遺物一覧表	175
第25表	H43(2)・H44(1)遺物一覧表	176
第26表	H44(2)～H47・H49・H50(1)遺物一覧表	177
第27表	H50(2)・H52・H53・H55・H56・F4・F8・ F11、単独ピット、D4・D5(1)遺物一覧表	178
第28表	D5(2)・D11・D13～D17(1)遺物一覧表	179
第29表	D17(2)～D19、M1～M4・M6・M7・ M9(1)遺物一覧表	180
第30表	M9(2)～M11(1)遺物一覧表	181
第31表	M11(2)遺物一覧表	182
第32表	M11(3)・M12(1)遺物一覧表	183
第33表	M12(2)遺物一覧表	184
第34表	M12(3)・M13(1)遺物一覧表	185
第35表	M13(2)・M14、グリット遺物一覧表	186

西・本柳遺跡XIV

図版目次

巻頭図版1	西一本柳遺跡XIV	弥生中期土器	図版1	D4~D17号土坑	254
巻頭図版2	西一本柳遺跡XIV	全景、H25・H29・H41・H50	図版2	I11(1)出土遺物	255
巻頭図版3	西一本柳遺跡XIV	H9・H37	図版3	I11(2)~H3(1)・H55出土遺物	256
巻頭図版4	西一本柳遺跡XIV	H3・H15・H31、F4、D8	図版4	H3(2)・H4(1)出土遺物	257
巻頭図版5	西一本柳遺跡XIV	M11~M14	図版5	H4(2)~H8(1)出土遺物	258
巻頭図版6	北一本柳遺跡Ⅲ	全景、H6	図版6	H8(2)~H9(1)出土遺物	259
巻頭図版7	北一本柳遺跡Ⅲ	H31・H33	図版7	H9(2)~H12出土遺物	260
巻頭図版8	北一本柳遺跡Ⅲ	全景、H51	図版8	H13~H15(1)出土遺物	261
巻頭図版9	北一本柳遺跡Ⅲ	H56・H161(1)	図版9	H15(2)~H117・H19(1)・H20(1)出土遺物	262
巻頭図版10	北一本柳遺跡Ⅲ	H161(2)	図版10	H19(2)出土遺物	263
巻頭図版11	北一本柳遺跡Ⅲ	D261・D263、M17(弥生後期)	図版11	H20(2)・H22~H24(1)出土遺物	264
巻頭図版12	北一本柳遺跡Ⅲ	M16・M17・M20、銀線、玉釧	図版12	H25~H27(1)出土遺物	265
巻頭図版13	北一本柳遺跡Ⅲ	中世全景、H113	図版13	H27(2)~H29出土遺物	266
巻頭図版14	北一本柳遺跡Ⅲ	中世漆、砥石	図版14	H24(2)・H30・H31(1)出土遺物	267
巻頭図版15	北一本柳遺跡Ⅲ	青磁、白磁、古瀬戸	図版15	H31(2)~H34(1)出土遺物	268
巻頭図版16	北一本柳遺跡Ⅲ	天目茶碗・茶壺・漆鉢・硯	図版16	H34(2)~H37(1)出土遺物	269
巻頭図版17	北一本柳遺跡Ⅲ	古瀬戸・灰釉陶器	図版17	H37(2)~H39(1)出土遺物	270
巻頭図版18	東大門先遺跡Ⅱ	H2・F3・F5・F12、全景	図版18	H39(2)・H40(1)出土遺物	271
巻頭図版19	東大門先遺跡Ⅱ	H2・H6・H9、全景	図版19	H40(2)~H42出土遺物	272
巻頭図版20	東大門先遺跡Ⅱ	D6・D7、全景	図版20	H43・H44(1)出土遺物	273
巻頭図版21	西八日町遺跡Ⅲ	H25・H26、全景	図版21	H44(2)~H46(1)出土遺物	274
巻頭図版22	西八日町遺跡Ⅲ	H4・H21・H45	図版22	H46(2)・H47・H49・H50・H53出土遺物	275
巻頭図版23	西八日町遺跡Ⅲ	H5・H29・H52	図版23	H52・H56、F4・F8・F11、単独ピット、D4・D5・D11出土遺物	276
巻頭図版24	西八日町遺跡Ⅲ	H1・H27・H34・H35	図版24	D13~19、M1・M2・M7出土遺物	277
巻頭図版25	西八日町遺跡Ⅲ	H20・H23、磨石・刻書土器	図版25	M3・M4・M6・M9(1)出土遺物	278
巻頭図版26	西八日町遺跡Ⅲ	全景	図版26	M9(2)~M11(1)出土遺物	279
巻頭図版27	弥生中期土器文様		図版27	M11(2)出土遺物	280
巻頭図版28	弥生後期土器文様		図版28	M11(3)出土遺物	281
巻頭図版29	弥生中期土器文様		図版29	M11(4)・M12(1)出土遺物	282
巻頭図版30	弥生後期土器文様		図版30	M12(2)出土遺物	283
			図版31	M12(3)出土遺物	284
			図版32	M13・M14(1)出土遺物	285
			図版33	M14(2)、グリット出土遺物	286

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

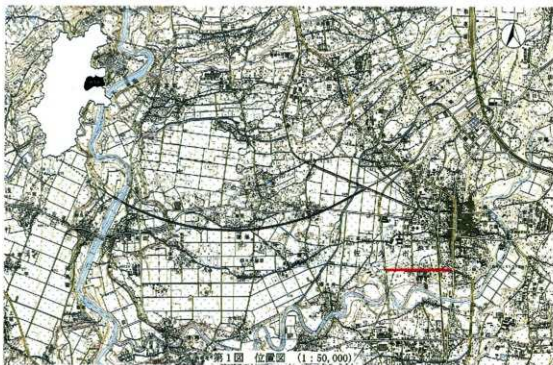
今回調査の西一本柳遺跡・北一本柳遺跡・東大門先遺跡・西八日町遺跡は、佐久市北部の岩村田遺跡群の南西にある遺跡である。弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。地形は浅間山南麓の西にのびる田切り地形の台地末端にあたり、南は湯川の浸食により断崖となっている。標高は695m～702mを測る。

佐久地域では草分けの発掘調査である昭和43（1968）年には東一本柳遺跡、昭和46（1971）年に金銅製馬具の飾り金具を出土した東一本柳古墳、昭和47（1972）年には北一本柳遺跡の発掘調査がなされている。

平成4（1992）年頃よりは西一本柳遺跡において、公共下水道・国道141号線の工事、店舗の開店などの開発に伴い13回にわたる発掘調査が行われ、遺構・遺物が確認されている。佐久市の中でも一本柳地籍は弥生時代の拠点的な集落であり、古墳から中世にいたるまで連続と人々の生活が営まれた有数の遺構密集地域であることが判明している。

今回、都市計画道路3.3.3号 原東1号線の道路工事が計画され、遺跡が破壊されるため、遺跡の記録保存を目的として発掘調査を行った。

調査は都市計画課より委託を受けた佐久市教育委員会が実施し、平成18年から平成22年にかけて発掘調査と整理調査を並行して行った。



第2節 調査組織

佐久市教育委員会

平成18年度(2006)

教 育 長	三石昌彦	社会教育次長	山崎明俊
社会教育部長	柳沢義春	文化財調査係長	高柳正人
文化財課長	中山 悟		

平成19年度(2007)

教 育 長	木内 清	社会教育次長	山崎明俊
社会教育部長	柳沢義春		
文化財課長	中山 悟 (平成19年6月18日退職)		
	森角吉春 (平成19年7月1日就任)	文化財調査係長	三石宗一

平成20年度(2008)

教 育 長	木内 清	社会教育次長	柳沢本樹
社会教育部長	内藤孝徳	文化財調査係長	三石宗一
文化財課長	森角吉春		

平成21年度(2009)

教 育 長	木内 清 (平成21年6月18日退職)		
	土屋盛夫 (平成21年7月18日就任)		
社会教育部長	工藤秀康 (7月～)		
文化財課長	森角吉春	文化財調査係長	三石宗一

平成18年～平成21年度

文化財調査係	林 幸彦	並木節子 (平成19年10月～)	須藤隆司	小林眞寿		
	羽毛田卓也	富沢一明	上原 学	出澤 力		
	神津 格	(平成21年10月まで)	井出泰章 (平成21年11月～)			
調査担当者	佐々木宗昭	森泉かよ子				
調査副担当者	堺 益子	武者幸彦				
調 査 員						
赤羽根充江	浅沼勝男	浅沼ノブエ	阿部和人	甘利隆雄	安藤孝司	井出孝子
磯貝律子	市川光吉	岩崎重子	市川明子	確水知子	白田純佳	白田真杉
江原富子	小幡弘子	加藤信一	狩野小百合	河原田光男	河原田憲子	小井戸厚子
小井戸秀元	小林喜久子	小林妙子	小林よしみ	小林百合子	小山 功	清水澄夫
清水律子	柏木義雄	菊池喜重	斎藤恵幸	佐藤瑞希	澤井知春	里見理生
大工原達江	田中久子	土屋武士	中沢 登	中島フクジ	中山清美	羽田貴恵
萩原宮子	橋詰勝子	橋詰信子	花岡美津子	林まゆみ	林美智子	比田井久美子
日向昭次	広瀬利恵子	細萱ミスズ	細谷秀子	堀籠滋子	本出慶二	堀籠保子
森泉こずえ	宮川百合子	百瀬秋男	吉田信行	依田好行	依田三男	柳沢亜矢子
横尾敏雄	柳沢 武	柳沢千賀子	山田和子	山本徳明	山村容子	渡辺久美子
渡辺長子						

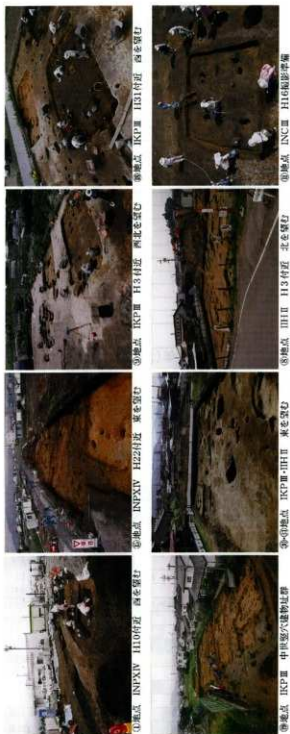
第3節 調査日誌

平成18～20年度

項 目	平成18年(2006)年度													平成19年(2007)年度													平成20年(2008)年度																						
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3													
西一本柳XIV	現 場	4/5 ~12/30												4/6~28												1/7~14																							
	洗浄・注記																																																
	土器接合																																																
	図面修正																																																
	遺物実測																																																
北一本柳III	現 場	5/23~7/10																								4/23 ~12/14																							
	洗浄・注記																																																
	土器接合																																																
	図面修正																																																
	遺物実測																																																
東大門先II	現 場	5/10~6/1																								9/26~11/4																							
	洗浄・注記																																																
	土器接合																																																
	図面修正																																																
	遺物実測																																																
西八日町III	現 場													4/26 ~8/7												10/1~1/7												8/11 ~12/26											
	洗浄・注記																																																
	土器接合																																																
	図面修正																																																
	遺物実測																																																

平成21年度

項 目	平成21年(2009)年度													事 項	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
西一本柳XIV	土器接合													2006.4 ①地点発掘調査に入る。細切れに調査を進める。 ②湧水激しく終始ポンプアップ状態で調査。 ③弥生中期・後期の溝を検出。集落を囲む環溝か。 ④大型住居検出。西近津道跡の大型住居の関連で注目。 2007.4・2008.1 未調査分の部分調査。1月は調査中絶かし。 2009.4 資料の整理を行いつつ、報告書作成作業を継続。	
	図面修正														
	遺物実測														
	トレース														
	遺物写真														
	掘りかけ														
	編集・執筆	期 待													
北一本柳III	現 場	4/20~5/19 洗浄・注記												2006.5 ①発掘調査に入る。公衆で土が非常に絡まり強い。 2008.4 ②～③地点まで順次調査。②中盤の遺構密集。 土坑300基、単独P1200個検出。雨期で冠水と湧水に悩む。毎日排水作業。 ③3本の弥生後期の重複する大溝を調査。深く湧水が激しい。総動員の泥まみれの調査。体力と気力を要した。この3本のM16・17・20の土器接合は多量で時間がかかる。 2009.4・11 ④～⑤地点まで細々とした未調査地点の発掘調査。資料の整理を行いつつ、報告書作成作業を継続。	
	土器接合														
	図面修正														
	遺物実測														
	トレース														
	遺物写真														
	掘りかけ														
編集・執筆	期 待														
東大門先II	現 場	4/20~5/19 洗浄・注記												2006.5 ⑥小海線高架工事地点に最初に調査に入る。 2007.9 ⑦小海線高架工事のため宮地点の北を調査。 小海線東地点の発掘調査を行う。 2009.4 ⑧は擾乱が多く労力を費やした。D7より炭化豆出土。資料の整理を行いつつ、報告書作成作業を継続。	
	土器接合														
	図面修正														
	遺物実測														
	トレース														
	遺物写真														
	掘りかけ														
編集・執筆	期 待														
西八日町III	土器接合													2007.4 旧営林署前の調査に入る。上面が舗装され、覆土は締まる。住居の重なりが複雑で、地山は砂地のため掘く、調査は難しい。 2008.8 ⑨～⑩の調査。建物の取り壊しが遅れ12月の末になる。 2009.4 土器が腐片で、接合に時間がかかる。資料の整理を行いつつ、報告書作成作業を継続。 2010.3 報告書刊行。	
	遺物実測														
	トレース														
	遺物写真														
	掘りかけ														
	編集・執筆	期 待													



第4節 報告書の概要

本報告書は、幅22m、総延長1026mを測る新設の道路造成に伴う調査である。安全上と長期的の通行止めができないことから現道部分は調査をしていない。調査可能な地点から分割して掘らざるを得ないため、遺構が細分され、連続しない未調査部分がある。

調査区域は東西方向に長いので、遺構の途絶える地点で、遺跡名を別けて付けている。

西から西一本柳遺跡XIV、北一本柳遺跡III、東大門先遺跡II、西八日町遺跡IIIとした。

検出遺構

	西一本柳 INPXIV	北一本柳 IKPIII	東大門先 IHIII	西八日町 INCIII	計
竪穴住居	56	119	18	57	250
弥生中期	17				17
弥生後期	17	48			65
古墳中期	3				3
古墳後期	7	11	2	23	43
奈良・平安	11		15	34	60
中世		57	1		58
不明	1	3			4
掘立柱	10	13	21	19	63
古墳～平安	3	1	17	13	34
中世		9			9
不明	7	3	4	6	20
土坑	16	310	9	9	344
縄文	1			1	2
弥生	4	7	1		12
古墳	2		1	3	6
奈良・平安	4 (H63)		2	2	8
中世	1	303 (H71)	1		305
不明	4		4	3	11
単独ピット	165	1821	198	129	2313
溝状遺構	13	32	10	5	60
弥生中期	5				5
弥生後期	2	11			13
古墳後期	1				1
奈良			3	2	5
中世	4	9	2	2	17
近代		2	3		5
不明	1	10	2	1	14

西一本柳遺跡XIVでは、弥生中期後半・弥生後期・古墳中期古墳後期・奈良・中世の遺構がある。

弥生中期後半は栗林式土器を伴う住居と溝を検出する。湯川沿いに展開した弥生中期後半の集落が本調査地点の西一本柳遺跡で、上流への広がりを終焉する。東端の中期の溝以东には住居が検出されず、弥生中期集落の東限界が確認された。

弥生後期は後期前葉の吉田式土器の住居が1棟確認され、後期中葉の箱清水式土器を伴う住居もあるが、大半は弥生後期後葉の住居である。また同期の溝が後期後葉の集落を囲むように弧状に東端から検出された。

古墳中期は3棟あり、畑を伴う住居とカマドを設置する住居の2時期が見られる。西側の西一本柳遺跡からの古墳中期の集落の続きである。

古墳後期の竪穴住居は7C代の集落である。奈良時代は小規模な竪穴が点在し、規模の大きいものはない。奈良初頭・中頃の集落である。

生産にかかわる遺構としては側柱の掘立柱建物址の中央に鉄滓を多量に含む土坑があり、製鉄がおこなわれ、側に井戸址が3基ある。中世の遺構は中央に道路址が東西に貫き、南北の道と2か所で接続している。

北一本柳遺跡IIIは弥生後期の集落と土坑、溝を調査している。H61は焼失家屋で、炭化材とともに炭化した豆が出土する。炭化材はクリと分析され、炭化豆も栽培種の可能性があるなど新たな情報をえた。炭化豆は95%確立では炭素年代測定でAD238年という測定結果を得ている。

本調査中最大の住居址であるH51は長軸長11m23cmを測り、H61と土器様相が同じである。第1

分冊の西一本柳遺跡XIVの最大住居H37とも同時期であろう。佐久の弥生国の盛隆を語る大型住居である。

この弥生後期後葉の集落は環濠を廻らしている。M20→M16→M17と溝を掘り替えている。ことにM16は東西から南北方向に変えるために、M20に陸橋を設けている。その後M20に沿った東西方向のM17を掘っている。

後期後葉の集落の東端に当たるM26・M27は浅いM27を切って、深いM26溝を構築している。M26とM20の断面は底の幅が広い逆台形、M27とM16の断面形はV字に近い底面の狭いものである。集落の西端のM1とM5は西にあって東側の集落を囲むようにいくらか弧状を呈しており、M1がM20とM5がM26と類似している。M5・M26は調査地点では遺物の量が少ない溝である。

弥生後期後葉の集落は約300mの東西幅を測る。また別の環濠に囲まれる西一本柳遺跡XIVにも一集落があることが確認された。この弥生後期末の竪穴住居の年代が炭素年代測定では3C前葉の可能性を示す。

古墳後期の竪穴住居9棟は疎らに点在し、7C代とみられる。ことに古墳末に近い資料があり、古墳から奈良時代への土器様相が分かる資料である。

中世の遺構群は竪穴建物址と土坑・単独ピットにより構成される。竪穴建物址・竪穴状遺構が56棟あり、二群構成される。一群の竪穴建物址からは漆製の柄頭や筒状製品、漆皮膜が出土する。製作道具である漆刷毛、凸面をもつ4～5cmの砥石が出土する。漆工房の遺構群であろうか。青磁玉縁碗・古瀬戸天目茶碗・古瀬戸灰釉直縁鉢、茶釜、茶臼などの高級品、火鉢、内耳、かわらけなどの日常品がある。もう一群は羽口・鉄滓を出し、かわらけ・内耳もあるが黒釉茶壺、白磁を伴い、常滑の大甕や中津川の甕を出土している。西にある西八日町遺跡Ⅲの中世の道路址と推定される溝からはウマ・ウシの骨と鉄滓が出ています。

東大門先遺跡Ⅱでは奈良から平安時代の竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落で、H9の焼失家屋から使用状況のわかる状態で遺物が出土している。放射性炭素年代測定ではH9の炭化材はヒノキで、AD718年～773年の年代が得られている。平安時代の住居からは甲斐型土器が出土しており、甲斐型土器の出土する集落は交通の要衝にあるという。中世の道路址以前に主要道路の存在を窺わせる。

西八日町遺跡Ⅲは古墳後期から奈良・平安の集落である。57棟がある。古代集落の密集した様子を記録した。ことに平安時代の竪穴住居の重複は激しく居住に適した地であったようである。砂地に構築され、壊れた壁を補修しており、掘りやすいが壊れ易い土質である。

出土遺物

縄文	堀之内式土器・打製石鏃・打製石斧
弥生前期	氷Ⅱ式土器・炭化豆
弥生中期	栗林式土器 石製品（磨製石斧・扁平片刃石斧・磨製石鏃・砥石）
弥生後期	箱清水式土器・土製品（紡錘車・土板）鉄製品（鏃・剣・斧） 石製品（鏃・蔽石・磨石・砥石・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧） ガラス小玉・鉄石英管玉・土製円板
古墳中期	土師器・須恵器・ミニチュア土器・勾玉
古墳後期	土師器・須恵器・白玉・管玉・ガラス小玉
奈良・平安	土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書・刻書土器・円面碗・転用碗 鉄製品（刀子・紡錘車・鉄斧・角釘）青銅製品（和同開珎・口金物）
中世	かわらけ・内耳・須恵質土器 陶器（古瀬戸卸し皿・深皿・こね鉢・小皿・水滴・碗） 青磁（碗・折皿）・常滑（壺・甕・摺鉢）・中津川・東海系山茶碗 青銅製品（渡来銭）・鉄製品（刀子・角釘）・羽口 漆製品（漆皮膜・柄頭・筒状漆製品・漆刷毛） 石製品（硯・碁石・凹石・搦鉢・茶臼・砥石・蔽石・磨石）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

本調査地点は佐久市の東北部、岩村田台地の南縁に位置し、千曲川支流の湯川に臨む。西の西一本柳遺跡の標高は692.8m、約1km東の西八日町遺跡は701.29mを測る。湯川は浅間山の東裾から流出して南流、岩村田で西に方向を変え、御代田・岩村田地域では河岸段丘を2段にわたって形成し、いたるところで極端な蛇行曲流の河川となっている。

この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大熱泥流（塚原泥流）の黒色集塊岩である。その上部に、黒斑火山の発達過程に噴出した多量の火山灰・火山弾などの湖成堆積物（水平互層を繰返す湯川層）が重なっている。その上部に浅間火山噴出物である浅間第一軽石流（P1）が厚く堆積しているところである。

本調査遺跡は湯川縁であることから第一軽石流は浸食され、薄層となっている地点やまた消失した地点とがある。

北側は浅間山から南西にかけて延びる台地が浸食され、北西久保遺跡あたりで大きな谷になる「田切り地形」となっている。本遺跡の北側は、後背湿地といえるような低地であり、本調査地点は東西に伸びる微高地または丘陵状の地形にあたる。

第2節 歴史的環境

本調査地点は、縄文時代後期の土器片があるが、住居址は認められず、遺構としては陥し穴がある。土器は縄文後期の堀の内式土器深鉢である。

弥生時代前期になると24.仲田遺跡のD6号土坑より、口縁二重突帯文の壺が見られたが、今回調査した3.東大門先遺跡ⅡのD7土坑からは、波状口縁で胴部に細突条痕を施す甕と炭化した豆が出土している。豆の存在は生産を伴い、近辺に居住すると考えられるが住居址は見つかっていない。10.大井城跡の南、同じ湯川右岸にあたる下信濃石遺跡Ⅱで、弥生前期の壺や甕などの土器と石器群が出土し、活動の痕跡がある。

弥生時代中期前半の遺物は本調査地域では出土していない。

西一本柳地籍が最も注目されるのは弥生時代中期後半である。千曲川から分かれてさかのぼること約1km、湯川兩岸に新しく集落ができ、広がって行くのである。弥生時代中期後半の初現の粟林期の集落は湯川左岸台地上の22.根々井芝宮遺跡である。中期後半古相の土器が多く、Y25住居址の壺中に、黒曜石の残骸や利用可能な剥片類、石器未製品をストックしていた。黒曜石の石器製作と黒曜石のリサイクルが行われていた様子が推定できる興味深いものである。産地は諏訪里ヶ台産が大多数で、蓼科冷山産が少数見られた。

左岸では根々井芝宮遺跡の東にあたる寄塚遺跡でも中期後半の集落がある。そして本調査地点のある湯川右岸には20.川原端遺跡、19.森平遺跡、6.五里田遺跡、5.北西ノ久保遺跡、1.西一本柳遺跡と弥生中期後半の集落が連続と展開するのである。

弥生時代後期に至ると集落が減少し、今のところ1.西一本柳遺跡に後期初頭の吉田式の住居が23棟確認されている。今回の調査でも数棟が確認されている。これに先駆ける中期末の土器様相を残し、住居址の形態が後期である枇杷坂遺跡群直路遺跡ⅠのH1、12.門正防遺跡群清水田遺跡Ⅱを経て、吉田式に移行するのであろう。いずれにしろ、佐久地域の弥生後期初頭古田式土器群はこの後の箱清水式土器の住居に較べて未だ少数である。

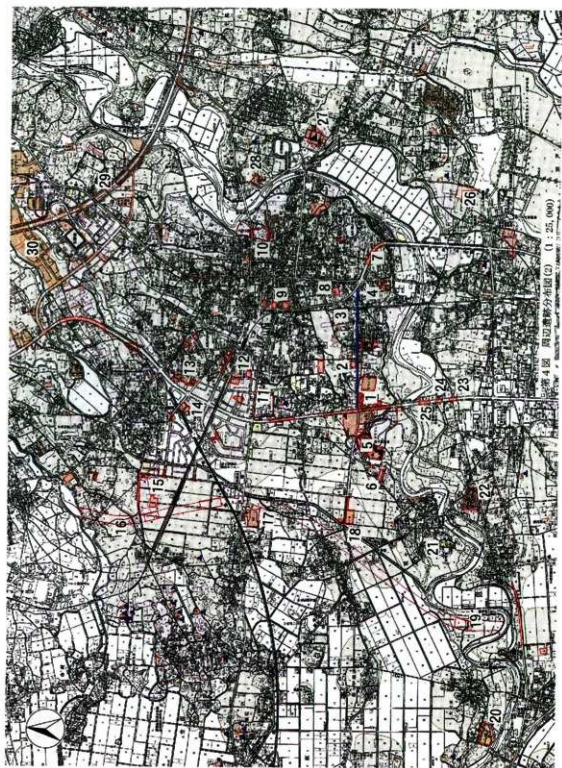
第1表 岩村田遺跡群周辺既調査遺跡一覧表

№	遺跡名	所在地	調査年度	主な検出遺構・遺物
1-1	西一本柳遺跡XIV	岩村田字上樋田	本報告書	
1-2	西一本柳遺跡I	岩村田字西一本柳	H3・4	瓦葺溝渠、人面付土器
1-3	西一本柳遺跡II	岩村田字西一本柳・常木上	H4	竪穴住居(弥生中期～平安)
1-4	西一本柳遺跡III・IV	岩村田字西一本柳・常木上	H7・8	竪穴住居201(弥生中期・後期・古墳中期・古墳後期・奈良・平安)、竪立45、土坑12、溝11
1-5	西一本柳遺跡V	岩村田字上樋田	H8	竪穴住居(弥生中期3・後期1・古墳後期2・奈良1)、溝(弥生中期1・弥生後期1・古墳後期1)
1-6	西一本柳遺跡VI	岩村田字上樋田	H9	溝
1-7	西一本柳遺跡VII	岩村田字西一本柳	H10	竪穴住居(弥生中期7・後期2・古墳後期6・奈良平安1)、竪立5、土坑8、溝6
1-8	西一本柳遺跡VIII	岩村田字上樋田	H12～14	竪穴住居(弥生中期9・後期7・古墳中期6・後期42・奈良16・平安9・不明2)、竪立30、土坑(中世24・不明27)、溝13
1-9	西一本柳遺跡IX	岩村田字西一本柳	H14	竪穴住居(古墳後期16・奈良1・平安2・竪穴2・不明2)、竪立9、土坑12
1-10	西一本柳遺跡X	岩村田字西一本柳	H15	竪穴住居(弥生中期34・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、竪立14、土坑19、溝14
1-11	西一本柳遺跡XI	岩村田字下樋田	H15	竪穴住居(弥生中期1・弥生後期1)、溝(弥生後期1)
1-12	西一本柳遺跡XII	岩村田字下樋田	H16	竪穴住居(古墳後期5・奈良1・竪穴伏遺構6)、竪立2
1-13	西一本柳遺跡XIII	岩村田字下樋田	H17	竪穴住居(弥生中期13・弥生後期8・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、竪立5
1-14	西一本柳遺跡XIV	岩村田字常木上	H19	竪穴住居(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈良3・平安2)、竪立3、土坑5、溝(弥生中期4)
1-15	西一本柳遺跡XV	岩村田字西一本柳	H20	竪穴住居(弥生中期12・弥生後期1・古墳後期4・奈良1)、竪立6、溝3
1-16	西一本柳遺跡XVI	岩村田字西一本柳	H20	竪穴住居(弥生中期1・弥生後期2・奈良2)、溝(弥生中期1)
2-1	北一本柳遺跡I	岩村田字北一本柳・西大門先	本報告書	
2-2	北一本柳遺跡II	岩村田字北一本柳	S-47	本報告書に掲載
2-3	北一本柳遺跡III	岩村田字北一本柳	H15	竪穴住居(弥生後期4)、土坑1、溝、竪立2
2-4	北一本柳遺跡IV	岩村田字北一本柳	H19	溝(弥生後期1)
2-5	宮の跡遺跡	岩村田字宮の跡	H19	竪穴住居(弥生後期)、溝(弥生後期)
3-1	東大門先遺跡I	岩村田字東大門先	本報告書	
3-2	東大門先遺跡II	岩村田字東大門先	H1	溝(弥生後期1・不明1)
4-1	西八日町遺跡I	岩村田字西八日町	本報告書	
4-2	西八日町遺跡II	岩村田字西八日町	S-58	竪穴住居(弥生7・奈良平安139)
4-3	西八日町遺跡III	岩村田字上福寺	H16	未報告
4-4	西八日町遺跡IV	岩村田字西八日町	H20・21	本年度報告書



第2表 周辺遺跡一覽表

No.	遺跡名	遺跡名	所在地	調査年度	主な出土遺物・遺構
1-1	岩村山遺跡群	西・本町遺跡XIV	岩村町字上國田		
2-1	*	西・本町遺跡XV	岩村町字北一本柳・西人門先		
3-1	*	東大門遺跡群	岩村町東大門先		
4-1	*	東大門遺跡群B	岩村町西八口町		
5		北西ノ久保遺跡	岩村町北西ノ久保	S57・60	
6		五石遺跡群	郡ヶ井字五石田	H19	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
7		上の森遺跡	岩村町上の森	S48-H14	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
8		神宮遺跡群	岩村町字神宮	H19	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
9		岩村山遺跡群	岩村町字岩村	H110	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
10		神宮遺跡群	岩村町字神宮	S58	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
11		北の木遺跡群	岩村町字北の木	H19	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
12		門止山遺跡群	岩村町門止山	H18	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
		神水田遺跡群	岩村町神水田	S53	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
		清水田遺跡群	岩村町清水田	H110	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
		川正坊遺跡群	岩村町川正坊	H11	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
13		熊畑遺跡群	長十郎字熊畑	H19~11	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
14		長十郎遺跡群	岩村町字上原	S60	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
15-1		西防犯遺跡群	長十郎字西防犯	H9	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
15-2	*	西防犯遺跡群	長十郎字西防犯	S65	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
15-3	*	北の森遺跡群	長十郎字北の森	H11	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
16		近所遺跡群	長十郎字近所	H19~H20	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
17		西防犯遺跡群	長十郎字西防犯	H4	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
18		西防犯遺跡群	長十郎字西防犯	S48-H15	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
19		川原遺跡群	川原遺跡群	H18	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
20		川原遺跡群	川原遺跡群	H4	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
21		川原遺跡群	川原遺跡群	H18	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
22		宮の上遺跡群	郡ヶ井字宮の上	H19~H20	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
23		宮の上遺跡群	郡ヶ井字宮の上	H4	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
24		寺田遺跡群	寺田遺跡群	H17	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
25		中ノ久保遺跡群	中ノ久保遺跡群	H17	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
26		神宮遺跡群	神宮遺跡群	H10	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
27		北東遺跡群	北東遺跡群	H6・H8	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
28		下小平遺跡群	下小平遺跡群	S55	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
29		長十郎遺跡群	長十郎遺跡群	S58	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)
30		長十郎遺跡群	長十郎遺跡群	H1~H7	聖六住居(弥生中期前)・弥生中期前38、古墳(中期前20)



第4區 周辺部分布圖(2) (1:25,000)

弥生後期の箱清水式土器は5.北西ノ久保遺跡、2.北一本柳遺跡、12~16の円正坊・枇杷坂・長土呂・周坊畑・近津遺跡群は台地縁辺に広くみられ、湯川縁から離れ、湯川の後背湿地的な中佐都地区の低地を囲むように集落がみられる。中でも16.西近津遺跡では国内最大級となる18×9.5mの長方形の竪穴住居址が検出され、床面積は46坪におよぶという。これほどの大型住居を建築できる勢力をもつ集団が佐久に形成されるに至ったのである。

古墳時代の初頭は、15.周防畑遺跡群の辻の古墳跡にある箱清水土器の特徴を備えた胴部球胴形の土器がみられる。壺は赤色塗彩で頸部に櫛描文、甕は櫛指波状文であるが、胴部形はいずれも球胴形を呈し、東海系土師器の高杯やS字台付甕を伴う古墳時代前期へと移ってゆく。14.下伯母塚遺跡のH8からは銅鐻が球胴形の弥生後期末の土器群とともに出土している。今回調査の北一本柳遺跡でも、土師器こそみられないが球胴形の弥生土器があり、古墳時代前期と言える資料がある。

湯川の左岸今井西原遺跡では4世紀前半の集落があり、11.松の木遺跡IVでは弥生・中世の水田址が発見されているが、浅間中学校の西の道路工事である11.松の木遺跡I・IIでは5世紀半ばの集落がある。5.北西ノ久保遺跡には古墳時代中期後半の住居址があり、続く古墳中期後半の集落は1.西一本柳遺跡に点在する。対岸の仲田遺跡にも集落がある。

28.下小平遺跡では古墳前期の墓である方形周溝墓が2基ある。古墳は北西ノ久保遺跡からは円形の周溝を残す古墳中期ころの(5世紀の後半)古墳14基が築造されている。27.蛇塚1号墳は7世紀後葉~8世紀初頭の円墳とされ、湯川左岸、佐久平の東部にあたる山裾に多くの後期古墳が群生している。また佐久平の西の小山は、黒斑山の山体崩壊した「流れ山」で、流れ山を利用した古墳時代後期の群集墳がみられる。

古墳後期の集落は、台地の先端から深部に至るまで広がりを見せ、12.円正坊遺跡群、7.上の城遺跡、10.大井城跡、20.川原端遺跡、24.仲田遺跡、25.中西ノ久保遺跡、本調査の1.西一本柳遺跡から4.の西八日町遺跡にある。また、田切りの台地上の30.聖原遺跡では古墳後期の住居址155棟が集落を作っている。

奈良時代の住居は古墳時代後期と同じ遺跡に展開しており、古墳時代との連続性が窺われる。平安時代の住居は遺跡数を増すが、住居の数量自体は減り、散村化の傾向がみられる。

中世の遺跡は21.根井氏館跡は木曾義仲に従った根井行親の館とされ県の史跡となっている。26.番屋前遺跡の北東にある野馬窪遺跡IIは二重の溝で囲まれ、竪穴状遺構・井戸などの中世遺構があり館と考えられる。10.大井城跡は中世佐久の北の領主であった大井氏の居城とされている。南の黒岩城跡が発掘調査され、54棟の竪穴状遺構・掘立・土坑などからは15・16世紀の遺物が出土している。黒岩城跡の400mほど南の下信濃石遺跡では、大井氏の氏寺である龍雲寺の一部が調査されている。8.観音堂遺跡は観音堂を取り巻く町屋であろうか。9.柳堂遺跡は苑池を持ち、中世の遺構を囲む溝があることから館と推測されている。江戸末の歴史書『四隣譚藪』に述べられている「國府にまさり」とは大井氏の城下町の賑わいを語っている。29.栗木坂遺跡群B区では中世の100m四方の溝により区画され、中に馬屋であろう竪穴状遺構が検出され、武士化した農民の館と推測されている。15.周防畑遺跡群でも中世の遺構・遺物が検出され、岩村田を基点とした大井氏の中世のネットワークが判明してきている。今回調査した北一本柳遺跡で、竪穴状遺構から漆製品や漆の皮膜・漆刷毛が出土しており、漆工房と推測される。

5.北西ノ久保遺跡には中世の五輪塔群がある。

第三章 基本層序

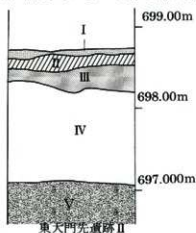
第二章 遺跡の環境で述べたように、本遺跡群は湯川の右岸の上段の河岸段丘上にある。湯川は浅間山の東裾から流出して南流、南軽井沢地域からの泥川と合流して、西に向きを変え、御代田・岩村田地域では、地殻変動の隆起運動の影響から下刻作用顕著な河岸段丘を2段に渡って形成し、しかも

いたるところで、極端な蛇行曲流の河川となっている。

この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が、第一次黒斑火山大爆発の山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）である。湯川沿岸に点々と堆積し、黒色集塊岩の頂上部が姿を残している（3万年前ほど前）。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物の湯川層が重なっている。

塚原泥流発生後、仏岩火山活動があって、しばらく火山活動の休止期があり、その後2回の軽石流の噴出があった。最初の噴出物を第一軽石流（1万3千年前）、後から噴出したものを第二軽石流という。浅間山南麓に、広く展開した軽石流は、塚原泥流の地域に達すると、西と南に分かれ、南にむかった軽石流は湯川の谷を埋めた。（1988、『佐久市志 自然編』P83、1986白倉成男『大井城跡』）

台地縁辺に当たる本調査地域では、湯川により浸食され、第一軽石流は端部では薄くなり、台地基部では厚く残っている状況である。西一本柳遺跡XIV地点ではところによって浅間第一軽石流に構築しているが、南隣の西一本柳遺跡XV地点では砂礫層に構築している。北一本柳遺跡では、浅間第一軽石流を基盤としている。東大門先遺跡では浅い遺構は浅間第一軽石流、深くなると二次堆積の砂礫層となる。西八日町遺跡ではほとんどが砂礫層に構築されている。西八日町遺跡では住居の壁が崩壊して、補修しているケースが3棟みられた。



基本層序

- I. 褐色土層 (10YR4/6)
ローム漸移層。
- II. 黄褐色土層 (10YR5/6)
ローム層。(浅間第一軽石流)
- III. 褐色土層 (10YR4/4)
ロームに円礫を含む。堅く締まる。
- IV. 砂礫層
5～10 cmの円礫を含む砂礫の水平層。
- V. 灰赤色土層 (2.5YR6/2)
(塚原泥流)

第5図 基本層序模式図



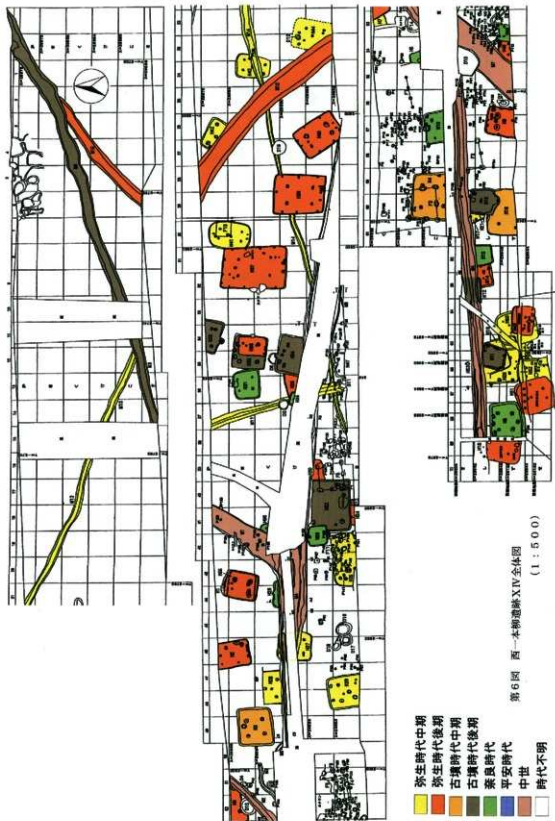
北一本柳遺跡III
浅間第一軽石流に構築

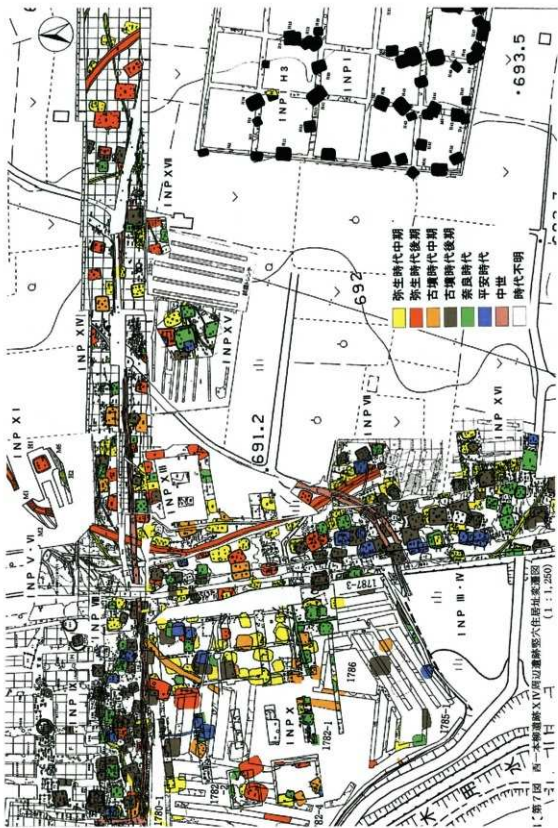


東大門先遺跡II
薄い浅間第一軽石流と砂礫層



西八日町遺跡III 砂質土
H9東壁は崩壊し修復





第IV章 西一本柳遺跡XIV遺構と遺物

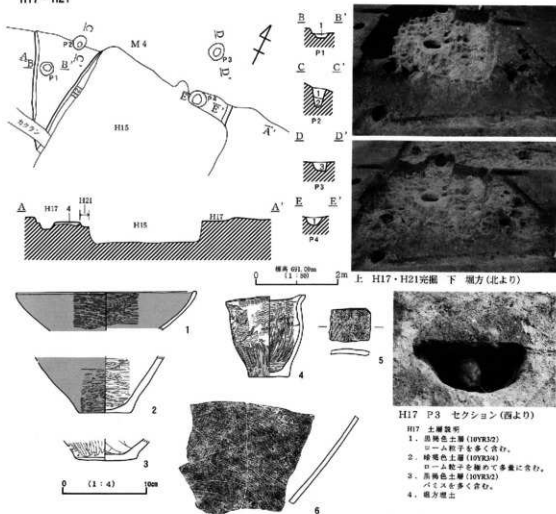
第1節 竪穴住居址

1、弥生時代中期

(1) H17号住居址・H21号住居址

し60グリッドにあり、北側は中世のM4に切られ、南の大半をH15に壊されている。H21と東側で重複している。H21は遺物がないので、時期は不明である。H17は南北(290)cm東西(470)cmを調査する。柱穴は4個あり、P1・P4は壁柱穴、P2は主柱穴で円形の長径34cm深さ51cmを測る。P3も主柱穴であろうか円形で径42cmを測り、M4に切られるが、深さ27cmを測る。火処はない。

H17・H21



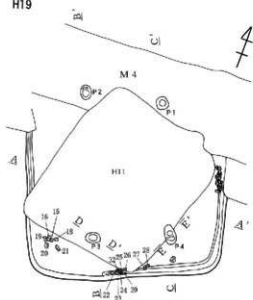
H17 P3 セクション(西より)

H17 土層説明

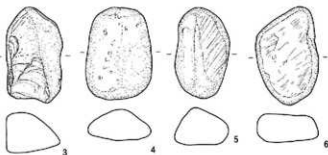
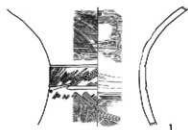
1. 赤褐色土層(10YR3/2)
ローム粒子を多く含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/4)
ローム粒子を極めて多量に含む。
3. 黒褐色土層(10YR3/2)
ベリスを多く含む。
4. 掘方埋土

第8図 H17・H21号住居址

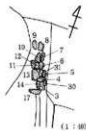
H19



標高 895.72m
(1:100)



(1:4) 10cm



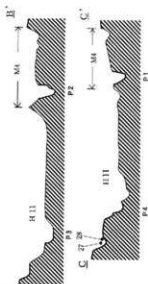
D D'



E E'



P3 P4



北

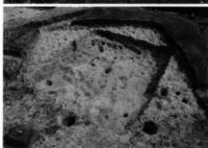
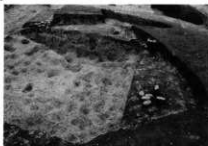
H19 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
~1cm ロームブロック・ローム粒を多量に含む。
4. 褐色土層 (10YR4/4)
~3cm ロームブロックを多量に含む。
5. 灰色土層 (10YR2/1)
暗褐色土層 (10YR3/4)
~3cm ロームブロック・ローム粒を多量に含む。
7. 黒褐色土 (10YR3/2)
黄褐色土 (10YR5/6) の混在層。(底層)

H19遺物出土状況
(北より)

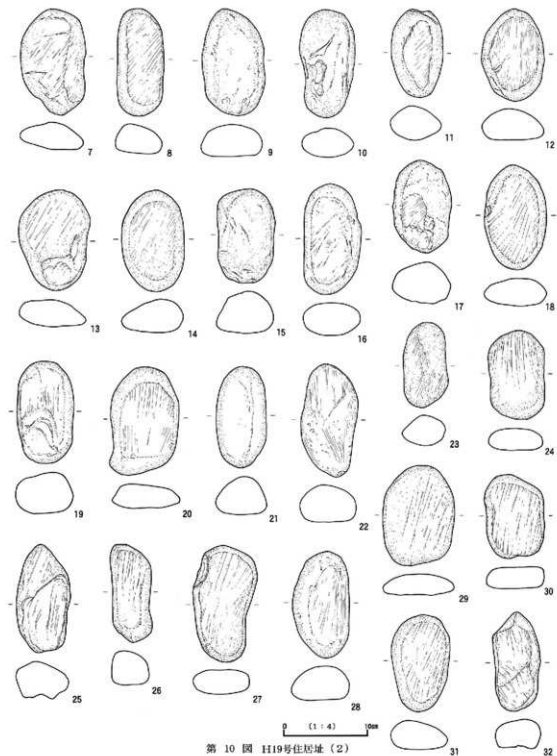


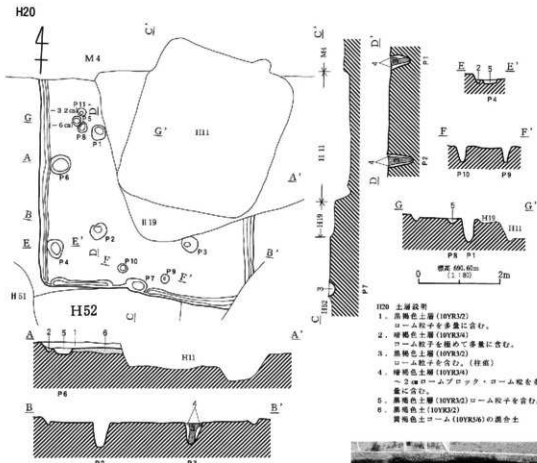
2



第 9 図 H19号住居址 (1) 上 H19完厩・下 堀方(西より)

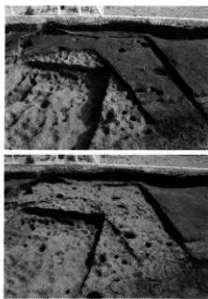
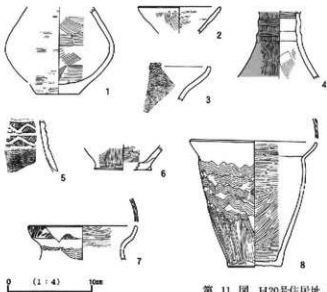
H19





H20 土層説明

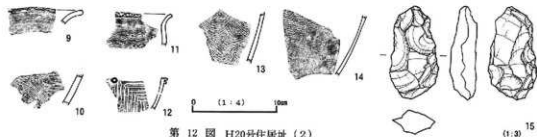
1. 赤褐色土層 (10YR3/2) コーム粒子を多量に含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) コーム粒子を極めて多量に含む。
3. 赤褐色土層 (10YR3/2) コーム粒子を含む。(柱痕)
4. 暗褐色土層 (10YR3/4) ~2cm コームブロック・コーム粒を多量に含む。
5. 赤褐色土層 (10YR3/2) コーム粒子を含む。
6. 赤褐色土 (10YR3/2)
7. 赤褐色土・コーム (10YR3/6) の混合土



上 H20完掘・下 掘方(北より)

第 11 図 H20号住居址 (1)

H20



第 12 図 H20号住居址 (2)

出土遺物には弥生土器があり、鉢、深鉢、壺、甕、土板がある。1の鉢は赤色塗彩され、器内は薄手で口径の大きいものである。2の深鉢は厚手で、甕の器形に似る。外面胴下部はミガキ赤色塗彩され、底部はミガキ。内面は黒色を呈し、ミガキ調整される。4は小型の甕で口縁端部は丸く、口縁が短く外傾している。外面は口縁から胴中位まで櫛描波状文が施される。

これらより、弥生中期後半の栗林式土器である。

(2) H19号住居址

し65グリッドにあり、H11、H50、M4に切られる。H11に大半を壊される。南北長(352)cm東西長474cm、壁高3~33cmを測る。H11が切っているためか、火処はない。長軸方位はN-21°-Wを指す。壁下には周溝が廻る。支柱穴4個があり、東西190cm南北320・340cmの長方形に配される。支柱穴は楕円形を呈し、長径32~48cm短径26cm、深さ22~50cmを測る。壁下の周溝上や壁近くの3か所にまとまって30個の編物石が出土している。

出土遺物には弥生土器、編物石がある。弥生土器は壺で、1の壺は太い首の大型品である。無彩色で、口縁は受け口になるようである。頭部は縄文にヘラ描横線文を施す。2の壺は口縁が外反するが上部は内湾気味になる。頭部は縄文に太いヘラ描横線文が廻る。編物石は河原石で、安山岩である。

これらより、弥生中期後半栗林式の古相の土器とみられる。

(3) H20号住居址

し66グリッドにあり、H11、H19、H52、攪乱に切られる。南北長(504)cm東西長504cm壁高1~24cmを測り、形は方形を呈すと推測される。H11、H19が中央を切っているため火処はない。長軸方位はN-3°-Wを指す。支柱穴4個は東西220cm、南北240cmの方形に配されたと推測されるが、北東はH11に壊されてない。円形を呈し、径36~43cm、深さ55~60cmを測る。柱穴には柱痕が確認された。南壁中央には長径52cm短径36cm深さ12cmの浅い楕円形の落ち込みがあり、その北側に入り口施設の柱がある。P9・10は円形を呈し、径24cm深さ38cmを測る。西壁側には円形のピットが2個あり、径46cm深さ38・44cmを測る。P5、P8、P11は径20cm前後で、深さ6・6・32cmを測る。床面は黄褐色ロームブロックを含む土で貼っている。

出土遺物には弥生土器と下呂石の石核がある。土器は壺・甕がある。1の壺は無彩色で、外面ミガキ調整される。2の杯は無彩色で、ナデ後わずかにミガキ調整される。胎土に細砂粒を含む。4の壺片はミガキ赤色塗彩されたもので、外面の頸部もミガキ赤色塗彩される。頸部は紐状の粘土帯を貼りつけ、2条の横線を作っている。7の甕は小型で、口縁部は受け口で、口唇・口縁部縄文、胴部に櫛描波状文を施す。8の甕は小型の甕で、口縁が折れて外傾し、口が広いものである。外面の口唇部は縄文、口縁は横ナデ、胴上部櫛描波状文、胴下部ミガキ調整される。

これらより、弥生中期後半の栗林式土器である。壺の器形など古相が窺われる。

(4) H25号住居址

し43グリッドにあり、南側は攪乱が入り、調査区域外となる。F11と、単独ピットP141~P145に切られる。南北(342)cm、東西(508)cm、壁高は3~7cmを測る。長軸方位N-1°-Wを測る。住居の形態は隅丸長方形と推測される。炉は炉縁に小礫を並べ凹形に囲み、炉壁に壺の胴部片を再利用している。炉が住居の中央にあるものと推測すると、北側に主柱穴が4個検出される。覆土が浅いため確実に伴うかはわからない。P1は長径36cm深さ56cm、P2は長径52cm深さ64cm、P3・P4は径50cm、深さ49・42cmを測る。床下からはP1の南にP5があり、長径56cm深さ57cmを測ることから建て替えがおこなわれたようである。P6・P7・P9・P10は壁柱穴で、径28~38cm深さ13~23cmを測る。

出土遺物には弥生土器、石製品がある。弥生土器は壺、甕、蓋がある。1の壺は口縁が長く袋状に広がって、外縁はないが受け口状になる。口唇部縄文、口縁縄文施文後へラ描波状文、頸部縄文施文後、突帯を作り出すような沈線の入れ方をしている。2の壺は口縁が短く外反し、口唇部に縄文を転がしている。9の壺は口縁を均一に欠き、器台として再利用している。8の頸部は縄文、へラ描横線文、櫛描横線文を施している。11のP3から出土した壺片も端部が煤け、炉に利用されたものとみられる。21の甕は口縁が短く内湾して立ち上がり、最大径は胴部に持つ。外面の口唇部縄文、口縁と胴上部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。22の甕は口縁の外縁が明確で、外に開き最大径を持つ。口唇部縄文、口縁櫛描波状文、頸部櫛描簾状文、胴上部櫛描斜走文(縦羽状)である。32は壺の蓋であろう。外面はどちらが正面になるのか測りかねるが、3列の紐帯が3/4ほど貼付されている。平成3年(1991)に現在岩村田高校の野球場の試掘調査の際に、H3号住居址(INP I H 3)の上面から壺の面土器が出土している。参考資料として掲載するが、胴上部にある紐帯の径と一致している。内面に幅5mmの外周に沿った円形の欠損痕があり、かえりが欠損しているとすれば、蓋として機能すると推測する。頸部の紐帯は後ろで切れているので、32の蓋も紐帯が無い部分が後ろになるであろう。

石製品は黒曜石製石鏃と輝緑凝灰岩製の磨製石斧転用の敲打石である。INP I H 3からも同様の敲打石、石鏃、弥生中期の土器が出土している。

本住居はこれらより、弥生中期後半栗林式の古相を持っている。

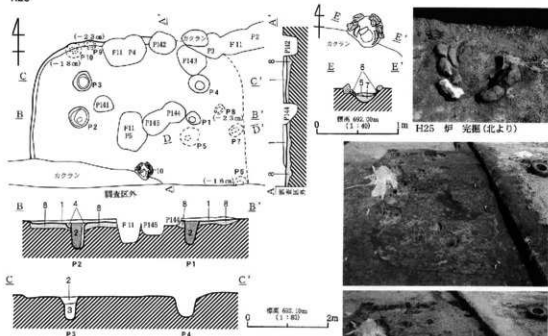
(5) H27号住居址

け46グリッドにあり、中央をM4と下水道により壊される。南北長502cm、東西長(410)cm、壁高6~18cmを測る。隅丸長方形を呈し、長軸方位N-2°-Eを指す。炉と主柱穴の北側は下水道に壊され、南側のP5(径32cm深さ46cm)・P7(径28cm深さ34cm)が主柱穴で、床下のほぼ同位置にP6・P8があり、床下のP10も旧主柱穴であろうか。柱が建て替えられている。南壁側には出入り口施設関連のピット4個が東西に並び、径20cm前後の円形を呈し、深さ20cm前後を測る。北壁中央のP2は径40cm深さ50cmの円形ピットで、棟持柱であろう。P1、P3は壁柱穴であろうか、他の遺構の可能性もあると考える。

出土遺物には弥生土器があり、鉢、高杯、壺、甕がある。石製品は黒色頁岩の模型石器がある。1の深鉢は口縁の内外が赤色塗彩され、口縁は受け口状を呈す。3の高杯は内面が屈曲して口縁外反する。口唇部に二山の突起が付く。1~3の赤色塗彩品は薄手で口縁端部が面取りされ、シャープな作りである。4の脚の底面は平坦で幅広くある。高杯の脚ではなく鉢類の脚であるかもしれない。5の高杯はミニチュアで口径は10.4cmほどである。壺14・15は同個体であろうが、接点はない。胴上部はハケ目を残しミガキ、中位上部に縄文を転がした後、へラ描横線文、へラ描波状文、列点文を組み合わせ、中位には連弧文を施す。頸部では7の縄文施文後へラ描横線文とへラ描波状文がある。甕は胴下部と小破片のみである。文様は櫛描波状文、櫛描斜走文、コ字重文、へラ描波状文がある。

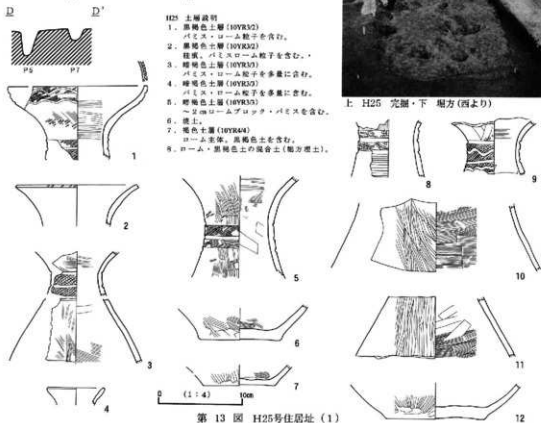
これらより、弥生中期後半の栗林式土器である。壺の文様が多段であることなどから古相である。

H25



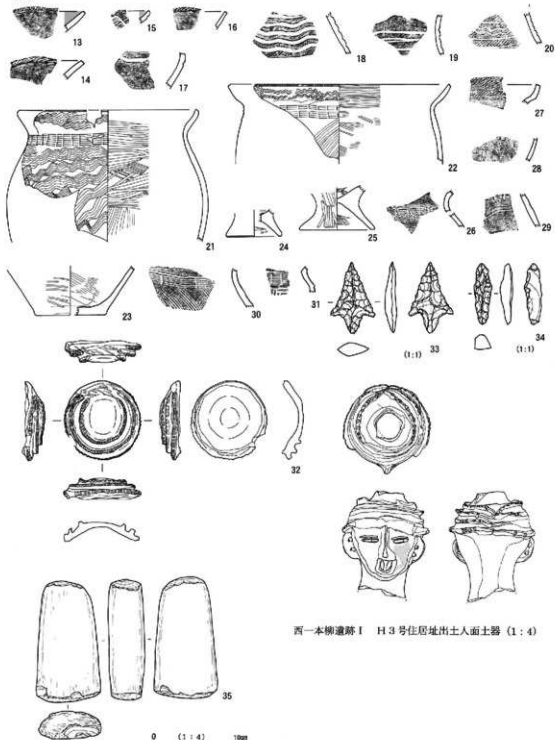
- H25 土層識別
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR3/2)
柱状。パリスローム粒子を含む。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
 4. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
 5. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ロームブロック・パリスを含む。
 6. 黄土。
 7. 褐色土層 (10YR4/4)
ローム主体。黒褐色土を含む。
 8. ローム・黒褐色土の混合土(転方埋土)。

上 H25 穴掘・下 堀方(西より)



第 13 図 H25号住居址 (1)

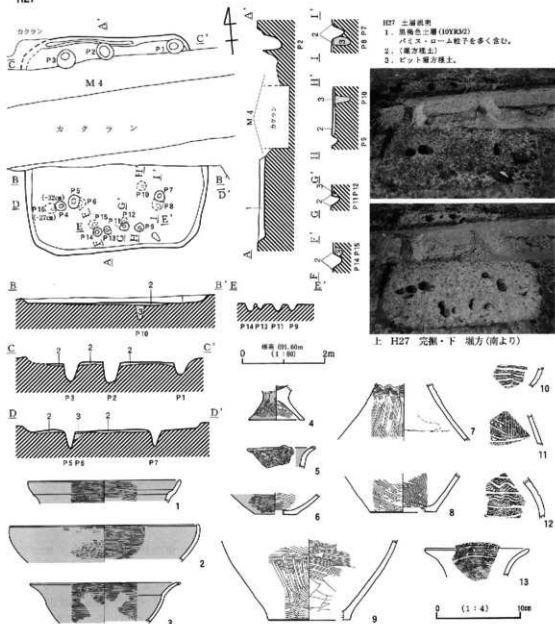
H25



西一本柳遺跡 I H3号住居址出土土人面土器 (1:4)

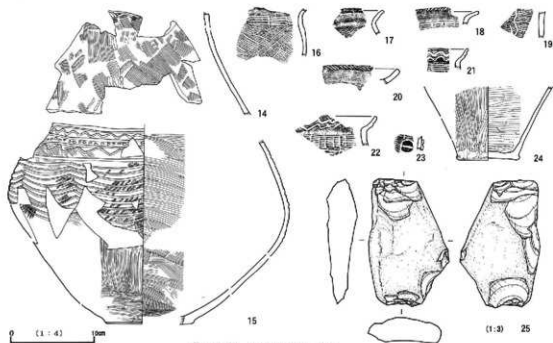
第 14 图 H25号住居址 (2)

H27



(6) H28号住居址

け47グリッドにあり、南端はM4と下水道により壊され、北は攪乱により壊される。南北(276)cm、東西490cm、壁厚2~12cmを測る。主軸方位はN-3°-Wである。炉と南の支柱穴を調査した。P1・P2は径54cm深さ55cmを測る。炉は60×50cmの楕円形に、深さ20cmほど下げて、壺体部重ねて炉底としている。北のP4は本住居に伴うピットで、北東の支柱穴であろう。北西は検出できなかった。



第 16 図 H27号住居址 (2)

出土遺物は弥生土器と磨製石鏃の未製品がある。弥生土器は鉢、壺、甕がある。2の壺は炉に使用されたもので、胴最大径36cmを測る大型品である。無彩色で一部赤色顔料が付着する。文様はなく、ハケナデ後ミガキ調整される。3の壺口縁も炉より出土し、口縁は外反口唇部に縄文を施文している。9の甕は口縁が短く外反、刻みを端部に施し、頸部に櫛描籬状文、胴部に櫛描斜走文を縦羽状に施文する。11・14も炉に利用されたもので、頸部櫛描籬状文、胴部は櫛描波状文を施す。

これらより弥生時代中期後半栗林式土器である。

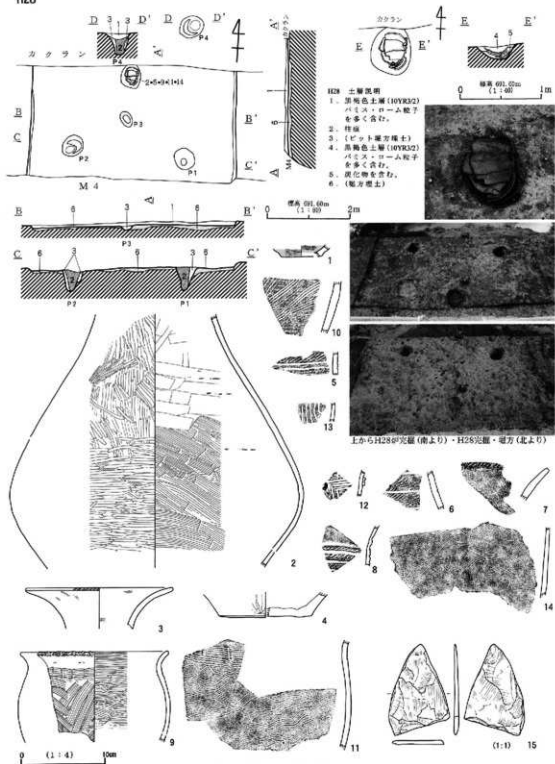
(7) H29号住居址

さ47グリッドにあり、南側は調査区域外である。南北482cm、東西496cm、壁高0～3cmである。壁下に周溝が廻る。炉が中央であるとすれば推定南北長640cm前後となり、隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-8°-Wを指す。炉は62cm×56cm、深さ27cmのほぼ円形を呈す。4と5の大小の甕を敷いて炉底としている。主柱穴はP1(50×40cm、深さ49cm)・P2(64×48cm、深さ41cm)で、床下からほぼ同じ位置に、P9・P10の旧主柱穴があり、建て替えられている。北壁下にP3(52×38cm、深さ58cm)・P4(40×38cm、深さ42cm)は主柱穴同様のビットがある。床下ビットがほぼ同じ位置にある。北の床下には長径108cm短径76cm深さ52cmの隅丸長方形の床下土坑がある。

出土遺物には弥生土器があり、壺・甕である。1の壺は小型品で、無彩色である。4の甕は大型品で、受け口状を呈し、口唇部に縄文、口縁に縄文と1本のヘラ描波状文、頸部櫛描籬状文、胴部は櫛描斜走文を縦羽状にほどこす。5は小型の甕で、4の甕との違いは口縁の施文が櫛描波状文である。

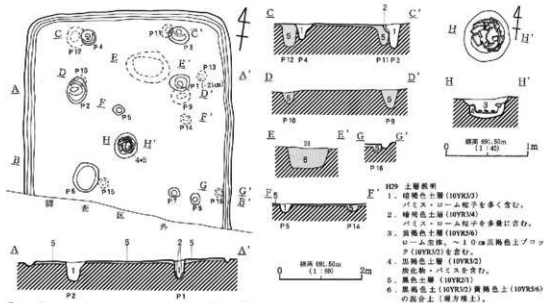
これらは弥生中期後半栗林式土器である。

H28



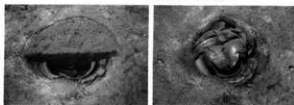
第 17 回 H28号住居址

H29

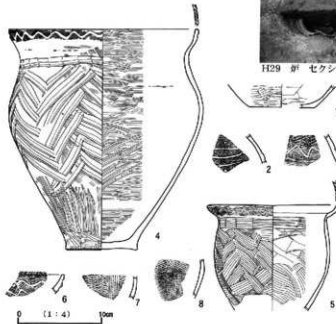


H29 土層説明

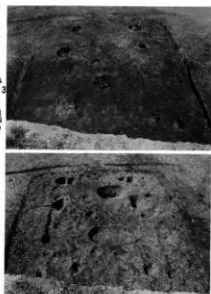
1. 緑褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒子を多く含む。
2. 緑褐色土層 (10YR3/4)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
ローム成分。～1.0cm厚褐色土ブロック (10YR3/2) を含む。
3. 黒褐色土層 (10YR2/1)
炭化物・パミスを含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/1)
炭化物・パミスを含む。
5. 黒褐色土層 (10YR2/1)
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土 (10YR5/6)
の混合土 (層方堆土)。



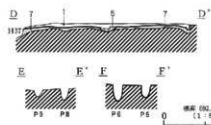
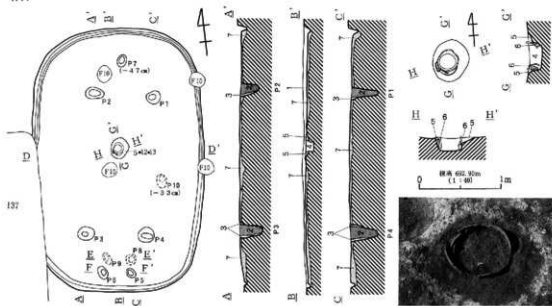
H29 砂 セクション(南より) H29 砂 完掘(南より)



第 18 図 H29号住居址

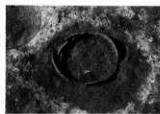


上 H29 完掘・下 地方(南より)

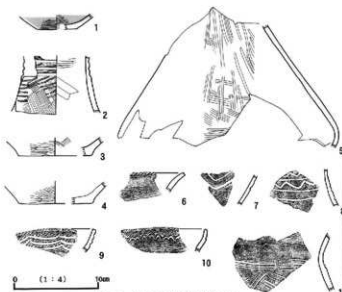


H41 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
ピリス・ローム粒子を多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多く含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2)
ローム粒子・炭化物を含む。
4. 黒褐色土層 (10YR3/1)
炭化物を多数に含む。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多く含む。
6. 暗褐色土 (10YR3/5) とローム混合土。



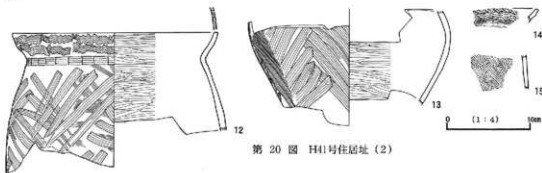
H41 炉 完照 (東より)



第 19 図 H41号住居址 (1)



土 H41 完照・下 堀方(北より)



第 20 図 H41号住居址 (2)

(8) H41号住居址

き30グリッドにあり、H37に西壁一部を、F10が北東に重なり、切られる。長軸632cm、短軸406cm、壁高1～15cmを測る。長軸方位はN-5°-Eを指す。形態は隅の丸い小判形である。壁下には周溝がまわる。炉は住居址中央の床にあり、50×46cm、深さ30cmに掘り込み、甕を逆位において、炉壁としている。主柱穴はP1～P4の4個があり、楕円形を呈す。長径36～42cm、短径28～38cm、深さ43～70cmを測る。北壁中央には棟持柱があり、円形を呈し、径30cm深さ47cmを測る。南側壁下には出入り口施設のビットがあり、円形・楕円形の両方あり、径26～34cm、深さ22～29cmを測る。

出土遺物には弥生土器がある。鉢、壺、甕がある。炉に使用された5の壺は無彩色で、文様がない。2は頸部に縄文を転がし、ヘラ描横線文を施す。12・13の甕は炉に使用したものだが、個体は異なる。12の甕は緩やかな外稜を持つ受け口で、口唇部縄文、口縁櫛描波状文、頸部櫛描簾状文、胴部櫛描斜走文を縦羽状に施す。

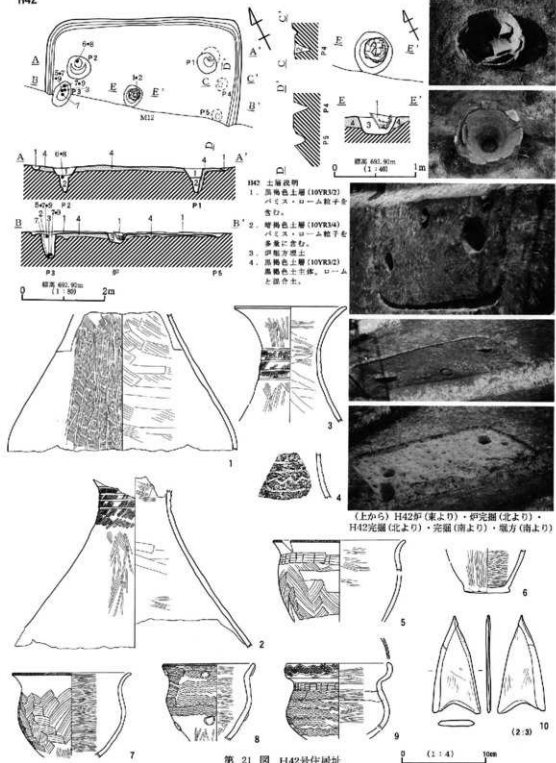
これらより、弥生中期後半栗林式土器である。

(9) H42号住居址

き26グリッドにあり、M12に南半を切られる。南北(216)cm、東西長466cm、壁高1～6cmを測る。壁下には周溝が廻る。炉は中央にあり、長径52cm短径46cmの楕円形に22cm掘り込み、壺胴上部を逆位において炉底としている。主柱穴はP1・P2で、径68・60cm深さ63cmを測る。P3は棟持柱であろうか65×42cm、深さ64cmを測る。東壁中程にはP4・P5があり、径34・30cm深さ37・26cmを測る。出入り口施設のビットで、主軸は東西方向にもっていたであろうか。主軸方位はN-62°-Wを指す。

出土遺物は弥生土器と、磨製石鏃がある。1、2の壺は炉に再利用していた壺胴上部である。1は無文で無彩色、2は無彩色で、頸部に縄文を転がし、ヘラ描横線文を4本廻している。3は白色の壺で、口唇部は剥離により、縄文は分からない。頸部は縄文を転がし、ヘラ描横線文の間にヘラ描列点文を施す。5、7の甕は口縁が短く外反し、同じ器形である。施文は5が頸部に簾状文、胴上部に櫛描斜走文である。7は口縁頸部は文様がなく、胴部に櫛描斜走文だけが施される。8は台付甕の小形品で口縁から胴部まで櫛描波状文である。貼付文があり、円形で穴が開いていない。内面は黒色を呈する。9は受け口の甕で、胴下部が内湾する。口唇部縄文、口縁外面縄文、ヘラ描山形文、頸部櫛描簾状文、胴部櫛描波状文である。5・7・9の甕はP3から、6・8の甕はP2の柱痕から出土している。

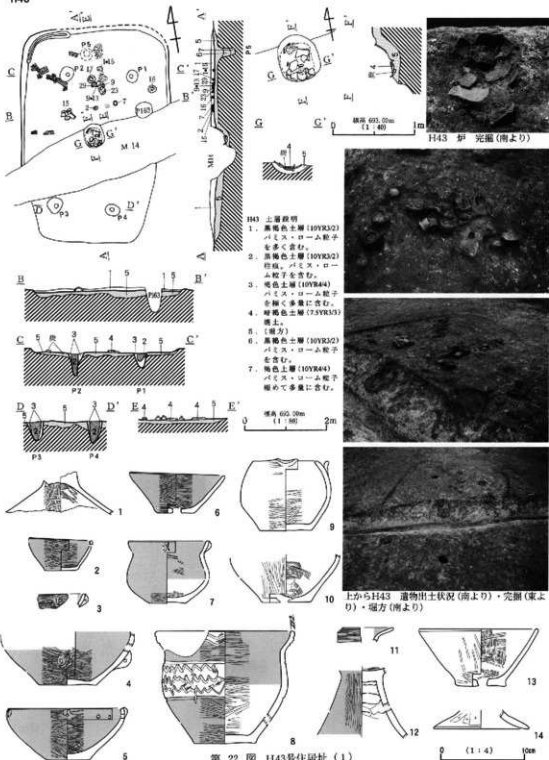
これらより弥生時代中期後半の栗林式土器である。



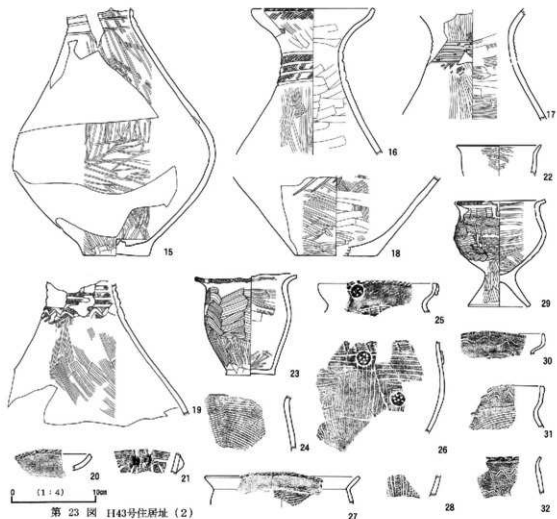
(上から) H42伊(東より)・伊完掘(北より)・H42完掘(北より)・完掘(南より)・堀方(南より)

第 21 図 H42号住居址

H43



第 22 図 H143号住居址 (1)



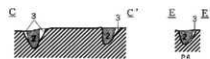
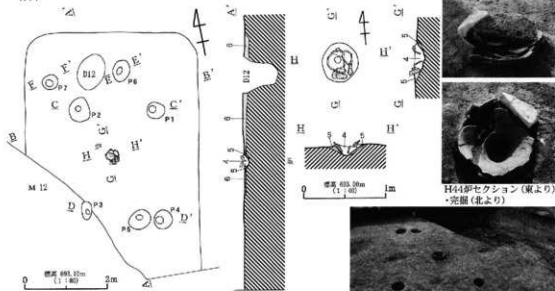
第 23 図 H43号住居址 (2)

(10) H43号住居址

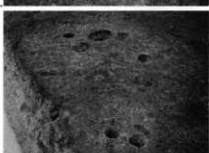
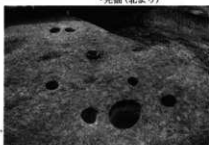
く23グリッドにあり、P163とM14に切られる。南北498cm、東西350cm壁高2~15cmを測る。南の幅が小さい隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-7°-Eを指す。床面からは炭化材が出土している。炉は中央にあり、上面をM14に壊されている。(56)×(48)cmの隅丸長方形を呈し、深さ34cmに掘り込み、土器を敷いている。主柱穴はP1~P4の4個である。径30~40cmの円形に近いビットで、深さ35~56cmを測る。P5は堀方で確認したが、棟持柱で、径28cm深さ52cmを測る。土器が炉の北側床面に集中して出土している。

出土遺物には弥生土器がある。2の杯は小型品で、底径が大きい。赤色塗彩され、口縁に焼成前穿孔の小孔がある。4、5は鉢器形で、4は中位に突起が付いている。6の甗は赤色塗彩され、底部に焼成前穿孔がされている。9は片口が付くピッチャー型で、内外ミガキ調整され、赤色顔料付着の痕跡がある。7、8は深鉢で口縁は受け口状、内面中位まで赤色塗彩し、下はミガキのみとなる。7は口縁外面に突起、8は口縁と胴中位に縄文施文後ナデ、ヘラ描波状文を施す。13は無彩色の甗である。焼成前穿孔され、内面はハケ目を残してミガキ外面はミガキ調整される。15の甗はハケ目調整

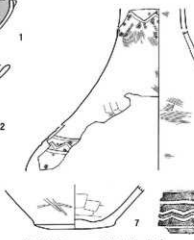
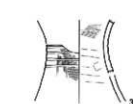
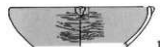
H44



H44 上層説明
 1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
 パリス・ローム粒子を含む。
 2. 赤褐色土層 (10YR3/2)
 パリス・ローム粒子を含む。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/4)
 パリス・ローム粒子を細く
 多量に含む。
 4. 黒褐色土層 (10YR3/1)
 炭化物・焼土粒を含む。
 5. (ジョマド層方)
 6. 暗褐色土層 (10YR3/3)
 コーム粒子を多量に含む。

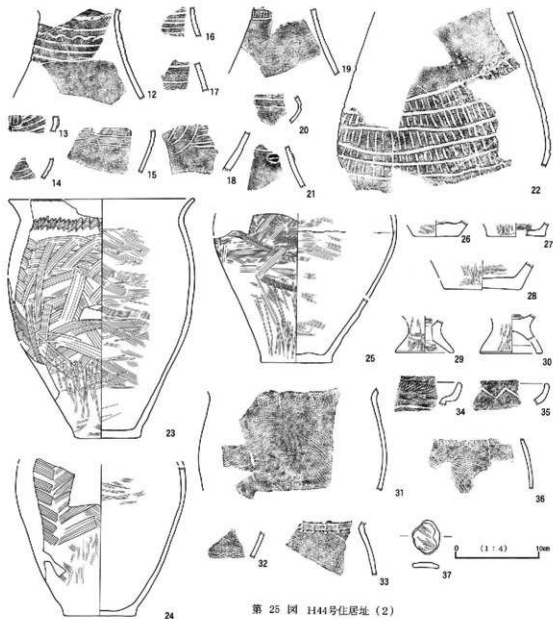


上 H44 完圓(北より)・下 堀方(南より)



第 24 図 H44号住居址 (1)

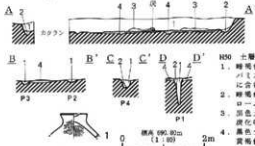
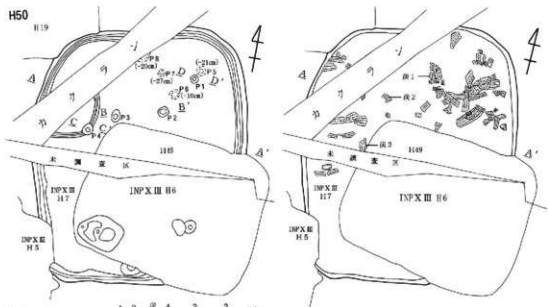
(1:4)



第 25 図 H44号住居址 (2)

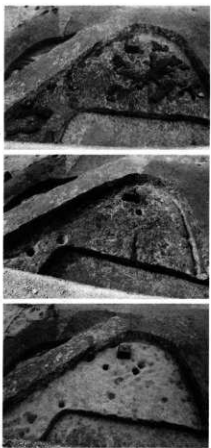
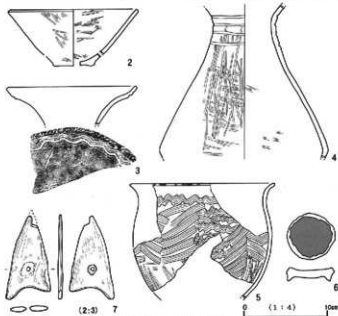
後頭部へラ描横線文を施す。縄文を転がしていない。16は口唇部・口縁部縄文、頭部は縄文施文後へラ描横線文。17は頭部に縄文、へラ描横線文間にへラ描籐状文を施す。

がから出土する19の壺は頭部に縄文施文後へラ描横線文、へラ描波状文を施文している。18の壺胴下部に外面にへラ描斜線文がある。23の甕は小型品で、口縁外反、端部に縄文、胴部籐描斜線文である。29の小型台付甕は口縁外反、端部に縄文、頭部籐描籐状文、胴部籐描波状文にへラ描縦線状文が施される。27の甕は、胴上部に縄文だけを施す。16、17は端面が揃っており器台として転用した可能性もある。



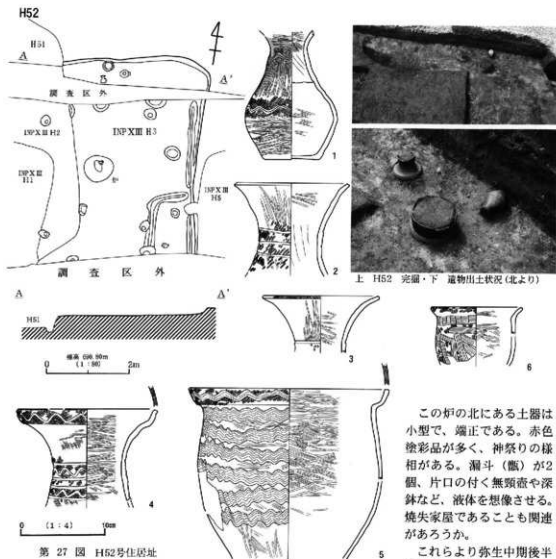
H50 土層説明

1. 暗褐色土層 (10YR3/3) パリス・ローム粒子を多量に含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒を多量に含む。
3. 灰色土層 (10YR2/1) 腐化ロームを多量に含む。
4. 黄褐色土 (10YR3/1) 黄褐色土 (10YR5/6) の混合土。



第 26 図 H50号住居址

上から H50炭化材出土状況・完相・庫方(南より)



上 H52 完備・下 遺物出土状況(北より)

第 27 図 H52号住居址

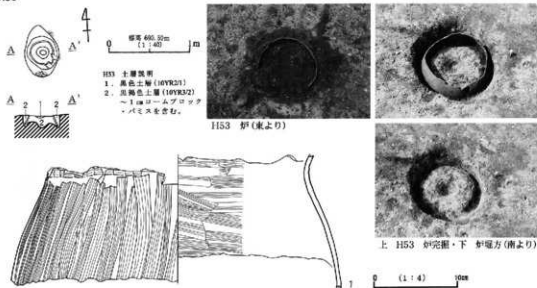
この炉の北にある土器は小型で、端正である。赤色塗彩品が多く、神祭りの様相がある。漏斗(甌)が2個、片口の付く無頸壺や深鉢など、液体を想像させる。焼失家屋であることも関連があろうか。

これらより弥生中期後半栗林式の土器である。

(11) H44号住居址

こ22グリットにあり、D12、M12に切られる。南側の床面は削平されてなく、炉から北の検出は床面でなされ、住居の形態は捉えきれなかった。炉は主柱穴の中央にあって、長径48cm短径44cm深さ16cmの円形の掘り込みに、壺を逆立てて炉底としている。炉の南縁には炉縁石が置かれている。主柱穴はP1～P4で円形を呈し、P2が径62cm深さ52cmと広い他は、径40～46cm深さ30～42cmを測る。南の主柱穴間にあるP5は円形で径54cm深さ54cm、北のP6は棒持柱で径54cm、深さ44cmを測る。

出土遺物には弥生土器がある。鉢、壺、甕、台付甕がある。1の鉢は内外赤色塗彩され、口縁上部に突起が付く。2の壺は頭が太く、口縁がやや袋状を呈する。端部は摩耗しており、縄文の痕跡がわずかにある。頭部にはヘラ描横線文がある。3の頭部はハケ目調整にヘラ描横線を4本廻している。4は頭部にヘラ描横線2本を廻している。6は大きく外反する口縁で、頭部にヘラ描横線、その間を櫛描縦短線で充填している。コービー豆形の貼付文が付く。5の壺は炉に使用されていたもので、頭



第 28 図 H53号住居址

部から胴中位にかけて細長く胴中位にかけて強く張る。頸部は縄文にヘラ描波状文が一本廻る。胴中位上部にも縄文、ヘラ描横線文、ヘラ描波状文が施文される。

10の壺口縁は袋状で、縄文、ヘラ描重ね山形文が施文される。22の壺は無花果形の胴部で、ヘラ描横線文の間をヘラ描縦短線文を充填させている。23は薄手の甕で、口縁が直線的に外傾している。口唇部縄文、頸部櫛描波状文、胴部櫛描斜走文で縦羽状ではあるが、整わず不規則な方向に施文される。31の甕の拓本と同個体である。25の甕も斜走文が施文され、5の壺と同様炉に使用されていた。24の甕も斜走文が施文されるが、底部形が膨らんでいる。

これらより弥生中期後半の栗林式土器であり、胴上部に文様を持つ壺など古相が窺われる。

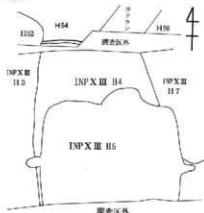
(12) H50号住居址

す64グリッドにあり、攪乱に北西を斜めに壊され、H49に南で切られ、南半城は調査区域外である。本調査区では南北(310)cm、東西496cmを測る。壁高は14~30cmを測る。南のINPXⅢのH7と同一住居であり、南北長は600cmの隅丸長方形を呈す。炭化材が多量に出土している。炭1・3はコナラ節とされ、炭2はヤマグワと同定されている。両者とも強度が高い材質である。炉はH51に切られてない。P1が主柱穴とみられ、柱底径は19cm、深さ63cmを測る。INPXⅢH7との主柱穴の配置は南北360cm、東西228cmの長方形に配され、北西ピットは攪乱の位置に当たる。北西に70cmほどを囲む間仕切り溝がある。

出土遺物には弥生土器と磨製石器があり、混入品としては鉄軸腕を再利用した陶板がある。1の蓋は台付甕であろうか再利用している。つまみの端部は丁寧な磨り込まれている。2の甕は、底部に焼成前穿孔がある。口縁端部は曖昧に面取りされる。3の壺は受け口状ではあるが、外稜はなく、内湾している。端部に縄文、口縁外面にヘラ描波状文、頸部には縄文とヘラ描横線文の痕跡がある。4の壺は頸部にヘラ描横線文が4本施文される。5の甕は口縁が短く外反して、口縁端部縄文、頸部に櫛描波状文、胴部櫛描斜走文を縦羽状に施す。胴中位に櫛描波状文が1単元分施文される。

これらより弥生時代中期後半栗林式土器である。

H54



第 29 図 H54号住居址

(13) H52号住居址

す66グリッドにあり、本調査では北端を調査し、南北(60)cm、東西(354)cmを調査した。わずかな調査ではあるが遺物が北壁中央にまとまって5個体見られた。

出土遺物は弥生土器で、壺と甕がある。1の壺は口縁が欠損し、無彩色であるが所々に赤色顔料が見られ、頭部へラ描山形文、胴中位縄文施文後へラ描山形文である。2の壺は口縁がラッパ状に開き、端部は縄文、頭部は縄文へラ描横線文3本を廻す。下端がほぼ水平に欠けており、器台として再利用している。4は受け口状を呈し、端部と縁に縄文を転がしてへラ描波状文を1本施文、頭部は縄文、へラ描横線文間に、上段は山形文、下段は波状文に近い山形文を施文をしている。5の甕は大型品で、受け口の口縁である。口唇部縄文、口縁縄文後柳描波状文、頭部から胴下部まで柳描波状文を施す。

6は小型の甕で、口縁は短く外傾、口唇部、口縁に縄文を転がし、頭部柳描波状文、胴部柳描斜走文がランダムに施文される。

これらより弥生中期後半の栗林式土器である。

(14) H53号住居址

さ66グリッドにあり、炉址を検出した。北は下水道で壊され、南はM4、H11に壊される。炉は長径61cm短径42cm深さ38cmに甕の胴部を輪切りにして、炉の側壁としている。柱穴は検出できなかった。H19のP1、P2も主柱穴としてもよい位置にあるため、本炉に伴う可能性もある。

出土遺物は炉に使用された甕である。胴部径40cmの大型品で、頭部柳描波状文、胴部柳描縦線文である。

(15) H54号住居址

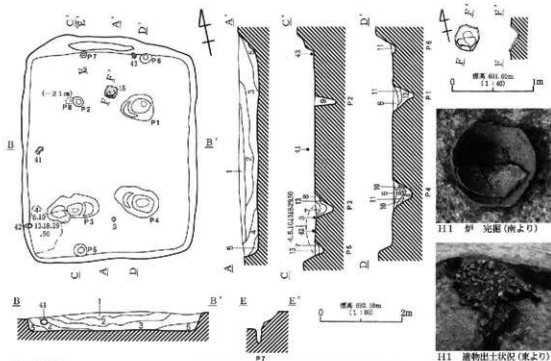
す66グリッドにあり、攪乱、H50、H52に切られ、南は調査区域外である。北壁の一部を調査し、南北(12)cm、東西(100)cm、壁高は7~13cmを測る。

出土遺物はない。INPX III H4と同じ住居で、報告では遺物はないが重複関係から弥生中期後半とされている。

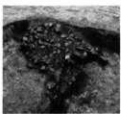
2、弥生時代後期

(16) H1号住居址

く43・44グリッドにあり、床下のH55を切る。南北512cm東西396cm、壁高は19~43cmを測り、隅丸長方形を呈す。N-11°-Eを指す。主柱穴はP1~P4の4個があり、P2は柱痕を残し、他のP1・P3・P4は掘方の状態で検出された。これらは柱材を抜いたとみられ、黒色土や黒褐色土が入り込んでいるのであろう。床面は黒褐色土とロームブロックの混在土層で締まっている。P2は柱痕が残り、円形の径26cm、深さ51cmを測る。P1・P3・P4は長径80~128cm、短径54~70cm、深さ45~52cmを測る。片側にテラスを持ち、柱穴の脇から掘り起こしている。壁際のピットは北壁側に2個、南壁側に1個ピットがある。P5は円形で、径30cm、深さ20cm、P6は径28cm、深さ11cm、P7は円形で、径15cm、深さ36cmを測る。炉は北の主柱穴線中央よりやや北にあり、径30cm、深さ12cmの円形に掘り窪め、赤色塗彩された大型の壺型土器の胴部片を敷いて炉底としている。南西隅の床には壺が細かに小片の塊で、出土している。土器をまとめて廃棄したようである。4の鉢、



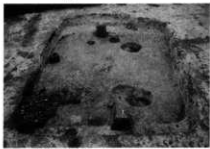
H1 炉 完図 (南より)



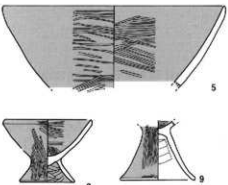
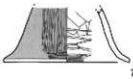
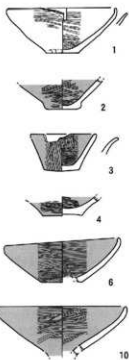
H1 遺物出土状況 (東より)

H1 土層説明

1. 黒色土層 (10YR2/1)
バミスを含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2)
バミスを多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR2/3)
バミスを多量に含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2)
バミス、炭化物を多く含む。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3)
バミス、ローム粒子を多量に含む。
6. 褐色土層 (10YR4/6)
ローム粒子を含む。
7. 暗褐色土層 (10YR3/3)
バミス、ローム粒子を多量に含む。
8. 黒褐色土層 (10YR2/2)
バミス、ローム粒子を多量に含む。
9. 黒褐色土層 (10YR2/2)
バミスを含む。
10. 黒褐色土層 (10YR2/2)
ロームブロックを含む。
11. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多量に含む。
12. 黒色土層 (10YR2/1)
炭化物を多く含む。
13. 暗褐色土層 (10YR3/4)
バミス、ローム粒子を多量に含む。

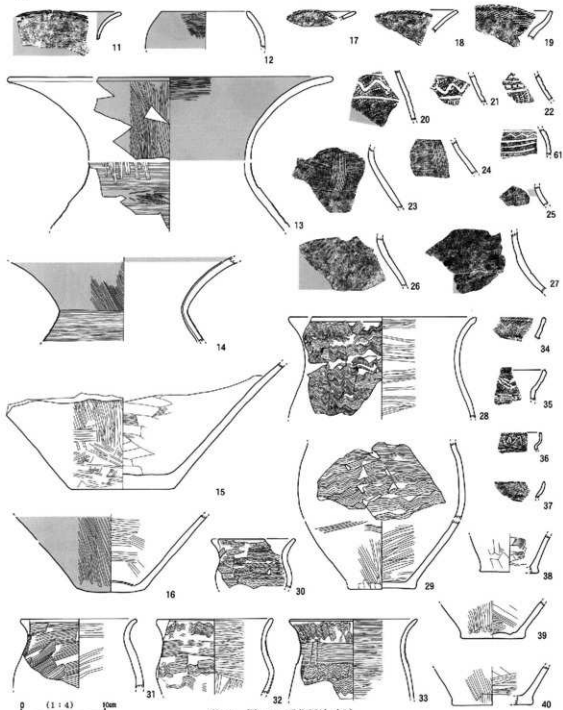


H1 完図 (南より)

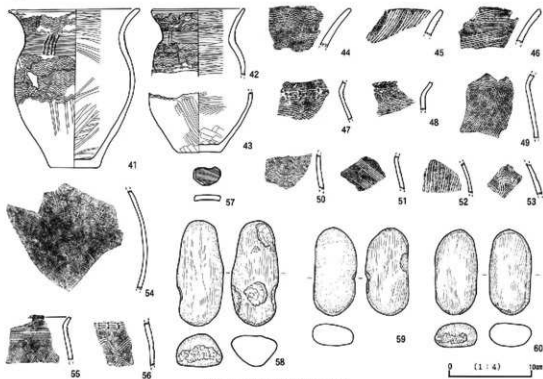


第 30 図 H1号住居址 (1)

H1



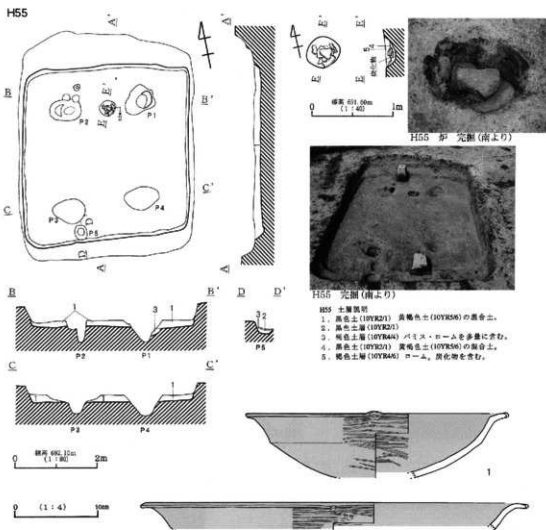
第 31 图 H1 号住居址 (2)



第 32 図 H1 号住居址 (3)

10の高杯、13・18の壺、29・50の甕と多器種がある。

出土遺物には弥生土器と叢石がある。1の杯は口縁上部が直立気味になり、片口が付く。赤色顔料の付着は確認されるが、赤くはない。3は小型の片口付杯で、赤色塗彩され、口縁は直線的である。8は高杯の小型品で脚は「八」の字に開き、杯部内面はほぼ直線的に開く。内外赤色塗彩される。11は口縁が大きく外反する高杯の口縁とみられるが、薄手で、端部は縄文、頭部は櫛描波状文、内ミガキ赤色塗彩される。H22に同じ破片が混入している。12は無頭壺で、内面はナデ、外面ミガキ赤色塗彩される。13の壺は頸が太く、口縁は強く外反し端部が水平に近くなる。頭部は櫛描横線文の間に赤色塗彩の帯を入れ、2段の横線文を施文する。口縁内外と、外面胴部が赤色塗彩される。壺の頸部文様は14・26の櫛描横線文、25の櫛描波状文、23・24櫛描T字文である。赤色塗彩されるが23・24は無彩色である。27は細いヘラ描横線文とヘラ描斜線文で構成する矢羽根文である。壺の胴部形は15・16の壺の下部はやや外反気味である。31は甕の厚手で、口縁が短く外反、最大径は胴部にある。外面は櫛描斜走文が全面に施される。32は口縁がゆるやかに外反し、胴部が膨らんで最大径を持つ。28・33・41の甕は口縁が大きく外反し、口縁に最大径を持つ。28は頭部の櫛描波状文はなく、波状文だけが施文される。他は頭部に櫛描波状文が施される。42は胴部から口縁の外傾が屈曲気味で口縁は直線的である。端面は面取りされる。下端は揃って欠けており、器台としての転用品であろう。30は小型の甕で、口縁に最大径を持ち、波状文の波が細かい。17～22までは壺片、38～56は甕の底部や破片で弥生中後期後半である。51・53は地文に縄文を施し、櫛描文を重ねている。中期の土器を除くと赤色塗彩の杯や壺、櫛描横線文の壺、波状文の甕など、これらより、弥生後期後半箱清水式土器である。



第 33 図 H55号住居址

(17) H55号住居址

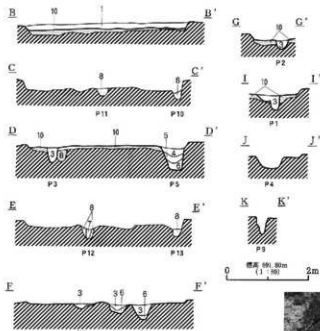
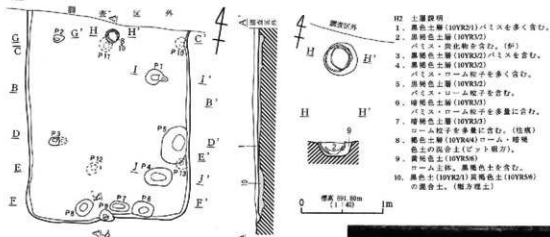
く43グリッドにあり、H1号住居址の床下住居址である。南北長404cm、東西長402cm、壁高11cm～18cmを測る。主軸方位はN-12°-Eを指す。H1より南北108cm、東西は4cm小さい。主柱穴はH1と同位置にあるものは壊されている。炉はP1とP2の中間にある。42×38cmのほぼ円形で12cm掘り込み、1、2の高杯が敷かれていた。土器と土器の間に炭化物層が残っていた。

出土遺物は弥生土器である。高杯2点で、炉に使用されている。1の高杯は口縁が直立し、内縁を持って折れるもので、端部に突起が付き、内外赤色塗彩される。2は大型品で口縁が大きく外反している。内外赤色塗彩される。これらより、H1との土器と大差はなく、弥生時代後期後半の箱清水式土器である。

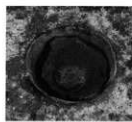
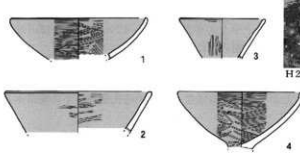
(17) H2号住居址

き46グリッドにあり、北側は調査区域外である。南北長(470)cm、東西長380cm、壁高は3～17cmを測り、隅丸長方形であろうか。主軸方位はN-8°-Wを指す。床面は黒色土とロームブロック

H2



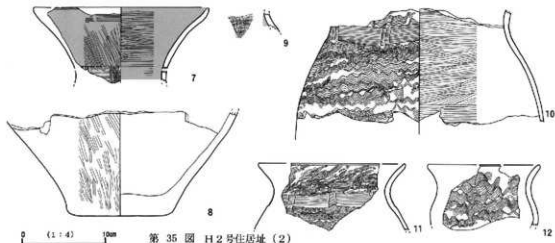
上 H2 完掘・下 堀方(南より)



H2 伊 完掘(南より)

H2 カ セクション(南より)

第 34 図 H2号住居址(1)



が混在して締まっていた。炉は北にあり、径40cm、深さ16cmの円形に掘り込まれ、8の壺胴下部に10の環状の裏上部を入れ込んで炉底としている。

主柱穴は西列のP2・P3が主柱穴としていい位置にある。東側の主柱穴はP1が柱痕状であるが位置が南にずれている。南東のピットは見当たらない。P6～P9は出入り口関連のピットである。P2は長径28cm、深さ24cm、P3は長径26cm、深さ36cmを測り楕円形である。P3の東側には堀方ピットが重なる。P5は貯蔵穴で、長径94cm、短径62cm、深さ56cmの楕円形である。黒褐色土が堆積している。P4は、長径68cm、短径44cm、深さ25cmを測る。

堀方では炉の下のP11があり、P10～P13は旧住居の主柱穴とみられる。長径28～36cm、短径25～32cmの楕円形を呈し、27～34cmを測る。

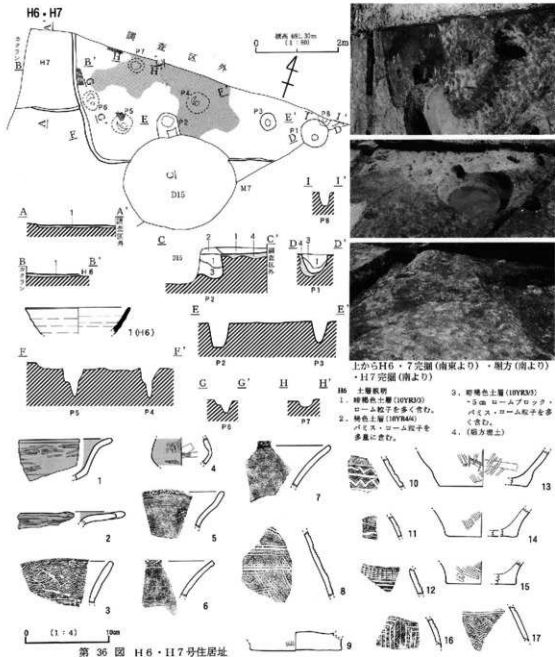
出土遺物には弥生土器がある。鉢、壺、甕、土板がある。1の鉢は、高杯の4と同器形であり、内湾気味に外傾し、端部は内湾する。内外ミガキ赤色塗彩である。2・3は高杯杯部であろうか口縁が直線的に外傾する。5の壺は口縁の内外、胴上部が赤色塗彩され、頸部に文様がない。7の壺は口縁が外反して、上端が内湾直立気味になる。頸部に櫛描T字文を施し、口縁内外赤色塗彩される。8の壺は炉に使用されたもので、底部は厚く、胴下部は内湾気味である。10の甕は炉に使用した甕で、櫛描波状文と櫛描麁状文を施文する。11の甕は口縁が強く外反する。口縁に施す波状文は不均一な櫛描波状文で、斜走文に近い。12は頸部の麁状文がない。

これらより弥生時代後期箱清水式土器である。

(18) H6・H7号住居址

H6号住居址は、く52グリッドにあり、北は調査区域外にあり、D15、M7に切られる。H7を切る。南北(310)cm、東西長(418)cm、壁高1～10cmを測る。床面には炭化物が多量に残っていた。南東のP1が貯蔵穴で、円形を呈し径66cm深さ53cmを測る。P2・P3は主柱穴であろうか。径52・44cm、深さ58・47cmを測る。東西棟でP7の40×34cm、深さ18cmの円形の落ち込みが炉であるとする解釈ができるであろうか。床下のP4・P5は小さな径で深く、弥生中期の住居のピットであろうか。重複が考えられる。H7も重複し、本址が切っているとしたが部分的で捉えきれていない。

出土遺物には弥生土器で、高杯、甕がある。1、2は高杯の口縁であるが直立した口縁が折れて、水平に伸びるものである。2は大型品で、口縁に突起が付く。内外赤色塗彩される。3の甕は外傾するがやや直線的である。外面は櫛描波状文、麁状文を施す。9の底部の時代は分からないが4～17は弥生中期後半の栗林式土器である。



これらより、H7は弥生後期後半箱清水式土器の住居で、また混入する多くの弥生中期の土器からも重複する住居があり、弥生中期後半と推定される。

H7号住居址は、 $\times 53$ グリッドにあり、東はH6と重複、西は攪乱溝に切られる。南北(188)cm、東西(157)cmを調査し、壁高0~3cmを測る。住居の南西隅に当たるようだが明確ではない。

出土遺物には須恵器杯がある。内外口クロ調整される。1片からは奈良・平安の住居址となろう。しかし、混入はままあることであり、確定には資料不足であるため、時期不明としたい。

(19) H9号住居址

し56グリッドにあり、南側は調査区域外である。単独ピットP69～P71に切られ、P108を切る。南北長(420)cm、東西407cm、壁高17～25cmを測る。形態は隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-10°-Eを指す。覆土は黒褐色土が堆積している。変わった事として、北の床面は堅い床面の上にロームを貼っている。ロームの貼り床は平坦ではなく、炉周辺を埋めて高くし地床炉を作っている。貼床は堅いというほどではないが、硬度はある。地床炉は長径64cm、短径36cmの楕円形で11cmほど下がっている。貼り床を切開したところ、ピット崩方が切っていることが確認され、やや軟弱な貼り床面は使用されていることが分かった。堅く平坦な床面を埋めて不安定な床面に地床炉を設けて使用した理由はなんであったろうか。

ローム貼床下の本来の炉は円形で、径54cm深さ18cmに掘り込まれ、15の壺胴下部を置いて、炉底としている。主柱穴は北側の2個が検出され、P1(94×80cm、深さ72cm)、P2(88×84cm、深さ67cm)の円形を呈す。柱痕は円形で、径24cmを測る。P2の床下に旧ピットがある事から建て替えている。北東のP3は貯蔵穴で、径56cm、深さ86cmを測り、円形を呈す。北壁にはP5～P7の浅い壁柱穴がある。主柱穴の両脇に当たる東西の壁にはP4、P8の壁柱穴がある。長径46・32cm深さ30・54cmを測る深いピットである。南の主柱穴は調査区域外になるであろう。床面はロームブロック含む土を貼り、良く締まっていた。崩方はやや内湾する住居プランがあり、建て替えている。南側の床面下は深く下がっている。

出土遺物には弥生土器と砥石がある。土器は杯、鉢、高杯、壺、甕、土板がある。9の杯は小型で、10の裾が外反して延びる脚が付いて高杯となろうか。11の鉢は薄手で、全体に内湾する。13の壺は外反する口縁が外稜を持って短く直立する受け口である。無彩色だが内面には赤色顔料が黒色に変化して付着している。16の壺は薄手で、頸部に細い櫛でT字文が施文され、口縁と胴上部は赤色塗彩である。14は球形胴の胴部が外稜を持って底部にほぼ直線的に窄まっている。底径は小さい。15は炉に使用された壺で胴部径49cmを測る。19の甕は口縁が筒状に直立し口縁がいくらか外傾し開く、胴部は中位にかけて膨らみ最大径を持つ。櫛描斜走文が横羽状に施され、頸部に簾状文を施す。20の甕は口縁が外反気味に大きく開き、最大径を持つ。22の甕は薄手で、口縁は短く外反、頸部でくびれ、胴部にかけて張る。口縁胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施文する。

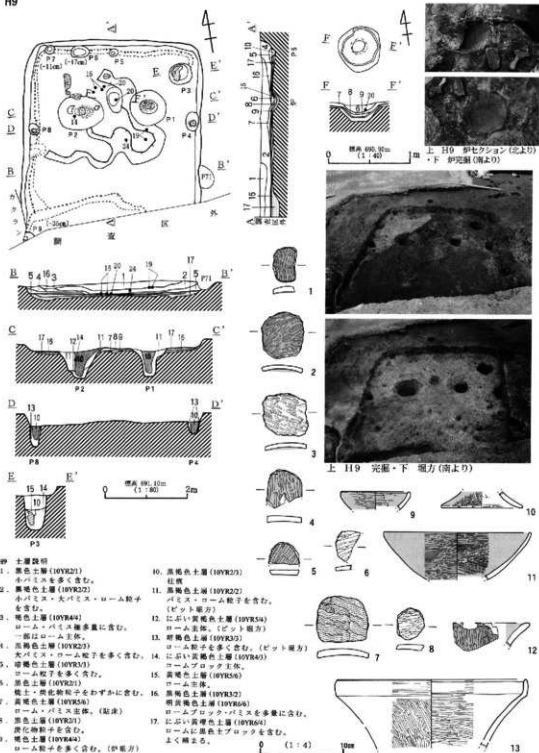
これらより頸部櫛描T字文、壺の胴下部の屈曲が少ないなど、櫛描波状文の甕などから弥生後期箱清水式前半の土器に伴う弥生後期の住居であろう。

(20) H14号住居址

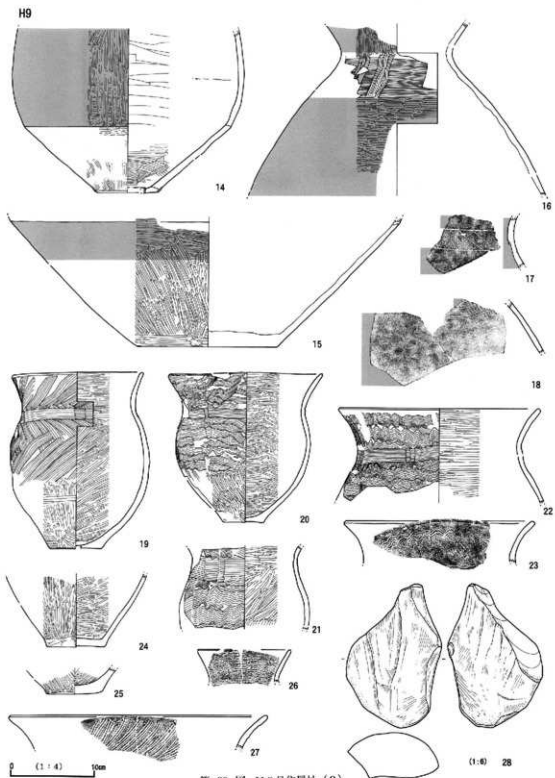
し63グリッドにあり、H12に北西、H13に南東、北でM4に切られる。さらに北は下水道により壊される。南西を調査し、南北(230)cm、東西(326)cm、壁高7～32cmを測る。主柱穴はP1(30×20cm深さ43cm)P2(28×20cm深さ42cm)のほぼ円形を呈す。P3は46×40cm深さ21cmの隅丸方形を呈す。P4・P5はM4に切られているが深いピットで主柱穴であろうか。南側とは間口が異なる。200cmと160cmである。炉はM4に壊されたようである。壁下には周溝が廻る。

出土遺物には弥生土器がある。杯、高杯、鉢、壺、甕がある。1の杯は下部が直線ではあるが外反気味に外傾する。2の高杯は口縁が短く外傾外反し、3は内稜を持って口縁が外方に折れる。端部に二山の突起が付く。4は鉢であろうか口縁上端が明確な稜を持たずに外反する。4・5が同器形であるが、内面ミガキ赤色塗彩は同様である。外面の赤色塗彩が5はナデ調整で彩色されないが、4は下部に調整されている。6の壺は無彩色で、口縁に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施文する。12の甕外面上部にのみ櫛描波状文が施される。14は櫛描波状文と縦に垂下する直線文の甕がある。9は無彩色で、外面ミガキ、内面は細かいハケ目を残す。赤褐色の塊状物質はベンガラと分析された。

これらより壺が赤色塗彩されていない、甕の波状文が帯状であるなどから弥生後期初頭の古田式土器であろう。

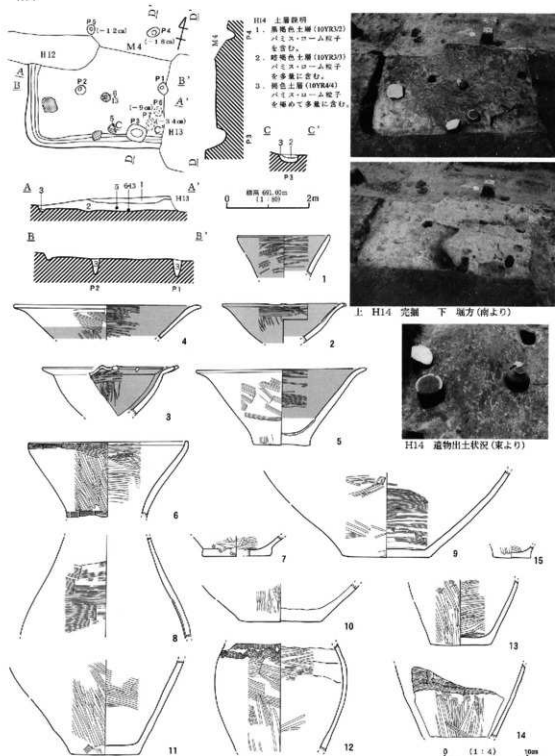


第 37 図 H9号住居址 (1)

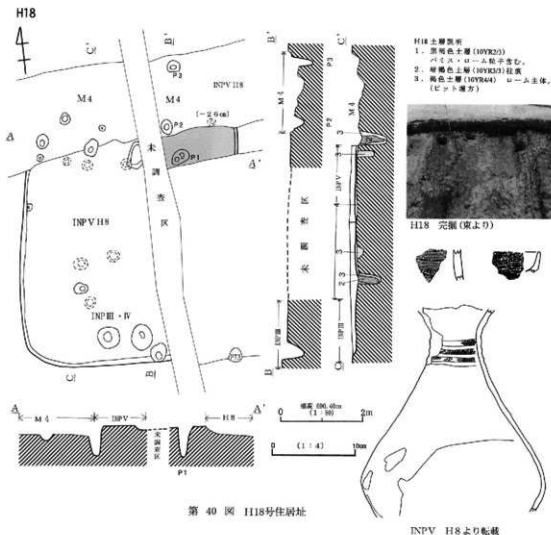


第 38 图 H9号住居址 (2)

H14



第 39 図 H14号住居址



(21) H18号住居址

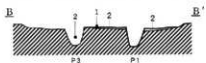
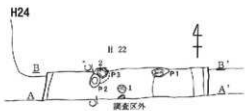
し69グリッドにあり、北をM4、南東をH8に切られる。南北66cm、東西184cmを調査した。INPV III・IVとINPV H8として調査している。住居は全体で、東西504cm、推定南北700cmの隅丸長方形を呈すようである。P1は主柱穴で、長径46cm、短径30cm、深さ73cmを測る。P3は32×28cm、深さ44cmを測る。炉の北にあって、棟持柱であろう。炉は北の主柱穴間にある。

出土遺物はない。INPV H8の報告では弥生後期としている。

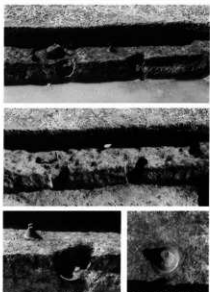
(22) H24号住居址

し41グリッドにあり、南は調査区域外、北はH22とD13に切られる。南北72cm、東西長276cmを調査した。壁高は4～9cmを測る。P1・P2は主柱穴で、P1(30×16cm、深さ43cm)、P2(24×18cm、深さ44cm)は楕円形を呈す。P2は床下ピットP3を切っている。P3は円形で、深さ44cmを測る。P3からは2の壺下半が出土している。

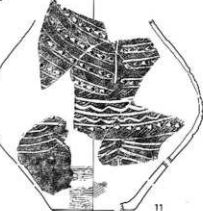
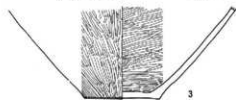
出土遺物は弥生土器である。2の壺の内面上部は煤けており、炉に使用されたものである。外面はハゲ目を残してミガキ調整される。弥生中期後半栗林式の土器とみられる。3の壺下半も上端が整え



- H24 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) パリス・ローム粒子を含む。
 2. 褐色土層 (10YR4/4) パリス・ローム粒子を多量に含む。(南方埋土)

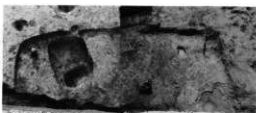
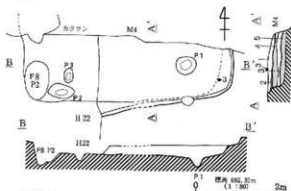


上から H24 完備・地方・
遺物出土状況(北より) H24 遺物出土状況
(南より)



第 41 図 H24号住居址

H30



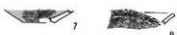
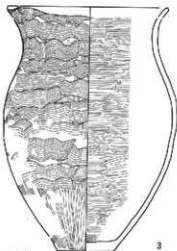
H30 完掘(北より)



H30 型方(北東より)

H30 土層説明

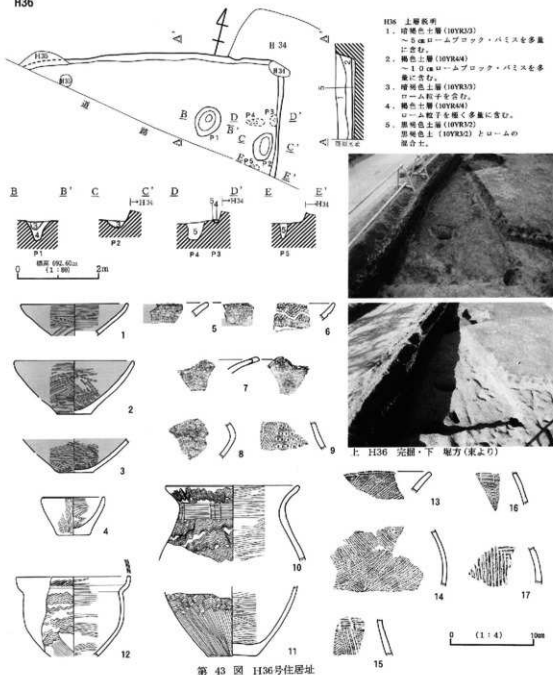
1. 暗褐色土層(10YR3/3)
ローム地すき多く、バク土を含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/4)
ローム土砂。(粘床)
3. 褐色土層(10YR4/6)
ローム土砂。(粘床)
4. 暗褐色土層(10YR3/3)
黒色土を含む。
5. 褐色土層(7.5YR4/4)
縦紋に黒色土とローム層。(粘床)



第 42 図 H30号住居址

られ、灰が付着しており炉に使用されたものである。胴下部は一面にミガキ調整される。1は高杯の脚部で、裾部が開いて外反しラッパ状である。内面は輪積痕を残してナデ、外面はミガキ赤色塗彩である。床下から出土の2の壺が弥生中期であることから、重複するH22のⅢ・Ⅳ区の堀方から出土した弥生中期後半の土器をH24に掲載した。11の壺は口縁が受け口で、口唇部、口縁外面に縄文施文後ヘラ描波状文、胴上部に縄文、ヘラ描垂下線文、ヘラ描横線文、一段飛ばしに管状具で刺突をして列点文を廻している。胴下はヘラ描き連弧文が施される。12の甕は口縁が短く外反し、口唇部縄文、頸部柳描波状文、胴部柳描斜走文を横羽状に施している。

これらよりラッパ状の脚の高杯、3の全面に胴下部をミガキ調整する壺などから弥生時代後期箱清



水式土器の住居であるが細分する根拠がないので後期としておく。また床下ピットから出た2の壺は弥生中期後半の土器と思われる。11、12の土器はH22のP4から出土した弥生中期後半栗式土器であり、床下にプランは不明であるが、弥生中期後半の住居址があることは確実である。

(23) H30号住居址

き39グリッドにあり、H22に西半城、F8に南、P136に南壁、M4と下水道に北の大半を切られる。南北(130)cm、東西長492cmを調査した。壁高は8~20cmを測る。本遺構は道路下にあったためか締まっており、床面の検出は難しい住居である。そのためか2つの床面がみられた。1層下で貼床状の硬質面があり、黒色土を挟んでその下にも床面がある。上面の床が偽物なのか、二遺構が重なっているのか完全に掘れないこともあって詳細はつかめなかった。H22の堀方に、深い方のプランと一致する堀方がある。

出土遺物には弥生土器がある。1の高杯は脚部が「ハ」の字に開き、杯部内面と脚外面は赤色塗彩される。2の甕は台付になるのであろうか、口縁が短く外傾し、胴部は張っている。胴中に櫛描斜走文を施文する。3の甕は口縁が短く外反、肩部張って最大径を持つ。口縁から胴中位下に櫛描波状文を施している。重複するH22のⅠ・Ⅱ区の堀方の弥生土器を掲載した。8~12は弥生中期後半の粟林式土器である。13はH22の覆土からの出土であるが本址の土器と近いものである。胴部にヘラ描帯文が施される。

これらより深い床面に伴う土器は弥生後期の上器である。

(24) H36号住居址

こ36グリッドにあり、南側は道路が横断し調査ができなかった。東と西にH34・H35に切られる。西側でM11を切っている。住居の北東部分、南北(260)cm、東西(594)cmを調査する。壁高は10~39cmを測る。P1が主柱穴で、76×60cmの楕円形を呈し、深さ54cmを測る。P2は70×46cm深さ20cmで、入り口脇の貯蔵穴である。P3は浅く、P4は46×16cm、深さ45cmと長楕円形で、深い。P5も同様である。P4・P5でセットの出入り口施設のビットであろう。

長軸方位がN-76°-Eを指す東西棟であろう。炉は検出されていない。

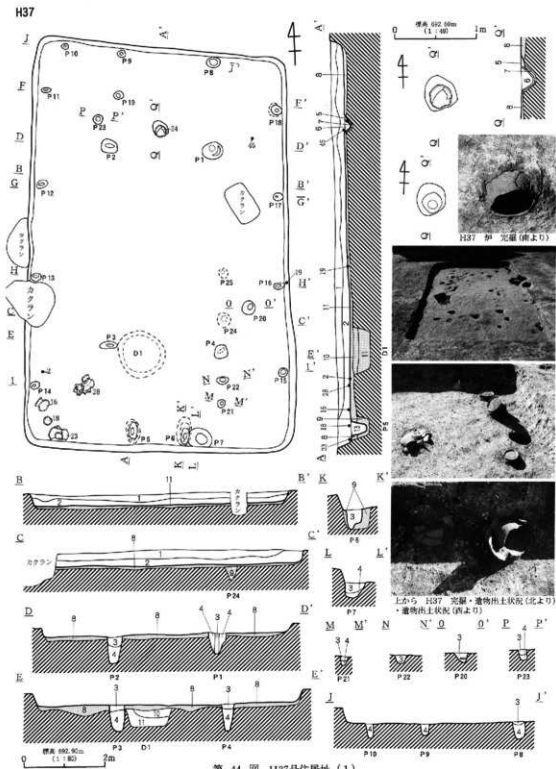
出土遺物には弥生土器がある。杯、鉢、甕があり、壺は小破片のみである。1・3の杯は薄手である。1の口縁端部は小さく内湾する。2は厚く重いもので、口縁が内湾気味に外傾する。外面の器形を内湾させ丸味を作っている。底部形が正円ではなく口縁下部の強いミガキ調整で角張るところがある。4は小杯で、無彩色である。内面は丁寧な磨かれるが、外面はヘラ削りを残してミガキが施される。10の甕は口縁が短く外反し、胴中に最大径をもち厚手である。外面は口縁から胴上部に櫛描波状文、頸部に櫛描斜走文を施す。13・14は櫛描斜走文の甕である。12の甕は弥生時代中期後半粟林式土器で混入品である。6~9の壺片、15~17の甕片も同様である。

これらより10・11の波状文の甕などから弥生時代後期の箱清水式土器である。

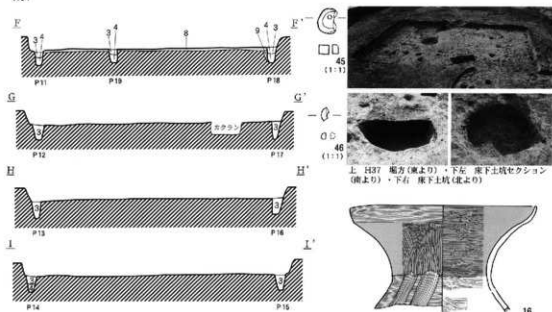
(25) H37号住居址

く31グリッドにあり、H41を切る。南北長960cm東西長614cm、壁高21~41cmを測る。主軸方位はN-0°で北を指し、隅丸長方形を呈する。本遺跡最大規模の住居である。主柱穴はP1~P4の4個であり、南の広い方で東西280cm、南北416cmの長方形に配する。ビット形は楕円形を呈し、長径34~45cm、短径18~35cm、深さ49~66cmを測る。南壁には、P5・P6の出入り口の施設ビットと、脇の貯蔵穴P7がある。P5・P6は南北に長い楕円の長径38cmと46cm、短径20cmのビットに柱痕が見られた。東の脇にはP7があり、長径58×短径44cm、深さ38cmの楕円形である。壁柱穴は東・北・西壁にP8~P18まで11個ある。間隔は224・240・200cmで、P10が円形で径16cmと小さいが、他は楕円または円形で、長径22~35cm、短径18~26cm、深さ34~46cmを測る。炉は北主柱穴ラインより上に位置している。42×35cmの楕円で、15cm掘り窪め、土器の底部を置いている。床下からはP3の東に床下土坑があり、径120cm、深さ46cmを測り、ほぼ円形を呈す。

出土遺物には弥生土器がある。蓋、杯、鉢、壺、甕、敷石、ガラス小玉がある。1は蓋で赤色顔料が付着する。つまみの穿孔が多孔である。2の杯は無彩色で、部厚く、ナデ調整のままミガキが施されていない。素地のまま焼成している。3の杯は薄手で、H36の1と同器形である。4の鉢は口縁端部



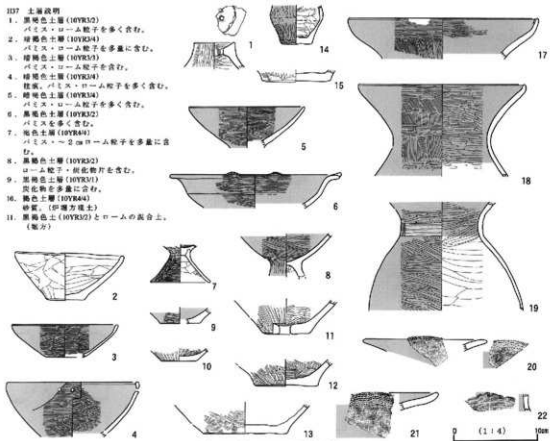
H37



上 H37 堀方(東より)・下左 床下土坑セクション(南より)・下右 床下土坑(北より)

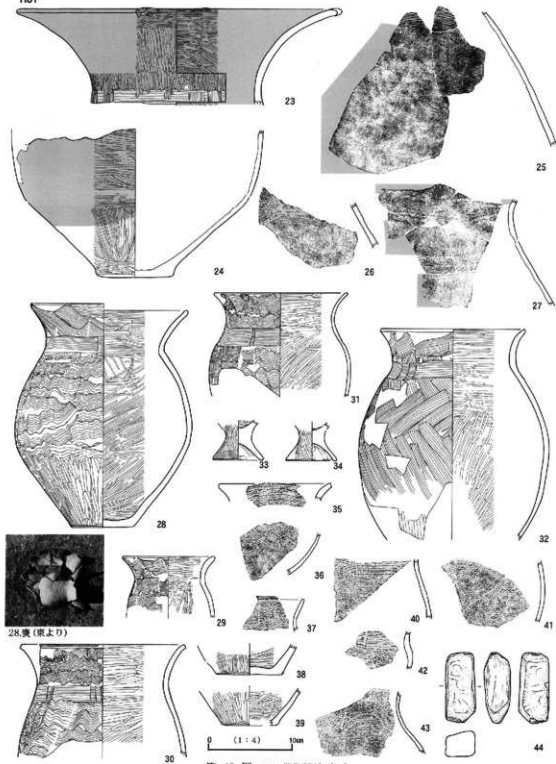
H37 土層説明

1. 黒褐色土層(10YR3/2)
パリス・ローム粒子を多く含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/4)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
3. 暗褐色土層(10YR3/3)
パリス・ローム粒子を含む。
4. 暗褐色土層(10YR3/4)
鉄質。パリス・ローム粒子を多く含む。
5. 暗褐色土層(10YR3/4)
パリス・ローム粒子を多く含む。
6. 黒褐色土層(10YR3/2)
パリスを多く含む。
7. 灰色土層(10YR4/0)
パリス・～2cmローム粒子を多量に含む。
8. 黒褐色土層(10YR3/2)
ローム粒子・板状物片を含む。
9. 黒褐色土層(10YR3/1)
炭化物を多量に含む。
10. 褐色土層(10YR4/4)
砂質。(伊達方硬土)
11. 黒褐色土(10YR3/2)とロームの混合土。
(堀方)



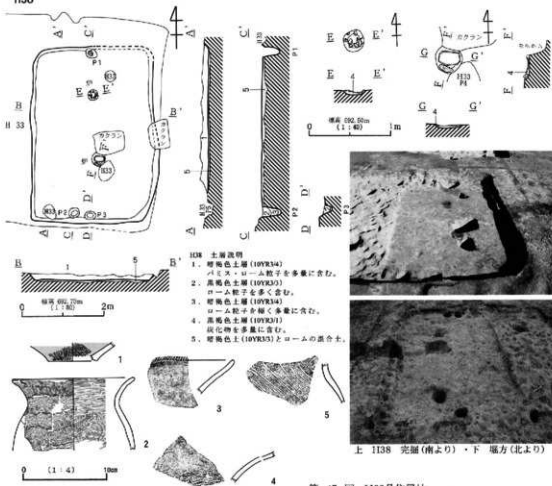
第 45 図 H37号住居址(2)

H37



第 46 図 H37号住居址 (3)

H38



第 47 図 H38号住居址

に焼成前穿孔があり、薄手の作りである。5の高杯の杯部は全体に内湾する。6は外稜をもって立ち上がり口縁上部が全体に外反する。端部に突起が付く。7の高杯は小型で、裾が外反する。壺は口縁が受け口を呈すものと外反のみのものがある。16は受け口の外面に櫛描横線文、頸部に櫛描T字文を施し、赤色塗彩される。18は受け口ではあるが内湾し、外稜はない。文様はなく、赤色塗彩される。19の壺の口縁は欠損し、頸部に櫛描簾状文が施され、赤色塗彩される。内面端部が煤けており、炉に使用されたことのある土器である。23は大型の壺で、頸が太い。口縁は外反し水平に近く伸びる。口径は40cm近い。頸部には櫛描T字文、口縁は赤色塗彩される。16・18・23の壺は南西隅から出土し、下部は欠損するが口縁が環状に残り、器台として使用したようである。24は炉に使用された壺である。底部は台状の底部から直線的に突き外稜を持っている。28の甕は頸部がくびれ、口縁が長く外反し、胴部上部で張らず中位下にかけて張っている。壺の器形と近いものである。口縁の櫛描斜走文はやや波状を呈し、胴部は櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。南西隅より出土。32は口縁が短く外反して胴部形が球形に近くなる。横羽状の櫛描斜走文に頸部櫛描簾状文を施す。30・31は櫛描波状文と簾状文が施文される。30の口縁端部は面取りされ、櫛描波状文が施される。29は櫛描簾状文がなく波状文のみ施文される。ガラス小玉は青緑色を呈す。

これらより本住居址は弥生時代後期後半の箱清水式の土器の時期である。

(26) H38号住居址

く34グリッドにあり、H33が上面に重なり、切られている。南北長418cm、東西長284cm、壁高6～20cmを測る。主軸方位はN-6°-Eである。隅丸長方形を呈す。主柱穴は北と南の壁中央にあるP1～P3である。P3の位置が壁中程にあたり、本来のピットであろう。ピットは円形を呈し、P1から径26・28・30cm、深さ43・45・18cmを測る。炉は2か所あり、東西で半分に分けた中央にある。炉1は径26cm、深さ4cmの窪みに土器片（赤色塗彩された大型壺の胴部片）を敷き、炭化物範囲がある。炉2は径32cm深さ5cmに掘り、外面赤色塗彩された大型壺の上部片を（27×16cm）皿状に整えて敷いている。

出土遺物には弥生土器がある。杯、壺、甕がある。杯は赤色塗彩される。2の甕は厚手で、口縁は強く外反し、胴上部は張っている。外面に櫛描波状文が施される。5は櫛描斜走文の甕である。3・4の壺は縄文があり、器形から弥生中期後半のものである。

これらより、5の甕などから弥生後期箱清水式土器の時代の住居である。

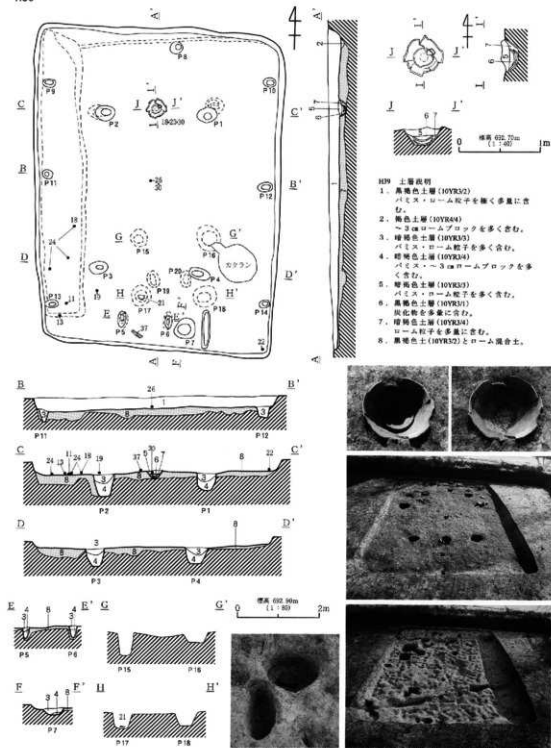
(27) H39号住居址

け28グリッドにあり、M14を切る。床面に1か所攪乱が入る。南北長760cm、東西長580cm、壁高4～30cmを測り、隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-0°である。P1～P4の4個が主柱穴で、東西248cm、南北384cmの長方形に配される。柱穴は楕円形を呈し、長径46～54cm、短径34～40cm、深さ40～54cmを測る。南壁側にはP5・P6が出入り口施設、東脇にP7があり、径64cmのほぼ円形を呈し、18cm掘り窪められている。壁柱穴は北壁中央のP8と東西の壁に各3個あり、P11が13cmと浅い他は、径25～38cm、短径22～30cm、深さ21～31cmを測り、楕円形、円形のピットである。ピットの間隔は280・260・224・320cmとさまざまである。炉は北の主柱穴間の中央線より、少し北にずれてある。炉は23の壺を敷いており、胴径49cmの大型壺の輪切りを逆位に置き、内側に18の壺の下半（土器実測図の上部には堀方の土器を接合している。）、30の甕の下半を重ねて入れている。囲炉裏の大きさである。

床下からは主柱穴と出入り口のピットが見つまっている。床下の北の主柱穴はP1・P2とあまり変わらない位置にあり（長径46・40cm短径36・42cm深さ42・45cm）、南は80cmほど内側に入った位置にP15（44×42×57cm）・P16（68×56×25cm）がある。P17・P18は出入り口施設ピットP19・P20の脇にある貯蔵穴である。径50・55cm、深さ35・33cmの円形を呈す。P17の底から22の壺が出土する。

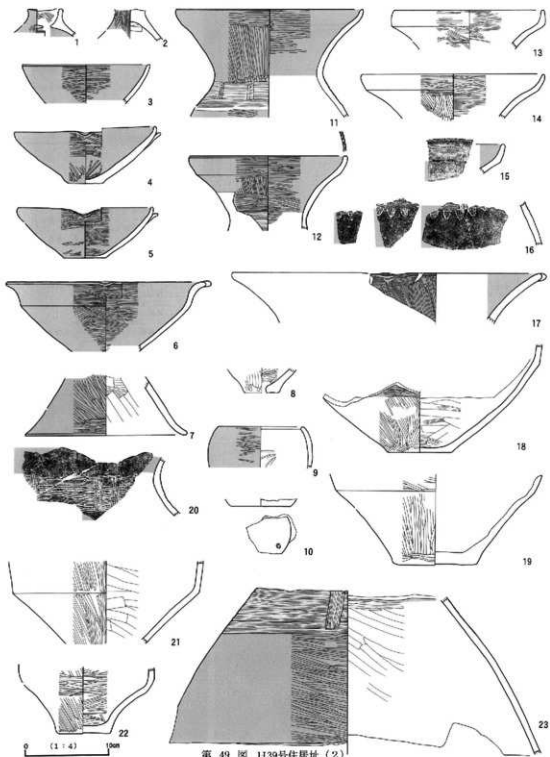
出土遺物には弥生土器と石器がある。土器は蓋、鉢、高杯、壺、甕、土板がある。1の蓋は焼成後の穿孔で、転用品である。4・5の片口鉢は堀方の出土である。4の片口鉢は二次焼成を受け、赤色塗彩はあせている。厚手で、重いタイプ。内面は直線的で外面の器形のみ丸くなる。5の鉢は薄手で軽く上端部が内湾し丸くなる。6の高杯は口縁上部が全体に外反し、端部は水平になる。端部に突起が付く。7の高杯脚部は大型品である。胴部が外反して開く。11の壺は口縁が大きく外反して伸び、内湾直立する。受け口状であるが明確な外縁はない。口縁部に文様は施文されず胴上部と赤色塗彩され、頸部に櫛描簾状文、櫛描横線文が施される。12は外面に外縁があり、受け口が明瞭で、内面は内湾程度である。口縁端部に縄文、口縁外面の施文はない。頸部に、櫛描横線文を施す。13は無彩色の口縁が強く外反した受け口の壺で、厚手である。ミガキ調整されるがそれほど丁寧ではない。14は同じ無彩色であるが、受け口状は明確ではない。薄手でミガキ調整が丁寧になされる。19は炉底に使用された壺の下半らしく一部煤けている。16は壺の頸部であるが、櫛描T字文施文後、鋸歯文を加えるために波状の沈線で作った中を削り取っている。21の壺は堀方ピットから出七したが胴下部は直線的である。22の壺は胴下半が極端なほど外反している。23の壺は炉に使用されたものである。胴径47cmを測り、頸部櫛描T字文、胴上部が赤色塗彩される。

24の甕は大型品で、口唇部を波状に面取り加工している。口縁は直立し上部でやや外傾し、上部で少し開く、胴部は中位にかけて張り球胴形になり、最大径は胴部にある。櫛描斜走文を横羽状に施し、

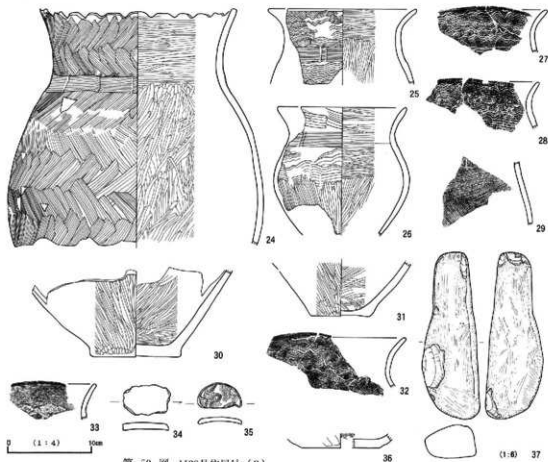


第 48 図 H39号住居址 (1)

H39



第 49 图 1139号住居址 (2)



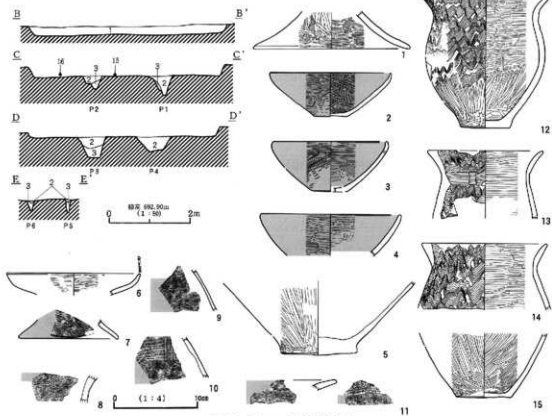
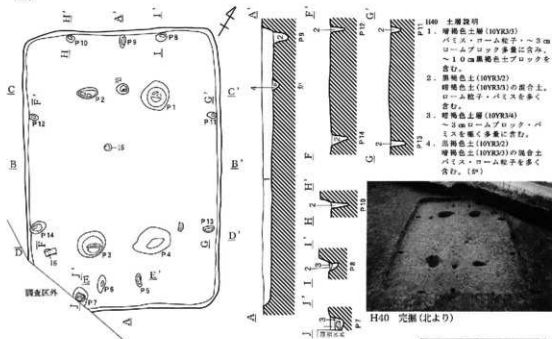
第 50 図 H39号住居址 (3)

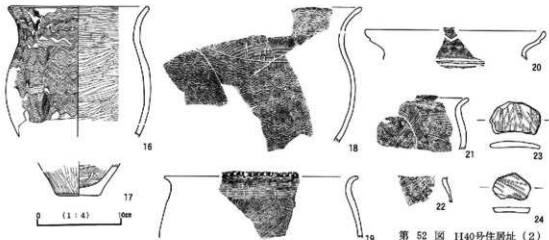
頸部に篋状文を施す。25は口縁が外反して、櫛描波状文、頸部に篋状文ではあるが、篋状文の施文位置が下にある。26は厚手で、口縁が短く外反、胴が張り最大径をもつ。胴上部櫛描斜走文、胴下部は波長の長い乱れた櫛描波状文が施される。

(28) H40号住居址

さ26グリッドにあり、南西隅が調査区域外である。南北長664cm、東西長464cm、壁高は5~28cmを測り、隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-34°-Wを指す。主柱穴はP1~P4で、東西168cm南北376cmの長方形に配される。P3の堀方は径66cmの円形を呈すが、柱痕の形態は楕円形を呈す。出入口のP5・P6は長楕円形で、長径32・40cm、短径13・18cm、深さ27・30cmを測る。P7は径38cm、深さ34cmを測る。壁柱穴はP8~14で、楕円形を呈す。P9は堀方の形が長方形である。炉の北にある。東西の壁柱穴は対称になっており、柱間は280cmである。P14が長径40cmと大きい。他は長径22~30cm、短径13~26cm、深さ23~45cmを測る。炉は北の主柱穴の間にあり、30×短径26cm、深さ14cmを測り、12×4cm大の礎が入っている。土器を抜いた状態であろうか。

出土遺物には弥生土器がある。蓋、杯、鉢、壺、甕、土板がある。1の蓋は内外ミガキ調整され無彩色である。杯は口縁上部が内湾する器形である。3の杯は底部まで赤色塗彩される。5の壺は、炉に使用されたようで煤けている。底部が厚く大きい。板状の土板に粘土紐を巻いて作っている。甕の





第 52 図 H40号住居址 (2)

外面は櫛描波状文が施され、13・18は頸部に櫛描簾状文がない。12・13・18の口縁が長く外反し、口縁に最大径をもっている。14・16は短い口縁が外反し胴部に最大径をもつ。前者が薄手で、後者が厚手である。12の口縁端部は内湾気味である。

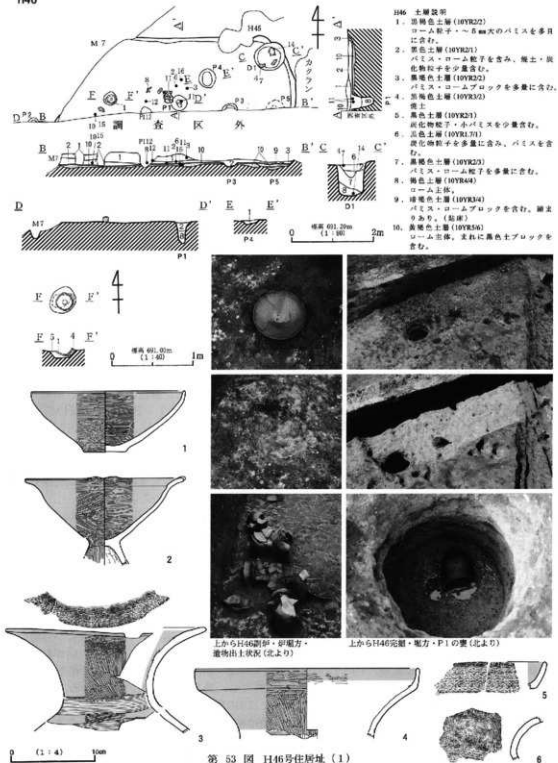
これらより弥生後期箱清水式の土器であり、本住居は弥生後期の住居址である。

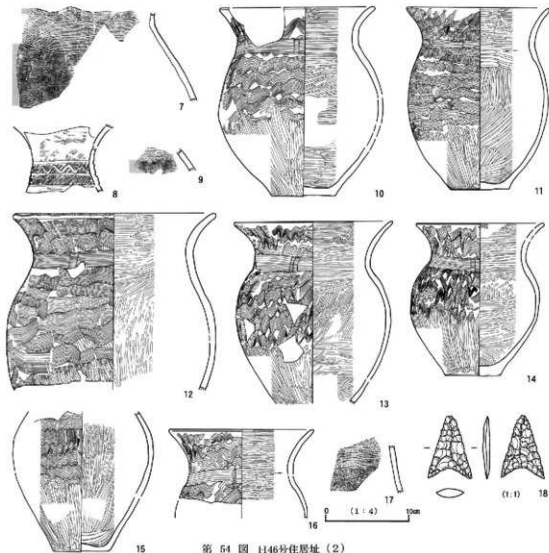
(29) H46号住居址

し53グリッドにあり、南は調査区域外である。H45、M7、P112、攪乱に切られる。南北(168)cm、東西(556)cmを調査した。壁高は0~11cmを測る。主柱穴はP1・P2で、P2はM7に上面を壊される。P1は径38×34cmの円形で、深さ53cmを測る。炉は径32cm、深さ8cmの円形に窪め、1の鉢を置いて炉底としている。D1は北東の隅にあり、円形で径76×70cm、深さ77cmを測る。底面から14の甕が出土し、土器内の土を分析したところ珪酸体が分析された。「栽培植物のイネ属モミに形成される穎(ほさき)珪酸体が多く認められ、葉部に形成されるイネ属機動細胞珪酸体もわずかに認められる。」としている。甕の中の土にはイネの穎が納められていたようである。

出土遺物には弥生土器、石鏃がある。弥生土器は鉢、高杯、壺、甕がある。1の鉢は口径19cmの炉底として利用されている。口縁上部が内湾し直立、内外赤色塗彩される。2の高杯も1と同様に脚内面を除いて赤色塗彩され、煤けている。口縁部が外反気味に折れ、端部に突起が付く。3の壺は頸部が筒状で、口縁が大きく外反して端部は水平に近くなる。胴部は張る。口縁内面端部に櫛描波状文を施文し、内外赤色塗彩する。頸部は櫛描横線文、赤色塗彩帯、櫛描T字文の3段構成である。4は破片であるが内面は赤色塗彩が剥離、外面は外縁をもち、受け口状である。文様はなく赤色塗彩される。5は受け口の外面に櫛描波状文が施文され、6は無彩色の壺である。7は頸部に櫛描横線文が幅広くある。8は弥生中期後半栗林式の壺頸部であるが環状にのこり、下端が揃っていることから器台として再利用している。甕はD1の底面から出土の14と、炉とP1辺りに6個体と多い。いずれも櫛描波状文、頸部櫛描簾状文である。10・12の口縁は短く外反、胴部が球胴形に張り最大径を持つ。13~16の甕は頸部がくびれて細く、口縁が大きく外傾外反し、最大径を口縁にもっている。11の甕は最大径が口縁と胴部ではほぼ同じで、中間器形である。12の甕は器内が厚く、下端部が整えられており、再利用している。意図的かはわからないが、外面は粘土が乾いてから削り調整をしたため簾状の削り痕が残り、波状文と相まって面白い文様になっている。数個体の波状文は一定ではなく個体ごと異なっている。

これらより弥生後期箱清水式の土器であり、大きく外反する壺口縁や、頸部の多段の文様施文、甕





第 54 図 H46号住居址 (2)

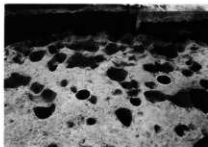
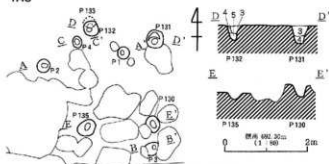
の頭部がくびれ、壺器形化など箱清水でも後半に当たる土器である。

(30) H48号住居址

さ38グリッドにあり、攪乱が激しく入り、柱穴のみを調査した。掘立とすべきであるが、柱穴東西200cm南北240cmの長方形に配されること、ビットがほぼ円形で、径30~33cm、深さ23~57cmと深いこと、またこの支柱穴の北にあるP4が棟持柱の位置に当たること、周囲から弥生の土器が多く出ることなどからここに掲載したが、時代の詳細を決定する資料はない。弥生時代に列挙するのみである。

(31) H49号住居址

す64グリッドにあり、南は調査区域外である。南北(100)cm、東西410cmを調査し、壁高50~



H48 完圖(北より)



第 55 図 H48号住居址

60cmを測る。南はINPXⅢ H6として調査され、南北は328cmを測る。炉が西にあることから主軸方位はN-95°-Wを指す。本調査区では柱穴は見つかっていないがINPXⅢのH6では隅に主柱穴に見合う深いビットが見られる。

出土遺物には弥生土器がある。1は杯で、赤色塗彩される。INPXⅢのH6からは壺があり、頸部櫛描T

字文、胴部赤色塗彩され球胴形を呈す。これらは弥生後期後半の箱清水式土器である。したがって本址も弥生後期の住居である。

(32) H51号住居址

す67グリッドにあり、南側は調査区域外である。南北(80)cm、東西(416)cmを調査し、壁高30~46cmを測り、住居の北端を調査した。主軸方位はN-15°-Wを指す。南のINPXⅢのH2を参考にと、東西475cm、南北(560)cmの隅丸長方形を呈す。炉が床面の北中央にあり、主柱穴4本の住居である。壁下には周溝が廻る。

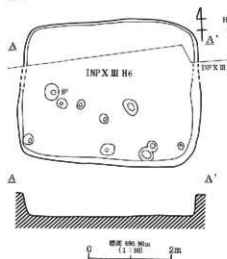
本調査では実測できる遺物はないが、INPXⅢのH2からは壺の頸部文様に櫛描T字文が施文され、壺胴部下半の屈曲や赤色塗彩品が多い。これらより、弥生後期清水後半の住居であろうとしている。

3. 古墳時代

(33) H3号住居址

け49グリッドにあり、重複関係はない。南北長502cm、東西長540cm、壁高29~44cmを測り、方形を呈する。炭化物範囲が北壁中央の内側にあり、火処であろうと推測される。主軸方位N-1°-Wである。主柱穴はP1~P4で、東西216cm、南北240cmの長方形に配され、ビットは円形を呈し、径54~64cm、深さ55~66cmを測る。径16~24cmの柱痕がある。北壁中央より24cm内に、隅丸長方形で長径68cm×短径57cm×深さ7cmの窪みに、炭化物範囲がある。炉の痕跡であろうか。遺物は主柱穴に囲まれた範囲に集中している。床下には南の主柱穴間に径20cm、深さ24cmの円形ビットがある。南壁の前には床下土坑があり、長径98cm×短径86cm×深さ26cmを測る。壁下には周溝が廻る。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は杯蓋で、丸い天井から縁は鋭くはないが直線に折れている。口縁は外反気味に開く。口縁端部は不明確な沈線がある。天井部外面は回転ヘラ削りされる。2の土師器杯は口縁が短く外傾する内斜暗文杯で、底部が深く内湾し丸底である。内面放射状暗文、外面底部ヘラ削り、中位より上部に放射暗文が施される。8の杯は口縁全体が内湾する。内外放射状



H49 完面(南より)

第 56 図 H49号住居址

暗文を施文。9・10は小型の鉢で底部が厚く、口縁が外反する。10はヘラ削りにより、底部を少し平坦にしてある。ナデ調整のみでミガキはない。9は雑な作りである。16は甕の口縁であろう。12の高杯は杯底部が平坦な丸底で、外縁を持ち、わずかに屈曲して外傾する。脚は柱が少し膨らみ、甕は水平に近く開く。13の脚柱は12より膨らみをもつ。14は膨らみがない。20の甕は重量があり、胴部は厚手である。ヘラナデ後わずかにミガキがある。19は薄手である。43の甕は口縁は外反気味で、胴部は下膨れである。胴部はヘラナデされる。22の壺下部は薄手で、ナデ調整である。23~38の土器は弥生中期後半栗林式の土器である。

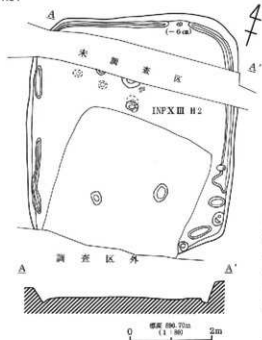
これらより口縁外斜の杯、高杯の脚部が膨らんでいる点、胴形の丸い甕などから古墳時代中期5C前半の土器であろうか。

(34) H4号住居址

け59グリッドにあり、南側を下水道に、北でF2、単独ピットP4に切られる。南北長(508)cm、東西長698cm、壁高10~38cmを測る。主軸方位はN-2°-Eを指す。床面は炭化物・焼土層が覆い、炭化材が残っている。炭化材4点は樹種同定ではいずれもコナラ節とされる。放射性炭素年代測定では、暦年校正年代σcalAD380-calAD416の数値を得た。主柱穴はP1~P4の4個あり、円形で径50~72cm深さ71・74cmを測る。北の主柱穴間に窪みが見られるが炬の跡であろうか。P5は東壁下において、径40cm、深さ26cmを測る。床下ではP6・P7が東西に並び、楕円形で長径66・50cm、深さ56cmを測る。P1から弥生後期の壺が出土しており、床下に弥生後期の住居が重複しているのであろう。

出土遺物には土師器、弥生土器、敲石がある。土師器は杯、小型丸底、高杯、壺がある。1の土師器杯は丸底の底部から口縁が短く外傾する内斜口縁杯で、外面底部ヘラ削り、内外に放射状暗文が施文される。3は小型丸底の口縁であろう。高杯は4・16の脚はやや膨らむが柱状で、内縁を持って裾が外に直線的に開くものと、5の三角錐柱で裾が外反して開くものがある。杯部は底部から外縁をもって少し屈曲外傾し、10は内湾気味であるが他は外反気味に開き、端部で内湾する。高杯の杯内面、外面は暗文が施される。23は小型丸底の壺で、口縁は横ナデされ、端部が内湾する。26の甕の外面はヘラナデ、内面ミガキ調整される。30~29・34は弥生土器で後期の箱清水式土器である。30の杯は口縁全体が内湾する。壺は受け口状を呈し、31は口縁に外縁がなく、32は緩やかな外縁がある。杯、壺は赤色塗彩される。38の敲石は磨製石斧の転用である。

これらより、土師器内斜暗文杯や高杯の脚が膨らむ器形、小型丸底の存在などから、古墳時代中期の土器で5C前半であろう。また床下にはピットがあり、弥生後期の赤色塗彩の杯や壺が出土していることから、床下には弥生後期後半の箱清水式土器がある。



H51 完掘(南より)

第 57 図 H51号住居址

(35) H11号住居址

し66グリッドにあり、M4に切られ、H19を切る。南北長368cm、東西長330cm、壁高9～66cmを測り、方形を呈す。カマドを北壁の東端に設けている。主軸方位N-17°-Eを指す。カマドは北壁の中央ではなく東に寄り、M4に壊されて上部はない。両袖を掘り残して構築している。火床は床面の高さに近い。主柱穴は北にはないが、南は各隅にあり、径34・56cm、深さ15・26cmを測り、P2は円形、P3は長楕円を呈し、浅いピットである。P1は隅丸長方形で、貯蔵穴であろうか。壁下には所々に溝溝が廻っている。壁方は東～南にかけて幅68cm、深さ16～30cmの帯状に低くなる。

出土遺物には土師器、弥生土器、石製品がある。土師器は杯、高杯、鉢、甕、壺、甕、壺がある。土師器杯は1～3・5が、内外面を塗りタイプの黒色処理で、5はかなり薄くなっている。1～3は内面に放射状暗文が施される。

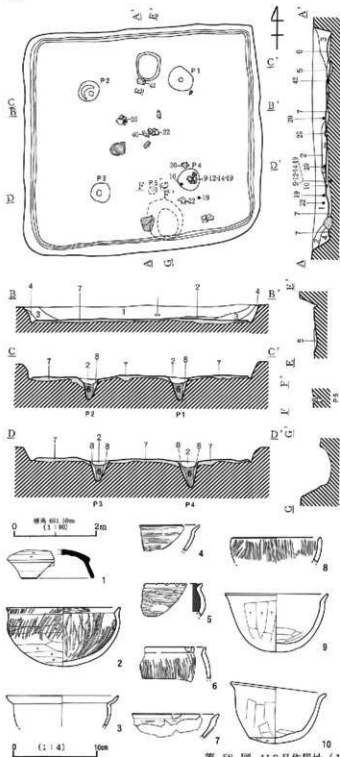
1は大振りの有段口縁杯で、口縁外面の中段に段ではなく沈線が廻っている。口縁内面端の沈線はない。2の杯は口縁外面にわずかな段を持っている。口縁内面の沈線はない。3は杯身模倣の杯である。4の杯は、内面ミガキ、外面は口縁横ナデ、底部ヘラ削りされる。外面は丸底から緩やかな稜で口縁が立ち上がる。5は器高の深いもので、口縁は内傾している。6は鉢ないし甕で、内外ミガキ調整される。7は外面が赤色塗彩の高杯脚で、柱状を呈し、裾が短く外傾する。9は甕で鉢器形の底部に多数(18個)の穴が開いている。内面ミガキ、口縁横ナデ胴部ヘラナデ調整される。11の甕は部厚く、口縁筒状で上端が少し開く。胴部は下部に向けて、膨らんでいる。口縁横ナデ後、内面は横に、外面は縦にヘラナデをしている。14の甕は口縁が筒状に直立し、上部で強く外反する。胴部は球胴形に張っている。接点はないが12の甕が底部とすれば、底部は台状に突出する。口縁横ナデ後胴部の調整をしている。滑石製の紡錘車は線刻で、鋸歯文、横線文が施されている。軽石製の凹石は脇に意図的な穿孔をしている。弥生時代の片岩製磨製石籬破片がある。

これらより、本址出土の土器は有段口縁杯の段の省略、11の甕などから6C後半の土器であろう。

(36) H12号住居址

さ63グリッドにあり、北は調査区域外で、調査した南の半分はM4に切られ壊されている。H14を切る。南北(282)cm、東西(386)cmを調査している。床面は南の50cmと北の60cm幅の帯状に残るだけである。床下からはP1～P4のピットが検出されている。内周するプランも床下にみられ、他遺構が重複しているようである。

出土遺物は土師器甕がある。口縁は短く外反して、口縁横ナデ後胴部ヘラナデ調整される。これは古墳時代後期の甕である。甕1点だけなので詳細は決めかねる。



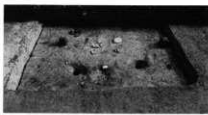
第 58 図 H3号住居址 (1)

H3 土層説明

1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロッケ粒子・パミスを多量に含む。
2. 黑色土層 (10YR2/1)
パミス・ローム粒子を含む。
3. 黒褐色土層 (10R3/1)
パミス・ローム粒子を含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/4)
ローム粒子・ロームブロッケを極めて多量に含む。
5. 棕色物
6. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
(埋積)
7. 黑色土 (10YR2/1) 黄褐色土 (10YR5/6) の混合土
8. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・ローム粒子を極めて多量含む。



H3 遺物出土状況(南より)



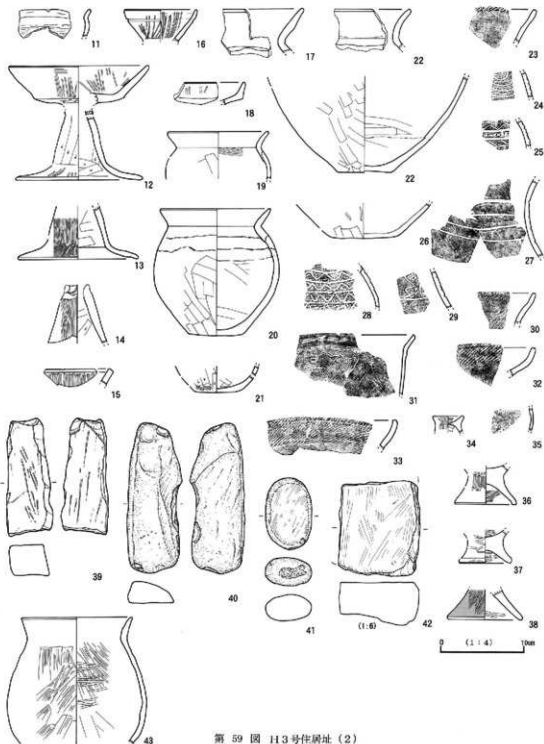
上 H3 北側完顔・下 堀方(北より)



H3 南側完顔(南より)

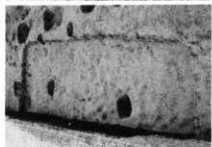
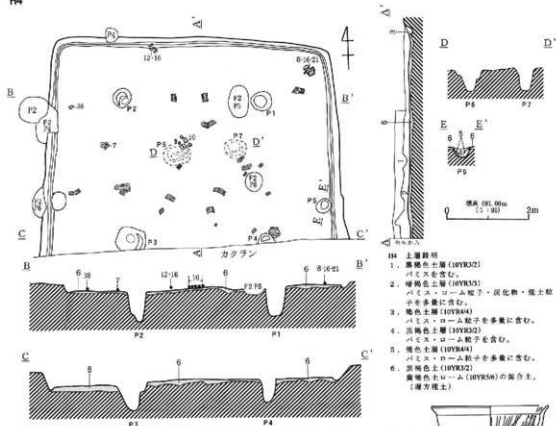
H3 南側堀方(東より)

H3



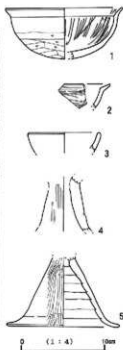
第 59 图 H3 号住居址 (2)

H4

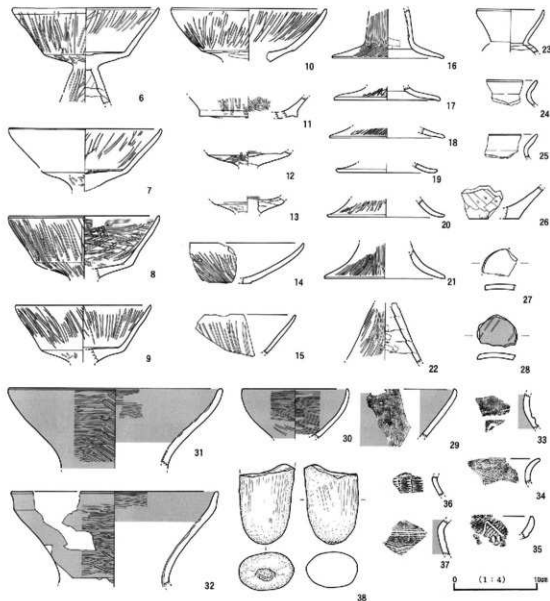


上 H4 北側完壁・下 堀方(南より)

上 H4 南側完壁・下 堀方(南より)



第 60 図 H4号住居址 (1)

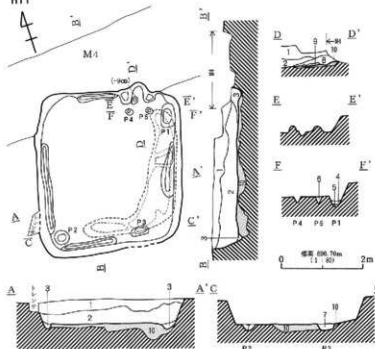


第 61 図 H4号住居址 (2)

(37) H15号住居址

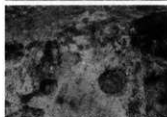
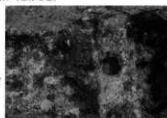
し60グリッドにあり、北でM4、下水道に切れられ、H16、H17、H21を切る。南北長364cm東西長356cm、壁高29~65cmを測り、南に張り出しの付く方形を呈す。張り出しを含めると南北442cmとなる。カマドを北壁にもつ。主軸方位はN-3°-Eである。西壁側には周溝が廻る。北東の床面に円形で、径52cm、深さ44cmの円形の落ち込みがあり、貯蔵穴であろうか。住居の中央には長径70cm、短径30cm、深さ20cmのピットの上に鉄平石2個が一部重なって出土している。ピットに石で蓋をし、石2枚を重ねて礎石にしたのであろうか。南の張り出しは、間口114cm奥行き80cmほどである。カマ

H11



H11 土層説明

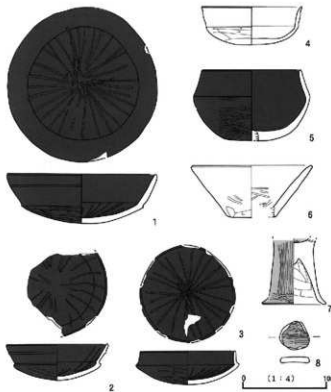
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒を多量に含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パリス・ローム大ロームブロックを極めて多量に含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4)
ローム粒を多量に含む。
4. 黒褐色土層 (10YR3/1)
パリスを含む。
5. 褐色土層 (10YR4/4)
～3cm大ロームブロックを多量に含む。
6. 濃い黄褐色土層 (10YR5/4)
微土粒・炭化物を含む。
7. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒・～1cm大ロームブロックを多量に含む。
8. 濃い黄褐色土層 (10YR5/4)
微土粒・炭化物を含む。
9. ローム主体。
10. (腐方堆土)



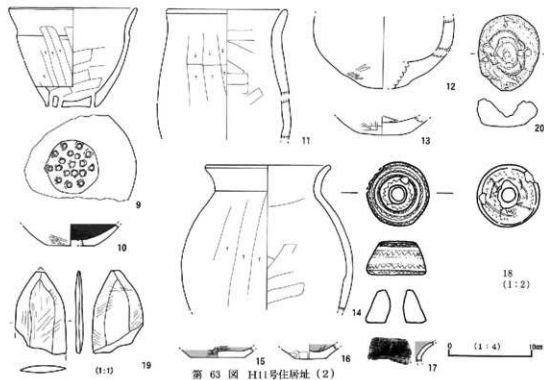
上 H11 カマド・下 カマド端方(南より)



上 H11 完器・下 壺方(南より)



第 62 図 H11号住居址 (1)



第 63 図 H11号住居址 (2)

トは北壁中央にあり、粘土により袖が作られている。壁からは煙道が幅40cm、奥行き30cmほど堀込まれている。カマドからは10・11の長胴甕が出土している。

出土遺物には土師器、弥生土器、陶器、石製品がある。土師器杯2・3は同一個体で、口縁が短く外傾する杯で、外面底部は丸底でヘラ削り口縁横ナデ、内面はミガキ調整され、内面底にヘソ状の窪みをもつ。6の甕の口縁「く」の字形に強く屈曲する。これらは前代の混入品であろうか。カマド出土の10は長胴甕で、口縁は外反し胴部肩は少し張るのみで、最大径を口縁にもつ。11は口縁が10より長く口縁の横ナデがきつい。ともに口縁横ナデ後縦にヘラナデ、ヘラ削りされる。12～18・21は弥生中期後半栗林式土器と磨製石鏃である。19・20は陶器で、混入品である。カマドからは2個の滑石製白玉が出土している。

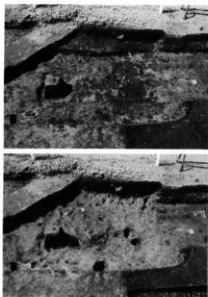
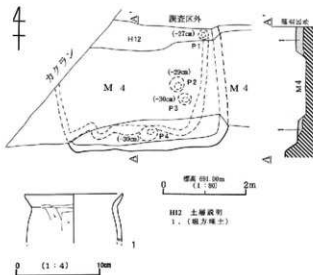
これらより、長胴の甕の口縁の外反などから、古墳時代後期7Cの土器であろう。

(38) H16号住居址

し60グリッドにあり、南は調査区域外であり、北東をH15に切られる。南北(420)cm、東西長698cm、壁高9～24cmを測る。主軸方位N-1°-Eを指す。北壁中央に焼土範囲があり、長さ40cmの石が南北に置かれ、40cmほど西に径22cm深さ10cmの浅いピットがある。石を袖石とみるとカマドであろう。焼土の存在も燃焼温度が高いことを証明している。北東のP1は主柱穴で、円形を呈し、径38cm、深さ92cmを測る。南主柱穴は北東ピットの南に写真では看取され、東西360cm南北240cmに柱穴が配される。堀方は壁周辺がぐるりと帯状に深く掘り込まれ、中央が高い。

出土遺物には土師器がある。杯、鉢、高杯、甕である。3は内面中央に小さな凹みがあり、厚い底部で、小鉢である。1～6(3を除く)は底部ヘラ削りの丸底で、口縁部が短く折れて外傾する。内斜暗文杯と器形は類似するが、暗文を施すのは1のみで、雑なミガキがある程度である。7の鉢は底部

H12



第 64 図 H12号住居址

上 H12 穴開・下 堀方(南より)

平底でヘラ削りされる。外面に煤なのか、墨書か判明しないが中位に帯状の煤付着が見られ、墨書のような痕跡も認められた。8の高杯は小振りで暗文を施す。9の高杯は口縁外面に段がある。11・12は小型の甕、16・17は中型の甕であろうか、口縁「く」の字形で、胴部は張るようである。15は壺の胴部で、胴上部は内面に輪積痕を残す。18は胴形が球胴形に近く、外面は緩くヘラ削りされる。19は甕の部品である。

これらより、須恵器横做杯がなく、甕の口縁形態などから、5C後半の土器であろうか。

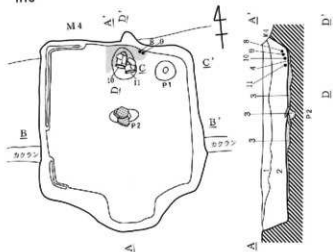
(39) H22号住居址

さ40グリッドにあり、北をM4と下水道に切れ、H23に北西、F8に東を切れ、南の一部を擾乱に壊される。H24、H30、D13を切る。南北長(650)cm、東西長768cm、壁高2~21cmを測る。カマドは北壁にあって、M4に壊されたのか検出されていない。主軸方位N-2°-Wを指す。支柱穴はP1~P4の4個で東西504cm、南北464cmに配される。P7・P8は補助の柱穴であろうか。支柱穴の東西間にある。P9・P10は重複する住居のビットであろうか。壁下には周溝が廻っている。支柱穴はほぼ円形を呈し、径64・70cm、深さ50~66cmを測る。柱痕が残り、径20~24cmを測る。P2は柱痕が2つあり、南の柱痕が廃絶時に使用したビットである。堀方は周囲が幅102cm深さ48cmに掘り込まれている。

出土遺物は須恵器、土師器、石製品がある。弥生土器も多量にあるが、重複するH24とH30に転載した。須恵器甕は広口で口縁帯をもち、口縁が外反する。外面には敲き目を施す。内面ナデを施す。2の杯は浅い丸底の底部が外稜を持って屈曲し口縁が外反する。4は底部から口縁への外稜がない。ともに内面黒色処理される。3は器高が浅く内外黒色処理され、内面ミガキを放射状に施す。5の鉢は内湾し口縁で直立する。肉厚で、重い。内面ミガキ、外面ナデ底部へラ削りされる。13の甕は胴肩部が屈曲して収縮して肩が張る。外面にハケ目が残る。8の甕は口縁外反し、頸部が屈曲する。12の甕は口縁が大きく外反し、頸部でくびれ、胴中位にかけて張る。口径と胴部径がほぼ近い。

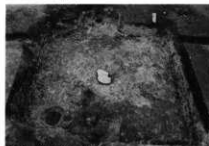
石製品は黒曜石製石鏃2点、方柱状片刃石斧1点、太型始刃石斧1点、砥石1点がある。石鏃と石斧は重複するH24の床下住居、H30に伴うものであろうか。砥石は凝灰岩製で、穿孔があり、携帯

H15

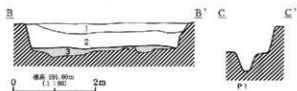


H15 土層説明

1. 赤褐色土層 (10YR5/2)
パミスを多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR5/4)
パミス・～5mmのロームブロックを織りこめて多量に含む。
3. 黒褐色土 (10YR3/2)
黄褐色土 (10YR5/6) の混合土。
(東方埋土)
4. 粘土。



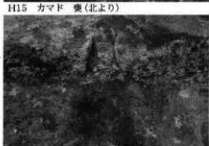
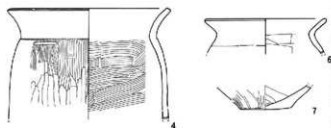
H15 完相 (北より)



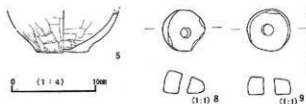
H15 掘方 (南より)



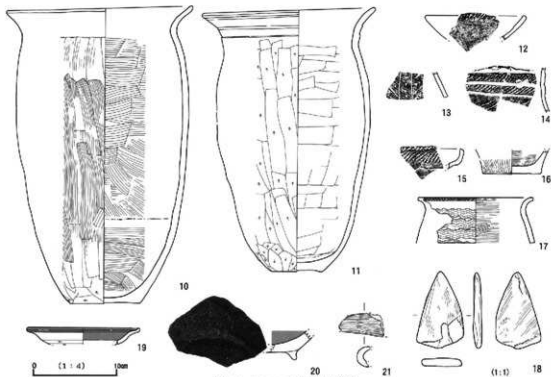
H15 カマド 變 (北より)



H15 カマド 完相 (南より)



第 65 図 H15号住居址 (1)



第 66 図 H15号住居址 (2)

用の砥石で、本址に伴うものであろう。

これらより、底部丸底が平底気味になり、甕の口径と胴部径がほぼ同じなど古墳時代後期6 C後半の土器様相である。

(40) H32号住居址

き33グリッドにあり、北は調査区域外である。南北(212)cm、東西長482cm、壁高11~23cmを測る。南の壁中央に出入り口の張り出しがある。主柱穴は南のP1・P2で、円形で径52cm、深さ59・54cmを測る。P1の北にP3があり、長径50cm、短径34cm、深さ29cmを測る。南の張り出しは68cm×68cmの方形を呈す。張り出しの底面には、円形の径50cm、深さ42cmを測るビットがある。その南に堀方から検出された長径16cm、短径12cm、深さ12cmの長方形ビットがある。壁下には周溝が廻る。カマドは調査区域内では検出されていない。

出土遺物は土師器と弥生土器がある。土師器杯の1は底部丸底で、外縁をもって口縁が外反する。内面はミガキ黒色処理される。2は甕の底部で、内外ミガキ調整される。3は小型の甕で、外面はヘラ削り後ミガキ調整されている。4~6は弥生中期後半栗林式の土器である。

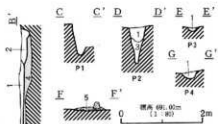
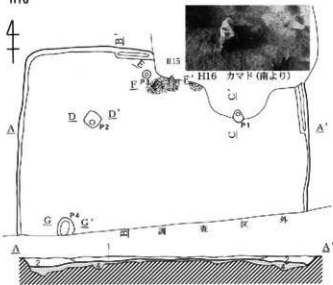
底部丸底の口縁が大きく外反する杯などから、古墳時代後期6 C後半の土器群であろうか。

(41) H33号住居址

く34グリッドにあり、H31、攪乱に切られ、H38を切る。南北長504cm、東西長516cm、壁高3~24cmを測り、方形を呈す。カマドは北壁中央にあり、主軸方位N-6°-Eを指す。床面がほぼ検出面である。主柱穴はP1~P4の4個で、東西272cm、南北248cmの長方形に配される。柱穴は円

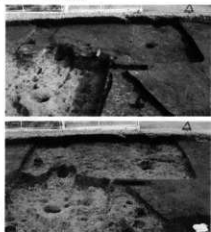
H16

4
↑

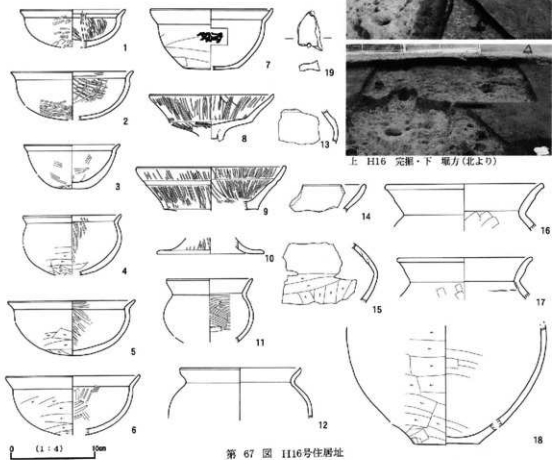


H16 土層説明

1. 黄褐色土層 (10YR3/2)
ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/5)
ローム粒子・砂を多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4)
ローム粒子・砂を極めて多量に含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/2)
5. 黄褐色土 (10YR3/6) の混合土。
6. 硬土層

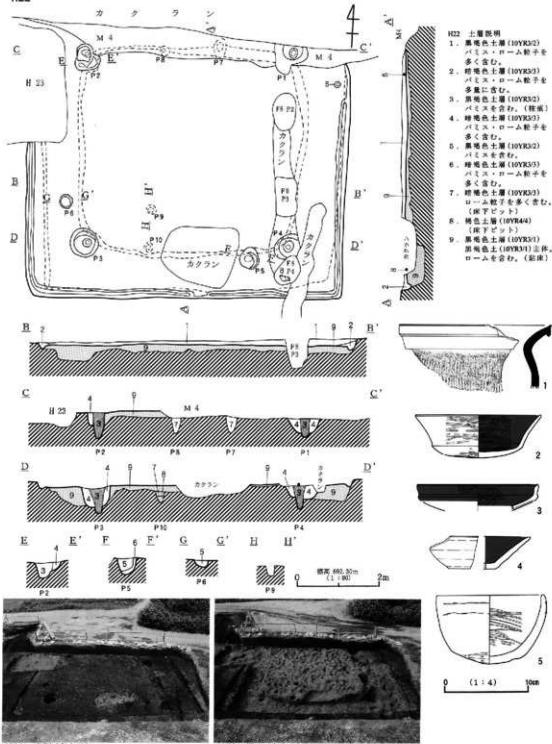


上 H16 完掘・下 堀方(北よりの)

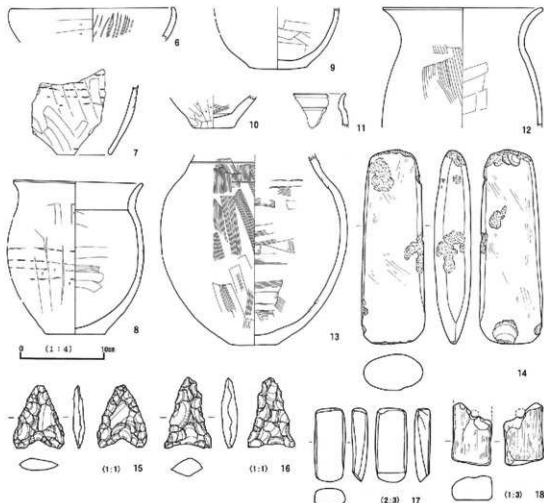


第 67 図 H16号住居址

H22



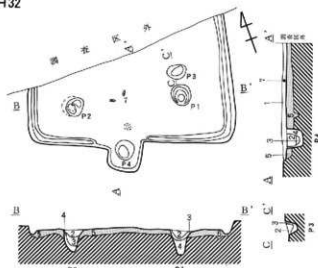
第 68 図 H22号住居址 (1)



第 69 図 H22号住居址 (2)

形を呈し、径40～68cm、深さ42～64cmを測る。径24～28cmの柱痕が4本とも確認された。南壁中央床には径36cm、深さ18cmのビットがある。東壁下には径16cm未満で、深さ24cmの小ビットが5個並ぶ。カマドは火床と焼土が残っている。袖は地山を掘残している。カマドの両脇にはP 6 (長径68cm、短径50cm、深さ22cm、楕円形)、P 7 (長径72cm、短径46cm、深さ20cm、長方形)があり、東のP 6は焼土ブロックを含み、灰落とし穴である。西のP 7は覆土に近い土が充填される。堀方ではP 2・P 3に重なって床下ビットがあり、ほぼ同位置での建て替えがされている。カマド西のP 7の下に2個の堀方ビットが並ぶ。

出土遺物には土師器、弥生土器がある。土師器は杯と甕である。1の土師器杯は丸底で、外縁が不明瞭である。少し屈曲して口縁が外傾し、端部で少し内湾気味になる。内外ミガキ調整される。2は浅い丸底からわずかに直立し、口縁が外傾して開く。内面ミガキ黒色処理される。3の杯は丸底の底部から口縁まで内湾する器形であり、器高は浅い。内外ミガキ調整される。5の甕は小型の長胴甕である。筒状の頭部から口縁が短く外反して、最大径をもつ。口縁横ナデ後、細いハケ目を残してナデ調整される。7～9は弥生中期後半栗林式土器である。



縮尺 0.25m
(1:80) 2m



1



2



3

0 10cm
(1:4)

H32 土層説明

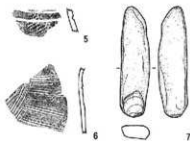
1. 黒褐色土層 (10YK3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層 (10YK3/2)
パリス・ローム粒子を多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YK3/3)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 (10YK3/4)
パリス・ローム粒子を極めて多く含む。
5. 黒褐色土層 (10YK3/2)
ローム混合土。



4



上 H32 完照・下 掘方(南より)



5

6

7

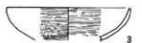
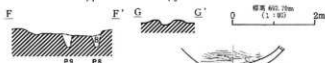
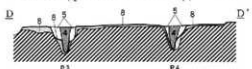
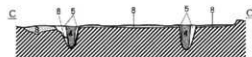
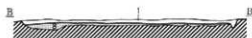
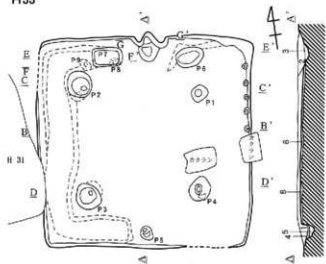
第 70 図 H32号住居址

これらより土師器は古墳時代後期の土器で、1の杯は大分崩れた器形である。6 C後半から7 Cの土器であろうか。

(42) H34号住居址

こ34グリッドにあり、南は道路と下水道のため未調査で、M4も東西に横切る。H36、D6を切る。南北(378)cm、東西長586cm、壁高8~29cmを測る。カマドを北壁中央より西にもち、主軸方位N-11°-Eを指す。主柱穴は北側のP1・P2の2個で、未調査地点に南のビットがあろう。P1(長径68cm、短径36cm、深さ37cm)、P2(長径64cm、短径40cm、深さ51cm)で楕円形を呈す。カマドは壁より奥行き50cm、幅80cmほど出ており、焼土層がある。住居のラインに袖石の芯と思われる線がある。カマド東脇のP3は楕円形で、長径44cm、短径30cm、深さ19cmで、炭化物を含む。カマド西脇のP5は長径68cm、短径46cm、深さ15cmの隅丸長方形で、粘土、焼土、炭化物を含んでいる。壁下には周溝が廻る。東壁の北は円形の小ビットが5個ある。床面には13~25の13個の編物石が3か所に点在している。堀方では40cm西に内周するプランが見られ、P1も床下ビットがあり、堀方プランではカマドの位置が北壁中央に近くなる。建て替え、拡張がなされたようである。

出土物には土師器、弥生土器、編物石がある。土師器は杯と甕がある。1の杯は小型で、底部が



H33 土層説明

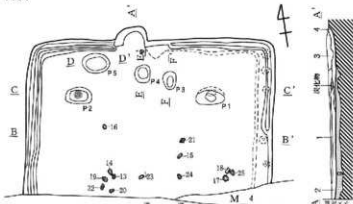
1. 赤褐色土層(10YR3/2)
～3cmロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)
～5cm赤褐色土ブロックを多く含む。
3. 黒褐色土層(10YR3/2)
～2cm赤褐色土ブロック・～3cm
ロームブロックを多く含む。
4. 赤褐色土層(10YR3/2)
ロームブロック・ローム粒子を
多く含む。
5. 黒褐色土層(10YR3/4)
～3cmロームブロックを多量に含む。
6. 赤褐色土層(10YR3/2)
～2cm赤褐色土ブロックを多く含む。
阿蘇粘土粒子を含む。
7. 黒褐色土層(10YR3/2)ローム粒子を含む。
8. 赤褐色土層(10YR3/3)
阿蘇粘土(10YR3/3)とロームの混合土。



上 H33 完備・下 堀方(南より)

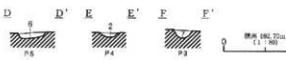
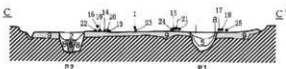


第 71 図 H33号住居址

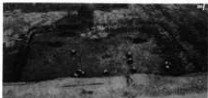


H34 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多く含む。
3. 高褐色土層 (10YR3/2)
～3cm赤褐色粘土ブロックを多く含む。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2)
～3cm赤褐色粘土ブロック・
～3cmロームブロックを多く含む。
5. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パリス・ローム粒子を多く含む。
6. 黒褐色土層 (10YR3/3)
粘質土・粘土・炭化物を含む。
7. 黒褐色土層 (10YR3/2)
炭化物・～3cmロームブロック
を多く含む。
8. 高褐色土層 (10YR3/2)
ビッド層方粘土
9. 黒褐色土層 (10YR3/2)
ロームの混合土。

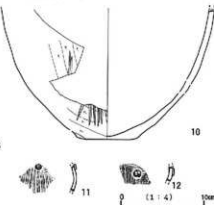
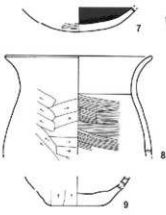
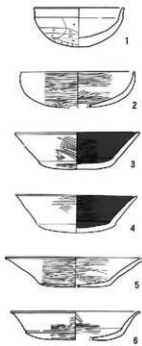


標高 162.72m
(1: 400) 2m



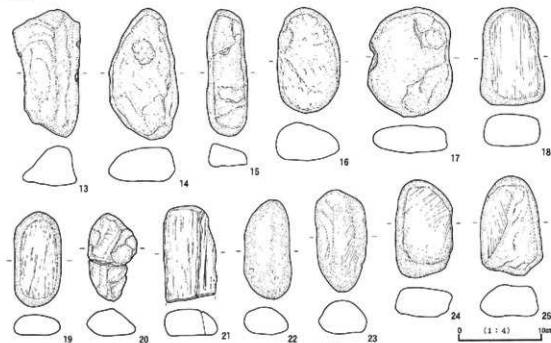
H34 遺物出土状況 (東より)

上から H34 完阻 (北より)・完阻 (南より)・壁方 (南より)



第 72 図 H34号住居址 (1)

0 (1: 4) 10cm



第 73 図 H34号住居址 (2)

厚い。口縁横ナデ、底部はヘラ削りである。内面はナデのみで、ミガキはない。2は丸底から口縁まで内湾する杯で、内外ミガキ調整される。3～5は浅い丸底からわずかに直立し口縁が外反気味に外傾して開くものである。丸底からの立ち上がりの外縁は丸味を帯び、3は部厚い。8の裏は口縁が大きく外反し、胴部はナデ肩である。外面胴部はヘラ削りされる。

これらより古墳時代後期の6C後半から7Cに近い土器であろう。

4 奈良時代

(43) H5号住居址

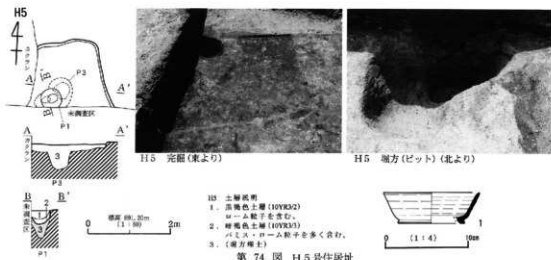
け54グリッドにあり、南は道路、西には擾乱があり、住居址の北東を調査した。調査区は南北160cm、東西135cm、壁高3～6cmである。P1は北東の支柱穴で、円形で、径50cm、深さ33cmを測る。床下に堀方ピットがあり、径68cm、深さ40cmを測る。さらに少し北東にずれてP3があり、楕円形で、長径70cm、短径58cm、深さ44cmを測る。

出土遺物は須恵器高台付杯があり、小振りで、火漉がある。高台は低く外方に開き、底面に凹線がある。馬の歯が出土している。

これらより8C代の土器であろう。

(44) H8号住居址

し68グリッドにあり、調査の西端にあるため、INPVとの間に未調査区があり、西壁は調査していない。単独ピットP138に切られる。南北長456cm、東西(494)cm、壁高9～50cmを測る。北壁中央下に焼土があり、カマドが設けられている。主軸方位N-1°-Wを指す。北壁下の焼土範囲は南北36cm、東西28cmの楕円形を呈し、両脇にピットP5・P6がある。長径64・62cm、短径48・50cm、



第 74 図 H5号住居址

深さ13・23cmの浅いもので、粘土・炭化物・焼土があり、カマドの袖跡であろう。主柱穴はP1～P4で、柱穴は円形を呈し、径52～65cm、深さ43～60cmを測る。南壁下にはP8があり、円形で径58cm深さ39cmを測る。北西にはP7があり、貯蔵穴であろうか、長径90cm、短径68cm、深さ21cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器がある。1の土師器の甕は武蔵甕で、口縁が「く」の字形に強く外反して、胴部は張らずに、口縁に最大径をもつ。2の土師器杯は底部へラ削りの平底で、杯下部もへラ削りされる。口縁は内湾し、内面はミガキ黒色処理である。外面の口縁上部1.7cmほどはミガキ調整される。3は口縁全体にミガキ。4は内湾し、外面は口縁横ナデ後、その1cm幅のみミガキ調整。5は小杯で、口縁横ナデ底部へラ削り後わずかに磨いている。丸底気味である。9の須恵器蓋は小型で浅く、つまみ扁平で、口縁が短く折れる。10のつまみは高台状の紐で、口縁端部は少し外方に折れる。12～14の須恵器杯は切り離し後、弱いへラ削りをするが、12・14は丸底気味である。13は平底である。15～17は須恵器の甕であろうか。15は小型である。8は土製紡錘車で、弥生時代のものであろう。

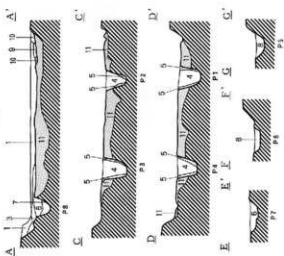
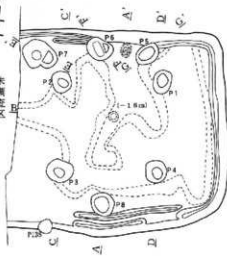
これらより奈良時代、8C前半の土器であろう。

(45) H10号住居址

こ57グリッドにあり、南は下水道の擾乱により住居址の北側を調査する。単独ピットP47に切られる。南北(278)cm、東西長460cm、壁高14～28cmを測る。カマドを北にもち、主軸方位N-3°-Wを指す。カマドは粘土・炭化物・焼土を含む粘質土が、幅100cm奥行き112cmにみられる。カマドの構築材である礎が並べられた状態出土している。P1・P2が主柱穴で、長径64・50cm、短径40・18cm、深さ51・45cmを測る。床下にはほぼ同じ地点に堀方ピットがあり、長径74・70cm、短径54・56cm、深さ47・52cmを測る。壁下には周溝が廻る。北東のP3は円形で径44cm、深さ18cmの浅い穴がある。P4はカマドの東脇にあり、円形の径36cm、深さ23cmを測り、焼土・炭化物粒子を含む。

出土遺物には須恵器、土師器がある。1の須恵器杯は底部回転系切り後、軽くナデ調整し、杯下部を回転へラ削りしている。上底である。3は細い高台が付く。土師器の7は武蔵甕の底部である。

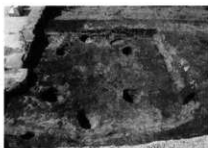
これらより、奈良時代8C後半の土器である。



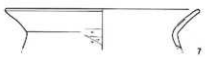
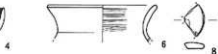
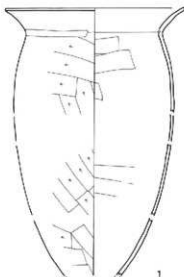
標高 606.16m
(1/40)

H8 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミスを含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/2)
パミス・ローム粒子を含む。
5. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ロームブロックを多量に含む。
7. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・ローム粒子を多量に含む。
8. 暗褐色土層 (10YR3/3)
炭化物・粘土・焼土粒子を多量に含む。
9. 濃い褐色粘土
10. 暗褐色土層 (10YR3/3)
粘土・焼土・炭化物を多量に含む。
11. (硬方塊土)

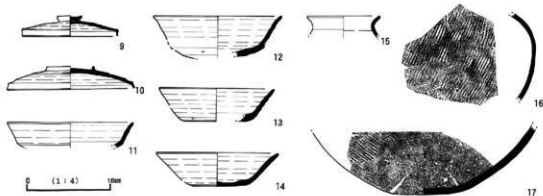


上 H8 完掘・下 堀方(南より)



第 75 図 H8号住居址 (1)

0 (1:4) 10cm



第76図 H8号住居址(2)

(46) H13号住居址

し62グリッドにあり、北をM4に切られ、H14を切る。南北(294)cm、東西長296cm、壁高18~37cmを測る。柱穴はない。北壁中央下にカマドの袖石が残る。カマドは幅112cmほどである。

出土遺物には土師器と須恵器がある。1の須恵器は高台の付く杯か鉢で、口縁は全体に内湾し、口縁端部は面取りされる。2は土師器杯で、内面ミガキ黒色処理、口縁は全体に内湾し、外面底部は軽くヘラナデされる。杯下部は丸味を帯びている。3は武蔵甕の口縁で、外反し「く」の字形を呈す。4は軽石製の支脚である。1区1層より鉄製刀子、長さ(4.3)cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、2.98gの刃先と長さ(5.6)cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、9.45gの茎が出土している。

これらより、8C前半の土器である。

(47) H23号住居址

さ42グリッドにあり、北端をM4に切られる。H22、単独ピットP152を切る。南北長282cm、東西長286cm、壁高4~26cmを測り、隅丸方形を呈す。主軸方位N-6°-Wを指す。カマドは北の中央より西寄りにあり煙道の袖石が残っている。P2・P3が外幅で88cm、内幅で40cmを測る。P1はカマドの東脇になるのか炭化物を含むピットである。長径42cm、短径36cm、深さ25cmを測る。南壁下には長辺52cm×短辺32cmの石が埋め込まれている。堀方ではP5・P6の小ピットが床中央にあり、P4は64×58cmの方形で、深さ13cmを測り、土坑が中央にある。堀方では周辺部が中央より堀窪められる。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は杯で、1は底部回転条切り後底部周辺に手持ちヘラ削りをし、平底である。火槽が内面にある。2は高台付杯で、高台は少し外に開き底面はわずかに凹線がある。4は丸底気味の土師器杯で、内面に暗文がある。5・6は武蔵甕の小甕と甕である。口縁が外傾外反して、最大径が口縁と胴上位で、同じ値になる。7の白玉、8の磨製石鏝は混入品であろう。

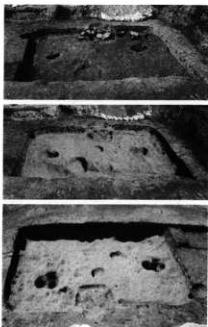
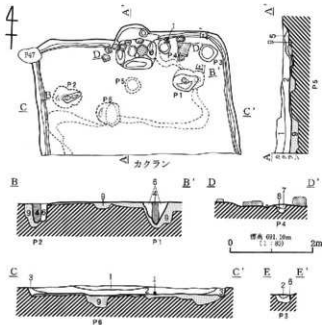
これらより、奈良時代8C後半の土器であろう。

(48) H26号住居址

け44グリッドにあり、M4に大半を壊される。南北(74)cm、東西長390cm、壁高3~19cmを測る。ピットはない。カマドは北壁中央が30cmほど張り出し、底面に6の須恵器甕を敷いている。床下の堀方では内周するプランがあり、拡張しているようである。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器杯は、1の底径の小さなものと、2の底径の大きいも

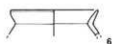
H10



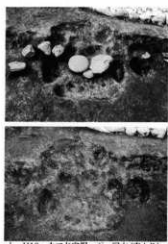
上から H10 完掘 (前より)・堀方 (南より)
・堀方 (南より)

H10 土器説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・ローム粒を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒を多量を含む。
3. 黒色土層 (10YR2/1)
パミス・ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/4)
ローム粒子を多量を含む。(柱状)
5. にぶい黒褐色土層 (10YR4/3)
にぶい黒褐色土層 (10YR6/4)
粘土・炭化物・焼土粒子を多く含む。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2)
7. 黒褐色土層 (10YR3/2)
焼土粒子・炭化物を含む。
8. 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土粒子・炭化物を多量を含む。
9. 黒褐色土層 (10YR3/2)
黄褐色土ローム (10YR5/6) の混合土。
(堀方堀土)



第 77 図 H10号住居址

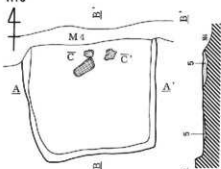


上 H10 カマド完掘・ト 堀方 (南より)

のとある。両方丸底気味で、底部はヘラナデ、周辺部回転ヘラ削りをしている。1は内面口唇部が摩耗、2は内面口唇部、見込が摩耗している。用途が異なるのであろうか。須恵器壺の平底の底部には×に一本加えたヘラ記号がある。6の裏はカマドの底に敷かれたもので、大型品である。底部は尖底の丸底である。内面に当て具痕、外面に平行敷き目を施す。土器器裏は武蔵裏で口縁部形態「く」の字形で外反している。8の武蔵裏下部は膨らみをもっている。

これらより奈良時代8 C前半の土器である。

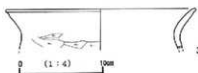
H13



- H13 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) 砂を多く含む。
 2. 灰褐色土層 (10YR3/2) バミスを多く含む。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む。
 4. 灰褐色土層 (10YR3/2) ロームブロックを含む。(カマド東方)
 5. 灰褐色土層 (10YR3/2) ~3cmロームブロックを含む。(東方雑土)



H13 カマド (北より)



上 H13 完備・下 堀方(南より)

第 78 図 H13号住居址

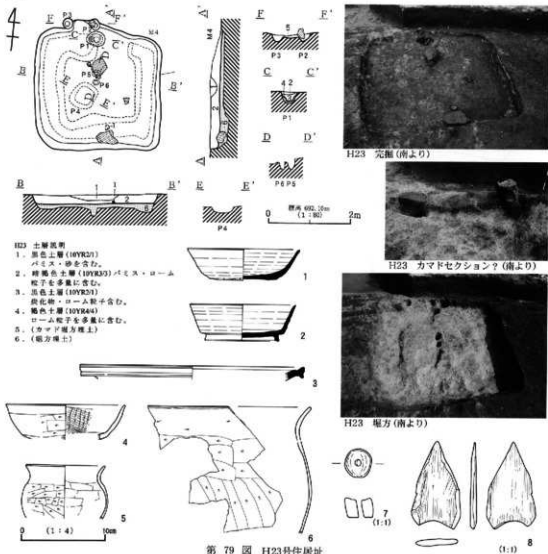
(49) H31号住居址

く36グリッドにあり、単独ピットP162にカマド一部を切られ、H33を切る。南北長394cm、東西長426cm、壁高12~24cmを測り、隅丸方形を呈す。カマドが北壁にあり、N-7°-Wを指す。主柱穴が4個あり、径24~32cm、深さ28~46cmを測る。P3には堀方に2個の礎が入っている。カマドは北壁の中央より少し東にあって、幅110cm、奥行き100cmを測る。両袖が残り、長さ30cmの割り石を立てて芯にし、粘土を貼っている。カマド前面の床には8・9の甕が潰れて出土している。偶々なのかその床下には礎4個が径50cm深さ16cmの穴に入っている。壁下には周溝が廻る。堀方のP5は径52cmの円形ピットで、深さ45cmと深い。他の床下ピットは18~24cmと比較的浅い。

出土遺物には須恵器、土師器、弥生土器、蔽石がある。1の器台は須恵器高杯の転用で、脚部を割って整えてある。2・3の須恵器杯は大小で重なってカマドの東脇から出土している。2の杯は底部ヘラナデ、3は回転ヘラ切りのままである。4は須恵器の甕で丸底を呈し、内面ナデ、外面タタキ目である。カマドの袖に利用される。5は土師器高杯で、杯下部はほぼ平坦で、脚は短く裾が強く外反する。6の土師器甕は厚手で、口縁が短く外反、胴上部は直線的である。外面は口縁横ナデ後縦にヘラ削りされる。7は武蔵甕の口縁で「く」の字形を呈す。8・9はカマドの前の床にあった武蔵甕である。8・9の胴部は細長く、9は肩が張っている。13・14は弥生中期後半の栗林式土器である。

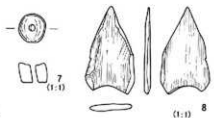
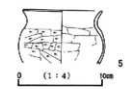
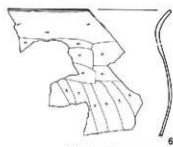
これらよりヘラ切り離しの須恵器杯、「く」の字形態の武蔵甕などから奈良時代8C前半の土器である。

H23



H23 土層説明

1. 赤色土層(10YR2/7)
パミス・砂を含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/3)パミス・ローム
粘土を多量に含む。
3. 灰色土層(10YR5/1)
炭化物・ローム粘土を含む。
4. 褐色土層(10YR4/4)
ローム粘土を多量に含む。
5. (カマド掘方埋土)
6. (堀方埋土)



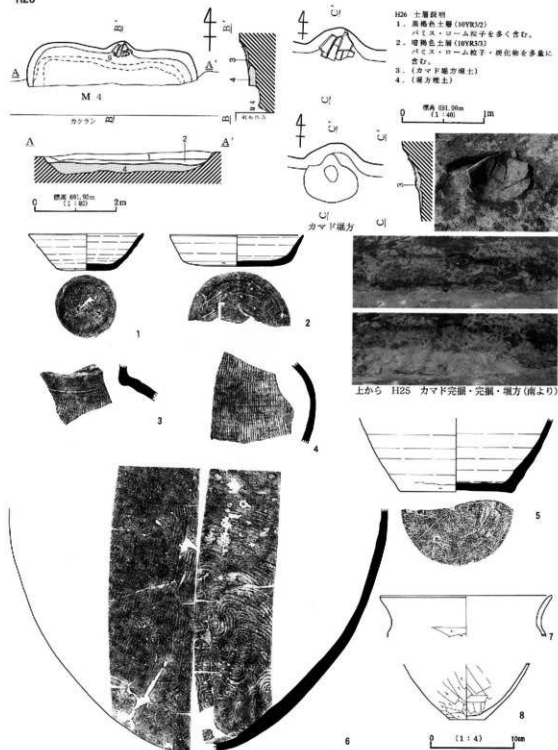
第79図 H23号住居址

(50) H35号住居址

こ36グリッドにあり、南が道路のため、北側の44cmを調査した。H36、M11を切る。東西184cm、壁高13~21cmの小規模な住居である。中央に径18cm、深さ57cmの柱痕がある。床下の堀方は深く、24~64cm下がる。

出土遺物は須恵器、弥生土器がある。1の須恵器鉢は高台が付き、内外ロクロナデで、口縁が内湾し、端部が平坦に面取りしてある。高台は外方に開き、端部が丸縁状になり、底面は凹線が廻る。H13.1も同器形であるが薄手である。2は須恵器甕で、壺に近い器形である。内面ロクロナデ、外面はタキ目を残してロクロナデされる。口縁は短く外反し口縁帯をもち、肩はナデ肩である。3~5は弥生土器である。

これらより奈良時代の8C代の土器である。

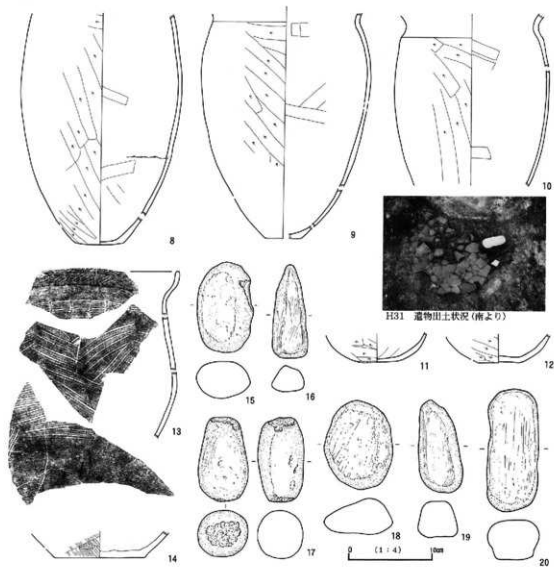


第 80 図 H26号住居址

H31



第 81 図 H31号住居址 (1)



H31 遺物出土状況(南より)

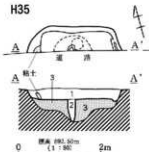
第 82 図 H31号住居址 (2)

(51) H45号住居址

し53グリッドにあり、南は調査区域外で、東は攪乱に切られる。H46を切る。南北(192)cm、東西(322)cm、壁高4~7cmである。カマドを北壁にもち、主軸方位N-8°-Wを指す。カマドは、幅100cm、奥行89cmの隅丸長方形内に、袖の粘土が少し残り、焼土がわずかにある。カマドの両脇にはP1(42×40×10cm)、P2(50×44×16cm)の円形で浅い穴があり、P1は焼土・炭化物粒子を多く含み、P2は覆土と同じ土が入っている。主柱穴はない。

出土遺物は、須恵器、土師器、弥生土器、軽石製の凹石がある。須恵器は1の杯が底部回転糸切り、2の杯は底部回転ヘラ削りで、小型で焼成良好である。4の甕は広口の甕で、内外ロクロナデ、口縁帯の内側に強い凹線を入れている。7は土師器杯片で、底部ヘラ削りである。8は武蔵甕で口縁部形

H35

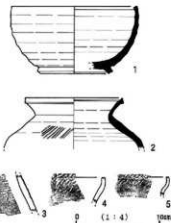


H35 土壁説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・ローム断片を多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム断片を含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・〜3cmロームブロック
を多く含む。



上 H35 完照 (北より)・下 堀方 (北西より)



第 83 図 H135号住居址

態が「く」の字形ではあるが口縁が短く頸部に直立気味な部分が見られ、「コ」の字形態が窺える。11~13は弥生後期箱清水式の土器である。重複するH46の土器であろう。

これらより、甕の「コ」の字形傾向、糸切りの須恵器などから奈良時代8C後半の土器である。

(52) H47号住居址

し35グリッドにあり、南側は調査区域外、F9に切られ、単独ピットP127を切る。南北(146)cm、東西長364cm、壁高4~13cmを測る。カマドを北壁にもち、主軸方位N-4°-Wを指す。カマドは幅100cm、奥行88cmの隅丸長方形で、壁より60cmほど張り出す。袖と奥壁に粘土があり、芯に礫を入れ粘土を貼ったようである。礫がカマド内から出ている。床面はロームブロックを含む土を貼り、締まっている。主柱穴は北側の2本P1・P2である。北壁から44cm離れ、東西間は200cmを測る。主柱穴P1・P2であるがP1の上面にF9のP1が重なり、長さ28×30cmの礫が転がり込んだように載っている。下には柱穴があり、円形の径36cm、深さ61cmのピットがある。P2は楕円形で、長径40cm、深さ64cmを測る。北東のP3は円形で、径40cm、深さ8cmの浅いピットである。壁下には周溝が廻る。

出土遺物には須恵器、土師器がある。1の須恵器杯は底部回転ヘラ切り後軽くヘラナデ、丸底気味である。4・5は武蔵甕で、口縁「く」の字形態で、口縁は長い。

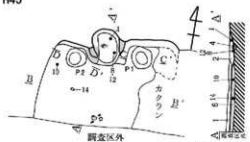
これらより、奈良時代8C前半の土器であろう。

(53) H56号住居址

け41グリッドにあり、M1、単独ピットP158~160に切られる。南は道路で未調査である。南北(132)cm、東西(366)cmを調査する。壁高は24~37cmを測り、カマドを北壁に持つ。上面はM1に切られ、カマドの堀方を検出した。前面の礫は構築材が流出したものであろうか。北東の主柱穴が残る。

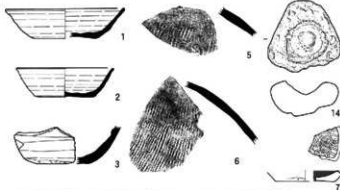
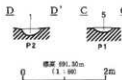
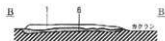
出土遺物は須恵器があり、蓋、杯、小壺、甕がある。1の須恵器蓋は扁平で小型、かえりが1cmほど内側の内面に付く。2の蓋は端部が短く折れる蓋である。3の須恵器杯は丸底気味で、底部はヘラナデをしている。4は茶壺で、口縁が短く外反し、肩が外稜を持って折れる。5は甕の口縁であろうが口縁帯を持って外反している。

これらより本址は土器より8C初頃であろう。

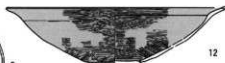
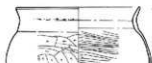
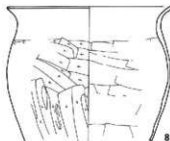


H45 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR2/2)
わずかにパミス・ローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2)
焼土粒子・炭化物粒子を含む。
3. 暗褐色土層 (2.5YR3/5)
焼土粒子を多量に含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2)
パミス・ローム粒子を含む。
(カマド痕方)
5. 黒褐色土層 (10YR2/2)
焼土・炭化物粒子を多く含む。
6. 茶褐色土層 (10YR2/5)
ロームブロック・パミス・炭化物
粒子を含む。床上面は陥没する。
(陥没)



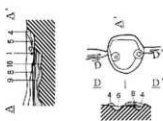
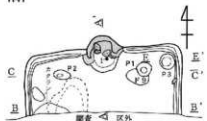
上から H45 カマド断面(北より)・カマド痕方
・H45完掘・堀方(南より)



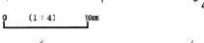
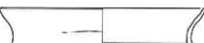
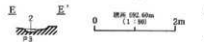
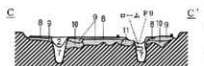
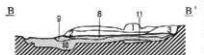
第 84 図 H45号住居址

0 (1:4) 10cm

H47



上 H47 カマド完備・
下 カマド壊方(南より)



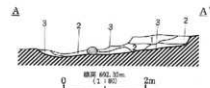
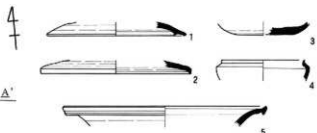
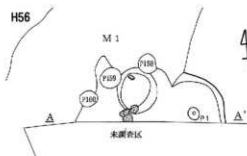
- H47 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) パリス、ロームブロックを含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 1層よりロームブロックの量が少ない。
 3. 黒色土層 (10YR2/1) パリス、ローム粒子を含む。
 4. 黒褐色土層 (10YR2/2) 粘土を多量に含む。
 5. 黒褐色土層 (10YR2/2) 黒褐色土 (10YR2/2)・ロームブロックを含む。
 6. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 高土粒子を含む。
 7. 黒褐色土層 (10YR2/2) 柱状。
 8. 黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロックを多量に含む。崩れる。
 9. 黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロックを含む。黒色炭。
 10. 黒褐色土層 (10YR2/2) 大粒のロームブロックを含む。
 11. 褐色土層 (10YR4/4) 灰黄褐色ロームブロック (10YR4/6) を含む。



上 H47 完備 (北より)・下 壊方 (南より)

第 85 図 H47号住居址

H56



- H56 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) パリス、小礫を含む。
 2. 暗褐色土層 (10YR2/3) ロームブロック、黒褐色土の混合土。
 3. 褐色土層 (10YR4/6) ローム粒子を多量に含む。

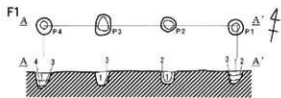
第 86 図 H56号住居址

第2節 掘立柱建物址

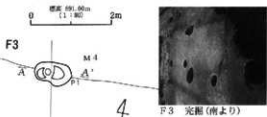
(1) F1号掘立柱建物址

け55グリッドにあり、南は道路で未調査となり、北の柱列を調査した。重複関係はない。桁行×梁間は3×である。東西棟と思われ、主軸方位N-76°-Eをさす。桁行柱間は160cmを測る。柱穴はP3が楕円形で他はほぼ円形を呈し、長径36~50cm、短径35~37cm、深さ31~36cmを測る。

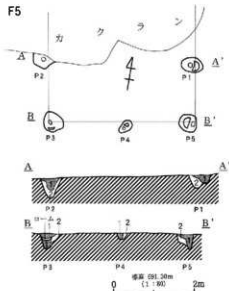
F1・F3・F5



F1 完照(南より)



F3 完照(南より)



F5 完照(南より)

F1 土層説明

1. 黒色土層(10YR2/1)
ローム殻子を多く含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/3)
ローム殻子・パミスを多量に含む。
3. 暗褐色土層(10YR3/4)
ロームブロックと黒褐色土の混合土。
4. 灰色土層(10YR2/1)
ローム殻子を含む。

F3 土層説明

1. 暗褐色土層(10YR3/3)
~5cmロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)
~2cmロームブロック・パミスを多く含む。

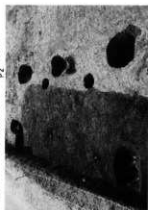
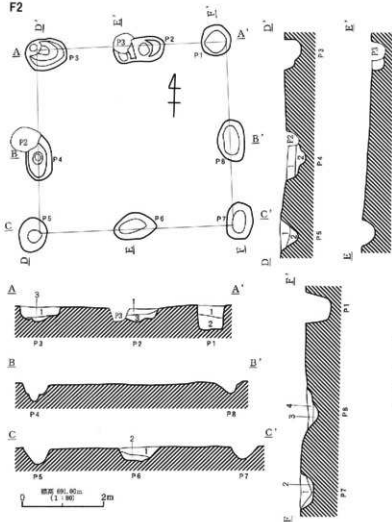
F5 土層説明

1. 黒褐色土層(10YR3/3)
ローム殻子をわずかに含む。
2. 暗褐色土層(10YR2/2)
黒褐色土(10YR3/8)のブロック混合土。

第 87 図 F1・F3・F5号掘立柱建物址

F2・F9

F2

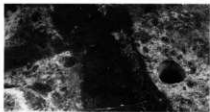
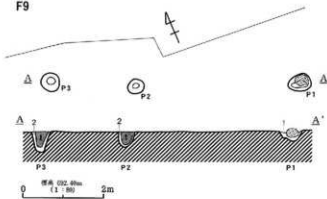


上 F2 北側完顔・
下 F2 南側完顔(南より)

F2 土層説明

1. 黒褐色土層(10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層(10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多く含む。
3. 褐色土層(10YR4/4)
ローム粒子を極く多量に含む。
4. 灰色土層(10YR2/1)
パリスを含む。

F9



F9 完顔(北より)

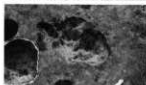
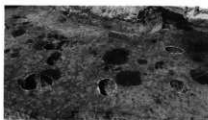
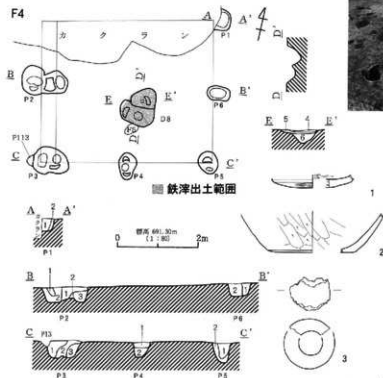
F9 土層説明

1. 黒褐色土層(10YR2/3)
粒状
2. 濃い黄褐色土層(10YR5/4)
ロームに黒色土ブロック含む。

第 88 図 F2・F9号掘立柱建物址

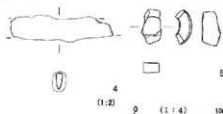
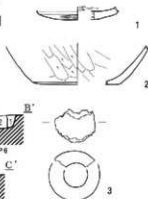
F4・F6・D8

F4

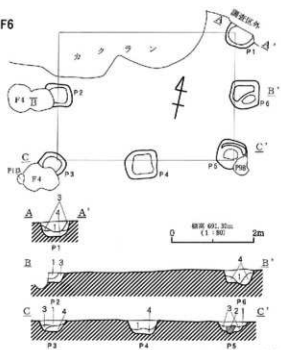


上 F4 完掘・
下 D8 完掘(南より)

- F4・D8 土層説明
1. 黒褐色土層(10YR2/2)
ローム粒子・パミスを含む。
 2. 黒褐色土層(10YR2/3)
ロームブロックを多量に含む。
 3. 黒褐色土層(10YR2/2)
パミスとまれに含む。
 4. 黒色土層(10YR2/1)
焼土・炭化物粒子・鉄滓を多量に含む。
 5. 黒褐色土層(7.5YR3/2)
多量の鉄滓・焼土を含む。粗く
硬まる。上面焼け込む。
 6. 黒褐色土層(7.5YR2/2)
ロームブロック含む。

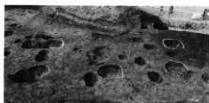


F6



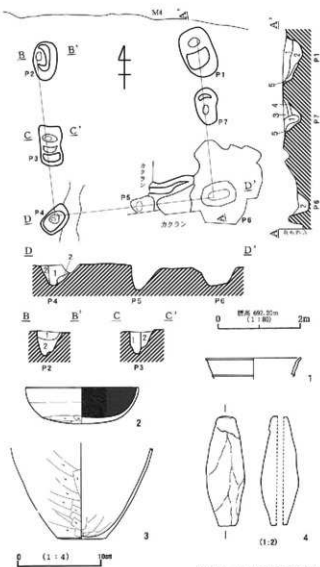
F6 土層説明

1. 黒褐色土層(10YR2/2)
パミス・ローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)
粒状
3. 黒褐色土層(10YR2/3)
パミス・ロームブロックを多量に含
む。
4. 黒褐色土層(10YR3/6)
黒色土ブロックをわずかに含む。



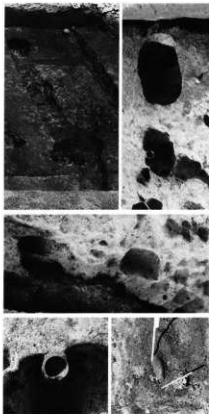
F6 完掘(南より)

第 89 図 F4・F6号掘立柱建物址、D8号土坑



F8 土層説明

1. 黄褐色土層 (10VR32)
砂質
2. 暗褐色土層 (10VR33)
バリス・ローム殻子を多く含む。
3. 黄褐色土層 (10VR22)
ロームブロックを含む。
4. 赤褐色土層 (10VR22)
土層より多くのロームブロックを含む。
5. 黄褐色土層 (10VR36)
ローム主体。



上から F8P2~P4・F8P1・P7・F8P5・P6 (南より)
遺物出土状況(東より)・遺物出土状況(南より)

第 90 図 F8号掘立柱建物址

出土遺物はP4より弥生中期後半の栗林式土器の壺破片がある。本址の該期は弥生中期後半以降である。

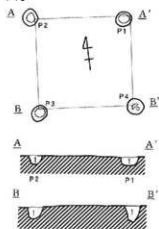
(2) F2号掘立柱建物址

け60グリッドにあり、単独ピットP2・P3に切られ、H4を切る。2間×2間の側柱の掘立である。桁行468cm×梁間450cmで、東西棟で、主軸方位N-87°-Eを指す。柱間は桁行232cm、梁間224cmである。柱穴は楕円形で、長径74~104cm、短径62~78cm、深さ30~63cmである。P1が63cmと深い。P6・P7は30・32cmと浅い。

出土遺物は弥生土器と土師器がある。弥生土器は中期後半の栗林式土器である。土師器は古墳中期

F10・F11 P57~P60

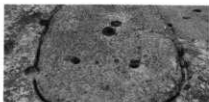
F10



標高 402.00m
(1:50) 2m

F10 土層説明

1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多く含む。



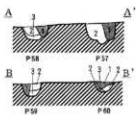
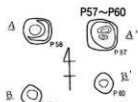
F10 完圖 (北より)



P57・P58・P59・P60 (南より)

P57～P60 土層説明

1. 暗褐色土層 (10YR3/2)
バリス・ローム粒子を多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
バリス・ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4)
バリス・ローム粒子を多量に含む。

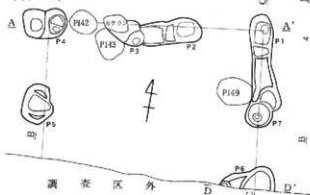


標高 402.00m
(1:50) 2m

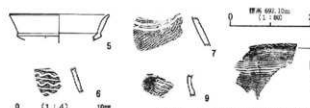
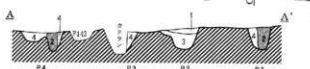
F11 土層説明

1. 暗褐色土層 (10YR3/2)
バリス・ローム粒子を多量に含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/2)
柱間。バリス・ローム粒子を含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
バリス・ローム粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3)
バリス・ローム粒子を多量に含む。

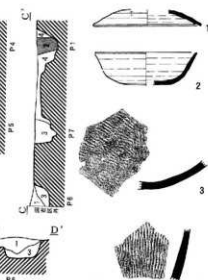
F11



調査区外

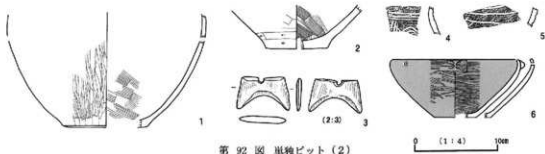


標高 402.00m
(1:50) 2m



F11 完圖 (南より)

第 91 図 F10・F11号掘立柱建物址、単壁ピット (1)



第 92 図 単独ピット (2)

の暗文の高杯片がある。古墳中期の遺物は重複するH4遺物であろう。古墳中期またはそれ以降の遺構である。

(3) F3号掘立柱建物址

し58グリッドにあり、北でM4、下水道の攪乱に切られ、南側を調査している。2×(1)で、416cm×(230)cmである。東西棟であれば主軸方位はN-78°-Eである。柱穴は楕円形で、長径80・92cm、短径56~70cm、深さ45~69cmである。P4が最も深く63cmである。

出土遺物は弥生土器と土師器がある。弥生土器は中期後半栗林式土器、土師器は古墳時代後期のミガキ調整の杯片がP2・P3から出土している。古墳時代後期、または以降の遺構である。

(4) F4号掘立柱建物址

さ51グリッドにあり、単独ピットP113に切られ、北を攪乱に壊され、F8を切る。2×2の側柱である。西列のピットは40cm西に拡張され、新桁行420cmを測る。旧桁行384cm、梁間344cmを測る。主軸方位はN-82°-Eを指す。桁行柱間は新しい方が208cm・拡張前192cm、梁間柱間172cmである。柱穴は楕円形で、拡張のピットは長径72cm、短径60・50cm、深さ40cmを測る。旧ピットは長径54~64cm、短径42~56cm、深さ31~49cmを測る。P5が最も深い。

掘立の中央にD8号土坑があり、多量の鉄滓966gが充填されている。D8は長軸長96cm、深さ35cmの不正円形を呈す。P1~P6内からも合計370gの鉄滓が出土している。鍛冶関係の建物であろうか。

出土遺物にはP3から土師器、羽目、刀子があり、土坑・ピットからは合計1,336gの鉄滓が出土する。土師器は古墳時代後期の高杯と甕である。本址は古墳後期またはそれ以降であり、鉄製品の出土量の多さからは奈良・平安とみられる。

(5) F5号掘立柱建物址

さ51グリッドにあり、2×(1)間の側柱である。攪乱に北を切られ、D8、単独ピットP92を切る。主軸方位N-81°-Eを指す。桁行360cm×梁間(148)cmである。ピットは楕円形で、長軸38~56cm、短軸24~46cm、深さ15~49cmを測る。P4が長径38cm、短径24cm、深さ15cmと小さく浅い。出土遺物はない。

(6) F6号掘立柱建物址

さ51グリッドにあり、北を攪乱に切られ、F4、単独ピットP98に切られる。2×2間の側柱であろうか。桁行432cm×梁間312cmである。F4~F6はほぼ同位置にあり、同じ性格のものであろう。本掘立が最も古いことになる。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺70~72cm、深さ26~38cmを測る。

出土遺物はP3から鉄滓30gが出ている。

(7) F8号掘立柱建物址

さ39グリッドにあり、南東は攪乱に一部切られ、H22、H30を切る。2×2間の側柱で、桁行392cm×梁間384cmを測る。主軸方位N-84°-Eを指す。桁行柱間196cm、梁間柱間192cmである。柱穴は隅丸長方形に近い楕円形で、P1は長径120cm、短径80cm、深さ70cmと大きい。他は長径72~94cm、短径50~58cm、深さ42~60cmを測る。

出土遺物には、土師器、土製錘がある。1の土師器杯は小型の橙色を呈する杯で丸底から口縁が外反する。2の土師器杯はほぼ完形品で、平底に近い丸底である。底部は手持ちヘラ削りされる。3の甕は武蔵甕で、底部径が6cmと大きい。4は土製の錘で長さ6.6cm、27.3gを測る。

これらより、土師器杯の底に丸味があり、武蔵甕があることなどから8C初頭の掘立とみられる。

(8) F9号掘立柱建物址

さ36グリッドにあり、H47を切り、攪乱に切られ、北は道路のため未調査である。3×(1)の桁行620cm、桁行柱間208cmである。主軸方位N-66°-Wを指す。柱穴は円形で、径40・44cm、深さ41・56cmを測る。M14との重複部分は見落としている。出土遺物はない。

(9) F10号掘立柱建物址

さ30グリッドにあり、H41を切る。1×1の側柱で桁行228cm×梁間220cmを測り、N-90°である。ピットは円形を呈し、径40~42cm、深さ20~40cmを測る。

出土遺物はない。H41は弥生中期後半なので、弥生中期後半かそれ以降の遺構になる。

(10) F11号掘立柱建物址

し42グリッドにあり、単独ピットP143・145・149に切られ、H25(弥生中期)を切る。南は調査区域外である。F11に新田があり、柱穴が重なっている。北東隅の2柱穴は溝持である。2×(2)の側柱で、桁行520cm×梁間(400)cmを測る。主軸方位N-80°-Eを指す。柱穴はP1・P4の長径が108・106cmと大きく、P7が径66cmと小さく、他は長径80~90cm、短径58~72cm、深さ49~58cmを測る。

出土遺物は須恵器、土師器、弥生土器がある。1の須恵器の蓋は扁平で、内側に短いかえりが付く。2の須恵器杯は底部が丸底気味である。底部はヘラ削り後ハケナデ、口縁下端がヘラ削りされる。5の杯は丸底で口縁が外反外傾する橙色の小型杯である。

これらより内側にかえりの付いた蓋、丸底気味の杯などから8C初頭の掘立であろう。

第3節 単独ピット

P14は、く57グリッドにあり(全測図)、楕円形で長径58×短径41×深さ23cmを測り、1・2の弥生中期壺と磨製石鏝が出土する。P78(さ56グリッド)からは弥生中期後半の甕、杯が出土する。P78は26×23×27cm楕円形を呈す。さ56グリッドはP75をはじめ、ピットが多くあり、く57グリッドも同様で、弥生時代中期の竪穴住居址の可能性もある。

第4節 土坑

(1) D4号土坑

く51グリッドにあり、M2、P41に切られる。楕円形を呈し、長軸長134cm、短軸長(78)cm、深さ40cmを測り、N-37°-Eを指す。黒褐色土層を含み、弥生後期の壺片を出土する。壺は頭部櫛描縞状文、赤色帯、櫛描T字文を施す。弥生後期後半箱清水式土器である。

(2) D5号土坑

こ37グリッドにあり、M11(弥生中期)を切る。円形を呈し、長軸長156cm、短軸長150cm、深さ43cmを測り、底面は平坦である。N-84°-Wを指す。上層に黒褐色土、下層に暗褐色土を含み、弥生中期後半栗林式土器を出土する。M11を切っているからであろうか。破片であるため土坑の該期はわからない。

(3) D6号土坑

け35グリッドにあり、H34(奈良)に切られる。円形で、長軸長184cm、短軸長180cm、深さ40cmを測り、底面は平坦である。覆土は黒褐色土である。遺物はない。

(4) D7号土坑

し56グリッドにあり、攪乱に一部切られる。楕円形を呈し、長軸長158cm、短軸長98cm、深さ31cmを測る。N-6°-Wを指す。底部は船底形を呈す。出土遺物はない。

(5) D9号土坑

し53グリッドにあり、H45、単独ピットP105、攪乱に切られる。長軸長362cm、短軸長123cm、深さ48cmを測る。長軸方位N-50°-Wを指す。底面には3個の円形の柱穴が検出された。P1が径20cm、深さ46cm、P2が径28cm、深さ52cm、P3は径32cm、深さ44cmを測り、それぞれ柱痕があり、P3は2本の柱痕がある。縄文時代の陥し穴である。

(6) D10号土坑

さ54グリッドにあり、M4に切られ、M2、M7を切る。南北(336)cm、東西長376cm、深さ29cmを測る。底面が平坦で、浅い柱穴が4個ある。胴張の長方形を呈すのであろうか。長軸方位N-32°-Eを指す。覆土はロームブロックを含む黒褐色土である。北は道路で調査できなかった。遺物はない。M7が中世とすると中世かそれ以降である。中世の堅穴状遺構ともよめる遺構である。

(7) D11号土坑

し36グリッドにあり、南は調査区域外で、一部攪乱に切られる。M11を切る。隅丸長方形を呈し、長軸長192cm、短軸長106cm、深さ18cmを測る。底面は平坦であるがわずかに円形の窪みを持つ。長軸方位はN-67°-Wを指す。出土遺物は弥生時代中期後半栗林式土器である。完形品がないので、時期は明確ではない。重複するM11も弥生時代中期後半であり、弥生中期後半かそれ以降の遺構である。土坑墓の可能性もありうる。

(8) D12号土坑

こ23グリッドにあり、H44を切る。楕円形を呈し、長軸長84cm、短軸長66cm、深さ71cmを測る。出土遺物はない。

(9) D13号土坑

し40グリッドにあり、H22に切られ、H24を切る。南北(64)cm、東西長100cm、深さ8cmを測る。形態は分からない。

出土遺物には土師器がある。1の土師器杯は器高の浅いもので、丸底から直立する。口縁下には段を持つ。内面はミガキ黒色処理、外面もミガキ調整される。2は杯に短い脚が付いて、杯部は丸底で外縁を持って少し屈曲し、口縁が直立する。内面は横ナデ、底にわずかにミガキ、外面は横ナデ後下部から脚にかけて縦にヘラ削りしている。3の甕は口縁が外反し頸部でくびれ、胸中位が張り、最大径を持つ。やや丸底気味の底部は大きい。外面は口縁横ナデ後ハケ目を残し、下部は横方向に削る。

古墳時代後期の土器で、3点の土器と同じ器形は本調査ではない。

(10) D14号土坑(井戸)

け53グリッドにあり、M2、攪乱に切られる。円形で、長軸長250cm、短軸長(210)cm、深さ83cmを測る。覆土は黒色土で、壁際は暗褐色土である。

出土遺物は須恵器、土師器、弥生土器がある。須恵器は甕の破片で、外面に平行タタキ目、内面当て具痕を残すものがある。土師器杯は内面に放射状暗文、外面底部ヘラ削りされ、丸底気味である。これらより、8C代の井戸であろう。

(11) D15号土坑

く52グリッドにあり、M2に切られ、H6を切る。長軸長274cm、短軸長(230)cm、深さ134cmを測る。楕円ないし円形を呈す。上層には黒色土、中間層に暗褐色土を含む。

出土遺物には弥生土器がある。5の甕は口縁が反し、櫛描波状文に頸部櫛描篋状文が施される。高杯、壺の口縁は赤色塗彩される。弥生後期後半箱清水式の土器である。H6が弥生後期後半であり、M2(中世)に切られることから本土坑は弥生後期、それより新しく中世より古い遺構である。

(12) D16号土坑(井戸)

し45グリッドにあり、D17・D18を切る。長軸長252cm、短軸長210cm、深さは156cmまで下げたが底には至っていない。井戸枠はセクション面で、幅88cmを測る。枠内は黒色土層、枠外はロームブロックを含む暗褐色土である。枠自体はない。下面では方形基調になる。

出土遺物は須恵器がある。須恵器は蓋、杯、高台付杯、壺、甕がある。蓋は扁平で、端部が短く折れる。外面天井部は回転ヘラ削りされる。2の杯底部は丸味を持つ。3は大振り、4は小振りの高台付杯で、高台が貼付され、高台底は摩耗している。これらより8C代の井戸である。

(13) D17号土坑(井戸)

し46グリッドにあり、D16に切られる。長軸長200cm、短軸長(172)cm、深さ110cmを測る。枠内は黒褐色土、枠外は暗褐色土である。枠幅はセクション面で、60cmを測る。

出土遺物は須恵器、土師器、軽石製の凹石がある。1は土師器の壺で、胴下部は球胴形である。外面ヘラ削り後ミガキ調整される。須恵器は甕と壺がある。これらより8C代の井戸であろう。

(14) D18号土坑

し46グリッドにあり、楕円形を呈し、長軸長154cm、短軸長118cm、深さ109cmを測る。土坑の南は幅112cm、深さ28cmに底部が平坦に下げられている。この浅い掘り込みがD18に伴うとすればD16・D17に切られることになる。セクションからは枠外部分が2層と思われるが一般的なセクションではない。

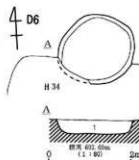
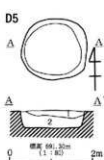
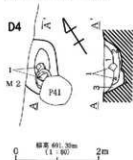
出土遺物は土師器、軽石製の凹石がある。土師器は破片で、古墳時代後期の胴部球胴形の口縁部と胴部片がある。古墳時代後期かそれ以降である。

(15) D19号土坑

け27グリッドにあり、M14を切る。長軸長228cm、短軸長204cm、深さは74cm掘り下げた。

出土遺物は弥生土器がある。1の高杯は小型で、上下が杯部で対称になっているもので、内外赤色塗彩される。2は高杯の脚で、外面赤色塗彩内面はナデである。3は壺の口縁で、受け口を呈し、外面口縁に櫛描波状文を施し、内外赤色塗彩される。4の甕は櫛描波状文が施文される。弥生後期後半箱清水式土器である。

D4 ~ D7 · D9 ~ D13

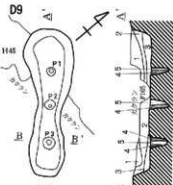
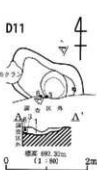
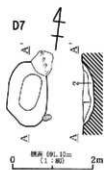


- D4 土層説明**
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) パリスを多く含む。
 2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・パリス多量に含む。
 3. 褐色土層 (10YR4/4) ロームを多く多量に含む。

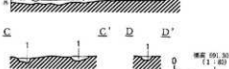
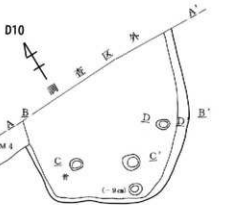
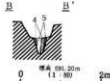
- D5 土層説明**
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) パリスを多く含む。
 2. 暗褐色土層 (10YR3/3) パリス・ローム粒子を多量に含む。

- D6 土層説明**
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) パリス・~5cm ロームブロックを多量に含む。

- D7 土層説明**
1. 黒色土層 (10YR1/2) パリスを多く含む。
 2. 黒色土層 (10YR2/1) パリス・ロームブロックを多量に含む。



- D9 土層説明**
1. 黒色土層 (10YR2/1) ~5mm大のパリスを含む。
 2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) パリス・ロームブロックを多く多量に含む。
 3. 黒褐色土層 (10YR3/2) パリス・ローム粒子を多く含む。
 4. 褐色土層 (10YR3/3) 砂粒。
 5. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム主体。



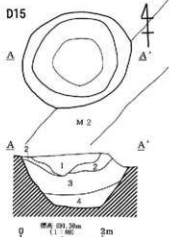
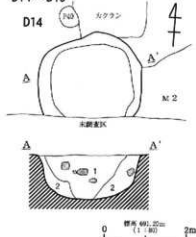
- D10 土層説明**
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 細ロームブロック・パリスを含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR3/3) 細ロームブロックを多量に含む。
 3. 黒褐色土層 (10YR3/3) 細ロームブロックを多く多量に含む。砂粒あり。

- D11 土層説明**
1. 黒色土層 (10YR2/1) パリス・ローム粒子を多く含む。砂粒に石灰が一部あり。

- D12 土層説明**
1. 黒褐色土層 (10YR3/3) パリス・ローム粒子を多く含む。
 2. 褐色土層 (10YR4/4) パリス・ローム粒子を多く多量に含む。

第 93 図 D4~D7 · D9~D13号土坑

D14~D19



D 14 土層説明

1. 褐色土層 (10YR2/1)
パミス・2~3.0cm幅を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ロームブロックを多量に含む。

D 15 土層説明

1. 褐色土層 (10YR2/1)
パミスを多く含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒子・ロームブロックを多く多量に含む。
4. 褐色土層 (10YR4/4)
ロームを多く多量に含む。

D 16 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミスを多く含む。
2. 褐色土層 (10YR2/1)
パミスを多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

D 17 土層説明

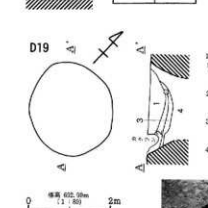
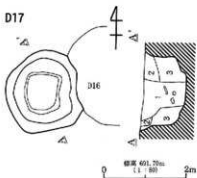
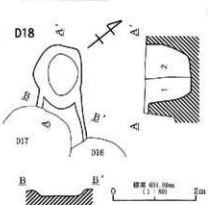
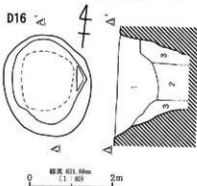
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・~2.0cm幅を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・~1.0cmロームを多量に含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・~1.0cmロームブロック・~2.0cm幅を多量に含む。

D 18 土層説明

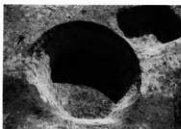
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・ローム粒子を多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
~1.0cmロームブロックを多量に含む。

D 19 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・~3cmロームブロックを含む。
2. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・~3cmロームブロックを多く多量に含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミス・~5cmロームブロックを含む。
4. 褐色土層 (10YR4/4)
パミス・~5cmロームブロックを多く多量に含む。



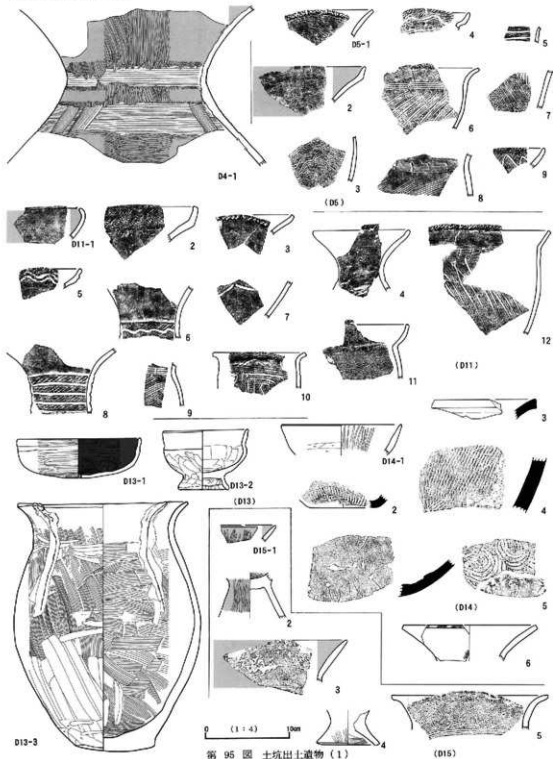
D18 完照 (北より)



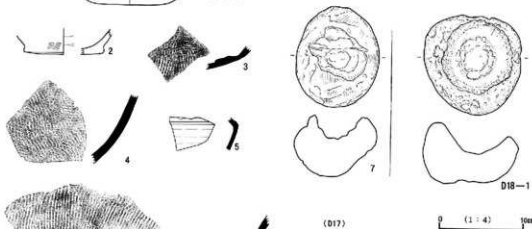
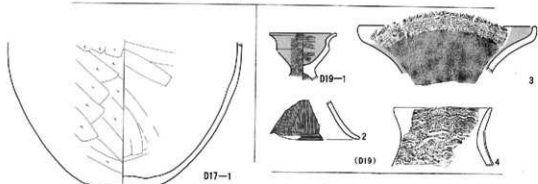
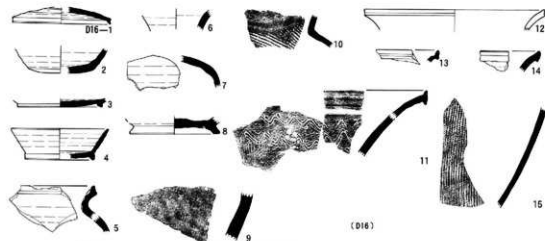
D19 完照 (北より)

第 94 図 D14~D19号土坑

D4・D5・D11・D13～D15



D16~D19



第 96 图 土坑出土遺物 (2)

第5節 溝址

1. 弥生中期

溝から出土した土器が多量であるため大まかに分類して見たい。

壺型土器

- 壺1類：受け口状を呈すもので、頭部から強く外反し、口縁外面に外稜をもち、口縁が立ち上がる。
- 壺2類：受け口状ではあるが、口縁外面に明確な稜がなく、袋状ともいえるもの。口縁が頭部から外反し、口縁上部で内湾する。
- 壺3類：口縁が外反し開くのみのももの。

甕形土器

- 甕1類：口縁に外稜をもち、受け口状の口縁。
- 甕2類：明瞭な受け口ではなく、頭部から外反し、口縁上部が内湾する口縁。
- 甕3類：頭部から短く直線で外傾する口縁。
- 甕4類：頭部から短く外傾するが外反気味の口縁。

(1) M3・M6号溝址

M3は、け51～け52グリッドにあり、歪んだ半円形を呈し、6.1mを調査している。幅50～60cm 深さ28～50cmを測る。断面形は逆台形で、覆土は黒褐色土である。M6は、け49グリッドにあり、2.06mを調査している。幅50～60cm、深さ43～55cmを測り、M4と道路に切られ、弧状に伸びている。M3とM6は規模、形態が類似しており、途切れて続く溝であろうと推測される。

出土土物には弥生土器がある。M3からは高杯、甕、打製石鏃が出土する。高杯は赤色塗彩され直線の口縁が曖昧な内稜を持って折れ外傾する。鉢であるかも知れない。2は甕で、口唇部に縄文を転がし、口縁は短く外反する。胴部に櫛状斜走文を縦羽状に施す。5はコ字重ね文の甕である。

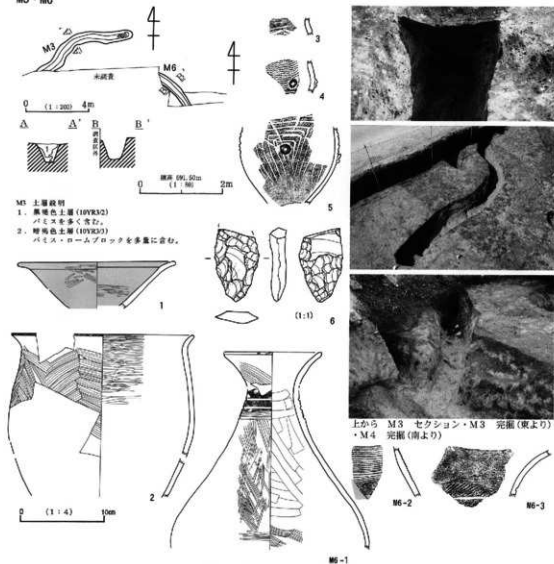
M6からは壺が出土する。1は壺3類の口縁が外反する壺で、口唇部縄文、頭部縄文、ヘラ描横線文を施文する。3も同様の壺である。2は頭部に櫛状横線文、胴部赤色塗彩の破片である。M3・M6からはM6-2を除いて、弥生中期後半栗林式土器が出土している。

(2) M11号溝址

き37～き36グリッドにあり、全長21.4mを調査した。ほぼ南北方向に伸びる溝で、南・北は調査区域外、道路部分は未調査、H35・H36、F9、D5、D11、単独ピットP128・P129に切られ、M14を切る。幅100～172cm、深さ56～74cmを測る。断面形は逆台形である。覆土は上面にロームの堆積があり、2・3層の黒色土・黒褐色土層から多量の遺物が出土する。下の暗褐色土層からの遺物は少ない。出土地点は北のAセクションから北のI区と、未調査区を挟んだ南のIII区に集中する。I区とIII区の接合がかなりある。

出土土物には弥生土器、土製紡錘車、土製円板、使用痕のある剥片石器、太型蛤刃石斧破片、磨石、小型扁平片刃石斧がある。土器は1の鉢の口縁端部は面取り、口縁外面端部に突起が付く。2の杯の端部も面取りされる。5は脚端面を平坦にし、8の端部面取りの脚と異なる。外面は赤色塗彩される。9・10は深鉢で、口縁が明瞭な外稜は持たないが受け口状を呈す。内面はミガキ、口縁から胴中位まで赤色塗彩される。外面はミガキ赤色塗彩である。口縁上部に焼成前穿孔の小孔がある。11の壺は胴中位に縄文、ヘラ描横線文、ヘラ描連弧文を施文し、施文部以外の胴部をミガキ赤色塗彩している。内面はナデである。13は壺胴上部の文様である。ヘラで鋸歯文を作り、斜線を充填している。施文部以外をミガキ赤色塗彩している。12は受け口状の壺1類で、装飾されている。口縁外面に縄文を転がし、2個対の穴の開いた突起を5か所に貼付する。頭部は縄文、太いヘラ描横線を施す。文

M3・M6



M3 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パミスをよく含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3)
パミス・ロームブロックを多量に含む。

上から M3 セクション・M3 完掘(東より)
・M4 完掘(南より)

第 97 図 M3・M6号溝址

様部以外はミガキ赤色塗彩される。口縁中位に焼成前穿孔の小孔2個が、対面にある。

M11の壺は大きく3形態の口縁があり、このうち21は2類と3類の中間器形、36は短頭でやや異なる器形である。

壺の器形と文様構成

壺1類：受け口状口縁 12・14・17・19

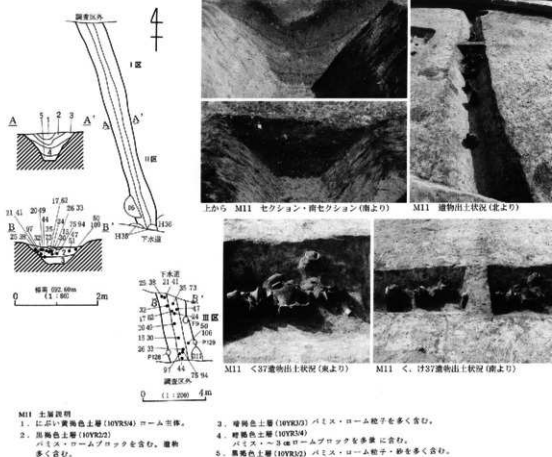
口唇部面取 面取りのみ17、縄文11・12・14・19

口縁帯 ヘラ描波状文17、縄文+ヘラ描波状文19+貼付文11・12・14

頸部 ヘラ描横線文 +ヘラ描き波状文17

縄文+ヘラ描横線文 11・14+ヘラ描波状文25+ヘラ描列点文19

受け口状口縁壺は縄文を口唇部、口縁帯、頸部に施文、口縁帯の施文はヘラ描波状文、装飾性のあるものは貼付文を施す。頸部の文様はヘラ描横線文とヘラ描波状文である。その下に列点文を付加するものがある。



第 98 図 M11号溝址 (1)

壺 2類：内湾口縁壺 15・16・18・20・21

口唇部面取 縄文15・18・20・21, M14-9

口縁外面 縄文15・18・21+ヘラ描波状文M14-9

縄文+櫛描波状文20

ヘラ描波状文16

99部 縄文+ヘラ描横線文+ヘラ描波状文+縄文押圧沈線文15

縄文+ヘラ描横線文M13-6, M14-9・17

縄文+ヘラ描横線文+櫛描波状文20

+ヘラ描横線文+ヘラ描波状文16

縄文 +ヘラ描波状文21・36

口縁内湾の壺は口唇部面取り後縄文、口縁外面に縄文施文3例、波状文施文は2例である。

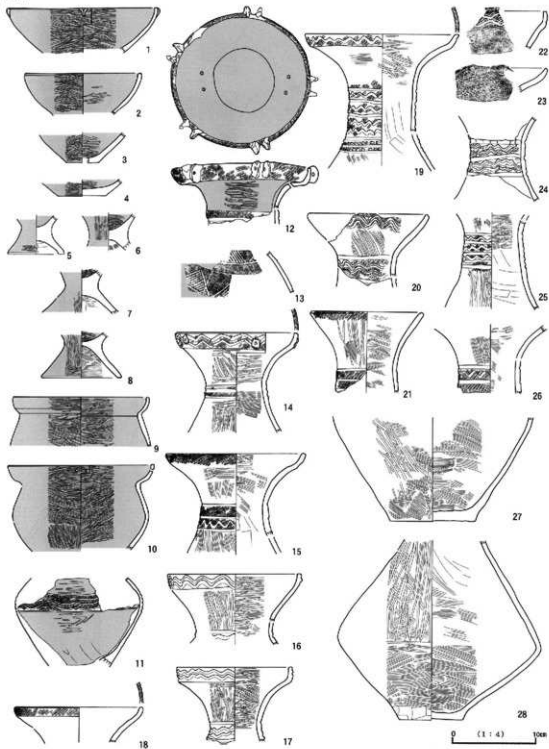
壺 3類：単純に口縁が外反する壺 29・30・31・32・33・36・37・40

口唇部 面取 縄文29・30・31・32・33・37・40

頸部 縄文 +ヘラ描き横線文29・31・32+ヘラ描波状文30・40

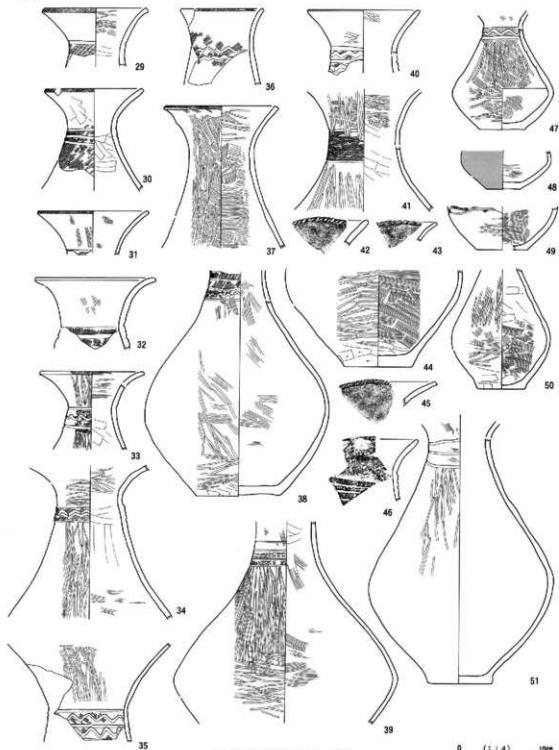
ササノ剣突+ヘラ描横線文+ヘラ描波状文33

M11



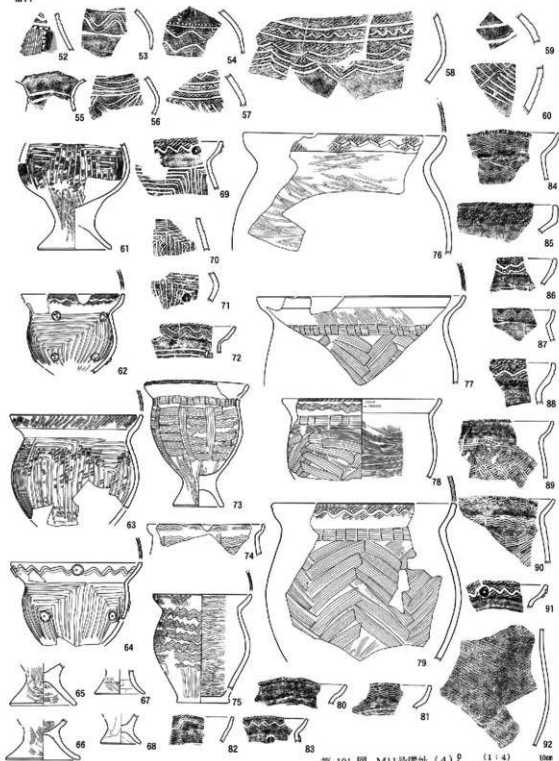
第 99 图 M11号遗址 (2)

M11

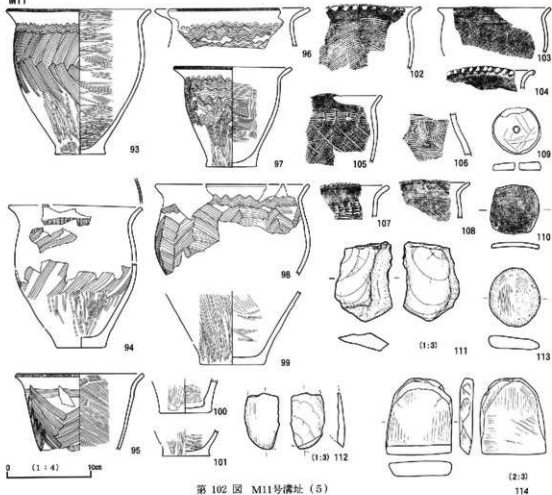


第 100 图 M11号清址 (3)

M11



第101圖 M11号儀址(4) (1:4)



第102図 M11号溝址(5)

壺3類の外反口縁の数量が最も多い。口唇部は面取り後に縄文、当然のことながら、口縁外面上部の施文はなし、頸部は縄文とヘラ描横線文の組み合わせが多い。33は縄文ではなくササラ状の刺突が見られる。頸部に文様帯のない37もある。

頸部文様だけでは51のヘラ描横線のみ、39のヘラ描横線文間にヘラ描篋状文などがある。胴部形は無花果形のナデ肩から胴中位下で膨らみ底部にいたる27・38・44・50・51、胴中位下で極端に張り、算盤玉形を呈すもの28・39・47の2種類がある。無彩色の壺が主体で、装飾性の高いものが赤色塗彩される。

甕形と文様

甕は脚の付く台付壺と平底のものがあるが、完形品が少なく分離できないので、一括して扱う。

甕1類：受け口状口縁の壺 63(台付?)・77

口唇部 縄文63・77、M14-28

口縁帯 無文77

縹縹波状文 M14-28

胴部 縄文+コ字重ね文63、M14-28

縹縹斜走文(縹羽状) 77

甕2類：明確な受け口ではなく、頸部から外反し内湾する口縁の甕 62(台付?)・64(台付?)・73(台付?)・74・75・76・78・79

口唇部 縄文62(台付?)・64(台付?)・73(台付?)・75・76・78・79、M13-15・17・18

口縁外面 縄文+ヘラ描波状文76

縄文+ヘラ描波状文62(台付?)・61(台付?)・79

+柳描波状文74・75・78、M13-18

縄文M13-17

無文M13-15・20

頸部 無文76

柳描波状文73・78・79、M13-17・20

胴部 無文76

柳描波状文74・75 +柳描垂下文73

斜走文(縦羽状)78・79、M13-15・17・18・20

コの字重ね文+胎付文62・64

数量が最も多い。台付甕が多くあり、コ字重ね文がある。頸部に柳描波状文、胴部は柳描波状文と斜走文を施す。

甕3類：短く直線で外拓する口縁 96・97・98

口唇部 縄文96・97・98、M14-29

頸部 柳描波状文98

柳描波状文M14-29

胴部 柳描波状文96・97

柳描斜走文(縦羽状)98

コ字重文M14-29

甕3類は口縁外面に施文しない。97・98は頸部文様に波状文や縦羽状文など頸部に異なる文様をいれていない。

甕4類：短く外拓するが外反気味の口縁93・94・95

口唇部 縄文93・94・95

頸部 柳描波状文93、柳描波状文94、柳描縦線文95

胴部 柳描斜走文(縦羽状)93、斜走文(縦羽状)95、斜走文94

数がそれほど多くない。口縁外面の文様はなく、頸部、胴部に施文する。

本址の甕は無彩色が大半を占め、無花果形の胴部に文様をもたないものが大半であり、文様に縄文、ヘラ描文が主体であること、甕も縄文が多用され、ヘラ描き文が多用されるなど、弥生中期栗林式土器後半の様相を呈する。

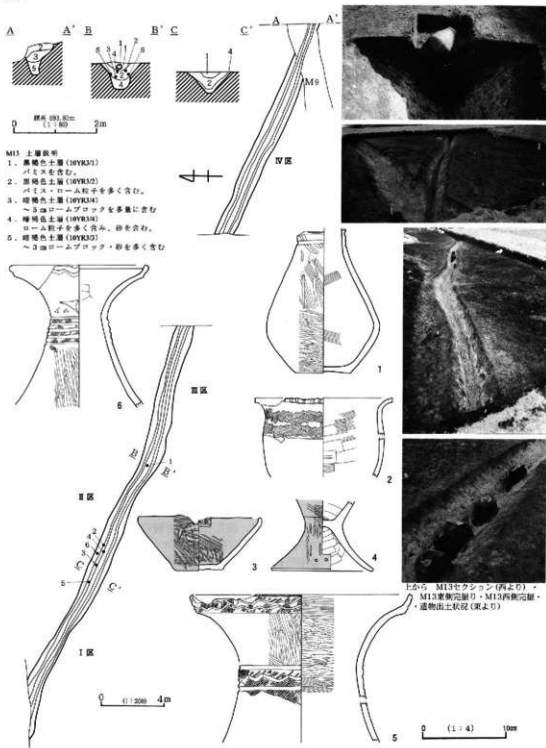
47の甕の中より、炭化種子が見られた。分析の結果、炭化した栽培種のイネの穎(7個)と胚乳(41個)、キビ近似種の胚乳(1個)、豆類の種子(1個)が検出されている。生米や穎粟(稲粃)の状態で、炭化したとみられるとしている。放射性炭素年代測定では、暦年較正年代σ calBC163-cal BC129, BC-75cal BC89としている。

(3) M13号溝址、

か22~こ12グリッドにあり、全長45.65mを調査した。北と南に調査区域外、道路部分は未調査、南でM9に切られる。北西から南東に伸びる溝である。幅65~121cm、深さ40~70cmを測る。断面形はJ字形に、中位で箱形に下がる。遺物は18~20グリッドに多い。上層は上層が黒褐色土層、下層に暗褐色土層が堆積する。遺物は黒褐色土層の1・2層から出土している。

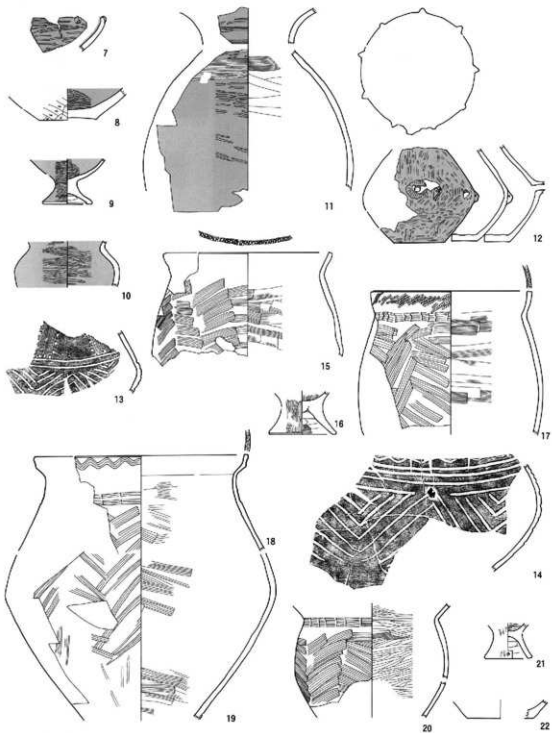
出土遺物は弥生土器がある。鉢、高杯、甕がある。3の鉢は直線的に開き口縁端部で内湾する。端部は丸味を帯びている。重さのある鉢で、内外赤色塗彩される。4は上下とも内面はナデ調整され、外面はミガキ赤色塗彩である。上下が図示した通りであれば、脚には焼成前穿孔される。上部はわずかな段をもって直線的に外傾する。8は鉢であろうか内面に赤色塗彩され、外面は摩耗するがミガキの痕跡が残る。9は小型の高杯である。10は深鉢であろうか、内外ミガキ赤色塗彩される。12は赤

M13



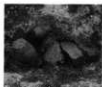
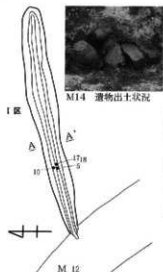
上から M13セクション(西より)・
M13東側完掘り・M13西側完掘り・
遺物出土状況(東より)

M13

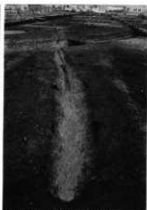


第 104 图 M13号遗址 (2)

M14



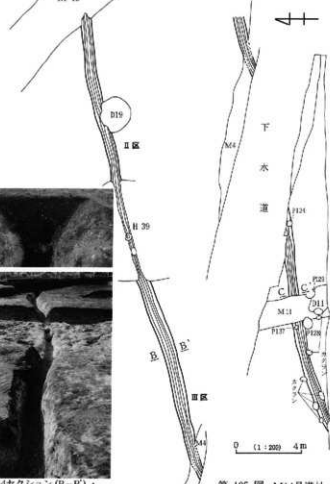
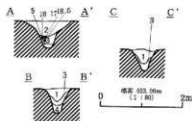
M14 遺物出土状況



M14 東側完掘(東より)



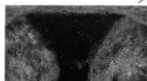
M14 遺影(北より)



第 105 図 M14号溝址(1)

M14 土層説明

1. 赤褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。
2. 黄褐色土層 (10YR3/2)
パリスを含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4)
一部ロームブロックを多く含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3)
ローム粒子を多量に含む。
5. 褐色土層 (10YR4/7)
ローム二次堆積・砂を含む。

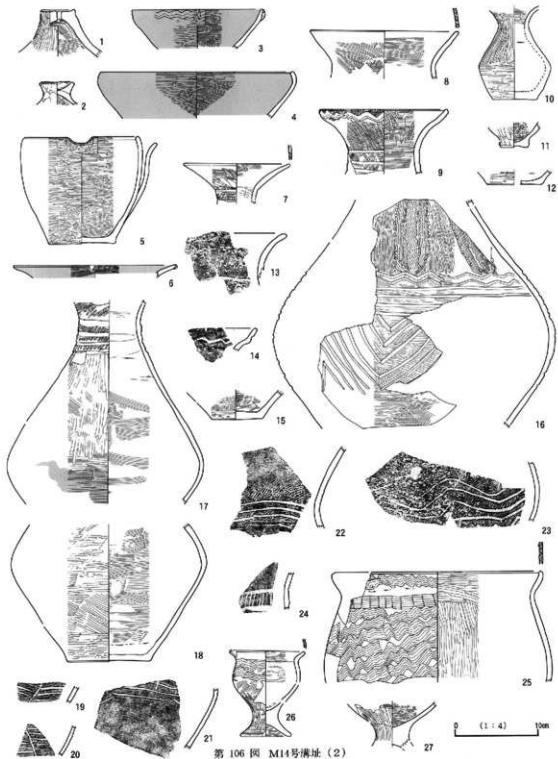


上 M14セクション(B-B')・
下 M14完掘(東より)

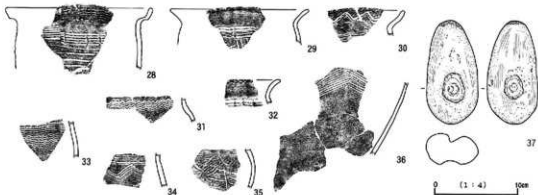


上 M14セクション(C-C')・
下 M14西側完掘(西より)

M14



第 106 图 M14号遗址 (2)



第107図 M14号溝址(3)

色塗彩される注口付きの壺である。注口は胴部の最も張る中位にあり、小穴のあく貼付文が9か所付いている。内面は細かいハケ目を残している。1の壺は口縁が欠けるが整えてあり、再利用したであろうか。頸部にヘラ描横線文を施す。5の壺は太い頸で、口縁は1類である。6は口縁が外反し内湾する。M11で分類した壺2類である。同じ1層中には11の壺があり、胴部球胴形で、頸部に櫛描横線文とその間に赤色塗彩の帯を扶む壺である。これは弥生後期後半箱清水式土器である。1層は弥生時代後期後半の土層である。2の甕は口縁が短く外反する甕4類である。口唇部は縄文施文後刻みを施している。胴部櫛描波状文を施文する。15~20の甕は2類で、15は口縁外面に文様はなく頸部にもない。17は口縁外面に縄文、頸部に簾状文である。18は外面にヘラ描波状文、頸部に簾状文、20は口縁に文様はなく、頸部櫛描簾状文である。胴部は櫛描斜走文で、縦羽状である。口縁外面の施文の簡略化など、M11と近い時期ではあるが新しい様相がある。

(4) M14号溝址

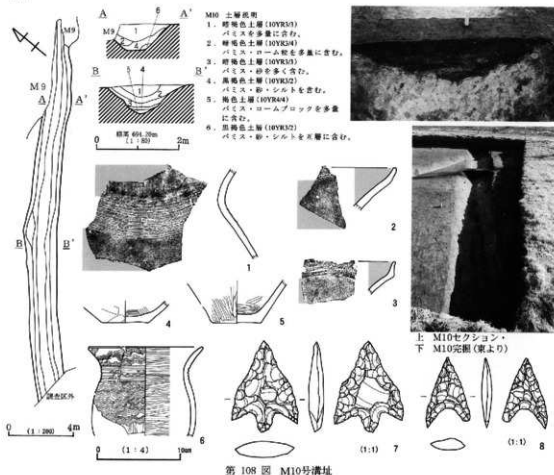
く21~し38グリッドにあり、68.67mを調査する。く21で発生した溝は、し38グリッドで南の調査区域外となる。H39、D19、M4、M11、M12、P128、P137に切られ、H43を切る。道路分は調査していない。幅43~174cm、深さ39~71cmを測る。断面形は逆台形を呈し、2段階に落ちる。覆土は上層が黒褐色土、下に暗褐色土を含む。南側では黒褐色土が下方まで入っている。

出土遺物には弥生土器と凹石がある。土器は蓋、杯、鉢、片口鉢、壺、台付甕、甕があり、3の杯は口唇部面取り、口縁上部外面にヘラ描波状文2本と貼付文を施し、赤色塗彩される。4の鉢も赤色塗彩され、口唇部は面取される。5の片口付鉢の口縁は丸味を持ち、器面は内外ミガキで、無彩色である。8の壺は口縁は直線的に外傾し、口唇部に縄文、頸部に縄文を施す。9は袋状の口縁の壺で、壺の2類である。口縁外面は縄文とヘラ描波状文、頸部に縄文とヘラ描横線文である。16は胴上部に懸垂文、中位に横線文と重ね山形文などヘラ描や櫛描文を胴部に充填している。7の壺口縁は口縁が長く直線的である。24の頸部の刻みは縄文の押印痕である。

甕は25が甕2類で袋状の口縁、口縁外面に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文、胴部に櫛描波状文を施す。26の台付甕は、口縁が短く外傾する甕3類である。口唇部縄文、胴部に櫛描波状文を施す。28は甕1類で、口縁帯に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文、胴部にコ字重ね文を施す。

弥生中期後半の栗林式土器を伴出する。M11・M12に切られていることから、本遺跡では最も古い弥生中期後半栗林式の土器ということになる。16など文様を胴部に充填した壺の存在、3の杯口縁に施文する、7・8の直線的に外傾する壺の口縁、これらより、弥生中期後半栗林式土器中葉の土器群である。28・29の口縁の長いことなど中期後半の中では古相である。

M10



2. 弥生後期

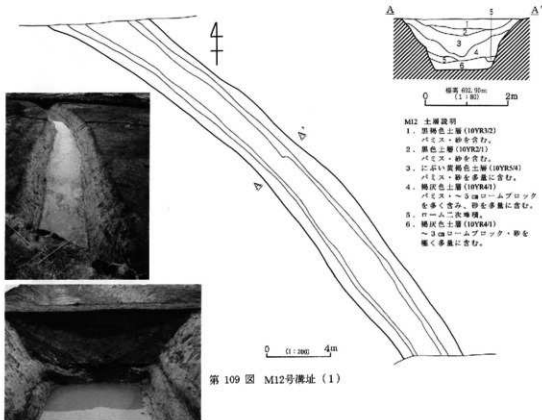
(5) M10号溝址

き2～き6グリッドにあり、全長22.72mを調査した。北東から南西方向に伸びる溝で南は調査区域外、北はM9に切られる。溝幅156～204cm、深さ57～75cmを測る。溝断面の傾斜は緩く断面形は逆台形である。上層は暗褐色土、底近くに黒褐色、褐色、黒褐色土層が互層に堆積する。

出土遺物は弥生土器と黒曜石製石鏃2点がある。弥生土器は頸部に縞描横線文、口縁外面に櫛描波状文が施文され、赤色塗彩される壺と、口縁櫛描波状文、頸部縞描横線文の甕がある。これらは弥生後期後半箱清水式土器である。M9から出土する弥生後期M9-23・24の土器も本址に伴うものである。

(6) M12号溝址

き23～き29グリッドにあり、全長28.4mを調査した。弧状に北西から南東にあり、南と北は調査区域外である。H42、H44、M14を切る。溝幅288～368cm、深さ119～125cmを測る。断面形は逆台形、上層は黒褐色土と黒色土、中間に砂層を含み、下層はロームブロックをを主体とする層が堆積する。遺物は3層から多量に出土している。



第109図 M12号溝址(1)

I: M12完掘・下 M12セクション(南より)

出土遺物には弥生土器がある。蓋、杯、鉢、高杯、壺、甕がある。2の杯は口縁が直線と直立する。4は片口付杯で、口縁が内湾して外傾する。底部径は2.8cmと小さい。5は4の大きいタイプ。6は、片口の杯であるが、口縁端部に強く内湾する。高杯の脚が小振りでも多くみられる。以下の2種がある。

高杯脚1類：「ハ」の字状に開き裾が短い。12・13・14・18・20・24

高杯脚2類：「ハ」の字ではあるが裾が外反し長い。15・17・19・22・23

高杯の上下の接合にホヅ技法が見られるものが11・16・18である。大半が赤色塗彩される杯、高杯であるが、9・10の片口杯の大・小、11の高杯は無彩色である。片口杯は器形が類似しセットであろう。ミガキ調整される。11の高杯脚内面はナデ、杯部はわずかに見込にミガキの痕跡、外面は横ナデ後、杯下部から脚にかけてミガキ調整される。3点のみが無彩色である。

高杯の杯部形は3種ある。

高杯1類：口唇部面取り、口縁に突起貼付する。弥生中期的な形である。

高杯2類：杯中位で直立し、上部が外反する。23

高杯3類：上位まで直線的に外傾し、上部が外反する。11・24

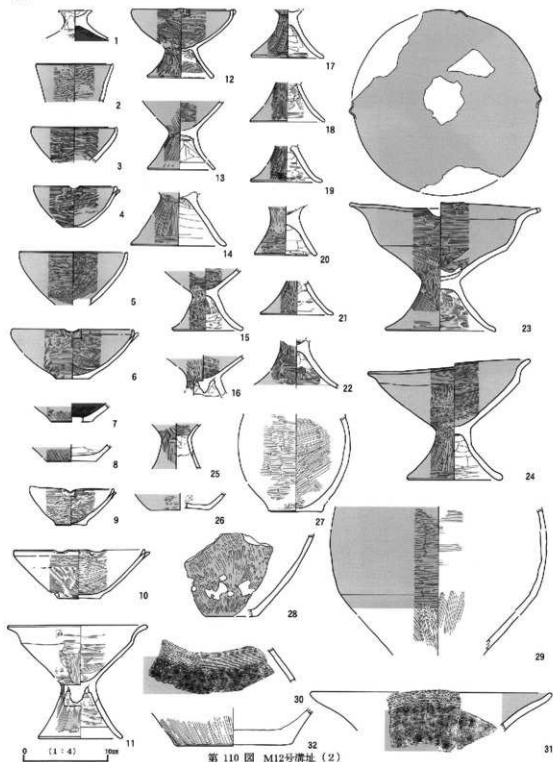
実測はしていないが、脚に三角透しのものもある。

壺の口縁部形態で分類する。

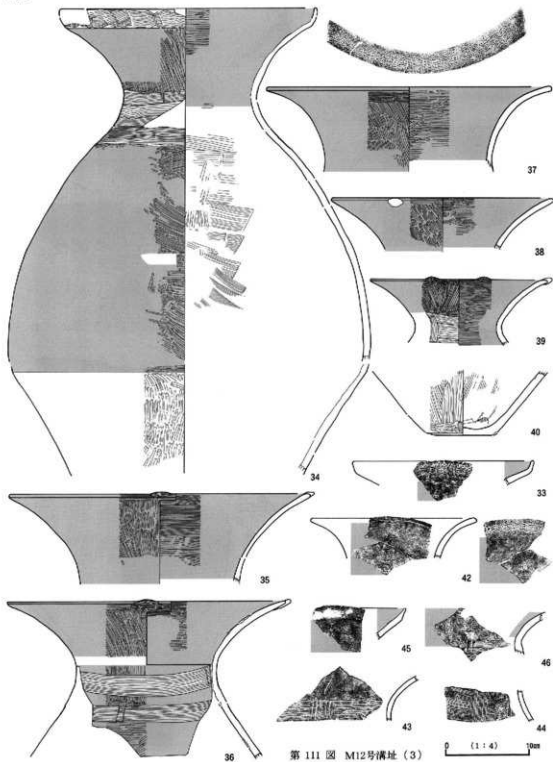
壺1類：受け口状で、頸部から外反し、上部で明瞭な外稜をもって、口縁が立ち上がるもの。

壺2類：受け口状ではあるが、上部が内湾するのみで、外稜がないもの。袋状口縁。

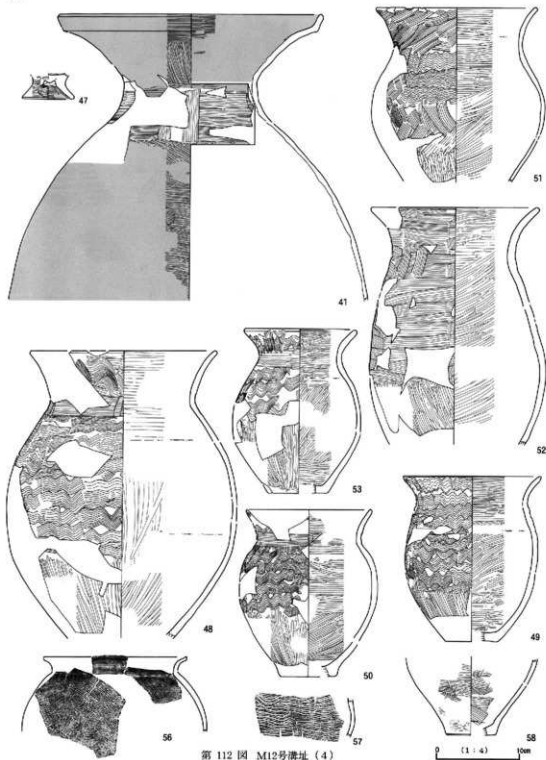
M12



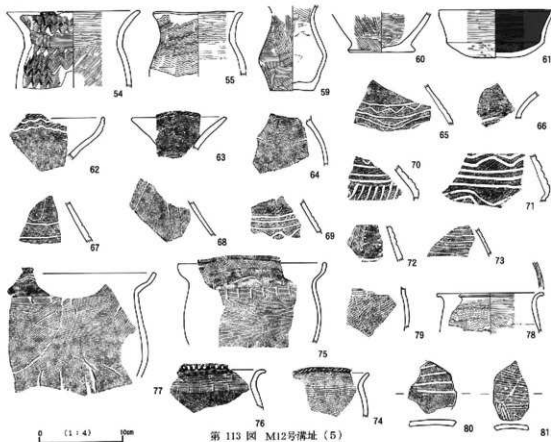
第 110 图 M12号窖址 (2)



第 111 图 M12号坑址 (3)



第 112 图 M12号溝址 (4)



壺3類：口縁が外傾外反するのみのもの。

壺1類 33・34・41

口縁外面 無文(赤色塗彩)41、柳描波状文33・34

頸部 柳描横線文34、柳描T字文41

壺2類 31

口縁外面 柳描波状文31

壺3類 35・36・37・38・39・42

口唇部 面取り37+ササラ状刺突+突起35・36・39

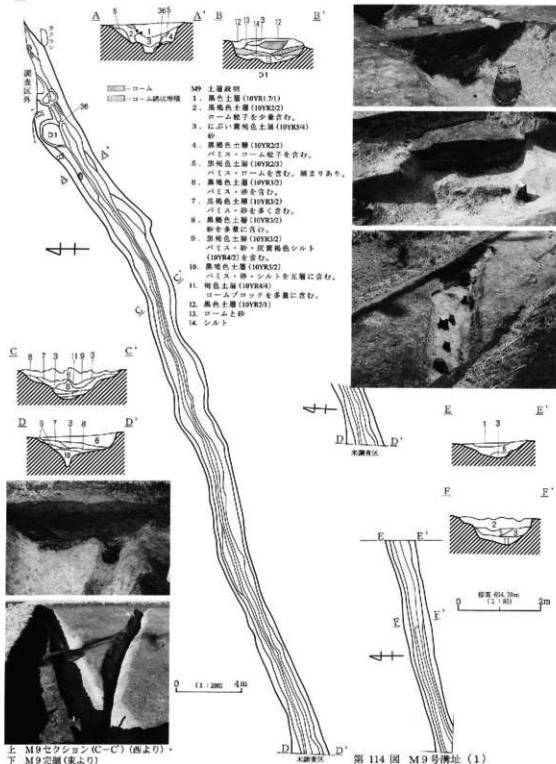
口縁内面端部 柳描波状文37・42

頸部 柳描簾状文+赤色塗彩帯+柳描波状文36、柳描T字文39

壺は口縁外反の壺3類の器形が多く、文様帯以外は口縁は赤色塗彩される。文様は細い柳描文である。まれに無彩色の43の壺もある。頸部文様は口唇部同様いずれも細い柳描で、T字文、簾状文+赤色塗彩帯+簾状文、簾状文+波状文など組み合わせをする。胴部形については29には胴下部の屈曲はない。34はわずかに屈曲傾向が見られる。28は胴下までミガキ赤色塗彩される。27は内外ミガキ調整であるが外面に赤色塗彩が黒色に変化した痕跡があり、深鉢とした。

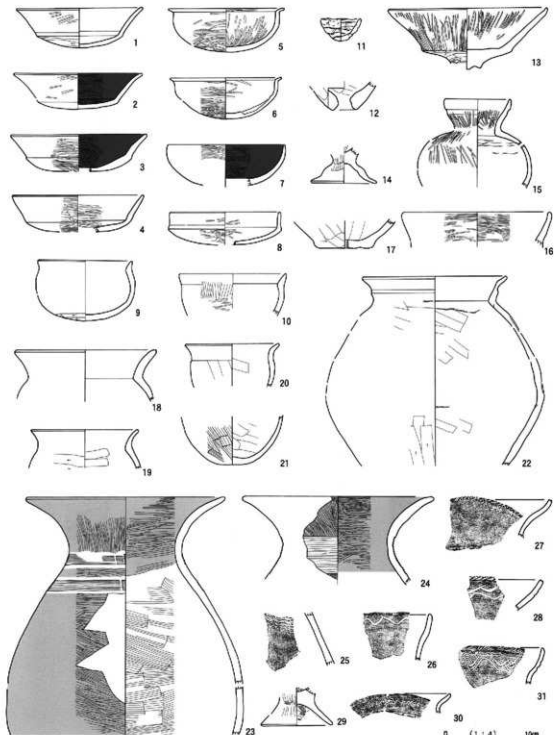
壺の形態を分類してみる。

壺1類：口縁が外傾外反し、口縁に最大径をもつ。胴部はやや胴張り程度である。

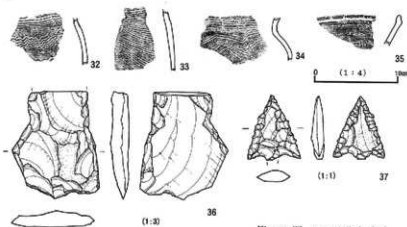


上 M9セクション(C-C') (西より)
下 M9完掘(東より)

M9



第 115 图 M9号遗址 (2)



第116図 M9号溝址(3)

甕2類：頸部がぐびれ口縁が長く外反する。胴部は張り、球胴形になり胴部に最大径をもつ。

甕3類：口縁が長く、胴部もそれほど張らず、最大径が口縁と胴部で近い。

甕1類 49・54

口縁 柳摺波状文49・54、頸部 柳摺波状文49・柳摺波状文54、胴部 柳摺波状文49・54

甕2類 48・50・51

口縁 柳摺波状文48・50、柳摺斜走文51、頸部 柳摺波状文48・50・柳摺波状文51

胴部 柳摺波状文48・50、柳摺斜走文51

甕3類 52・53・55

口縁 柳摺横線文52、柳摺斜走波状文53・55

頸部 柳摺横線文53、柳摺斜走波状文55、柳摺T字文52

甕2類、甕3類は弥生後期箱清水式土器の中では新相である。ことに甕3類は初めての登場で、波状文の波がぐずれ、方向も斜走している。52などは逆に斜走文が横になり、頸部には壺の文様であるT字文にしている。56の土師器壺は破片ではあるが3層中の出土であり、胴部外面にハケ目を残している。56の土器が混入ではないとすると、これらの箱清水式土器は古墳時代前期ということになる。

なお1層中からは61の土師器杯が出土することから、1層は古墳時代後期の層である。58～81は、61と64を除いて、弥生時代中期後半栗林式土器である。64は土師器壺であろうか。

3、古墳時代

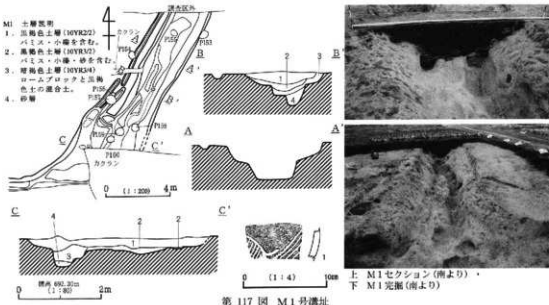
(7) M9号溝址

IKPⅢお98～本遺跡か1～こ10グリッドの全長65.7mを調査した。南と北に調査区域外があり、北東から南西方向に伸びている。M10、M13を切る。高低差はあまりないが水流により東側は挟られている。南西から北東に低いようである。砂層の堆積があり、後代に流路となったようである。底面近くに締まった5層などがあることから道路遺構の可能性がある。

出土遺物には土師器、弥生土器、石鏃、打製石斧がある。1～4の土師器杯は、丸底の底部からわずかに直立して、口縁が大きく外反するもので、古墳時代6C頃のものである。5・6・13・15・22などの5C後半の土器群もあり、近くに住居があろう。弥生後期後半箱清水式の壺、弥生中期栗林式の土器片もある。35は弥生前期の甕の口縁部片であろうか。

最終の遺物が古墳時代後期6C代のものであるが、それ以降の可能性もありうる。

M1



4. 中世

(8) M1号溝址

き40〜け43グリッドまで12.65mを測る。南北方向の溝で北に続いている。現道と攪乱によりわからない所もあるが、M4と連結するようである。幅は約150cm、深さ40〜80cmの逆凸形の断面である。凸の部分には、砂が堆積しており、流路となったようである。両脇の浅い部分には、ロームブロックと、黒褐色土の混合土があり、締まっている。M4と連結している。道路の一部が流路化して決った結果、凸部分ができたようである。

弥生中期の壺破片、須恵器がある。M4と連結すれば、M4は中世であるが、該期の遺物はない。

(9) M2・M7号溝址

け51〜す56グリッドに検出され、中間が現道路で、調査できなかったが27.8mを調査した。

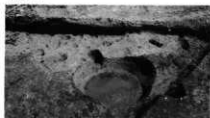
北側の細い溝をM2とし、M2は幅120cm、深さ40cmを測る。道路を挟んだ南をM7とした。同じ溝と思われるが記録上別けている。M7は上面にロームブロックを含む土を貼り締まっている面がある。Bセクション地点では幅408cm、ハード面まで深さ8cmを測る。両側に側溝状の溝がある。中央は流路で、削られたのから54cm低くなっている。Cセクション地点になると、東側が低くなり、幅4mほどの谷状の窪みができている。道路とその後侵食により谷になって行くようである。M2からは磨製石鏃未製品を出土する。2層中より、馬の歯が出土する。M7からは、かわらけ、内耳鍋、常滑の甕片、馬の脛骨が出土している。

出土遺物に中世遺物があることから、未調査区でM4と交わり、連結すると思われる。

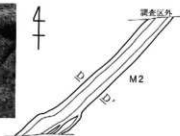
(10) M4・M8号溝址(平面図は全体図参照)

M4は調査区し27〜し69グリッドに渡っている。現在の道路や下水道の攪乱に寸断されている所が多いが、一応全長169.3mを調査している。西はINPV・Ⅷに続いている。幅220cm、深さ30〜66cmを測る。溝は逆台形の断面形をし、底面の両脇が細い溝になっている。竪穴住居をすべて切っ

M2・M7

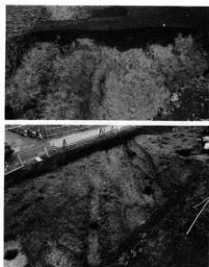
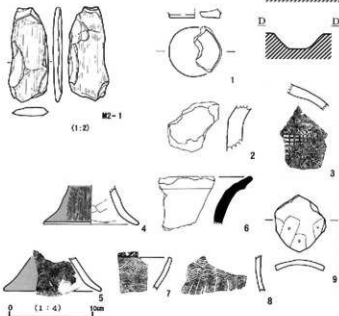
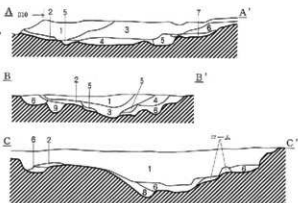
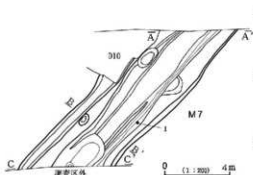


M2 完測(南より)



- M2・M7 土層説明
1. 赤褐色土層(10YR2/3)
パリスを少し含む。
 2. 暗褐色土層(10YR3/3)
パリス・ロームブロックを含む。網ま
りあり。
 3. 黒褐色土層(10YR2/3)
パリス・ロームブロックを含む。
 4. 黒褐色土層(10YR2/3)
細ロームブロックを多量に含む。
 5. 暗褐色土層(10YR3/3)
細ロームブロック多く含む。
 6. 赤褐色土層(10YR2/3)
パリス・ローム塊子を含む。
 7. 黒褐色土層(10YR2/3)
ロームブロックを多く含む。
 8. にぶい黄褐色土層(10YR4/5)
ロームブロックを多量に含む。
 9. 赤褐色土層(10YR2/3)
パリス・ロームブロックを含む。

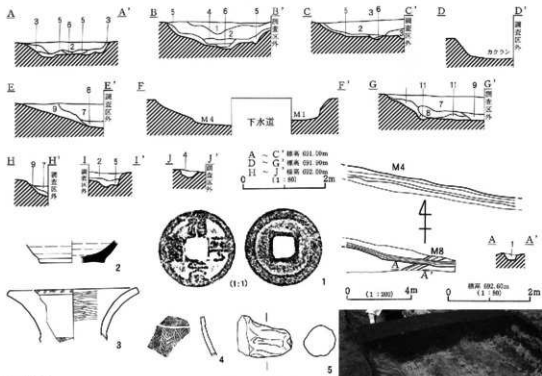
道路



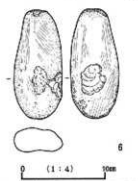
上 M2・M7セクション・下 完測(南より)

第118図 M2・M7号溝址

M4・M8



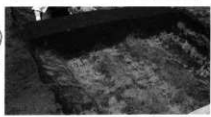
- M4 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR3/3)
パリスを含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を多く含む。
 3. 黒褐色土層 (10YR3/2)
砂を多く含む。
 4. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を多く含む。
 5. 黒褐色土層 (10YR3/4)
パリス・ローム粒子を多く含む。
 6. 黒褐色土層 (10YR3/3)
砂を多量に含む。
 7. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・砂を含む。
 8. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・砂を多く含む。
 9. 黒褐色土層 (10YR3/3)
パリス・ローム粒子を多量に含む。
 10. 褐色土層 (10YR4/4)
ロームブロック主体。黒褐色土混入。
 11. 褐色土層 (10YR4/4)
ロームブロックと黒褐色土中々。



M8 セクション (北より)



M8 完照 (北より)



上からM4セクション・
M4完照 (東より)・
M4完照 (西より)

- M8 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR3/2)
パリス・ローム粒子を含む。

第 119 図 M4・M8号構址

る。

出土遺物には、「熙寧元寶」（初鑄年1068年）の渡来銭、内耳、須恵質杯、弥生土器、土師器把手、敲石が出土している。65グリッドからはウシの歯が出土する。内耳、古銭などは中世であり、5層暗褐色土上面が締まっており、側溝などから道路遺構であろう。

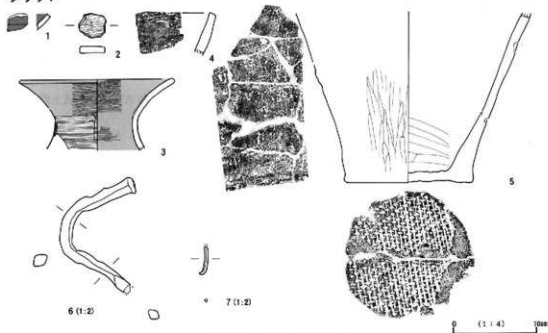
M8はし32グリッドにあり、M4に切られている。出土遺物はない。

第6節 グリッド

か4グリッド付近は、水性堆積土層が見られ、水田の可能性も踏まえ、土壌分析したところ、タケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出された。この辺りは、低地であったようである。

さ59グリッドから、5の深鉢が出土し、縄文後期層の内式土器である。遺構は確認できていない。

グリッド



第120図 グリッド出土遺物

第V章 まとめ

本報告書で報告する遺構は以下の通りである。

時代	竪穴住居址	竪立柱建物址	土坑	溝
縄文			1	
弥生中期後半	17		2	5
弥生後期	17		2	2
古墳中期	3			
古墳後期	7		2	1
奈良	11	3	4 (井戸3)	
中世			1	4
不明	1	7	4	1
合計	56	10	16	13

第1節 弥生時代中期

1、竪穴住居址

弥生時代中期の竪穴住居は16棟調査した。遺物のないH7を除くと15棟である。住居址は22グリットから67グリットの180m間である。住居址の東には、M13が北西から南東にかけて延び、区切っている。これより東には弥生中期後半の遺構がない。千曲側の合流地点から西へ湯川沿いに展開してきた弥生中期集落の限界が確認されたようである。

述べてきたように弥生中期後半の住居は栗林式土器を出土している。これまでに栗林式土器の細分が試みられ、大方4段階に分類がなされている。

1999.1 小山居夫「佐久地方の弥生土器」では中期後半栗林式を、4期に分け、I期、II期古、II期新、III期としている。

I期： 蓋の口縁外反が弱く短い傾向。頸部から胴部までくまなく縄文。

竪穴口縁（口縁が短く外反、胴最大径を中位・中位上方にもつ。）

II期（古）：蓋口縁の外反が強まり、口縁が伸びて大きくなる。縄文の採用。

蓋は単純口縁の胴最大径が中位上部にあるものが主体。

II期（新）：さらにII期の傾向が強まり、蓋胴部最大径が胴部下位にあるものが増加。受け口の蓋の口縁の開きが強くなる。

蓋は単純口縁の胴最大径が中位上部にあるものが減少。口縁が外反し、胴部が球状を呈す。

受け口口縁が目立つ。

III期： 受け口蓋3（受け口口縁の細頸蓋、口縁が大きく外反して伸長化、最大径は胴下部にある。）が加わる。縄文の衰退。

蓋の口縁の伸長化が図られる。口縁部の縄文の使用が衰退する。

1991.1 寺島孝典「長野盆地南部の様相」栗林古段階古相、栗林古段階新相、栗林中段階古相、栗林中段階新相、栗林新段階に細分。栗林中段階古相

壺形土器は口縁部の外反が著しく、長くなり、ラップ状に大きく開く形態が目立つようになる。受け口の口縁も変化する。内筒状の増加。胴部最大径が下に移動。文様は頸部と胴部で分離傾向、頸部のみ、胴部のみと文様を減少させ、文様をもたないものもある。壺形土器は胴部の膨らみが顕著となり、口縁部の厚みが強くなり、受け口にするものが出てくる。大型品も目立つ。頸部が縦溝され柳掻きによる平行線文、波状文、簾状文が施文され、胴部は縦方向の羽状文、波状文がある。

栗林中段階新相

壺形土器は口縁部の外反が著しく、長くなり、ラップ状に大きく開く形態が目立つようになる。受け口の口縁も変化する。内筒状の増加。胴部最大径が下に移動。文様は頸部、胴部といった部分に単独に文様帯をもつものが大半をしめ、特に頸部のみ文様帯をもつというものが多くなり、施文自体も粗雑化簡略化が進む。

壺形土器も形態の多様化が著しく、内筒状の口縁も出現する。胴部に施文されていた列点文が姿を消す。この段階で、台付き壺が

出現。新しくコの字重ね文が施文される。

栗林新段階

奇形土器の受け口縁は内湾状になるもののみとなり、強く折曲がる形態の口縁はなくなってしまふ。大型の土器が少なくなり、小型へと移行する。文様は頸部のみ集中して施文され、胴部へは施文されるものはごくわずかとなってしまふ。縄文は口縁部頸部に一部残るものがあるが、施文されなくなってしまう。甕は頸部に縞状文の施文率が高くなり、波状文が多段に施文される傾向がある。

2002.5長野県考古学会誌99・100によれば石川氏は栗林式を4段階に区分し、裝飾帯構成で分類している。本遺跡には第1段階の栗林1式は見当たらない。栗林2式(古)の2段階・栗林2式(新)の3段階・栗林3式の4段階が該当してくる。

1=口唇部、2=頸部、2a=頸部の分化したもの、3=胴上部、4=胴中位上部、5=胴中位下、0=無文帯、

P58「第3段階 2+4の裝飾帯をもつ類型が激減する一方で、2・2a裝飾帯以下が無文となる。〔2・0・0〕や〔2・2a・0・0〕類型が多数を占めており、第2段階に顕著となった無文化が一層進行する。そして第4段階になると、2+4裝飾帯は姿を消す。2a裝飾帯をもつ類型が半数近くまで増加し、〔2・0・0〕類型や、〔2・3・4〕類型も存続する。ただここで注意したのは、胴部の無文化が急速に進行する中で、3裝飾帯や5裝飾帯をもつ裝飾的な類型が第4段階まで継続と存続することである」としている。このことを踏まえ、2005.2、『西一本柳遺跡X』の資料を加えて、本遺跡の資料を見てみる。

弥生中期の住居の形態は1.隅丸方形、2.隅丸長方形(矩形が強い)3.楕円形と分類している。

円形・隅丸方形→楕円・隅丸長方形といった変遷方向にあり、本遺跡では方形プランはなく、矩形の強い隅丸長方形と、楕円形の住居がある。主柱穴は4本で、その中央付近に炉を設けている。炉を検出したすべての住居で、土器を埋設して、火床としている。

矩形の強い隅丸長方形の竪穴住居は、16棟中10棟-H19・H20・H25・H27・H29・H42・H43・H44・H52・H54、楕円形は16棟中2棟-H50・H41となり、圧倒的に隅丸長方形が多い。また方形とみられる住居はない。これらからも弥生中期後半範疇である。

西一本柳遺跡土器分類(編年図は第1分冊に掲載)

奇形土器は胴上部に懸垂文は残るものの横位の文様はまれである。小山氏の中期後半Ⅱ期の古段階が初見の資料とみられる。次いで、さらに文様を減少させ、単純口縁壺では、口唇部と頸部にのみ施文する壺が主体となる時期がある。これらが中期後半Ⅱ期新段階に当たる。2002.3小林眞寿『深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』で、中期後半Ⅱ期を分離できることから小山氏のⅡ期古を→Ⅲ期、Ⅱ期新を→Ⅳ期、Ⅲ期をⅤ期とするとしているので、小林氏に従って資料を見てゆきたい。

弥生中期後半Ⅱ期(H44)

H44-2の壺は口縁部が頸部から折れて直線的外傾している。5の壺胴上部形は頸部から細長く胴中位下にかけて大きく張る。10の壺の口縁は強く外反して伸び、上部は強く内湾する。6の壺は口縁が外反し水平に近い。22の壺は頸部との間に無文帯があり、胴中位に施文される。

→壺4類は口縁部から折れて、直線的に外傾する広口の壺、受け口状の壺1類は強く外反し口縁部は低く、長い。口縁上部で内湾する壺2類はやはり強く外反し、上部の内湾の度合いも強い。文様は胴上部に無文帯が顕著となる(1・2・0・4・5)構成である。

壺3類は頸部から口縁が長めに外傾し、胴最大径を肩部にもっている。頸部に櫛描簾状文、胴部櫛描斜走文を縦羽状に施文している。付台甕もみられる。

弥生中期後半Ⅲ期(H25)

H25-2の壺は壺3類の単純口縁で、長めに外反する。3・5の壺頸部は縄文施文後へラ描横線文を施す。石川氏の言う2aの存在は少ないようである。壺2類1は口縁が高くなり、口縁の外反が緩くなる。壺1類もある。甕は壺2類の21・22がある。21は口縁が内湾するもので、最大径は胴中位上部にある。口縁・胴部櫛描波状文、頸部櫛描簾状文である。22は前段階の壺2類で口縁が内湾気味に外に開き、最大径を口縁にもつ。文様は口縁にへラ描波状文、頸部櫛描簾状文、胴部櫛描斜走文

が縦羽状にある。

→壺2類の口縁部の器高が高くなり、口縁外面・頸部に文様が施文される。胴上部の器形は膨らむタイプと直線的タイプがある。

弥生中期後半Ⅳ期（枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅰ-H1）

H1は南北8.16m×5.04mで、隅丸長方形を呈すが、南東の矩形が弱い。枡を中央に持ち、6本柱の住居である。炭化材があり、焼失家屋であろう。

壺は壺2類の口縁の外反が緩み、上部が内湾する。H1-1の壺は、口縁描波状文、頸部ヘラ描横線文・描描横線文、鋸歯文、貼付文が施される。胴部中位にかけて強く張る。11は口縁が内湾し胴部は細長く下部で算盤玉状を呈す。2の壺は壺3類で、頸部から口縁にかけて外反し頸部描描簾状文、胴上部描描波状文の垂下文、胴中位ヘラ描波状文を施す。13も壺3類で、頸部にだけ施文し、描描波状文、ヘラ描横線文を施す。

甕は23が甕3類で、口縁端部刻み目、頸部縄文・描描簾状文、胴部描斜走文を格子にしている。

24は甕4類で、口縁が短く外反し、頸部描描簾状文、胴部描斜走文の縦羽状で、胴部上部に最大径をもつ。前段階の様相が残る甕である。25は甕2類で、口縁に最大径をもつタイプ、27は甕2類の胴部に最大径をもつ。文様構成は同じで口縁に縄文、ヘラ描波状文、頸部描描簾状文、胴部描斜走文の縦羽状である。30は壺2類と3類が合わさったもので、口縁内湾気味に外傾し、口唇部縄文、口縁無文、頸部描描簾状文、胴部描波状文である。底部形が中期の土器の甕の細さがなく膨らんだ器形になる。台付き甕は44の前段階のもの43のゴ字重ね文の崩れた文様がある。42の台付き壺は口縁が外反する甕4類で口唇部縄文、頸部波状文、胴部は縄文である。

隣接するH2に弥生中期後半Ⅲ期の壺が出土している。H1にある弥生中期Ⅲの土器は、それらの土器も携えて引越したかのようである。

→壺2類の口縁の外反が緩み、口縁が高く、直線的に、上部で内湾する。〔2・0・0・0〕が主体で、〔2・3・4・0〕も存続する。頸部に描描文、鋸歯文が施される。甕の口縁が伸びて、頸部簾状文、胴部描描文で弥生後期の器形と施文が出現する。

しかしながら、この分類は寺島氏の弥生中期後半のⅡ期新とⅢ期を、中期後半Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの3段階に分類している。

石川氏の栗林2式（古）段階の土器様相は〔2+4・5〕類型、〔2+4・0〕類型、〔2・3・4・5〕類型の3類型がおおむね明瞭ながら全体に占める率は低だし、むしろ〔2・0・4・5〕類型〔2・0・4〕類型、〔2・0・0〕類型など2-4の裝飾帯間が広く無文帯となる一群が増加して、全体の半数を占めるようになる。としている。ここでⅡ期とした土器群の中に〔2・3・4・5〕類型がないこと、〔2・0・4〕が破片や枡の火床として再利用されていることから、本遺跡の弥生中期の住居址は石川氏が言う弥生中期後半栗林2式（古）段階より後出する資料である。

壺の器形と文様構成

○壺1類：受け口状口縁 M11-11・12・14・17・19、H52-4・・・6

1 a 口唇部 面取りのみM11-17・・・1

縄文M11-11・12・14・19、H52-4・・・5

1 b 口縁部 縄文+ヘラ描波状文M11-19・・・1+貼付文M11 11・14・・・2

ヘラ描波状文M11-17・・・1

2 頸部 ヘラ描横線文 +ヘラ描波状文M11 17・・・1

縄文+ヘラ描横線文 M11-11・14+ヘラ描波状文M11-25、H52 4+ヘラ描斜点文M11-19・・・8

○壺2類：袋状口縁 M11 15・18・20・21、M14-9、H25-1、H50-3、H43-16・・・8

1 a 口唇部 縄文M11-15・18・20・21、M14-9、H25-1、H50-3、H43-16・・・8

1 b 口縁 縄文M11 15・18・21、H43-16・・・4

縄文+ヘラ描波状文M14-9、H25-1・・・2

- 縄文+櫛波状文M11-20・・・・1
ヘラ描波状文M11-16、H50-3・・・2
- 2 頸部 縄文+ヘラ描櫛線文+ヘラ描波状文+縄文押圧沈線文M11-15・・・1
縄文+ヘラ描櫛線文M13-6、M14-9・17、II43-16・・・4
縄文+ヘラ描櫛線文+櫛波状文M11-20・・・1
ヘラ描櫛線文+ヘラ描波状文M11-16　・・・・・・1
縄文+ヘラ描波状文M11-21・36・・・・・・・2
- 表3類：単純な外反口縁　M11-29・30・31・32・33・36・37・40、H42-3、II52-2・3、・・・・・・11
- 1 a 口唇部 縄文M11-29・30・31・32・33・36・37・40、II42-3、H52-2・3、・・・・・・11
- 2 頸部 縄文　　+ヘラ描櫛線文M11-29・30・31・32、H42-3、II52-2・3、・・・・・・7
縄文　　+ヘラ描波状文M11-40　　・・・・・・1
サザラ刺突+ヘラ描櫛線文+ヘラ描波状文M11-33　　・・・・・・1
- 表4類：単純な口縁が直線的に外傾II44-2・・・・・・・1
- 変
- 表1類：受け口状口縁のもの。　M11-63・77、M14-28・・・・・・・3
- 1 a 口唇部 縄文M11-63・77、M14-28　　・・・・・・3
- 1 b 口縁帯 無文M11-77　　・・・・・・1
櫛波状文M14-28　　・・・・・・1
- 3 胴部 縄文+コ字重ね文M11-63、M14-28　　・・・・・・2
櫛波斜走文（縦羽状）M11-77　　・・・・・・1
- 表2類：明瞭な受け口ではなく、頸部から外反し内湾する口縁。最大径を口縁にもつものと、胴部にもつものとする。
M11-62（台付）・64（台付?）・73（台付）・74・75・76・78・79、M13-15・17・18、H20-7・8、
H25-21・22、H29-4・5、H41-12、H42-9、H52-5、・・・・・・20
- 1 a 口唇部 縄文M11-62（台付）・64（台付?）・73（台付）・75・76・78・79、M13-15・17・18、H20-7・8、
II25-21・22、II29-4・5、H41-12、H42-9、H52-5、・・・・・・19
- 1 b 口縁 縄文+ヘラ描山形文M11-76　　・・・・・・1
縄文+ヘラ描波状文M11-62（台付）・64（台付?）・79、II42-9、H52-5、H29-4、・・・・・・6
櫛波状文M11-74・75・78、M13-18　H25-21・22、H29-5、H41-12、・・・・・・8
縄文M13-17、H20-7　　・・・・・・2
無文M13-15・20、II20-8　　・・・・・・3
- 2 頸部 無文M11-76　　・・・・・・1
櫛波状文M11-73・78・79、M13-17・20、H25-21・22、H42-9、H29-4・5、H41-12　　・・・・・・11
- 3 胴部 無文M11-76　　・・・・・・1
櫛波状文M11-74・75、H20-7、H25-21、H42-9、II52-5、・・・・・・6
櫛波状文+櫛波垂下文M11-73　　・・・・・・1
斜走文（縦羽状）M11-78・79、M13-15・17・18・20、H25-22、II29-4・5、H41-12、・・・・・・10
コの字重ね文+貼付文M11-62・64　　・・・・・・2
- 表3類：短く直線で外傾する口縁。胴は肩部がやや張り底部に窄まる。　M11-96・97・98、H42-8、H52-6・・・・・・・5
- 1 a 口唇部 縄文M11-96・97・98、H42-8　　・・・・・・4
- 1 b 口縁 櫛波状文H52-6　　・・・・・・1
- 2 頸部 櫛波状文M11-98、II42-8　　・・・・・・2
櫛波状文H52-6　　・・・・・・1
- 3 胴部 櫛波斜走文（縦羽状）M11-98　　・・・・・・1
櫛波斜走文H52-6　　・・・・・・1

櫛描波状文H42 8・・・1

○裏4型：短く外反気味の口縁。胴部球形胴形に近く歪る。

M11-93・94・95、M14-29、H28-9、H42 5・7、H44 23、H43-23・29、H50 5・・・11

1 a 口唇部 櫛文M11-93・94・95、M14-29、H42-5・7、H43-23・29、H50 5・・・9

刻み口H28-9・・・1

2 頸部 櫛描波状文M11 93、H50 5、H44-23・・・3

櫛描縹状文M14 29、H28-9、H42 5、H43-29・・・4

3 胴部 櫛描波状文+ヘラ描波状垂下文H43-29・・・1

櫛描斜走文(縦羽状) M11-95、H28-9 H42-7、H50-5、H43-23、H44-23・・・6

コ字重文M14-29・・・1

2. 溝状遺構

3本の溝があり、M11はM14を切っている。土器の様相は、M14-3の口縁外面にヘラ描波状文を施す赤色塗彩の杯、7・8の壺の頸部から折れるように直線的に延びる口縁などはM11から出土していない。口縁～胴部中位下まで連続して施文されるものは破片のみで、頸部の文様のみ施文される。M11は弥生中期後半Ⅲ期に、M14はⅡ期に当たるであろう。M13はM11に近い時期とみられる。

第2節 弥生時代後期

1. 竪穴住居址

弥生後期の竪穴住居址は17棟、溝2本がある。箱清水式の土器を出土する竪穴住居址は西から続いて22グリットまでで一旦途切れる。約100m東に離れて、IKPⅢH18があり、48棟の弥生後期集落が検出された。

弥生後期の土器様相は、H14の6の壺は内湾する口縁外面に櫛描波状文が施され、頸部櫛描縹状文で、無彩色である。12の甕は胴上部に波状文が施文される。壺の胴下部は膨らみをもっている。炉が中央になく、M4に切られてないと推定されることから弥生後期初頭の古田式の土器である。

H30の3の甕は口縁が外反し、口縁から胴中位下まで櫛描波状文が施される。最大径は胴部にもつ。

H9の壺形土器は赤色塗彩され、頸部文様に櫛描T字文が施文される。壺胴部中位下の屈曲がない。22の甕は口縁外反するが、最大径は胴部にもつ。口縁・胴部櫛描波状文、頸部櫛描縹状文の典型的弥生後期後半箱清水式土器である。20の甕に口縁の伸長が見られ、胴部が球形に近いなど新しい様相もある。

土器分類

壺1類：受け口の壺で、口縁が外反傾し、上部で外反をもつて直立する。H9-13、H37-16、H39-12・13・14、H46-4・・・6

1b 口縁帯 無文 無彩色H9-13、H39-13・14・・・3

無文 赤色塗彩H39-12、H46 4・・・2

櫛描縹縦文 赤色塗彩H37-16・・・1

2 頸部 櫛描T字文H37-16、H46 4・・・2

櫛描縹縦文H39-12・・・1

壺2類：外反外傾する口縁の上部で内湾直立する。外縁はない。H2-7、H37-17・18、H39-11・・・4

1a 口唇部 ササウ杖刺突H39-11・・・1

1b 口縁帯 無文 赤色塗彩H2 7、H37-17・18、H39-11・・・4

2 頸部 櫛描T字文H2-7・・・1

櫛描縹状文+櫛描波状文H39-11・・・1

無文H37 18・・・1

壺3類：単純に外反する口縁 H1-13、H37-23、H46-3・・・3

1b 口縁 ミガキ赤色塗彩H1-13、H37-23・・・2

口縁内面 櫛描波状文H46・3

2 頸部 櫛描T字文H37-23

櫛描T字文+赤色帯+櫛描横線文 H1-13・・・1

Ⅱ1類a: 口縁が大きく外反して、最大径をもつ。胴部はナゲ胴である。

口縁・胴上部櫛描波状文、頸部櫛描波状文H1-28・33・41・42、H9-20、H40-13・14、H46-11・13・14・16・・・11

Ⅱ1類b: 口縁が大きく外反し最大径をもつ。頸部がくびれ、胴部が球形を呈す。

口縁～胴部櫛描波状文H2-12、H39-26、H40-14・・・3

Ⅱ2類: 口縁が胴部で直立し上部で外反する。胴部に最大径をもつ。H9-19、H30-3、H37-32、H39-24・・・4

口縁・胴部櫛描斜走文(横羽状)、頸部櫛描波状文(施文が整っている)H9-19、H39-24・・・2

口縁・胴部櫛描斜走文(横羽状)(口縁の斜走文がやや波状になる)、頸部櫛描波状文H37-32・・・1

口縁～胴中位下まで櫛描波状文H30-3・・・1

Ⅱ3類: 口縁が短く外反、胴部球形形状を呈す。H1-31、H2-11、H36-10、H37-28・31、H39-26、H40-16、H46-10・・・8

口縁・胴上部櫛描波状文、頸部櫛描波状文(波状文が整っている)H9-20、H36-10、H46-10・・・3

口縁部櫛描斜走文がみだれて櫛描横線文状を呈し、斜走文の施文ランダムH1-31・・・1

口縁櫛描斜走文、胴部櫛描波状文、頸部櫛描波状文H37-28、H39-26・・・2

口縁の櫛描波状文が斜走し、波形が乱れ、胴部波状文、頸部波状文H2-11・・・1

口縁～胴部櫛描波状文。H40-16・・・1

Ⅱ4類: 口縁と胴部最大径がほぼ等しい。H1-32、H9-22、H37-30、H38-2、H39-25、H46-12・・・6

口唇部 両取・櫛描波状文H37-30・・・1

櫛描刻みH46-12・・・1

口縁・胴部波状文、頸部櫛描波状文(波状文整う)H9-22、H37-30、H39-25・・・3

口縁・胴部波状文、頸部櫛描波状文(波状文が乱れる)H1-32、H46-12・・・2

口縁～胴部櫛描波状文H38-2・・・1

これらより、Ⅱ1類のa形態は箱河木式の中では後半に位置づけられるものである。

弥生後期土器分類は1999.1小山岳夫氏は弥生後期をⅤ期6段階に分類している。

Ⅰ期 空白

Ⅱ期 壺 所謂無花果形のスリムな胴部。文様は櫛+篋のT字文、綾杉文+帯曲文

甕 ㄎ状に外反・直立・受け口口縁の3種。文様櫛描波状文、綾杉文+簾状文

高杯 口縁に筒をもつ大型高杯

Ⅲ期古 査 胴下部に検出。胴部径広がる。文様は櫛+篋のT字文、綾杉文+帯曲文、矢羽根文

甕 Ⅱ期同様。文様櫛描波状文、綾杉文+簾状文(波と綾杉の組み合わせ消える。)

高杯 杯下に稜をもつ後期型高杯出現

Ⅲ期新 査 前代と変わらない。文様は櫛+篋だが櫛が多い。櫛だけのT字文。

甕 ㄎ状の外反に統一。文様は櫛描波状文+綾杉文。

Ⅳ期 壺 球形化始まる。文様は櫛描波状文と直線文の組み合わせ。

甕 球形化始まる。文様は櫛描波状文・綾杉文+簾状文。

Ⅴ期 壺 球形化進む。文様は櫛描波状文と直線文の組み合わせ。ヘラ描矢羽根文残る。

甕 球形化進む。文様は櫛描波状文・綾杉文+簾状文。

このⅠ・Ⅱ期に当たる資料がH114である。

Ⅰ期・Ⅱ期 H114

壺 口縁内湾の壺2型。文様は口縁外面櫛描波状文 頸部櫛描波状文。無彩色。

甕 口縁部不明。胴肩部に1～2条の櫛描波状文。

鉢 口径が大きく、口縁端部が外力に折れる。内面上部のみ赤色塗彩。

Ⅳ期 H9・H39・H30・H55

壺 口縁外反が鋭く高さをもつ。赤色塗彩されるが無彩色のものもある。

頸部文様に横溝字文、櫛指縷状文の組み合わせ。

Ⅱ 弥生中期にある口縁受け口、内湾するものはない。Ⅱ1類aの口縁が最大径をもつ甕で頸部がくびれず、胴部がナデ肩で張らない器形。

V期 H1・H2・H36・H37・H38・H40・H46

Ⅲ 3類の単純口縁で強く外反し、赤色塗彩される。頸部に文様をもたず赤色塗彩される大型品がある。

頸部文様は櫛指横線文間に赤色塗彩帯をはさむものがある。単純口縁の外反が強まり、口縁内面に櫛指波状文を施す。

Ⅳ1類は口の頸部がくびれ、胴部が球胴形を呈す甕になる。

Ⅳ3類はさらに胴部が張り、Ⅳ4類は球胴化して胴部に最大径をもつ。

これらより弥生後期は前葉の吉田式土器を伴う住居が1棟、他は弥生後期後葉の箱清水式土器のⅣ・Ⅴ段階の集落であろう。

2. 溝址

グリット23～29にかけてM12の幅1m70cm前後の溝が弧状にあり、住居址は南西にある弥生後期後葉の集落を囲んでいる。溝から出土する土器は弥生後期Ⅴ段階の土器であり、竪穴住居と時期が一致している。

第3節 古墳時代

1. 竪穴住居址

(1) 古墳中期

49～69グリットに3棟の住居がある。H3・H4は方形で炉が北壁に寄ってはいるが、カマドではない。遺物は口縁内斜線文の丸底の深い杯、高杯は暗文を施し、脚は筒状と三角錐状を呈するもので、5C前半の土器であろう。H16はカマドの袖状に礫が残っており、カマドが構築されているようである。土器は5C後半に位置づけられよう。

(2) 古墳後期

7棟の住居址がある。33グリットから西に竪穴住居址が点在し、土器様相からは2時期がある。

6C後半 H11・H32・H33

6C末～7C代 H15・H34

2. 溝址

東には古墳中期から後期の遺物を含む溝がある。溝東端はIKPⅢの98グリットからINPXⅣの14グリットまで延び、道路址とみられる。溝の両側に竪穴住居址はなく集落は途切れている。

第4節 奈良時代

1. 竪穴住居址

11棟調査され、いずれも規模が小さい。規模全体が分かる資料が少ないので、東西方向で見ると、H8が最も大きく494cm、H10が460cm、H13が295cm、H23が286cm、H26が390cm、H31が426cm、H47が364cmである。最小は3m未満、中間が4m前後、大きくて5mという規模である。H35は火処の確認できない竪穴であるが、東西長が184cmで約1間幅と極小である。他はカマドを北にもち、H5・H8・H10・H31・H47・H56に主柱穴がある。

土器は奈良時代H8-1の甕は口縁部形態「く」字形態での武蔵甕で、口縁部が長い。H8-2の土師器杯の底部に丸味が残り、14の須恵器杯はヘラ切り底である。これらは8C前葉の資料であろう。H8・H10・H13・H26・H31・H35・H47・H56

H45-8の土師器甕は口縁部形態「く」字形態であるが口縁が短くなる。H45-1の須恵器杯は底部回転糸切りで、平底である。8C後半に位置付けられる。H23・H45

8世紀はじめの集落が確認される。M4は中世の溝ではあるが、奈良時代の住居もM4に切られているか近い所にある。東西方向集落が展開している。8世紀の住居は36グリットから西にある。

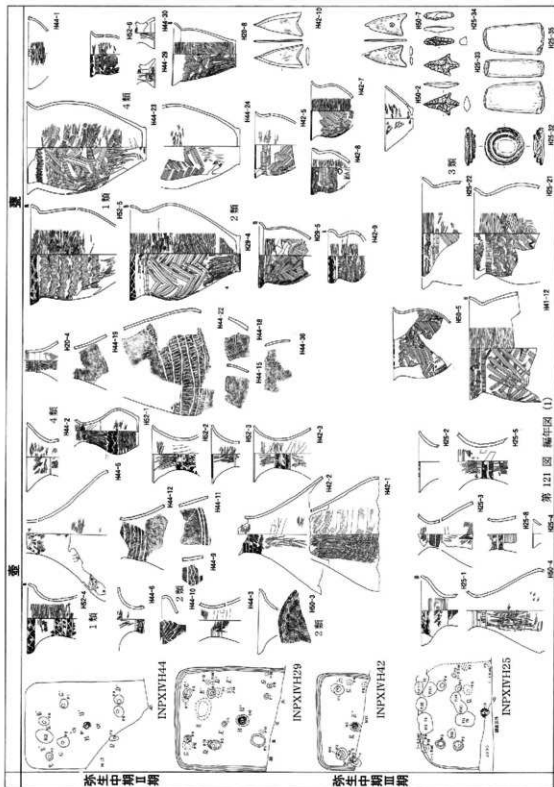
2. 掘立柱建物

F4は鉄滓を含むD8を囲む掘立柱建物であり、作業場であつたろうか。F5・F6もF4と同じ位置にあり、同様の性格であろう。D8は底に堅く焼き締まった層が見られ、その上面に焼土・炭化物粒子・鉄滓が乗っていることから精錬の炉であろうと推測される。(2002.佐々木稔)奈良・平安時代であるが、平安時代の竪穴住居が見られないことから帰属する時期は奈良時代となろうか。本遺跡の竪穴住居址には鉄製品が見られないが、今回報告する第3分冊の東大門先遺跡ⅡのH9号住居址では鉄斧・紡錘車・刀子といった鉄製品が出土している。

本遺跡は弥生中期後半の栗林式土器の時代、弥生後期前葉吉田式土器の時代、弥生後期後葉の箱清水式土器の時代、古墳時代中期・後期、奈良時代の住居址が検出される。掘立柱建物と土坑からは鉄を精錬した炉を検出する。22～69グリットにある竪穴住居址は、22グリット付近で途切れ、東側は溝がある。弥生時代中期後半、弥生時代後期後葉、古墳時代中期～後期と各期の溝が集落を囲むようである。M11-47の壺より炭化米が出土し、放射性炭素年代測定では、補正年代 $2,091 \pm 25$ としている。弥生時代中期後半Ⅲ期の年代が $2 \delta \text{ cal BC181} - \text{cal BC45}$ という数値を得ている。

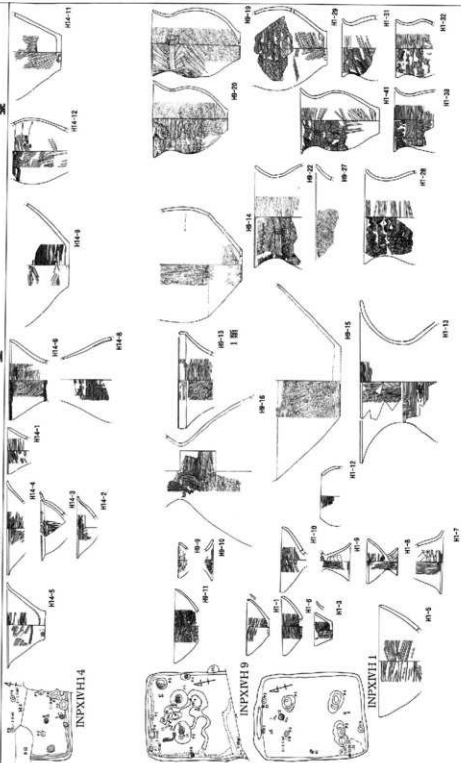
引用参考文献

- 1986. 白倉盛男 『大井城跡』佐久市教育委員会
- 1999. 長野県考古学会弥生部会編 『長野県の弥生土器の編年』
- 1999. 三石宗一 『鳴沢遺跡群 五里田遺跡』佐久市教育委員会
- 2002. 佐々木稔 『鉄と鋼の生産の歴史』雄山閣
- 2002. 石川日出志 『長野県考古学会誌99・100号』「栗林式土器の形成過程」
- 2005～2008. 長野県埋蔵文化財センター 『長野県埋蔵文化財センター年報22～25』



杯・高杯

蓋



新 生 後 期 一・二 期

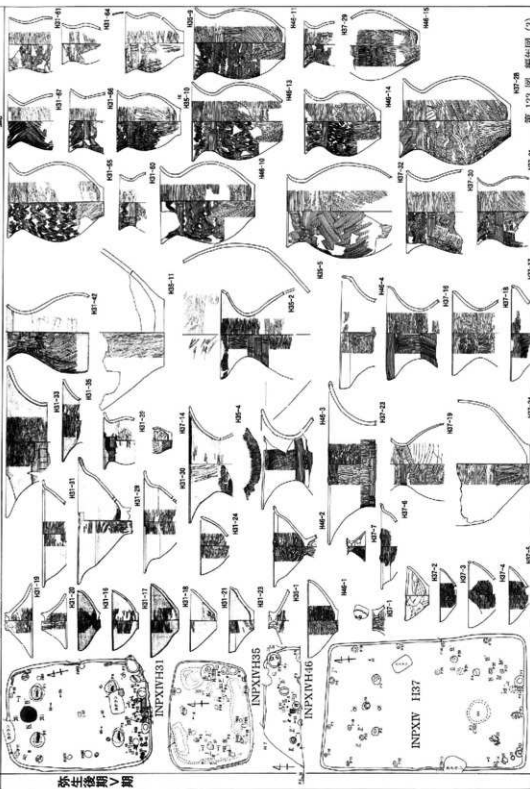
IV 期

第 122 图 编年图 (2)

壺

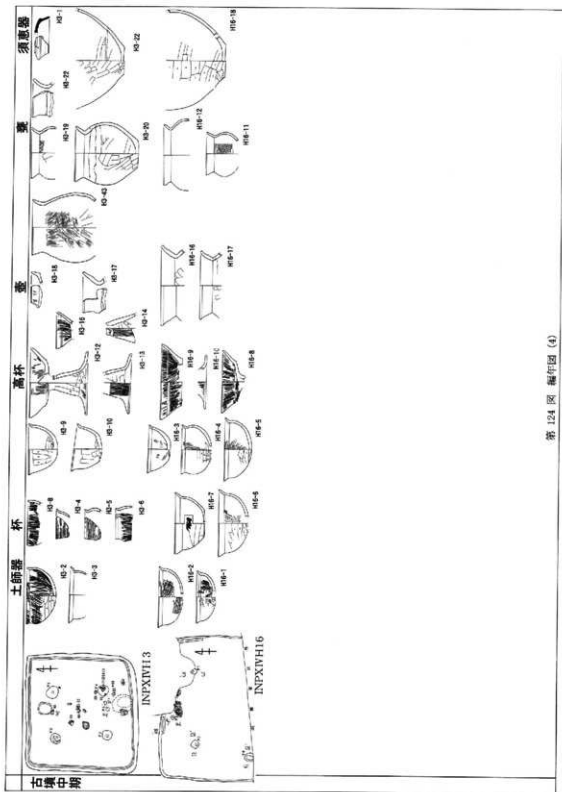
壺

杯・高杯



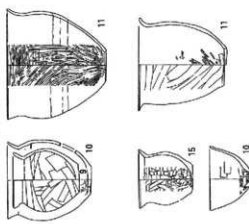
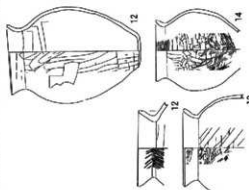
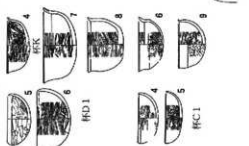
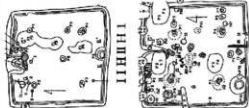
弥生後期Ⅰ期

第 123 図 藤井園 (3)

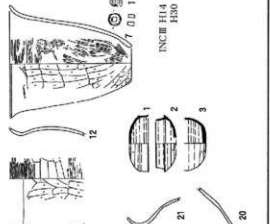
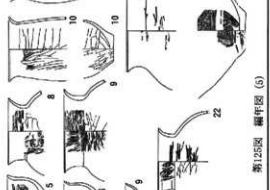
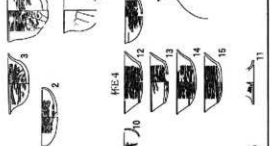
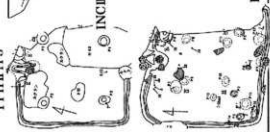


第 124 图 编年图 (4)

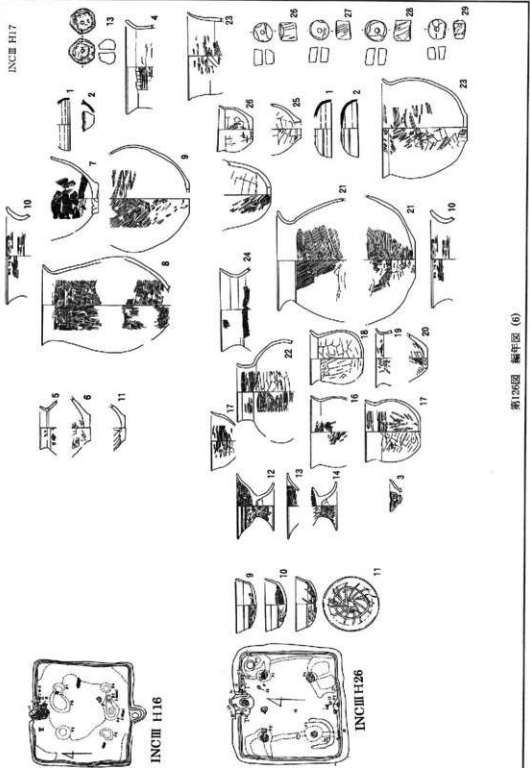
古墳時代後期 1 期



古墳時代後期 2 期

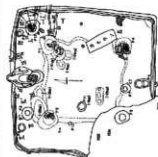


第125図 編年図 (5)



古墳時代後期3期

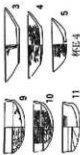
第126図 瀬年区 (6)



INC III H 21



INC III H 46



杯 K 4



15

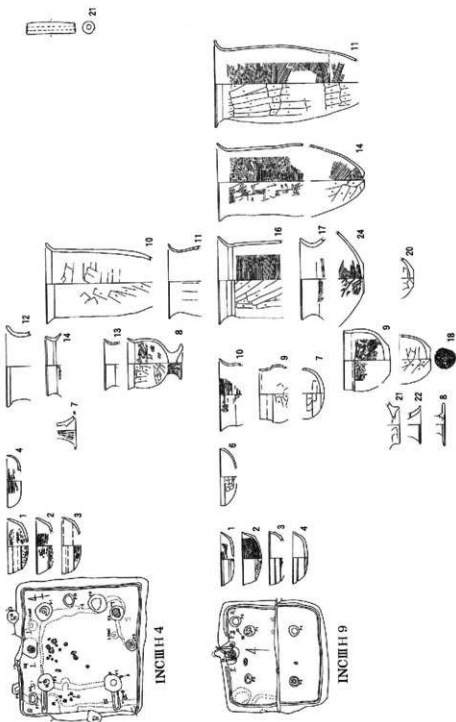


6



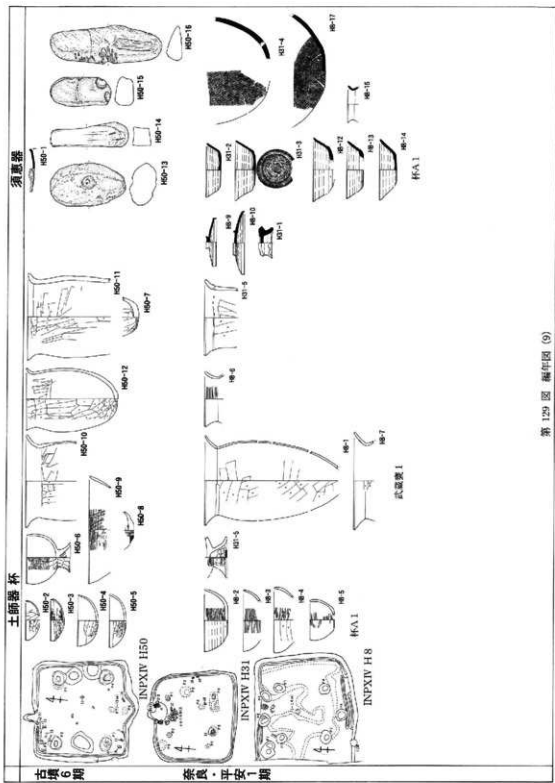
石 墳 時 代 後 期 4 期

INC III H 43
H 45



古墳時代後期 5 期

第128図 編年圖 (8)



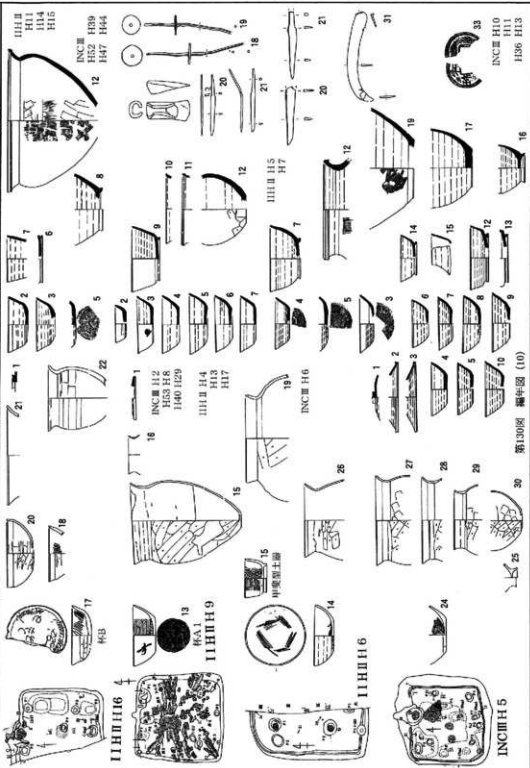
土師器

須妻杯・高台付杯

須妻

器杯

他



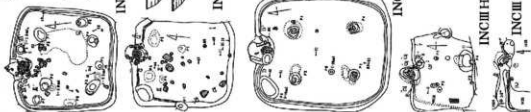
奈良・平安2期

奈良・平安3・4期

奈良・平安5(古)期

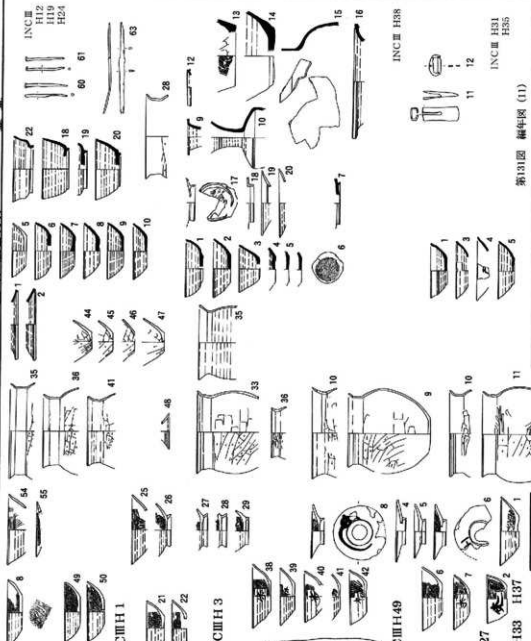
第130図 編年圖 (10)

土師 器 杯 壺 須 臺 杯 高 台 付 杯 壺 臺 器 他



奈良・平安時代5期

奈良・平安時代6期



第131図 編年図 (11)

土師器 香・臺 須臾・杯・高台付杯 他



INCIII H20



INCIII H23



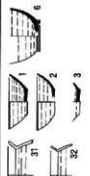
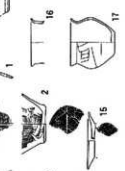
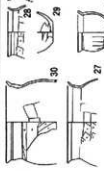
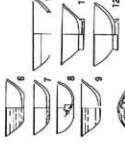
IHHH 2



IHHH 18



IHHH 6



INCIII
H18
1134



奈良・平安時代中期

第132図 編年図 (12)

第3表 西一本物遺跡XIV 竪穴住居址一覽表(1) (例) (補定)

遺構名	出土位置	時代	形態	現 場	面積 (cm・m)	主軸方位	カマド形	柱 穴	備 考
H1	<43 竪穴住居		長方形	南北長 51.2 東西長 38.0	19~43 380	N・11°E	伊	主柱4 他3 主柱4 側柱1 他3 出入口2 床下3	H45を切る。 北側溝を除外
H2	<46 竪穴住居		長方形	502	29~44	N・1°W	伊	主柱4 床下1 床下土階1?	南側カクラン(下水道) F2, P4に切られる。
H3	H54 竪穴住居		長方形	502	10~38	N・1°W	伊	主柱4 他1 床下2	南側カクラン・備は遺跡遺構。
H4	H55 竪穴住居		長方形	(1608)	3~6	N・2°E	伊	他1 床下1	北側溝を除外 D15, M7に切られる。 H7を切る。
H5	H54 竪穴住居		長方形	(1608)	3~6	N・2°E	伊	他3 床下4	北側溝を除外 西側カクラン H16に切られる。
H6	<52 竪穴住居		長方形	(310)	(418)	0~10	N・72°E	北	北側溝を除外 P138に切られる。
H7	<53 竪穴住居		長方形	(185)	(157)	0~3	N・72°E	北	西側カクラン P99~71を切られ、P108切る。
H8	L68 竪穴住居		長方形	456	(694)	9~50	N・1°W	主柱1 他1 床下1	南側溝を除外 P47に切られる。
H9	L68 竪穴住居		長方形	420	407	17~25	N・10°E	主柱2 側柱2 他5 床下1	M4に切られ、H19を切る。
H10	<57 竪穴住居		長方形	(278)	400	14~28	N・3°W	主柱2 他2	北側溝を除外、カクランに切られ、H14を切る。
H11	L66 竪穴住居		長方形	368	390	9~66	N・17°E	他4	北側溝を除外、カクランに切られ、H14を切る。
H12	L66 竪穴住居		長方形	(282)	(386)	5~46	N・3°W	主柱2 他3 床下2	H12・13, M4に切られる。
H13	L62 竪穴住居		長方形	(294)	(296)	18~37	N・5°W	主柱1 出入口1 床下1	M4・カクランに切られ、H16・17・21を切る。(出入口あり)
H14	L63 竪穴住居		長方形	(230)	(326)	7~32	N・15°W	主柱1 出入口1 他2	南側溝を除外 H13に切られる。
H15	L60 竪穴住居		長方形	364	356	29~65	N・3°E	主柱1 出入口1 他2	H15・21, M4に切られる。
H16	L60 竪穴住居		長方形	(430)	(698)	9~24	N・1°E	他4	H8, M4に切られる。
H17	L60 竪穴住居		長方形	(290)	(470)	8~15	N・1°E	主柱4	H11・50, M4に切られる。
H18	L69 竪穴住居		長方形	(66) ♀	1~6	N・21°W	北	主柱3 側柱2 出入口2 他4	H15, M4に切られ、H17を切る。
H19	L66 竪穴住居		長方形	352	474	3~33	N・3°W	主柱3 他2 床下4	H23, F8, M4に切られ、H24・30, D13を切る。
H20	L66 竪穴住居		長方形	(504)	504	1~24	N・3°W	他3 床下土階1	H22, P152を切る。
H21	L60 竪穴住居		不明	(284)	1~10	N・2°W	北	主柱2 他2 床下6	床上に赤土中間の住居あり、南側溝を除外 H22, D14に切られる。
H22	<42 竪穴住居		長方形	(650)	768	2~21	N・6°W	主柱2 他2 床下6	北側溝を除外 P11, P141~145, カクランに切られる。
H23	<42 竪穴住居		長方形	(282)	286	4~26	N・1°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4に切られる。
H24	L41 竪穴住居		長方形	(72)	376	4~9	N・1°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H25	L43 竪穴住居		長方形	(542)	(308)	3~7	N・1°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H26	L744 竪穴住居		長方形	(74)	390	3~19	N・2°E	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H27	L746 竪穴住居		長方形	502	(410)	6~18	N・2°E	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H28	L747 竪穴住居		長方形	(276)	490	2~12	N・3°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H29	L747 竪穴住居		長方形	(482)	496	0~3	N・8°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H30	L539 竪穴住居		長方形	(130)	492	8~20	N・2°W	主柱2 他6 出入口2 床下6	M4, カクランに切られる。
H31	<36 竪穴住居		長方形	394	426	12~24	N・7°W	主柱4 床下4	H22, F8, M4, P156, カクランに切られる。
H32	<35 竪穴住居		長方形	(212)	482	11~23	N・7°W	主柱2 出入口1 他1 床下1	P152に切られ、H33を切る。
H33	<31 竪穴住居		長方形	504	516	3~21	N・15°E	主柱4 出入口1 他1 床下1	北側溝を除外(出入口あり)
H34	<34 竪穴住居		長方形	(378)	586	8~29	N・0°E	主柱4 床下2 (側柱? 5)	H41, カクランに切られ、H38を切る。
H35	<36 竪穴住居		長方形	(44)	184	13~21	N・11°E	主柱2 (側柱? 5) 他3	南側溝 M4に切られ、H35, D6を切る。
H36	<38 竪穴住居		長方形	(260)	(594)	10~39	N・7°E	主柱1 他6 床下2 出入口2	南側溝 H36, M11を切る。
H37	<31 竪穴住居		長方形	960	614	21~41	N・0°E	主柱1 他6 床下2 出入口2	南側溝 H37・35に切られ、M11を切る。
H38	<34 竪穴住居		長方形	418	284	11~37	N・6°E	側柱H11 1块1	カクランに切られ、H41を切る。
H39	<28 竪穴住居		長方形	760	580	4~30	N・0°E	主柱4 側柱7 出入口2 他2 床下6	H33に切られる。 M14を切る。

第4表 西一本柳遺跡XIV 竈穴住居址一覽表(2)

遺構名・位置	時代	形態	面積 (m ²)	築 高	築 長	築 幅	築 内長	築 内幅	築 向	築 方位	方 材	柱 穴	備 考
H40 ③20	弥生前期	長方形	604	464	5~28	-	N-34°W	-	竈	北	柱4	1個柱7 出入口2 他1	南出溝遺跡外 H37、F10に切られる。
H41 ③30	弥生中期	竈石方形	632	406	1~15	25.66	N-5°E	-	竈	北	柱4 出入口2 床下2	M12に切られる。	
H42 ③26	弥生中期	方形	216	466	1~6	-	N-62°W	-	竈	北	柱2 他1 床下2	M14、P168に切られる。	
H43 <23	弥生中期	竈石方形	498	350	2~15	17.43	N-7°E	-	竈	北	柱4 他3	D12、M12に切られる。	
H44 <22	弥生中期	竈石方形	628	452	0	0	-	-	竈	北	柱4 他3	南出溝遺跡外 方ケランに切られ、H46を切る。	
H45 L53	奈良	-	(192)	(322)	4~7	-	N-8°W	-	北	北	柱2 他1 床下1	南出溝遺跡外 方ケランに切られ、H45、M7、P112、方ケランに切られる。	
H46 L53	弥生後期	-	(163)	(556)	0~11	-	N-1°W	-	北	北	柱2 他1 床下1	南出溝遺跡外 F9に切られ、P127を切る。	
H47 L35	奈良	-	(146)	364	4~13	-	N-4°W	-	北	北	柱2 他1	南出溝遺跡外 F9に切られ、P127を切る。	
H48 S38	弥生	-	-	-	-	-	N-16°W	-	-	-	柱3 他1	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H49 S64	弥生後期	-	(100)	410	50~60	-	N-95°W	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H50 S64	弥生中期	竈石方形	310	(498)	14~30	-	N-10°W	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H51 S77	弥生前期	-	(30)	(416)	30~46	-	N-15°W	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H52 S76	弥生中期	-	(60)	(354)	7~10	-	-	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H53 S66	弥生中期	-	-	-	0	-	-	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H54 S76	弥生中期	-	(12)	(100)	7~13	-	-	-	-	-	柱1 他3 床下4	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H55 <43	弥生後期	方形	404	392	11~18	16.24	N-12°E	-	石	北	柱4 他2	南出溝遺跡外 H20を切る。	
H56 ④41	奈良	-	(132)	(366)	24~37	-	-	-	-	-	柱4 他2	南出溝遺跡外 H20を切る。	

第5表 西一本柳遺跡XIV 竈穴住居址一覽表

遺構名・位置	構造	柱行×梁間 (間)	柱行×要間 (間)	新行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	柱穴位置		備 考
						長短方位	短径	
F 1 ④55	竈	3×	4.8×-	1.60	-	N-76°E	31~36	南出溝遺跡外調査。 P2・3に切られ、H4を切る。
F 2 ④60	竈	2×2	4.64×4.50	2.32	2.24	N-87°E	30~63	M4に切られる。
F 3 L58	竈	2×(1)	4.16×(2.30)	4.16	2.30	N-78°E	45~74	M4に切られる。
F 4 ③51	竈	2×2	4.20×3.84×3.41	2.08・1.92	1.72	N-82°E	31~49	P13、方ケランに切られ、F8を切る。
F 5 ③51	竈	2×(1)	3.6×(1.48)	1.80	1.48	N-81°E	15~19	方ケランに切られ、P8、P92を切る。
F 6 ③51	竈	2×2	4.32×3.12	2.16	1.56	N-80°E	26~38	F4、P98、方ケランに切られる。
F 7 ③30	竈	2×2	3.92×3.84	1.96	1.92	N-84°E	44~59	方ケランに切られ、H22・30を切る。
F 9 ③30	竈	3×(1)	6.20×-	2.14	-	N-66°W	42~54	H47を切る。方ケランに切られる。北は遺跡。
F10 ③30	竈	1×1	2.28×2.29	2.28	2.20	N-90°W	20~40	H41を切る。
F11 L42	竈	2×2	5.40×(4.0)	1.80	2.20	N-80°E	57~74	南出溝遺跡外、P143・145・149に切られ、H25を切る。

第6表 西一本柳遺跡XIV 土坑一覽表

(現) (推定)

遺構名	検出位置	平面形	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	長軸方位	備 考
D1	欠						P165に変更
D2	欠						M3に変更
D3	欠						P165に変更
D4	<51	楕円形	134	(78)	40	N-37°-E	M2、P41に切られる。
D5	こ37	円形	156	150	43	N-84°-W	M11を切る。
D6	け35	円形	184	170	40	N-87°-W	H34に切られる。
D7	し56	楕円形	158	98	31	N-6°-W	カクランに切られる。
D8	し51	不整形	(96)	88	35	N-12°-E	F5に切られる。鉄滓土はF4関連。
D9	し53	楕円形	362	123	48	N-50°-W	H45、P105、カクランに切られる。
D10	き54	—	(336)	376	29	N-32°-E	北側道路 M4に切られ、M2・7を切る。
D11	し36	楕円形	192	106	18	N-67°-W	南側調査区外 カクランに切られ、M11を切る。
D12	こ23	楕円形	84	66	71	N-35°-E	H44を切る。
D13	し40	—	100	(64)	8	N-90°-W	H22に切られ、H24を切る。
D14	け53	方形	250	(210)	88	N-89°-E	M2、カクランに切られる。 井戸
D15	<52	楕円形	274	(230)	134	N-71°-E	M2に切られ、I16を切る。
D16	し45	楕円形	252	210	(156)	N-20°-W	D17・18を切る。 井戸3
D17	し46	楕円形 (下は方形)	200	(172)	110	N-3°-E	D16に切られる。 井戸4
D18	し46	楕円形 (深い所) 不整形 (深い所まで)	154	118	109	N-50°-W	D16・17に切られる。 井戸5
D19	け27	楕円形	228	204	(74)	N-43°-W	M14を切る。 井戸6

第7表 西一本柳遺跡XIV 溝址一覽表

(現) (推定)

遺構名	検出位置	全長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	備 考
M1	き40~け43	(12.65)	300	69~103	P153~161、カクランに切られる。M4と連結か
M2	き51~け52	(5.0)	120	40	北側・南側調査区外 一部道路により未調査。
M3	け51~け52	(6.10)	50~60	28~50	南側道路
M4	し27~し69	(169.3)	220	30~66	一部道路 下水道 H11~15-17~22-26~28-30-34-40、F3・8、M6・8・11-14、P110-111・124・139・140-152を切る。M1と連結か
M5	欠				
M6	け49~け50	(2.06)	50~60	43~55	西側道路 M4に切られる。
M7	き53~す56	(4.8)	220	30	北側・南側調査区外 一部道路により未調査。 D10に切られ、H46、P109を切る。
M8	し32~し33	(2.04)	28~30	6~11	南側調査区外 北側道路 M4に切られる。
M9	IKPⅢお98~こ10	(65.7)	130~242	43~99	南・北側調査区外 西側道路 M10・13を切る。
M10	き2~こ6	(22.72)	156~204	57~75	南側調査区外 M9に切られる。
M11	し36~き37	(21.4)	100~172	56~74	南側・北側調査区外 一部道路 H35、F9、D5・11、P128・129に切られ、M14を切る。
M12	き23~き29	(28.4)	288~368	119~125	南側・北側調査区外 H42・44、M14を切る。
M13	こ12~か22	(45.65)	65~121	40~74	北側調査区外 一部道路 M9に切られる。
M14	<21~し38	(68.67)	43~174	39~71	南側調査区外 一部道路 H43を切り、H39、D19、M4・11・12、P128・137、カクランに切られる。

第8表 西一本柳遺跡XIV 単独ピット一覧表(1)

(残) (推定)

遺構名	出土位置	規模(cm) [長さ][幅][高さ]	平面形	覆土	備考	遺構名	出土位置	規模(cm) [長さ][幅][高さ]	平面形	覆土	備考
P 1	756	83 70 29	不整形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.灰色土層(10YR4/0)		P 44	754 (55) (55)	40	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.灰色土層(10YR4/0) 3.褐色土層(10YR3/3)	P38に切られる。P46を切る。
P 2	761	76 59 39	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	F2を切る。	P 45	754 (48) (48)	60	-	正褐色土層(10YR2/2)	P38に切られる。
P 3	760	53 50 33	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	F2を切る。	P 46	< 51 (50) (45)	13	-	-	北側溝区外 P41に切られる。
P 4	760	45 35 25	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 47	758 56 38 56	楕円形	-	-	II10を切る。
P 5	760	35 35 35	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 48	758 40 35 47	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		
P 6	759	50 40 34	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 49	759 42 38 50	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		
P 7	< 58	46 44 38	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 50	759 65 50 33	楕円形	-	-	
P 8	< 58	50 (15) 30	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	北側溝区外	P 51	758 39 34 21	円形	褐色土層(10YR3/3)		
P 9	759	24 20 11	円形	黒色土層(10YR4/0)		P 52	759 37 37 37	円形	黒褐色土層(10YR3/3)		
P 10	759	31 23 44	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P23を切る。	P 53	759 43 38 35	円形	褐色土層(10YR3/3)		
P 11	< 58	47 40 36	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 54	759 38 30 27	楕円形	褐色土層(10YR3/3)		
P 12	757	50 31 36	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 55	欠				
P 13	757	37 32 13	円形	灰色土層(10YR2/1)		P 56	757 47 47 46	円形	1.黒褐色土層(10YR3/3) 2.褐色土層(10YR4/0)		
P 14	< 57	58 41 23	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	土器あり	P 57	757 75 73 58	方形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		
P 15	757	54 43 41	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P33-34を切る。	P 58	757 66 53 41	長方形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3) 3.褐色土層(10YR4/0) 4.褐色土層(10YR3/3)		
P 16	757	61 54 43	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 59	757 46 44 32	方形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3) 3.褐色土層(10YR4/0)		
P 17	< 58	40 33 26	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 60	757 49 47 26	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		
P 18	< 57	42 30 14	楕円形	黒色土層(10YR2/1)		P 61	757 100 62 41	不整形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		
P 19	757	78 68 44	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P34を切る。	P 62	757 30 29 14	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 20	757	82 72 40	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 63	747 33 30 24	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 21	757	60 56 14	円形	褐色土層(10YR2/1)		P 64	747 26 23 20	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 22	757	33 30 14	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 65	746 30 30 22	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 23	759	60 52 67	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P10-25に切られる。	P 66	747 38 33 18	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 24	759	52 41 40	楕円形	褐色土層(10YR4/0)		P 67	747 35 33 21	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 25	759	20 20 22	円形	灰色土層(10YR2/1)		P 68	757 30 29 19	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 26	757	64 58 57	円形	黒色土層(10YR2/1)		P 69	757 27 24 26	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		H9を切る。
P 27	757	48 30 61	-	1.褐色土層(10YR2/1) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 70	757 30 28 16	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		H9を切る。
P 28	757	27 25 18	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 71	756 60 46 19	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		II9を切る。
P 29	759	60 47 26	楕円形	-	P23を切る。	P 72	756 114 40 24	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 30	757	22 18 20	円形	灰色土層(10YR2/1)		P 73	756 43 40 14	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P74を切る。
P 31	< 57	30 23 11	楕円形	灰色土層(10YR2/1)		P 74	756 28 (27) 23	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P73に切られる。
P 32	< 57	20 16 20	円形	褐色土層(10YR2/1)		P 75	756 41 37 13	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 33	757	54 30 33	-	1.褐色土層(10YR2/1) 2.褐色土層(10YR3/3)	P15に切られる。	P 76	756 11 16 9	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P77を切る。
P 34	757	45 28 47	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P15-18に切られる。	P 77	756 65 28 14	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P78に切られる。
P 35	< 60	46 40 32	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	カタクタンに切られる。	P 78	756 26 23 27	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 36	759	40 25 69	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	F24に切られる。	P 79	756 32 31 9	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 37	欠					P 80	756 46 40 13	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 38	< 55	100 71 46	楕円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	P44-45を切る。	P 81	756 38 36 10	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 39	754	65 60 32	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)		P 82	756 48 30 17	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 40	758	52 42 18	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	カタクタンに切られる。	P 83	754 78 45 31	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P83-94を切る。
P 41	< 51	73 72 60	円形	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	D4を切る。	P 84	754 22 21 20	円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
P 42	752	76 (70) 32	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	M2に切られる。	P 85	753 87 45 21	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P118に切られる。
P 43	< 52 (64) (62)	57	-	1.黒色土層(10YR2/2) 2.褐色土層(10YR3/3)	M2に切られる。	P 86	753 34 24 13	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		P121を切る。
						P 87	753 28 25 10	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		
						P 88	753 26 20 9	楕円形	黒褐色土層(10YR2/2)		

第9表 西一本柳遺跡XIV 単独ピット一覧表(2)

(残) (推定)

遺構名 坑名	長さ	幅	深さ	平面形状	層土	備考	遺構名 坑名	長さ	幅	深さ	平面形状	層土	備考		
P 89	1.53	30	22	21	楕円形 1.黒色土層(10YR2/1) 2.赤褐色土層(10YR3/3)		P133	3.38	300	28	33	楕円形 黒褐色土層(10YR3/2)	P132に切られる。		
P 90	1.53	25	21	13	楕円形 黒色土層(10YR2/1)		P134	3.39	29	23	17	楕円形 赤褐色土層(10YR3/2)			
P 91	1.32	22	21	37	円形 黒色土層(10YR2/1)		P135	1.38	47	40	23	楕円形			
P 92	1.52	36	27	25	楕円形 黒色土層(10YR2/1)	F 5に切られる。	P136	3.39	25	22	11	楕円形	H30を切る。		
P 93	1.34	25	16	12	楕円形 1.黒褐色土層(10YR3/3) 2.黒褐色土層(10YR2/2)	P83に切られる。	P137	1.36	24	23	21	円形	M14を切る。		
P 94	1.54	24	20	20	楕円形 1.黒褐色土層(10YR3/2)	P83に切られる。	P138	3.69	34	30	50	円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR2/2) 3.黒褐色土層(10YR3/2)	H8を切る。 M4に切られる。	
P 95	1.62	57	47	37	楕円形 黒色土層(10YR2/1)		P139	3.59	47	25	30	楕円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR2/2)	M4に切られる。	
P 96	1.32	28	22	24	楕円形 黒色土層(10YR2/1)		P140	3.58	36	30	13	円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR2/2)	M4に切られる。	
P 97	1.52	35	33	32	円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.黒褐色土層(10YR3/3)		P141	1.43	50	36	24	楕円形	黒褐色土層(10YR3/2)	I25を切る。	
P 98	1.51	48	37	27	不整形 黒色土層(10YR2/1)	P 6を切る。	P142	1.43	67	52	34	楕円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR3/2)	H25を切る。	
P 99	1.50	86	40	25	楕円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.黒褐色土層(10YR3/3)		P143	1.43	75	55	47	楕円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR3/2)	H25を切る。	
P100	1.51	33	33	19	円形 黒褐色土層(10YR2/2)		P144	1.43	57	50	20	不整形	-	H25を切る。	
P101	1.51	32	29	12	円形 黒色土層(10YR2/1)		P145	1.43	103	60	26	不整形	-	H25を切る。	
P102	1.51	28	24	9	楕円形 黒褐色土層(10YR2/2)		P146	1.42	87	69	23	楕円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR3/2)		
P103	1.52	68	33	30	-	カクランに切られる。	P147	1.42	50	46	36	円形	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR3/2)		
P104	1.52	60	52	35	楕円形 黒色土層(10YR2/1)		P148	1.42	39	27	61	円形	-		
P105	1.53	70	50	25	楕円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR2/2)	カクランに切られる。	P149	1.42	88	55	58	楕円形	黒褐色土層(10YR3/2)	F11を切る。	
P106	1.52	23	24	28	円形		P150	3.42	65	57	59	楕円形	黒褐色土層(10YR3/2)		
P107	1.62	27	24	16	楕円形		P151	1.42	25	30	20	-	-		
P108	1.56	92	47	18	-	H9に切られる。 M 7に切られる。	P152	3.42	32	24	24	楕円形	-	H28に切られる。	
P109	3.33	28	24	17	楕円形		P153	3.41	51	40	20	-	-	M1に切られる。	
P110	3.55	64	46	23	楕円形 黒褐色土層(10YR2/1)	M 4に切られる。	P154	3.41	48	38	26	楕円形	-	M1を切る。	
P111	3.55	28	26	20	円形 黒褐色土層(10YR3/2)	M 4に切られる。	P155	3.41	38	31	7	楕円形	-	M1を切る。	
P112	3.54	36	15	21	-	南側調査区外 H36を切る。	P156	4.2	23	16	10	-	-	P157に切られる。	
P113	1.52	24	24	12	円形 黒褐色土層(10YR2/2)	F 4を切る。	P157	4.2	65	58	-	円形	-	P156を切る。	
P114	3.53	39	34	28	楕円形 黒褐色土層(10YR2/2)		P158	4.2	50	45	-	円形	-	M1を切る。	
P115	1.63	53	51	19	円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.10YR2/2-10YR3/6褐色 3.黒褐色土層(10YR3/3)		P159	4.2	46	43	17	-	-	M1に切られる。	
P116	1.53	42	42	17	円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.10YR2/2-10YR3/6褐色 3.黒褐色土層(10YR3/3)		P160	4.2	44	38	22	楕円形	-		
P117	1.53	45	39	44	楕円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.10YR2/2-10YR3/6褐色		P161	4.2	28	27	12	円形	-	(H56のピット)	
P118	1.53	29	29	20	円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.10YR2/2-10YR3/6褐色	P 85を切る。	P162	4.36	43	43	51	円形	-	H31を切る。	
P119	3.52	33	31	39	円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR2/2)		P163	4.23	42	38	49	円形	-	I143を切る。	
P120	3.53	44	31	37	楕円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR2/2)		P164	4.2	74	64	64	-	-	1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.黒褐色土層(10YR4/4) 3.黒褐色土層(10YR3/2)	南側道路
P121	1.53	30	27	45	円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR2/2)	P 86に切られる。	P165	4.51	113	93	70	-	-	南側道路	
P122	1.53	27	28	30	円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR2/2)		P166	1.33	56	46	22	楕円形	1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR3/2)		
P123	1.52	30	26	45	楕円形 1.黒褐色土層(10YR2/1) 2.黒褐色土層(10YR3/3)		P167	1.34	70	123	45	-	-	南側調査区外	
P124	3.35	34	30	24	楕円形 赤褐色土層(10YR3/2)	M14を切る。									
P125	1.34	27	24	23	楕円形 赤褐色土層(10YR3/2)										
P126	1.34	47	40	15	楕円形 黒褐色土層(10YR3/2)										
P127	1.35	34	32	16	-	H47に切られる。									
P128	1.36	62	54	27	-	カクランに切られ M11-14を切る。									
P129	1.36	51	47	17	円形 1.黒褐色土層(10YR2/2) 2.黒褐色土層(10YR2/2)										
P130	1.38	41	34	23	楕円形 1.黒褐色土層(10YR3/2) 2.1.黒褐色土層(10YR3/2)	カクランに切られる。									
P131	3.38	44	39	45	-	カクランに切られる。									
P132	3.38	39	30	36	楕円形										

遺物番号	期	種	遊	法	量	寸	調	文	様	備	考	川上位置
H1				口径(長)(底径)(幅)	厚(重)	(g)						
1	弥生	片口杯	片口杯	(13.2)	(4.0)	3.5	3.5	3.5	3.5	白磁(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
2	弥生	杯外杯	杯外杯	(7.9)	(3.7)	4.3	4.3	4.3	4.3	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区2層
3	弥生	片口杯	片口杯	(7.9)	(4.2)	4.3	4.3	4.3	4.3	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
4	弥生	鉢	鉢	(27.0)	(10.0)	5.4	5.4	5.4	5.4	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
5	弥生	鉢	鉢	(13.9)	(5.0)	5.4	5.4	5.4	5.4	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
6	弥生	杯	杯	(10.4)	(5.7)	7.7	7.7	7.7	7.7	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
7	弥生	高杯	高杯	(10.4)	(6.6)	7.7	7.7	7.7	7.7	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
8	弥生	高杯	高杯	(10.4)	(6.6)	7.7	7.7	7.7	7.7	赤色(赤)	完全美湖	Ⅱ区3層
9	弥生	高杯	高杯	(16.0)	(9.2)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
10	弥生	高杯	高杯	(10.8)	(4.6)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
11	弥生	無形器	無形器	(10.8)	(4.6)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
12	弥生	無形器	無形器	(40.0)	(18.7)	(18.7)	(18.7)	(18.7)	(18.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
13	弥生	尊	尊	(40.0)	(10.2)	(10.2)	(10.2)	(10.2)	(10.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
14	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
15	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
16	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
17	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
18	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
19	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
20	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
21	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
22	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
23	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
24	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
25	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
26	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
27	弥生	高足	高足	(15.4)	(8.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	(9.4)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
28	弥生	高足	高足	(22.8)	(12.2)	(12.2)	(12.2)	(12.2)	(12.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
29	弥生	高足	高足	(17.9)	(8.4)	(17.9)	(17.9)	(17.9)	(17.9)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
30	弥生	高足	高足	(10.0)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	(6.1)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
31	弥生	高足	高足	(4.0)	(0.8)	(0.8)	(0.8)	(0.8)	(0.8)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
32	弥生	高足	高足	(4.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
33	弥生	高足	高足	(3.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
34	弥生	高足	高足	(3.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
35	弥生	高足	高足	(3.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
36	弥生	高足	高足	(3.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
37	弥生	高足	高足	(3.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
38	弥生	高足	高足	(7.0)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
39	弥生	高足	高足	(9.8)	(4.6)	(4.6)	(4.6)	(4.6)	(4.6)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
40	弥生	高足	高足	(9.8)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	(4.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
41	弥生	高足	高足	(16.0)	(6.0)	(6.0)	(6.0)	(6.0)	(6.0)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
42	弥生	高足	高足	(11.4)	(6.7)	(6.7)	(6.7)	(6.7)	(6.7)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
43	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
44	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
45	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
46	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
47	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
48	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
49	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層
50	弥生	高足	高足	(5.4)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	(7.2)	赤色(赤)	同能美湖	Ⅱ区3層

第10表 H1 (I) 遺物一覽表

(現) (特定)

遺物番号	種類	器種	法	量	寸法	面	文	外	面	方	出土位置
			口径(底径) 高さ(厚)	(g)							
H1	51	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	52	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	53	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	54	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	55	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	56	赤土	裏			ミガキ	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	57	石	十板	3.2	0.6	ミガキ	赤色塗彩			漆器土	Ⅱ区3層
	58	石	取石	1.29	5.7	ミガキ	赤色塗彩			漆器土	Ⅱ区3層
	59	石	磨石	1.07	5.2	ミガキ	赤色塗彩			漆器土	Ⅱ区3層
	60	石	磨石	1.04	5.1	ミガキ	赤色塗彩			漆器土	Ⅱ区3層
	61	赤土	背			ハツ目	へうたの字跡止文			粘土	Ⅱ区3層
	1	赤土	背	0.66	5.0	ミガキ	赤色塗彩			粘土	Ⅱ区3層
	2	赤土	背	0.78	6.1	ミガキ	赤色塗彩			粘土	Ⅱ区3層
	3	赤土	背	1.04	6.9	赤色塗彩(厚)	ミガキ	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	4	赤土	背	1.58	9.9	赤色塗彩	ミガキ	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	5	赤土	背			赤色塗彩	ミガキ	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	6	赤土	背	6.7	19.5	赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	7	赤土	背	21.2	62.2	赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	8	赤土	背			赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	9	赤土	背			赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	10	赤土	背	18.0	51.3	赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	11	赤土	背	13.6	37.3	赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
	12	赤土	背	13.6	37.3	赤色塗彩	ハツ目	赤色塗彩		粘土	Ⅱ区3層
H3	1	須臾器	鉢			ロクロ子	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	2	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	3	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	4	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	5	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	6	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	7	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	8	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	9	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	10	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	11	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	12	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	13	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	14	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	15	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	16	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	17	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	18	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	19	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	20	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	21	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	22	須臾器	鉢			ヘラコケシ	ヘラコケシ			磁器	Ⅱ区3層
	23	赤土	背			ミガキ	赤色塗彩			粘土	Ⅱ区3層
	24	赤土	背			ミガキ	赤色塗彩			粘土	Ⅱ区3層
	25	赤土	背			ハツ目	赤色塗彩			粘土	Ⅱ区3層
	26	赤土	背			赤色塗彩	ヘラコケシ			粘土	Ⅱ区3層

第11表 H1(2)~H3(1)遺物一覧表

遺物番号	横 種	器 種	土器(%)	底層(%)	層高(%)	量 (g)	内 面	外 面	備 考	方 向	出土位置
H3 27	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		1区 IV区2層
28	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
29	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
30	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
31	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
32	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
33	弥生	弥生	3.8		(2.1)		小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
34	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
35	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
36	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
37	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
38	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
39	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
40	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
41	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
42	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
43	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
H4 1	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
2	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
3	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
4	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
5	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
6	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
7	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
8	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
9	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
10	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
11	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
12	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
13	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
14	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
15	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
16	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
17	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
18	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
19	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
20	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
21	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
22	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
23	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
24	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
25	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
26	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
27	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
28	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
29	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
30	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
31	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
32	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層
33	弥生	弥生					小片	ヘラノコシ線文	柄杓		IV区2層

第12表 H3(2)・H4(1)遺物一覧表

簿籍番号	種別	器種	法	算	(g)	測	面	文	外	面	考	州土位置
114	34	學生	口隆(石)	底(漆)	底(漆)	(g)						
35	學生	甕	37升									田区1番
36	學生	甕	37升									田区1番
37	學生	甕	37升									田区2番
38	石器	磨石	9.7	6.8	4.5	462.23						田区2番
115	1	初級器	高台付外	11.6	8.0	3.8						田区1番
H6	1	學生	高杯									田区1番
3	學生	高杯										田区1番
4	學生	甕				(3.4)						田区1番
5	學生	甕										田区1番
6	學生	甕										田区1番
7	學生	甕										田区1番
8	學生	甕										田区1番
9	學生	甕				11.2	(2.2)					田区1番
10	學生	甕										田区1番
11	學生	甕										田区1番
12	學生	甕										田区1番
13	學生	甕				(10.6)	(4.3)					田区1番
14	學生	甕				(8.8)	(3.6)					田区1番
15	學生	甕				(8.6)	(2.7)					田区1番
16	學生	甕										田区1番
17	學生	甕										田区1番
H7	1	茶器	牙			(3.28)						田区1番
H8	1	茶器	牙			(22.0)						田区1番
2	茶器	牙				15.2	7.0	5.75				田区1番
3	茶器	牙				(15.0)		(4.1)				田区1番
4	茶器	牙				(15.8)		(4.7)				田区1番
5	茶器	牙				(9.0)		(3.2)				田区1番
6	茶器	牙				(13.2)		(2.5)				田区1番
7	茶器	牙				(24.0)		(3.0)				田区1番
8	茶器	牙				3.9	2.4	0.8				田区1番
9	茶器	牙				11.8		2.3				田区1番
10	茶器	牙				(15.0)		2.8				田区1番
11	茶器	牙				(15.3)		(4.1)				田区1番
12	茶器	牙				(16.0)		(3.2)				田区1番
13	茶器	牙				(16.0)		8.2				田区1番
14	茶器	牙				(15.0)		6.8				田区1番
15	茶器	牙				(8.8)		(2.7)				田区1番
16	茶器	牙										田区1番
17	茶器	牙										田区1番
H9	1	學生	土製陶器	4.3	2.9	0.9	(7.8)					田区1番
2	學生	土製陶器	5.7	5.3	0.9							田区1番
3	學生	土製陶器	5.6	5.2	0.9							田区1番
4	學生	土製陶器	4.8	4.3	0.9							田区1番
5	學生	土製陶器	3.8	(2.7)	0.6							田区1番
6	學生	土製陶器	3.8	(3.0)	0.8							田区1番
7	學生	土製陶器	6.4	5.6	1.1							田区1番
8	學生	土製陶器	3.8	3.4	0.7							田区1番
9	學生	土製陶器	8.6		(2.3)							田区1番

第13表 H4(2)~H9(1)遺物一覽表

遺物番号	種類	原産地	止	重量 (g)	(g)	内	河	墓	文	外	面	遺	ろ	出土地
H10	10	銅	18.1	(10.0)	2.0	銅土師ヘナチ子 黒色塗彩	銅土師ヘナチ子 黒色塗彩	ミナチ	ミナチ	黒色塗彩	黒色塗彩	黒色塗彩	黒色塗彩	黒色塗彩
	11	銅	—	—	(5.0)	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ	ミナチ	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	黒色塗彩
	12	銅	—	—	(8.5)	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ	ミナチ	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	黒色塗彩
	13	銅	—	—	(8.5)	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ 赤色塗彩	ミナチ	ミナチ	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	赤色塗彩	黒色塗彩
	14	銅	—	—	(6.0)	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	ヘナチ子	黒色塗彩
	15	銅	—	—	17.3	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	16	銅	—	—	(21.9)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	17	銅	—	—	(23.7)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	18	銅	—	—	—	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	19	銅	—	—	6.4	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	20	銅	—	—	18.8	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	21	銅	—	—	(10.3)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	22	銅	—	—	24.8	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	23	銅	—	—	(23.4)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	24	銅	—	—	6.1	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	25	銅	—	—	29.2	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	26	銅	—	—	(11.4)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	27	銅	—	—	(31.6)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	28	銅	—	—	25.7	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	H11	1	銅	—	14.8	17.2	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅
2		銅	—	(16.0)	8.4	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
3		銅	—	(11.4)	0.7	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
4		銅	—	(8.4)	(3.4)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
5		銅	—	(6.6)	(1.1)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
6		銅	—	(10.6)	(3.2)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
7		銅	—	(4.0)	(3.7)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
8		銅	—	3.2	14.9	6.1	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
9		銅	—	(12.2)	(10.0)	4.4	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
10		銅	—	13.6	12.6	4.1	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
11		銅	—	12.2	11.3	4.7	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
12		銅	—	(6.8)	(8.8)	—	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
13		銅	—	(7.2)	(2.3)	—	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
14	銅	—	(15.0)	—	(17.8)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
15	銅	—	—	(6.6)	(1.3)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
16	銅	—	—	4.0	(1.8)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
17	銅	—	—	—	—	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
18	銅	—	3.8	2.0	38.0	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
19	銅	—	2.5	1.5	0.2	1.27	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
20	銅	—	9.3	7.5	3.4	70.5	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩	
H12	1	銅	—	(2.0)	—	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	2	銅	—	(3.4)	(6.1)	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩
	3	銅	—	(3.4)	7.6	4.6	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	黒色塗彩

第14表 H19 (2) ~ H13 (1) 遺物一覧表

遺構番号	種類	器類	法	面積 (㎡)	面積 (㎡)	文	外	面	備	考
H13			口徑 (cm) 底径 (cm) 高さ (cm)	(㎡)						
H14	4	石丁	14.9	11.2	8.6	494.90				
	1	外生	—	—	—	—	ミガキ 赤色塗彩			新石
	2	外生	—	—	—	—	ミガキ 赤色塗彩			H1K2層
	3	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	4	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	5	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	6	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	7	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	8	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	9	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	10	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	11	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	12	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	13	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	14	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	15	外生	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
H15	1	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	2	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	3	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	4	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	5	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	6	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	7	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	8	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	9	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	10	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	11	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	12	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	13	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	14	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	15	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	16	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	17	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	18	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	19	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	20	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	21	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
H16	1	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	2	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	3	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	4	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	5	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	6	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	7	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	8	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	9	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層
	10	土師器	—	—	—	—	口縁部のみ 赤色塗彩			H1K2層

第15表 H13(2)~H16(1)遺物一覽表

INDEX IV

() 内 () 指定

遺構番号	種類	法	高さ (m)	位置	遺文	基	面	備考	出土位置
H16	11 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	(7.8)	1口内径ナナ子	ヘラナナ子→1口内径ナナ子	ヘラナナ子→1口内径ナナ子	ヘラナナ子→1口内径ナナ子	陶器	皿区
	12 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	(6.1)	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	陶器	皿区
	13 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	14 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	15 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	16 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	17 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	(5.9)	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	陶器	皿区
	18 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	(14.5)	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	陶器	皿区
	19 土器類	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
H17	1 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(22.1)	3口内径ナナ子	3口内径ナナ子	3口内径ナナ子	3口内径ナナ子	陶器	皿区
	2 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(6.9)	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	陶器	皿区
	3 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(2.7)	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	陶器	皿区
	4 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	9.7	5口内径ナナ子	5口内径ナナ子	5口内径ナナ子	5口内径ナナ子	陶器	皿区
	5 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	6 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	7 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(14.5)	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	1口内径ナナ子	陶器	皿区
H19	1 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区
	2 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	532.80	ミナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	陶器	皿区
	3 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	394.41	—	—	—	—	陶器	皿区
	4 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	501.40	—	—	—	—	陶器	皿区
	5 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	528.74	—	—	—	—	陶器	皿区
	6 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	505.54	—	—	—	—	陶器	皿区
	7 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	497.15	—	—	—	—	陶器	皿区
	8 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	550.08	—	—	—	—	陶器	皿区
	9 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	509.97	—	—	—	—	陶器	皿区
	10 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	466.40	—	—	—	—	陶器	皿区
	11 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	506.69	—	—	—	—	陶器	皿区
	12 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	531.06	—	—	—	—	陶器	皿区
	13 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	836.44	—	—	—	—	陶器	皿区
	14 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	580.90	—	—	—	—	陶器	皿区
	15 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	566.43	—	—	—	—	陶器	皿区
	16 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	420.00	—	—	—	—	陶器	皿区
	17 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	730.71	—	—	—	—	陶器	皿区
	18 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	387.27	—	—	—	—	陶器	皿区
	19 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	6.9	—	—	—	—	陶器	皿区
	20 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	3.2	—	—	—	—	陶器	皿区
	21 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	4.6	—	—	—	—	陶器	皿区
	22 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	6.8	—	—	—	—	陶器	皿区
	23 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	5.4	—	—	—	—	陶器	皿区
	24 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	3.2	—	—	—	—	陶器	皿区
	25 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	3.2	—	—	—	—	陶器	皿区
	26 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	4.4	—	—	—	—	陶器	皿区
	27 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	7.5	—	—	—	—	陶器	皿区
	28 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	4.3	—	—	—	—	陶器	皿区
	29 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	8.8	—	—	—	—	陶器	皿区
	30 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	4.3	—	—	—	—	陶器	皿区
	31 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	7.1	—	—	—	—	陶器	皿区
	32 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	3.9	—	—	—	—	陶器	皿区
H20	1 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(10.6)	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	陶器	皿区
	2 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	(3.3)	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	ヘラナナ子	陶器	皿区
	3 多土器	口内径(底径) 高さ(底径)	—	—	—	—	—	陶器	皿区

第16表 H16(2)・H17・H19・H20(1)遺物一覧表

記号番号	種類	部類	規格	口径(径)	底径(幅)	長さ(高)	質量(g)	内径	蓋	蓋・文・外・内	面	備考	山付位置
H20	4	弾生	普通	—	—	—	—	ナチ→ハチノ子	1口ニミガ子→赤色空銃形	機銃用文	ニガ子→赤色空銃形	同銃用文	11区
	5	弾生	普通	—	—	(8.3)	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	6	弾生	普通	—	—	(3.1)	—	ニガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	7	弾生	普通	(13.4)	(4.2)	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	8	弾生	普通	15.6	6.5	15.6	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	9	弾生	普通	—	—	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	10	弾生	普通	—	—	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	11	弾生	普通	—	—	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	12	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	13	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	14	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	15	弾生	普通	8.6	4.5	2.1	97.73	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	16	弾生	普通	—	—	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	17	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	18	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	19	弾生	普通	(15.4)	(11.2)	6.3	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	20	弾生	普通	(11.8)	(3.2)	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	21	弾生	普通	—	—	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	22	弾生	普通	13.2	8.3	—	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	23	弾生	普通	(13.6)	—	(4.1)	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	24	弾生	普通	15.6	7.4	15.9	—	ミガ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	25	弾生	普通	—	—	2.2	(7.0)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	26	弾生	普通	—	—	(5.0)	(4.0)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	27	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	28	弾生	普通	(19.6)	—	(14.8)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	29	弾生	普通	—	—	6.0	(23.3)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	30	弾生	普通	23.6	7.7	4.3	1415.886	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	31	弾生	普通	2.0	1.5	0.35	0.85	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	32	弾生	普通	2.2	1.5	0.6	1.13	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	33	弾生	普通	3.4	1.8	7.41	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	34	弾生	普通	5.6	3.8	2.2	61.73	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	35	弾生	普通	(13.8)	(6.4)	3.8	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	36	弾生	普通	(13.0)	(9.2)	4.5	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	37	弾生	普通	(27.6)	—	(1.7)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	38	弾生	普通	(14.6)	—	(4.2)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	39	弾生	普通	(9.7)	—	(6.5)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	40	弾生	普通	—	—	—	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	41	弾生	普通	—	—	0.8	0.6	1.0	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	11区
	42	弾生	普通	2.7	—	0.2	0.83	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	43	弾生	普通	—	—	15.2	(11.2)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	44	弾生	普通	—	—	11.0	(13.7)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	45	弾生	普通	—	—	9.3	(11.3)	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	46	弾生	普通	(21.6)	—	(3.2)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	47	弾生	普通	(8.1)	—	(4.4)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	48	弾生	普通	—	—	(3.6)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	49	弾生	普通	—	—	(6.9)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	50	弾生	普通	(16.0)	—	(9.4)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区
	51	弾生	普通	(21.6)	(10.3)	(34.0)	—	ハチノ子	機銃用文	機銃用文	機銃用文	同銃用文	11区

第17表 H20(2)・H21～H24(1)遺物一覽表

遺跡番号	器類	器種	法	長 (cm)	内 面	外 面	備 考	出土位置	
H24	12 赤土	壺	口縁(16.7)	6.8	14.0	ミガキ	穴文文様	H24西區東方	
	13 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	穴文文様	H24西區東方	
	14 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	穴文文様	H24西區東方	
	1125	1 赤土	壺	口縁(17.0)	—	9.0	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		2 赤土	壺	口縁(14.6)	—	(5.1)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		3 赤土	壺	—	—	(13.7)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		4 赤土	壺	口縁(6.8)	—	(2.2)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		5 赤土	壺	—	—	(12.5)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		6 赤土	壺	—	—	9.8	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		7 赤土	壺	—	—	8.6	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
		8 赤土	壺	—	—	(7.0)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子
	9 赤土	壺	—	—	(6.6)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子	
10 赤土	壺	—	—	(8.3)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
11 赤土	壺	—	—	(7.0)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
12 赤土	壺	—	—	(12.0)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
13 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
14 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
15 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
16 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
17 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
18 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
19 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
20 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
21 赤土	壺	—	—	—	ミガキ	横線文	横子		
22 赤土	壺	口縁(22.2)	—	(15.1)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
23 赤土	壺	口縁(27.0)	—	(9.8)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
24 赤土	壺	—	—	(8.4)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
25 赤土	壺	—	—	(6.6)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
26 赤土	壺	—	—	9.2	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
27 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
28 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
29 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
30 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
31 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
32 赤土	壺	—	—	—	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
33 赤土	壺	口縁(8.6)	—	2.4	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
34 赤土	壺	口縁(2.2)	—	1.35	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
35 赤土	壺	口縁(1.85)	—	0.46	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
36 赤土	壺	口縁(1.85)	—	0.39	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
37 赤土	壺	口縁(7.8)	—	4.5	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
38 赤土	壺	口縁(14.0)	—	7.4	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
39 赤土	壺	口縁(10.2)	—	(10.8)	HV日 横子子・ミガキ	横線文	横子		
H26	1 赤土	壺	口縁(14.0)	7.4	4.5	ロクロ子	横線文	西區東方	
	2 赤土	壺	口縁(10.2)	—	3.8	ロクロ子	横線文	西區東方	
	3 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
	4 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
	5 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
	6 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
	7 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
	8 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區東方	
1127	1 赤土	壺	口縁(18.8)	—	(2.8)	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	2 赤土	壺	口縁(23.1)	—	(4.5)	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	3 赤土	壺	口縁(18.2)	—	(4.9)	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	4 赤土	壺	—	—	(6.8)	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	5 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	6 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	7 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區 IV区	
	8 赤土	壺	—	—	—	ロクロ子	横線文	西區 IV区	

第18表 H24(2)~H27(1)遺物一覧表

遺構番号	種類	時期	築	法	高さ (m)	面積 (m ²)	内	面	方	面	遺	考	州
				口壁(築)	底壁(築)	築高(厚)							
1127	1 竪石	弥生	築	(5.0)	(2.6)		三ツ子→赤色塗彩	三ツ子→赤色塗彩	底壁三ツ子	底壁三ツ子	三ツ子	三ツ子	山口県
	2 竪石	弥生	築	(7.0)	(7.0)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	3 竪石	弥生	築	(6.2)	(4.5)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	4 竪石	弥生	築	(10.0)	(9.8)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	5 竪石	弥生	築	(12.9)	(3.5)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	6 竪石	弥生	築	(10.7)	(24.6)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	7 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	8 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	9 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	10 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	11 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	12 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	13 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	14 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	15 竪石	弥生	築	5.6	3.7	0.3	ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
1129	1 竪石	弥生	築	(8.0)	(2.8)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	2 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	3 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	4 竪石	弥生	築	2.3	(8.8)	27.0	ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	5 竪石	弥生	築	16.2	(12.9)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	6 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	7 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	8 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
H30	1 竪石	弥生	築	7.4	(4.9)		ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	2 竪石	弥生	築				ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県
	3 竪石	弥生	築	(19.8)	7.0	30.1	ハツ日	ハツ日	竪文	ハツ日	ハツ日	ハツ日	山口県

第19表 H27(2)~H30(1)遺物一覽表

() 残 () 指定

遺構番号	遺構種類	部 位	法 量 (cm)	内 面	外 面	考 慮	出土位置
			山階(底) 底径(頂径) 深さ(厚)				
H34	3	土師器 杯	(15.2)	9.0	4.5	3分牛	穴倉裏側
	4	土師器 杯	14.7	9.6	4.6	3分牛	1区Ⅰ層 カマド
	5	土師器 杯	(17.2)	(8.6)	3.6	3分牛	1区Ⅰ層
	6	土師器 杯	(15.5)	(12.0)	3.5	3分牛	1区Ⅰ層 高坪跡
	7	土師器 鉢	(5.0)	(5.0)	(5.0)	1/4分牛	1区Ⅰ層 高坪跡
	8	土師器 鉢	(18.0)	(11.9)	(11.9)	1/4分牛	1区Ⅰ層 高坪跡
	9	土師器 甕	(3.6)	(3.6)	(3.6)	1/4分牛	1区Ⅰ層 高坪跡
	10	土師器 甕	-	7.4	(16.0)	ナデ	穴倉裏側
	11	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	12	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	13	赤土生 甕	15.7	8.3	5.6	3分牛	穴倉裏側
	14	石製 甕	16.0	8.4	4.2	3分牛	穴倉裏側
	15	石製 甕	15.1	5.1	2.8	3分牛	穴倉裏側
	16	石製 甕	12.9	7.8	4.9	3分牛	穴倉裏側
	17	石製 甕	13.5	10.3	3.5	3分牛	穴倉裏側
	18	石製 甕	12.0	8.0	4.5	3分牛	穴倉裏側
	19	石製 甕	11.5	5.8	3.5	3分牛	穴倉裏側
20	石製 甕	10.7	5.8	3.2	3分牛	穴倉裏側	
21	石製 甕	12.3	6.3	3.4	3分牛	穴倉裏側	
22	石製 甕	12.4	6.3	3.9	3分牛	穴倉裏側	
23	石製 甕	12.1	6.3	3.9	3分牛	穴倉裏側	
24	石製 甕	12.1	7.7	4.3	3分牛	穴倉裏側	
25	石製 甕	12.2	7.7	4.3	3分牛	穴倉裏側	
H35	1	赤土生 甕	(17.4)	(8.4)	(8.2)	3分牛	穴倉裏側
	2	赤土生 甕	(12.0)	-	(6.2)	3分牛	穴倉裏側
	3	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	4	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	5	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
H36	1	赤土生 甕	(13.2)	(3.0)	-	3分牛	穴倉裏側
	2	赤土生 甕	(14.6)	4.2	6.4	3分牛	穴倉裏側
	3	赤土生 甕	(7.6)	(4.2)	4.7	3分牛	穴倉裏側
	4	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	5	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	6	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	7	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	8	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	9	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	10	赤土生 甕	(16.4)	-	(9.2)	3分牛	穴倉裏側
	11	赤土生 甕	(8.4)	6.0	(8.4)	3分牛	穴倉裏側
	12	赤土生 甕	(14.0)	(4.6)	-	3分牛	穴倉裏側
	13	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	14	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	15	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	16	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
	17	赤土生 甕	-	-	-	3分牛	穴倉裏側
H37	1	赤土生 甕	(5.0)	(3.2)	-	3分牛	穴倉裏側
	2	赤土生 甕	13.3	4.8	6.0	3分牛	穴倉裏側
	3	赤土生 甕	(13.0)	-	(4.0)	3分牛	穴倉裏側
	4	赤土生 甕	(16.2)	-	(6.8)	3分牛	穴倉裏側
	5	赤土生 甕	(14.2)	-	(5.1)	3分牛	穴倉裏側

第21表 H34(2)~H37(1)遺物一覧表

種別番号	種別	管理	法	量	(g)	内	外	面	考	州位置
H43	赤生	固	底(底)	積	(g)	内	外	面		
14	赤生	固	(11.8)	8.2	(2.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		1区1層
15	赤生	固	(18.0)	8.2	(30.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		2区1層
16	赤生	固	15.2	13.6	(18.0)	新橋へうす子	山崎橋文→山崎橋文	完全集積		3区1層
17	赤生	固	15.2	13.6	(18.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		3区1層
18	赤生	固	(10.2)	9.7	(17.7)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
19	赤生	固	(17.7)	9.7	(17.7)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
20	赤生	固	15.2	13.6	(18.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
21	赤生	固	15.2	13.6	(18.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
22	赤生	固	12.5	6.0	12.4	山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
23	赤生	固	12.5	6.0	12.4	山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
24	赤生	固	12.5	6.0	12.4	山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
25	赤生	固	12.5	6.0	12.4	山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
26	赤生	固	12.5	6.0	12.4	山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
27	赤生	固	(19.0)	(3.4)		山崎橋文	山崎橋文	完全集積		4区1層
28	赤生	固	11.2	7.7	13.1	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
29	赤生	固	11.2	7.7	13.1	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
30	赤生	固	11.2	7.7	13.1	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
31	赤生	固	11.2	7.7	13.1	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
32	赤生	固	11.2	7.7	13.1	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
33	赤生	固	17.8	8.0	(4.9)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
1	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
2	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
3	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
4	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
5	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
6	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
7	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
8	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
9	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
10	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
11	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
12	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
13	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
14	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
15	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
16	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
17	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
18	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
19	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
20	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
21	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
22	赤生	固	(16.8)	8.0	(8.0)	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
23	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
24	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
25	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
26	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
27	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
28	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層
29	赤生	固	(22.8)	(6.0)	29.3	へうす子	へうす子→新橋橋文	完全集積		4区1層

第25表 H43(2)・H44(1)遺物一覽表

遺物番号	種類	図様	法	重量 (g)	内	面	裏	文	外	出	所	備考
H44	30	穿孔	1径(長) 底径(短) 高さ(厚)	(0.26)				ミガキ				完全炭素
	31	穿孔		(12.7)	銅製ミガキ	銅製分字		八角	銅製杖文	銅製杖文		同(完全炭素)
	32	穿孔			ハツトミガキ			銅製杖文				花本
	33	穿孔			ハツトミガキ			銅製杖文				花本
	34	穿孔			ハツトミガキ			銅製杖文				花本
	35	穿孔			ハツトミガキ			銅製杖文				花本
	36	穿孔			ハツトミガキ			銅製杖文				花本
H45	37	穿孔	土厚(厚)	4.2				ミガキ				花本
	1	首飾類	環	(1.45)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	2	首飾類	環	(7.7)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	3	首飾類	環	(11.9)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	4	首飾類	環	(33.8)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	5	首飾類	環			OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)		花本
	6	首飾類	環			OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)		花本
	7	首飾類	環	(7.3)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	8	首飾類	環	(20.1)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	9	首飾類	環	(15.2)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	10	首飾類	環	(6.1)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	11	穿孔	高杯	(17.2)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	12	穿孔	高杯	(26.7)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
	13	穿孔	高杯	(14.2)	OPロナ子	込込草履印		OPロナ子	草履印(込込草履印)			花本
14	石器	凹石	8.8	9.0	5.6	218.52		OPロナ子	込込草履印		花本	
H46	1	穿孔	鉢	(18.9)	5.2	7.4		OPロナ子	込込草履印			花本
	2	穿孔	点鉢	(19.4)				OPロナ子	込込草履印			花本
	3	穿孔	点鉢	24.5				OPロナ子	込込草履印			花本
	4	穿孔	点鉢	(27.5)				OPロナ子	込込草履印			花本
	5	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	6	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	7	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	8	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	9	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	10	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	11	穿孔	点鉢	19.0	7.6	23.2		OPロナ子	込込草履印			花本
	12	穿孔	点鉢	24.7	7.3	22.4		OPロナ子	込込草履印			花本
	13	穿孔	点鉢	19.5		21.6		OPロナ子	込込草履印			花本
	14	穿孔	点鉢	13.8	6.9	18.7		OPロナ子	込込草履印			花本
	15	穿孔	点鉢	6.9	6.9	17.1		OPロナ子	込込草履印			花本
	16	穿孔	点鉢	37.7		(10.9)		OPロナ子	込込草履印			花本
	17	穿孔	点鉢		1.9	1.4	0.42		OPロナ子	込込草履印		花本
H47	1	穿孔	点鉢	(15.0)	(10.0)	(4.1)		OPロナ子	込込草履印			花本
	2	穿孔	点鉢		(8.5)	(3.7)		OPロナ子	込込草履印			花本
	3	穿孔	点鉢		(7.0)	(3.1)		OPロナ子	込込草履印			花本
	4	穿孔	点鉢	(25.2)		(7.6)		OPロナ子	込込草履印			花本
	5	穿孔	点鉢		(5.6)	(2.3)		OPロナ子	込込草履印			花本
H49	1	穿孔	点鉢	12.2				OPロナ子	込込草履印			花本
	2	穿孔	点鉢	(16.0)	(5.1)	(6.9)		OPロナ子	込込草履印			花本
H50	1	穿孔	点鉢	(16.0)	(4.7)			OPロナ子	込込草履印			花本
	2	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本
	3	穿孔	点鉢					OPロナ子	込込草履印			花本

第26表 H44(2)~H47・H49・H50(1) 遺物一覧表

遺構番号	種類	器種	材質	高さ(m)	内面	外面	備考	出土位置	
H50	4	養生	土	(18.9)			H50A区画		
	5	養生	土	(14.1)			H50B区画		
	6	石造	軟積層	—			H50C区画		
	7	石造	軟積層	3.9	2.1	1.87	H50D区画		
	H52	1	養生	土	6.9	(15.8)		H52-1区画	
		2	養生	土	14.2	(11.3)		H52-2区画	
		3	養生	土	(14.4)	—		H52-3区画	
4		養生	土	17.2	(11.9)		H52-4区画		
5		養生	土	24.5	(20.8)		H52-5区画		
H53	1	養生	土	11.3	(7.1)		H53-1区画		
	2	養生	土	(32.0)	—		H53-2区画		
H55	1	養生	高坪	47.4	(8.0)		H55-1区画		
	2	養生	高坪	47.4	(3.3)		H55-2区画		
H56	1	石造	土	(16.8)	(1.7)		H56-1区画		
	2	石造	土	(18.3)	(1.5)		H56-2区画		
	3	石造	土	(10.2)	(7.6)		H56-3区画		
	4	石造	土	(24.8)	(2.5)		H56-4区画		
	5	石造	土	(24.8)	(2.5)		H56-5区画		
P4	1	石造	土	(9.4)	(1.5)		P4-1区画		
	2	石造	土	10.8	(4.4)		P4-2区画		
	3	石造	土	11.1	(3.0)		P4-3区画		
P8	1	土	別1	6.2	0.8	34.0	P8-1区画		
	2	土	別2	4.2	0.2	16.0	P8-2区画		
	3	土	別3	11.7	0.2	16.0	P8-3区画		
	4	土	別4	1.8	0.4	4.5	P8-4区画		
	5	土	別5	6.7	0.9	11.1	P8-5区画		
	6	土	別6	2.4	0.1	27.2	P8-6区画		
P11	1	土	別1	(13.2)	—	—	P11-1区画		
	2	土	別2	(8.6)	6.6	3.9	P11-2区画		
	3	土	別3	—	—	—	P11-3区画		
	4	土	別4	(12.0)	(10.3)	(3.2)	P11-4区画		
	5	土	別5	—	—	—	P11-5区画		
	6	土	別6	—	—	—	P11-6区画		
P	1	土	別1	(10.4)	(13.9)	—	P-1区画		
	2	土	別2	(7.6)	(5.3)	—	P-2区画		
	3	土	別3	(1.5)	2.4	0.97	P-3区画		
	4	土	別4	(15.4)	(3.2)	7.1	P-4区画		
	5	土	別5	—	—	—	P-5区画		
	6	土	別6	(15.4)	(3.2)	7.1	P-6区画		
	7	土	別7	—	—	—	P-7区画		
	8	土	別8	—	—	—	P-8区画		
	9	土	別9	—	—	—	P-9区画		
D4	1	土	別1	(10.4)	(13.9)	—	D4-1区画		
	2	土	別2	(7.6)	(5.3)	—	D4-2区画		
	3	土	別3	(1.5)	2.4	0.97	D4-3区画		
	4	土	別4	(15.4)	(3.2)	7.1	D4-4区画		
	5	土	別5	—	—	—	D4-5区画		
	6	土	別6	(15.4)	(3.2)	7.1	D4-6区画		
	7	土	別7	—	—	—	D4-7区画		
D5	1	土	別1	(10.4)	(13.9)	—	D5-1区画		
	2	土	別2	(7.6)	(5.3)	—	D5-2区画		
	3	土	別3	(1.5)	2.4	0.97	D5-3区画		
	4	土	別4	(15.4)	(3.2)	7.1	D5-4区画		
	5	土	別5	—	—	—	D5-5区画		
D6	1	土	別1	(10.4)	(13.9)	—	D6-1区画		
	2	土	別2	(7.6)	(5.3)	—	D6-2区画		
	3	土	別3	(1.5)	2.4	0.97	D6-3区画		
	4	土	別4	(15.4)	(3.2)	7.1	D6-4区画		
	5	土	別5	—	—	—	D6-5区画		
	6	土	別6	(15.4)	(3.2)	7.1	D6-6区画		

第27表 H50(2)・H52・H53・H55・H56・F4・F8・F11、単銀ピット、D4・D5(1)遺物一覧表

遺構番号	遺構種類	総面積 (㎡)	面積(㎡) 延床(㎡)	社	遺構	社	墓 (㎡)	(R)	内	向	電	文	外	備	考
D11	1	祭生	遺	遺					ミガキ		ハヤシ	朝鮮刺繍文	向		和紙
	2	祭生	遺						ミガキ		朝鮮刺繍刺繍文	体面朝鮮刺繍文			和紙
	3	祭生	遺						ミガキ		朝鮮刺繍刺繍文	体面朝鮮刺繍文			和紙
	4	祭生	遺						ナベ	赤色染彩					和紙
	5	祭生	遺						ハヤシ	朝鮮刺繍文	ミガキ				和紙
	6	祭生	遺						ミガキ						和紙
	7	祭生	遺						ハヤシ	朝鮮刺繍文	ミガキ				和紙
	8	祭生	遺						ハヤシ	朝鮮刺繍文	ミガキ				和紙
	9	祭生	遺						ハヤシ	朝鮮刺繍文	ミガキ				和紙
	10	祭生	遺						ハヤシ	朝鮮刺繍文	ミガキ				和紙
D13	1	土階路	環						ミガキ		口織ミガキ				和紙
	2	土階路	環						ハヤシ	ミガキ					和紙
	3	土階路	環						ハヤシ	ミガキ					和紙
	4	土階路	環						口織ミガキ						和紙
	5	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	6	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	7	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	8	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	9	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	10	須石階	環						口織ミガキ						和紙
D14	1	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	2	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	3	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	4	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	5	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	6	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	7	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	8	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	9	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	10	須石階	環						口織ミガキ						和紙
D15	1	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	2	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	3	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	4	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	5	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	6	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	7	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	8	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	9	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	10	須石階	環						口織ミガキ						和紙
D16	1	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	2	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	3	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	4	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	5	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	6	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	7	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	8	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	9	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	10	須石階	環						口織ミガキ						和紙
D17	1	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	2	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	3	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	4	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	5	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	6	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	7	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	8	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	9	須石階	環						口織ミガキ						和紙
	10	須石階	環						口織ミガキ						和紙

遺構番号	種類	器種	口径(φ) 底径(φ)	高さ(φ) 底径(φ)	容積(ℓ)	内径	面積	位置	外	内	面	積	面	遺	考	出土地
D17	7	石器	12.3	10.2	7.7	248.46									磨石	
D18	1	石器	12.3	11.9	7.6	479.79									磨石	
D19	1	灰土	8.2		(5.8)										灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
	4	灰土	高坪												灰土	
M1	1	灰土	高坪												灰土	
M2	1	灰土	高坪												灰土	
M3	1	灰土	高坪												灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
	4	灰土	高坪												灰土	
	5	灰土	高坪												灰土	
M4	1	灰土	高坪												灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
	4	灰土	高坪												灰土	
	5	灰土	高坪												灰土	
M6	1	灰土	高坪												灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
M7	1	灰土	高坪												灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
	4	灰土	高坪												灰土	
	5	灰土	高坪												灰土	
	6	灰土	高坪												灰土	
	7	灰土	高坪												灰土	
	8	灰土	高坪												灰土	
	9	灰土	高坪												灰土	
M9	1	灰土	高坪												灰土	
	2	灰土	高坪												灰土	
	3	灰土	高坪												灰土	
	4	灰土	高坪												灰土	
	5	灰土	高坪												灰土	
	6	灰土	高坪												灰土	
	7	灰土	高坪												灰土	
	8	灰土	高坪												灰土	
	9	灰土	高坪												灰土	
	10	灰土	高坪												灰土	
	11	灰土	高坪												灰土	
	12	灰土	高坪												灰土	
	13	灰土	高坪												灰土	
	14	灰土	高坪												灰土	
	15	灰土	高坪												灰土	
	16	灰土	高坪												灰土	
	17	灰土	高坪												灰土	
	18	灰土	高坪												灰土	

第29表 D17(2)~D19, M1~M4・M6・M7・M9(1)遺物一覽表

遺物番号	種別	器種	口径(径)	容量(ml)	注記	内面	底	文	外	備考	
M9	19	土師器 小甕	11.5(9)	(4.7)		口縁ハツ子 胴部ハツ子	口縁ハツ子 胴部ハツ子			同坑未測	
	20	土師器 小甕	11.4	(5.2)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	21	土師器 甕	(17.8)	(9.9)		ハツ子	ハツ子			同坑未測	
	22	赤土器 甕	(24.2)	(26.1)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	23	赤土器 甕	(22.4)	(19.1)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	24	赤土器 甕		(10.7)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	25	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	26	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	27	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	28	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	29	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	30	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	31	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	32	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	33	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	34	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	35	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	36	石器 打製石片	9.8	8.0	1.7	145.42					
	37	石器 打製石片	2.0	1.8	0.4	0.78					
	M10	1	赤土器 甕								同坑未測
2		赤土器 甕								同坑未測	
3		赤土器 甕								同坑未測	
4		赤土器 甕								同坑未測	
5		赤土器 甕								同坑未測	
6		赤土器 甕								同坑未測	
7		石器 打製石片	2.8	2.1	0.5	1.71					
8		石器 打製石片	2.2	1.5	0.3	0.66					
M11	1	赤土器 甕	18.8	(5.5)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	2	赤土器 甕	(14.4)	(5.1)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	3	赤土器 甕	(3.8)	(3.7)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	4	赤土器 甕	(5.8)	(2.0)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	5	赤土器 甕		6.9		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	6	赤土器 甕		(4.4)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	7	赤土器 甕		(5.2)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	8	赤土器 甕	(16.9)	9.8	(5.6)	口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	9	赤土器 甕			(6.0)	口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	10	赤土器 甕	18.0	(10.0)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	11	赤土器 甕	(10.7)	5.0		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	12	赤土器 甕	3.0	(3.2)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	13	赤土器 甕				口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	14	赤土器 甕	15.0	(12.3)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	15	赤土器 甕	17.1	(12.3)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	16	赤土器 甕	10.3	(6.0)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	17	赤土器 甕	14.8	(9.4)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	18	赤土器 甕	13.8	(9.4)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	19	赤土器 甕	18.9	(16.7)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	
	20	赤土器 甕	(15.0)	(8.7)		口縁ハツ子	口縁ハツ子			同坑未測	

第30表 M9 (2)~M11 (1) 遺物一覽表

遺物番号	遺物種類	法	高さ (cm)	内	位置	出土位置	備考
M11	21 弥生	環状 (14.0)	9.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北14
	22 弥生	環状		ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北14
	23 弥生	環状		ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北14
	24 弥生	環状		ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北14
	25 弥生	環状		ヘナナ	ヘナナ・口縁ミナキ	北東側	北6
	26 弥生	環状		ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	27 弥生	環状	10.6	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	28 弥生	環状	7.7	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	29 弥生	環状	12.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	30 弥生	環状	13.0	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	31 弥生	環状	12.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	32 弥生	環状	13.6	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	33 弥生	環状	14.8	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	34 弥生	環状	12.8	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	35 弥生	環状	18.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	36 弥生	環状	12.1	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	37 弥生	環状	10.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	38 弥生	環状	14.1	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	39 弥生	環状	10.3	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	40 弥生	環状	13.7	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	41 弥生	環状	13.7	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	42 弥生	環状	14.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	43 弥生	環状	13.7	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	44 弥生	環状	8.3	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	45 弥生	環状	11.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	46 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	47 弥生	環状	3.5	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	48 弥生	環状	4.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	49 弥生	環状	6.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	50 弥生	環状	5.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	51 弥生	環状	7.9	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	52 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	53 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	54 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	55 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	56 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	57 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	58 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	59 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	60 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	61 弥生	環状	—	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	62 弥生	環状	12.6	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	63 弥生	環状	16.2	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	64 弥生	環状	16.0	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	65 弥生	環状	8.1	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6
	66 弥生	環状	9.0	ハツリ・ミナキ	ハツリ・ミナキの環状遺文	北東側	北6

第31表 M11(2)遺物一覽表

品名	種別	語源	法		高 (m)	内 部			外 部			備 考	山 上 位 置
			白紙 (度)	高低 (度)		高 (m)	出	基	出				
M11	67	赤生	切付置	6.2	3.2	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置
	68	赤生	付付置	5.0	3.7	子	子	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	69	赤生	置			ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	70	赤生	置			ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	71	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	72	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	73	赤生	付付置	1.78	5.2	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	74	赤生	置	1.77	3.8	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	75	赤生	置	12.1	13.3	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	76	赤生	置	25.0	(14.5)	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	77	赤生	置	25.6	(10.9)	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	78	赤生	置	19.0	(9.8)	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	79	赤生	置	22.6	(13.3)	ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	80	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	81	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	82	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	83	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	84	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	85	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	86	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	87	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	88	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	89	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	90	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	91	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	92	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	93	赤生	置	17.7	6.2	17.8	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	94	赤生	置	16.4	6.4	17.5	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	95	赤生	置	15.8	(9.5)	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	96	赤生	置	19.0	(4.8)	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	97	赤生	置	14.5	6.2	12.3	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	98	赤生	置	18.9	(11.1)	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	99	赤生	置		7.9	9.0	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	ハク日→ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	100	赤生	置		6.4	(4.1)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	101	赤生	置		5.8	(3.3)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	102	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	103	赤生	置	14.0	(5.7)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	104	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	105	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	106	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	107	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	108	赤生	置			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	109	赤生	納置	5.7	5.9	1.0	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	110	赤生	付付置	6.0	6.1	0.6	ミガキ	ミガキ	ミガキ	完全光源	山出	山出位置	
	111	赤生	付付置	7.3	5.2	1.5	65.32						
	112	赤生	置	5.2	3.2	7.0	22.62						
	113	赤生	置	7.2	6.3	1.5	78.64						
	114	赤生	置	3.5	3.0	0.7	15.02						
M12	1	赤生	置	4.1	3.8								

第32表 M11(3)・M12(1)遺物一覧表

通稱	番号	種類	器機	法 量 (mm)		(H)	内 径	外 径	文 様	著 考	出 土 (位置)
				口径	底径						
M12	52	券生	蓋	—	(29.0)	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層 Ⅱ-V区3層
	53	券生	蓋	13.9	(7.3)	20.1	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	54	券生	蓋	(16.2)	—	(9.4)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	55	券生	蓋	10.9	—	(7.9)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	56	券生	蓋	(17.4)	—	(9.2)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	57	券生	蓋	—	—	(9.4)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	58	券生	蓋	—	(6.1)	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	59	券生	蓋	—	(5.9)	(10.4)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	60	券生	蓋	—	(8.2)	(4.9)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	61	券生	蓋	(13.9)	12.0	5.9	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	62	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	63	券生	蓋	(11.6)	—	(4.1)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	64	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	65	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	66	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	67	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	68	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	69	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	70	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
	71	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
72	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
73	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
74	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
75	券生	蓋	(18.2)	—	(9.9)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
76	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
77	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
78	券生	蓋	(13.2)	—	(5.0)	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
79	券生	蓋	—	—	—	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層	
80	券生	土製白磁	蓋	(6.3)	(5.9)	0.9	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
81	券生	土製白磁	蓋	7.0	4.3	0.7	ミナギ	ミナギ	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区3層
M13	1	券生	鉢	—	6.6	(17.8)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	2	券生	鉢	(16.9)	—	(9.7)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	3	券生	鉢	15.0	3.8	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	4	券生	蓋	—	(12.4)	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	5	券生	蓋	(27.2)	—	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	6	券生	蓋	(17.0)	—	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	7	券生	鉢	—	—	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	8	券生	鉢	—	7.2	(3.7)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	9	券生	鉢	—	6.0	(3.5)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	10	券生	鉢	—	(5.6)	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	11	券生	鉢	—	(22.4)	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	12	券生	鉢	—	—	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	13	券生	蓋	—	6.2	(11.7)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	14	券生	蓋	—	—	—	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	15	券生	蓋	(20.6)	—	(12.7)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	16	券生	蓋	—	8.3	(5.3)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	17	券生	蓋	(19.8)	—	(17.7)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	18	券生	蓋	(26.0)	—	(11.6)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層
	19	券生	蓋	—	—	(27.2)	ハナナ子	ハナナ子	赤土	完全灰土	Ⅱ-V区2層

第34表 M12(3)・M13(1)遺物一覧表

種別	部号	種別	海	法	長	高	内		系	文	外	区	考	近	上
							ミ	ナ							
M13	20	奈生	石	5.8	(14.9)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	21	奈生	石	5.8	(14.9)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	22	奈生	石	8.2	(22)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
M14	1	奈生	石	(4.8)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	2	奈生	石	(4.2)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	3	奈生	石	(16.2)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	4	奈生	石	(23.6)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	5	奈生	石	(14.2)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	6	奈生	石	(2000)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	7	奈生	石	(1340)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	8	奈生	石	(17.8)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	9	奈生	石	(1.58)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	10	奈生	石	5.6	(11.4)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	11	奈生	石	(11)			ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	12	奈生	石	(6.8)	(1.6)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	13	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	14	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	15	奈生	石	6.4	(3.6)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
16	奈生	石		(28.0)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
17	奈生	石		(25.0)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
18	奈生	石	10.1	(16.8)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
19	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
20	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
21	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
22	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
23	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
24	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
25	奈生	石	(50.0)		(13.6)	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
26	奈生	石	9.3	6.2	10.6	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
27	奈生	石		(5.7)		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
28	奈生	石	(18.0)		(7.6)	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
29	奈生	石	(17.0)		(4.4)	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
30	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
31	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
32	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
33	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
34	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
35	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
36	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
37	奈生	石	12.6	6.4	3.9	422.54	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ		
P	1	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	2	奈生	石	3.3	2.0	0.7	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	3	奈生	石	18.6		(8.8)	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	4	奈生	石				ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	5	奈生	石			156	(20.8)	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	6	奈生	石	(7.1)	0.6	0.7	14.0	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
	7	奈生	石	(1.7)	0.2	0.2		ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	

第35表 M13(2)・M14、グリッド遺物一覧表

() 残 () 推定

・炭化材同定、放射性炭素年代測定	高橋 敦
・種実遺体分析	松元美由紀
・骨、貝類同定	金井 慎司
・X線回折分析	斉藤 紀行
・植物珪酸体分析	馬場 健司
編集ほか	千葉 博敏

<目次>

はじめに	p. 189
I.西一本柳遺跡XIVの自然科学分析	p. 190
1.放射性炭素年代測定	p. 190
2.炭化材樹種同定	p. 190
3.種実遺体分析	p. 192
4.植物珪酸体分析	p. 193
5.骨同定	p. 194
6.X線回折分析	p. 195
引用文献	p. 196
II.北一本柳遺跡Ⅲの自然科学分析	p. 200
1.放射性炭素年代測定	p. 200
2.炭化材樹種同定	p. 200
3.種実遺体分析	p. 204
4.骨貝同定	p. 208
5.X線回折分析	p. 210
引用文献	p. 214
III.東大門先遺跡Ⅱの自然科学分析	p. 222
1.放射性炭素年代測定	p. 222
2.炭化材樹種同定	p. 222
3.種実遺体分析	p. 224
4.骨同定	p. 228
引用文献	p. 230
IV.西八日町遺跡Ⅲの自然科学分析	p. 236
1.炭化材樹種同定	p. 236
2.種実遺体分析	p. 238
3.骨同定	p. 240
4.X線回折分析	p. 241
引用文献	p. 243

<図表・図版一覧>

I.西一本柳遺跡XIV

表1.放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

表2.樹種同定結果

表3.種実分析結果

表4.植物珪酸体含量

表5.骨同定結果

図1.植物珪酸体含量

図2.X線回折図

図版1.西一本柳遺跡XIVの炭化材

図版2.西一本柳遺跡XIVの種実遺体

図版3.西一本柳遺跡XIVの植物珪酸体

図版4.西一本柳遺跡XIVの出土骨

II.北一本柳遺跡III

表1.放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

表2.樹種同定結果

表3.種実分析結果

表4.検出分類群一覧

表5.骨貝同定結果

図1.出土マメ類の大きさ

図2.X線回折図(1)

図3.X線回折図(2)

図4.X線回折図(3)

図5.X線回折図(4)

図6.X線回折図(5)

図7.X線回折図(6)

図版1.北一本柳遺跡IIIの炭化材(1)

図版2.北一本柳遺跡IIIの炭化材(2)

図版3.北一本柳遺跡IIIの炭化材(3)

図版4.北一本柳遺跡IIIの種実遺体(1)

図版5.北一本柳遺跡IIIの種実遺体(2)

図版6.北一本柳遺跡IIIの骨貝類

III.東大門先遺跡II

表1.放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

表2.樹種同定結果

表3.種実分析結果

表4.骨同定結果

表5.出土人骨の歯式および歯牙計測値

表6.出土人骨下顎骨計測値

図1.出土マメ類の大きさ

図版1.東大門先遺跡IIの炭化材(1)

図版2.東大門先遺跡IIの炭化材(2)

図版3.東大門先遺跡IIの種実遺体

図版4.東大門先遺跡IIの出土骨(1)

図版5.東大門先遺跡IIの出土骨(2)

IV.西八日町遺跡III

表1.樹種同定結果

表2.種実分析結果

表3.検出分類群一覧

表4.骨貝類同定結果

図1.X線回折図

図版1.西八日町遺跡IIIの炭化材(1)

図版2.西八日町遺跡IIIの炭化材(2)

図版3.西八日町遺跡IIIの炭化材(3)

図版4.西八日町遺跡IIIの炭化材(4)

図版5.西八日町遺跡IIIの種実遺体

図版6.西八日町遺跡IIIの出土骨

はじめに

長野県佐久市岩村田に所在する西一本柳遺跡XIV、北一本柳遺跡Ⅲ、東大門先遺跡Ⅱ、西八日町遺跡Ⅲは、浅間山南麓より流下する湯川が南北から東西へ流れを転じる中～下流域の右岸台地上に立地する。この湯川右岸の台地は、浅間火山の噴火に伴う軽石流堆積物や流下堆積物から構成されており、台地上には小河川の開析によって形成された開析谷（田切り地形）の発達や流れ山などが確認される（長野県農政部農村整備課,1991）。

上記した4遺跡のうち、西一本柳遺跡では、これまでの発掘調査結果では、弥生時代中期～中世の遺構・遺物が確認されており、竪穴住居址が500軒以上検出されたことなどから、古代の拠点的な集落であることが示唆されている。今回の西一本柳遺跡XIVでは、弥生時代中期から平安時代の竪穴住居址をはじめとして、溝址、土坑、井戸などが検出されている。北一本柳遺跡Ⅲでは、弥生時代後期、古墳時代中期の竪穴住居址や中世の竪穴状遺構、土坑、溝址などが検出されている。東大門先遺跡Ⅱでは、古墳時代および古代の竪穴住居址や掘立柱建物址のほか、土坑や溝址などが検出されている。西八日町遺跡Ⅲでは、古墳時代後期および古代の竪穴住居址や掘立柱建物跡、土坑、溝址などが検出されている。

本報告では、上記した各遺跡の発掘調査で出土した炭化材（炭化物）や炭化種実、動物遺存体、さらに、赤色顔料などを対象に自然科学分析調査を実施し、大型植物化石（炭化材、炭化種実）の年代観、動・植物資源利用、赤色顔料の性状などについて検討する。以下、遺跡毎に自然科学分析結果を記す。

引用・参考分析

- 長野県農政部農村整備課,1991.土地分類基本調査 小諸,66p.
- 佐久市教育委員会,2008,佐久市文化財 年報16 平成18年度,92p.
- 佐久市教育委員会,2009,佐久市文化財 年報17 平成19年度,93p.

1. 西・本柳遺跡XIVの自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、溝址 (M11) 出土の土器内より検出された種実 (試料番号4:M11 №1土器内) と、竪穴住居址 (H4) から出土した炭化材 (試料番号5:H4 №1) の2点である。

(2) 分析方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N) により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730±40年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すがが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表記している。暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲) 双方の結果を示す。また、表中の相対比 (確率分布) は、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

炭化種実および炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) は、試料番号4 (M11 №4土器内:イネ 胚乳) が2,090±25yrBP、試料番号5 (H4 №1:コナラ節) が1,665±20yrBPを示す。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果 (測定誤差 σ) は、試料番号4がcalBC163-calBC56、試料番号5がcalAD352-calAD416である (表1)。

2. 炭化材樹種同定

(1) 試料

試料は、弥生および古墳時代の竪穴住居址から出土した炭化材など13点 (試料番号41~53) である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面) ・柃目 (放射断面) ・板目 (接線断面) の3断面の割断

表1. 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code.
				σ	2σ		
試料番号4 INPXIV M11 №4土器内 炭化米 (イネ 胚乳)	2,090±25	24.07±0.17	2,091±25	cal BC 163 - cal BC 129	0.103	PLD-14362	
				cal BC 120 - cal BC 89	0.389		
				cal BC 75 - cal BC 56	0.208		
試料番号5 INPXIV H4 №1 炭化材 (コナラ節)	1,665±20	-23.85±0.15	1,665±22	cal BC 181 - cal BC 45	1.000	PLD-14363	
				cal AD 352 - cal AD 367	0.235		
				cal AD 380 - cal AD 416	0.765		
				cal AD 265 - cal AD 274	0.021		
				cal AD 333 - cal AD 426	0.979		

面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(3) 結果

結果を表2に示す。竅穴住居址から出土した炭化材は、針葉樹1分類群（モミ属）と、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・ヤマグワ）に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (Abies) マツ科

試料は年輪界付近で割れている。軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射組織は単列、1-20細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤマグワ (Morus australis Poirct) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-50細胞高。

(4) 考察

試料は、弥生時代中期 (H50)、弥生時代後期 (H9,H14,H15,H46,H55)、古墳時代中期 (H4)、古墳時代後期 (H31) の各住居址から出土した炭化材である。これらの炭化材からは、針葉樹のモミ属、落葉広葉樹のコナラ節とヤマグワが確認された。このうち、モミ属とヤマグワはそれぞれ1点のみ確認され、コナラ節が大部分を占めることから、本遺跡では弥生時代中期～古墳時代後期にかけて、コナラ節を主体とする木材利用が推定される。

コナラ節は、重硬で強度が高い材質を有し、ヤマグワも強度・耐久性が高い。このことから、利用

表2. 樹種同定結果

番号	出土遺構	出土位置	種類	樹種	備考
41	H55	Ⅱ区	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
42	H4	No.1	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定 (試料番号5)
43	H4	No.2	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
44	H14	No.3	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
45	H4	No.4	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
46	H19	Ⅱ区	炭化材	モミ属	
47	H14	No.1	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
48	H15	No.2	炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
49	H31	No.2	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
50	H46	P2	炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
51	H50	No.1	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
52	H50	No.2	炭化材	ヤマグワ	
53	H50	No.3	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

された背景には、強度などの材質的特徴が推定される。一方、モミ属は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが、保存性は低いとされる。今回確認された広葉樹材と材質が異なることから、用途・部位等の違いを示している可能性がある。コナラ節やヤマグワは、本遺跡周辺に普通に見られる落葉広葉樹であり、モミ属も山地斜面を中心に分布していることから、これらの木材は周辺域で入手可能であったと考えられる。

西一本柳遺跡では、これまでも弥生～古墳時代の竪穴住居址から出土した炭化材の調査が行われており、いずれもコナラ節に同定されている（株式会社古環境研究所,2003,2005）。また、佐久市域の調査事例では、腰巻遺跡で弥生時代後期後半の資料にクリとコナラ節、根々井芝宮遺跡の弥生時代中期とされる資料にコナラ節を主体としてカバノキ属やアサダ、クヌギ節、タケ並科が混じる組成、後家山遺跡の弥生時代後期とされる資料にコナラ節を主体としてヒノキ属、モミ属、カバノキ属、ブナ科、クヌギ節、ニシキギ属、タケ並科が混じる組成が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社,1988,1998;株式会社古環境研究所,2004）。

3.種実遺体分析

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴住居址より出土した炭化物（試料番号14;H46 No.1）と、弥生時代中期の溝址より出土した土器内の炭化物（試料番号15;M11 No.1土器内）の2点である。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

(3) 結果

結果を表3に示す。試料番号14は、種実は検出されず、炭化材9個が確認された。試料番号15は、炭化した栽培種のイネの穎（7個）と胚乳（41個）、キビ近似種の胚乳（1個）、マメ類の種子（1個）が検出された。以下に、検出された分類群の形態的特徴等を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。また、表面に穎の破片が付着する個体もみられる。穎は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は薄く柔かく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・キビ近似種 (*Panicum cf. miliaceum* L.) イネ科キビ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ2.1mm、幅1.8mm、厚さ1.2mm程度のやや偏平な広

表3. 種実分析結果

番号	出土遺構	出土位置		分類群	部位	状態	個数	備考*	
14	H46		No.1	炭化材	-	破片 炭化	9	最大径9.3	
15	M11	IK1層	No.4土器内	イネ	穎	破片 炭化	7	基部2個	
					穎・胚乳	完形 炭化	5		
					胚乳	完形 炭化	23	放射性炭素年代測定(試料番号4)5個	
						破片 炭化	13		
					キビ近似種	胚乳	完形 炭化	1	
					マメ類	種子	完形 炭化	1	長さ6.98,幅5.05,厚さ3.97

*備考中の計測値の単位は、mm。

卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上には、径0.7mm程度の円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色。長さ6.98mm、幅5.05mm、厚さ3.97mmのやや扁平な広楕円体。腹面の子葉合わせ目上にある細長い長楕円形の臍は不明瞭。胚軸は子葉の中間を占め、やや突出する。種皮表面はやや平滑で、一部表面が焼き崩れている。

(4) 考察

試料番号15 (YMI No.1土器内) からは、炭化したイネの穎 (7個) と胚乳 (41個)、キビ近似種の胚乳 (1個)、マメ類の種子 (1個) と複数の栽培種が検出された。イネ・キビの胚乳やマメ類の種子は、主要な植物質食糧の可食部であることから、当時利用されていた穀類と推定される。なお、検出されたイネの胚乳は、表面の様相が明瞭であることや、穎が付着した胚乳も確認されることから、生米や穎果 (稲藁) の状態で炭化したと推定される。また、これらの炭化種実の出土状況を考慮すると、何らかの要因で熱を受け炭化した状態のものが土器とともに廃棄された等の状況が推定される。

4.植物珪酸体分析

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の堅穴住居址のピット内より出土した壺形土器内の土壌 (試料番号1:H46 P1 No.18壺内) と、水田の可能性のある地点より採取された土壌 (試料番号2:S1) の2点である。試料番号1 (H46 P1 No.18壺内) は炭化物や円礫が混じる暗灰色～暗黄褐色の砂質土、試料番号2は軽石様の碎屑物が混じる黒色の泥混じり砂質土である。

(2) 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量 (堆積物1gあたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位として表示する。また、100個/g未満は「<100」で表示する。

(3) 結果

結果を表4、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が発見されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。

試料番号1 (H46 P1 No.18壺内) は、植物珪酸体含量が約1,800個/gである。本試料では、珪化組織片として栽培植物のイネ属の籾 (穎) に形成される穎珪酸体が多く認められ、葉部に形成されるイネ属機動細胞珪酸体もわずかに認められる。この他の分類群では、ススキ属を含むウシクサ族などが検出されるが、その含量は数百個/g程度である。

試料番号2 (S1) は、植物珪酸体含量が約8,000個/gと試料番号1よりも高い値を示すが、イネ属の植物珪酸体は全く検出されない。タケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されるが、その含量は約100～600個/gである。

表4. 植物珪酸体含量 (個/g)

分析部	試料番号1	試料番号2
	H46 P1 No.18費内	S1 水田?
イネ科葉部短期珪酸体		
ヨシ属	-	500
ウシクサ族ススキ属	300	600
イチゴツナギ亜科		100
不明キビ型	500	3,200
不明ヒゲシハ型		400
不明ダンチク型	400	800
イネ科葉身機動珪酸体		
イネ族イネ属	<100	-
タケ亜科	-	100
ヨシ属	-	300
ウシクサ族	200	600
不明	300	1,200
合計		
イネ科葉部短期珪酸体	1,200	5,700
イネ科葉身機動珪酸体	600	2,300
総計	1,800	8,000
珪化珪酸片		
イネ属珪酸体	**	-

珪化珪酸片：「」-検出、「*」-検出

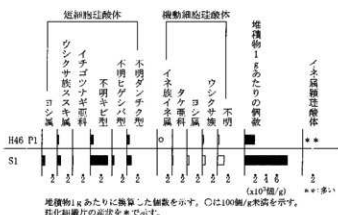


図1. 植物珪酸体含量

(4) 考察

試料番号1 (H46 P1 No.18號) からは、イネ属の珪酸体が多く認められた。このことから、窠内を充填する土壌にはイネ属の穎の混入が窺われる。また、この他に検出されたススキ属等の植物珪酸体などは、埋積した土壌中に蓄積されたものと推定され、周囲に生育していたイネ科草本類に由来すると考えられる。

時期不明の水田の可能性のあるS1 (試料番号2) は、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科等の植物珪酸体が検出されたが、イネ属を含めて栽培種に由来する植物珪酸体は検出されなかった。そのため、対象とされた試料については、水田利用の可能性や栽培種を言及することは困難である。なお、本試料より検出されたヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科は、周囲に生育していたイネ科植物に由来すると考えられ、これらが生育する開けた草地在周辺に分布していたと推定される。

5. 併同定

(1) 試料

試料は、奈良～平安時代の竪穴住居址 (H5) および古墳時代以降、奈良時代以降、中世以降とされる各溝址 (M2, M4, M7) などから出土した動物遺存体獣4試料 (試料番号17～20) である。

(2) 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。また、保存の悪い標本は、一般工作用接着剤を有機溶剤で溶かした溶液を塗布し、補強を行う。自然乾燥後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。

(3) 結果および考察

結果を表5に示す。検出された種類は、ウマ目 (奇蹄目: Perissodactyla) ウマ科 (Equidae) ウマ (*Equus caballus*) とウシ目 (偶蹄目: Artiodactyla) ウシ科 (Bovidae) ウシ (*Bos taurus*) であった。

ウマは、左下顎第3後臼歯 (試料番号17: H5) と歯牙片 (試料番号19: M2 II区1層)、両端を欠損する右脛骨 (試料番号18: M7 No.1) が確認された。試料番号17の下顎第3後臼歯は、臼歯高が39mm前後を計ることから、西中川ほか (1991) を参考とすると10歳程度と推定される。ウシは、歯牙片 (試

表5. 骨同定結果

番号	出土遺構	出土位置	種類	部位	左右	部分	数量	備考	
17	H5		哺乳綱	ウマ	下顎歯牙	左	第3後臼歯	1	臼歯高39±, 他破片14+
18	M7		哺乳綱	ウマ	脛骨	右	両端欠	1	他破片46+
19	M2	II区1層	哺乳綱	ウマ	歯牙		破片	54+	
20	M4	65G	哺乳綱	ウシ	歯牙		破片	11	

料番号20:M4 65G) が確認された。今回確認されたウマ、ウシは、それぞれ出土した遺構や時期が異なることや、破片となっている標本が多いことから、松井(1995)による出土例に関する検討は困難である。

6.X線回折分析

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の住居址から出土した淡赤褐色～赤色を呈する塊状物質(試料番号7:H14)の1点である。

(2) 分析方法

各試料に認められる赤色顔料を採取し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について下記の条件で測定を実施する。

装置：理学電気製MultiFlex

Divergency Slit : 1°

Target : Cu (K α)

Scattering Slit : 1°

Monochromcter : Graphite湾曲

Receiving Slit : 0.3mm

Voltage : 40KV

Scanning Speed : 2° /min

Current : 40mA

Scanning Mode : 連続法

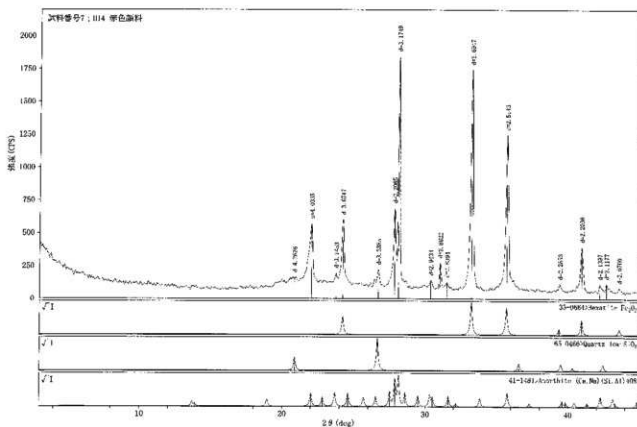


図2. X線回折図

Detector : SC

Sampling Range : 0.02°

Calculation Mode : cps

Scanning Range : 3~45°

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

(3) 結果および考察

X線回折図を図2に示す。試料番号7からは、赤鉄鉱 (hematite) のほか、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石: anorthite) が検出された。赤色を呈する代表的な顔料鉱物には、ベンガラ (赤鉄鉱: hematite[α -Fe₂O₃]) のほか、水銀朱 (辰砂: cinnabar[HgS])、鉛丹 (鉛丹: minium[Pb₃O₄]) などがある。試料番号7では、赤鉄鉱 (hematite) が検出されたが、この他に赤色を呈する鉱物が認められないことからベンガラと判断される。

ベンガラには、天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状 (塊状、球状、不定形など) 構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄 (いわゆる高師小僧) を利用したものであることが明らかとなっている (岡田, 1997; 織幡・沢田, 1997)。このような背景から、ベンガラ材料の産出地は無数に存在すると考えられ、本遺跡でも周辺で比較的容易に入手できた可能性がある。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- 株式会社古環境研究所, 2003, 西一本柳遺跡VIIIにおける自然科学分析。「一本柳遺跡群 西一本柳遺跡V III」, 佐久市埋蔵文化財調査報告書第109集, 佐久市・佐久市教育委員会, 1-20。
- 株式会社古環境研究所, 2004, 後家山遺跡における樹種同定。「後家山遺跡・東久保遺跡・宮田遺跡 I・III 後家山・東久保の丘陵上に営まれた弥生時代中期から後期の集落址と宮田の谷地に展開する中世村落と生産址遺構の調査」, 佐久市埋蔵文化財調査報告書第121集, 佐久市・佐久市教育委員会, 184-194。
- 株式会社古環境研究所, 2005, 佐久市西一本柳遺跡X出土試料の自然科学分析。「西一本柳遺跡X」, 佐久市埋蔵文化財調査報告書第127集, 佐武建設株式会社・佐久市教育委員会, 151-155。
- 近藤謙二, 2004, 植物ケイ酸体研究, ペドロジスト, 48, 46-64。
- 松井 章, 1997, 考古学から見た動物利用, 部落解放なら, 8, 奈良県部落解放研究所, 2-31。
- 中山至大・井之口希秀・南谷志志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p。
- 西中川駿・本田道輝・松元光春, 1991, 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究, 平成2年度文部省科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書, 99p。

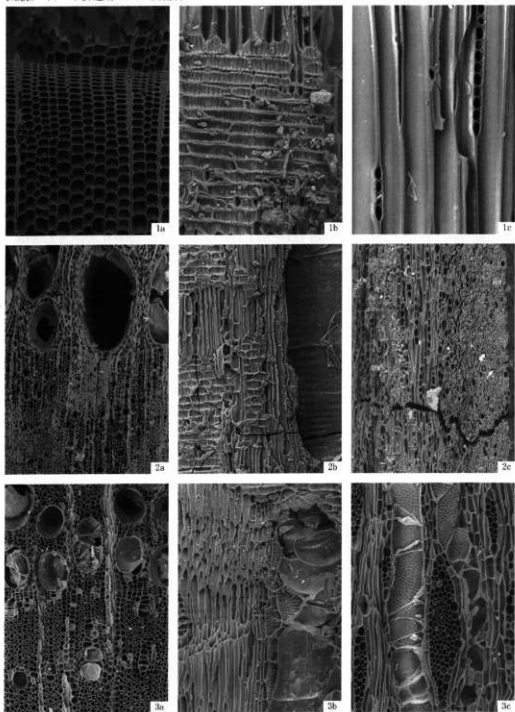
- 岡田文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39.
- 織幡順子・沢田正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1988,腰巻遺跡試料炭化材同定調査報告,「腰巻・西大久保Ⅱ・曲尾Ⅱ」,佐久埋蔵文化財センター調査報告書第15集,佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター,55-58.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1998,根々井芝宮遺跡出土炭化材同定報告,「宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡 本文遺物編」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集,佐久市教育委員会・佐久市土地開発公社,350-362.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2005,聖原遺跡の自然科学分析,「長土呂遺跡群 聖原 長野県佐久市浅間山麓田切大地上における巨大古代集落遺跡の調査(第5分冊)」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集,佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会,140-206.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版4 西一本柳遺跡XIVの出土骨



1. ウマ左下顎第3後臼歯(試料番号17:H5)
2. ウマ右脛骨(試料番号18:M7 No. 1)

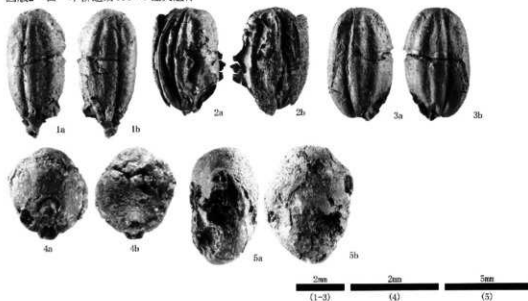
図版1 西一本柳遺跡XIVの炭化材



1. モミ属 (試料番号46:H9 II区)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号42:H4 No. 1)
 3. ヤマガタ (試料番号52:H50 No. 2)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

 200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

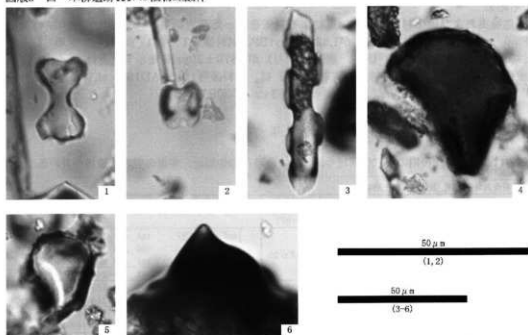
図版2 西一本柳遺跡XIVの種実遺体



1. イネ 穎・胚乳(試料番号15:M11 No. 1土器内)
3. イネ 胚乳(試料番号15:M11 No. 1土器内)
5. マメ類 種子(試料番号15:M11 No. 1土器内)

2. イネ 穎・胚乳(試料番号15:M11 No. 1土器内)
4. キビ近似種 胚乳(試料番号15:M11 No. 1土器内)

図版3 西一本柳遺跡XIVの植物珪酸体



1. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号2:S1)
3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号2:S1)
5. ウンクサ族機動細胞珪酸体(試料番号2:S1)

2. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号2:S1)
4. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号2:S1)
6. イネ属珪酸体(試料番号1:1146 P1)

II. 北一本柳遺跡Ⅲの自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴住居址より出土した炭化種実2点（試料番号1;H56 No.1土器内,試料番号2;H61 炭No.1）と、炭化材（試料番号3;H61 炭No.21）1点である。

(2) 分析方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表するのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表記している。暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ （ σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。表中の相対比（確率分布）は、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

炭化種実および炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、試料番号1（H56 No.1土器内 ;イネ 胚乳）が $1,825 \pm 25$ yrBP、試料番号2（H61 炭No.1 ;マメ類 種子）が $1,845 \pm 25$ yrBP、試料番号3（H61 炭No.21;クワ）が $1,870 \pm 20$ yrBPを示す（表1）。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（測定誤差 σ ）は、試料番号1がcalAD137-calAD223、試料番号2がcalAD130-calAD214、試料番号3がcalAD83-calAD218である。

2. 炭化材樹種同定

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴住居址や溝址、古墳時代の住居址、中世の竪穴状遺構や井戸址、土坑、

表1. 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正期) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code.
				σ	2σ		
試料番号1 IKPⅢ 1156 No.1土器内 炭化米（イネ 胚乳）	$1,825 \pm 25$	-23.69 ± 0.22	$1,827 \pm 25$	cal AD 137 - cal AD 160	0.300	PLD-14359	
				cal AD 165 - cal AD 198	0.454		
				cal AD 206 - cal AD 223	0.246		
				2σ cal AD 126 - cal AD 248	1.000		
試料番号2 IKPⅢ H61 炭No.1 粒状炭化米（マメ類 種子）	$1,845 \pm 25$	-25.84 ± 0.17	$1,845 \pm 25$	σ cal AD 130 - cal AD 180	0.636		PLD-14360
				cal AD 186 - cal AD 214	0.364		
				2σ cal AD 86 - cal AD 106	0.057		
				cal AD 121 - cal AD 238	0.943		
試料番号3 IKPⅢ H61 炭No.21 炭化材（クワ）	$1,870 \pm 20$	-24.12 ± 0.20	$1,870 \pm 22$	cal AD 83 - cal AD 139	0.765	PLD-14361	
				cal AD 155 - cal AD 168	0.112		
				cal AD 195 - cal AD 209	0.123		
				2σ cal AD 78 - cal AD 218	1.000		

ピットなどから出土した炭化材およびカヤ状炭化物など40点（試料番号1~40）である。これらの試料には、複数の炭化材からなる試料が含まれる。このうち、カヤ状炭化物の試料番号10,13,19については、カヤ状を呈する炭化物と炭化材の双方を対象としている。また、試料番号4,18,30,34,39は、複数の炭化材を抽出し、分析対象としている。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にす。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にす。

(3) 結果

結果を表2に示す。各遺構から出土した炭化材は、針葉樹1分類群（サワラ）、広葉樹9分類群（ハンノキ属ハンノキ亜属・アサダ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケンボナシ属・スノキ属・エゴノキ属）とイネ科に同定された。なお、試料番号1は、道管が認められたことから広葉樹と判断されるが、未炭化の木片で石化して硬いことから桂化木の可能性がある。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に1-2個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

試料は小片で保存状態が悪く、電子顕微鏡による観察・写真撮影ができなかった。環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

表2. 樹種同定結果

番号	出土遺構	出土位置		種類	樹種	備考
1	I12	D1(Y2)		木	仏堂樹	未炭化・石化
2	I116		No.1	炭化材	サワラ	
3	D108		炭3	炭化材	ハンノキ属ハンノキ亜属	
4	I119	I区炭化物層		炭砕片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	炭4
					クリ	
					スノキ属	
5	H19	炉の土		炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	炭5
6	H34			カヤ状炭化物	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	炭6
7	H56		No.9(炭2)	カヤ状炭化物	イネ科	
8	I156		No.13(炭1)	炭化材	クリ	
9	H57	炉		炭化材	クリ	
10	H60		No.2	カヤ状炭化物	クリ	炭化材
					イネ科	
11	H61		炭No.23	炭化物	クリ	
12	H61		炭No.3	炭化材	クリ	
13	I161		炭No.4	カヤ状炭化物	クリ	炭化材
					イネ科	
14	H61		炭No.6	炭化材	クリ	
15	H61		炭No.8	炭化材	クリ	
16	H61		炭No.11	炭化材	クリ	
17	I161		炭No.5	炭化材	クリ	
18	I161		炭No.17	炭化材	クリ	炭化材
					イネ科	
19	H61		炭No.18	カヤ状炭化物	クリ	炭化材
					イネ科	
20	I161		炭No.20	炭化材	クリ	
21	H61		炭No.21	炭化材	クリ	
22	H61		炭No.27	炭化材	クリ	放射性炭素年代測定(試料番号3)
23	I161		炭No.28	松葉状炭化物	イネ科	
24	H65	炉		炭化物	クリ	
25	H113			炭化材	クリ	
26	H117		No.7	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
27	H119		炭No.4	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
28	H129		炭No.1	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
29	H139	Ⅲ区	炭No.1	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
30	I1140		炭No.2	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
31	H145		炭No.7	炭化材	ケンボナン属	
32	D124			炭化材	エゴノキ属	芯持丸木(径1.5cm)
33	D191			炭化材	クリ	
34	D210			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	芯持丸木(径1.3cm)
					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
35	D402			カヤ状炭化物	イネ科	
36	D402			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
37	P641			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
38	F3	P8	炭	炭化材	アサダ	
39	M16	え50		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	小片多数
					クリ	
40	M20	炭層(え55)		炭化材小片・炭	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケンボナシ属 (Hovenia) クロウモド科

環孔材で、孔部は1:3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・スノキ属 (Vaccinium) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管は年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものとして7-10細胞幅、50-100細胞高前後の大きな組織とがある。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、肉眼観察で潰れた円筒状を呈する。横断面では、道管の外側に篩部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は、柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。観察した範囲では放射組織は認められない。

(4) 考察

弥生時代後期および古墳時代、中世の各遺構から出土した炭化材からは、針葉樹1分類群(サワラ)と広葉樹9分類群(ハンノキ属ハンノキ亜属・アサダ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケンボナシ属・スノキ属・エゴノキ属)、さらに、イネ科が確認された。

弥生時代後期の堅穴住居址(H19,H56,H57,H60,H61,H65)のうち、最も試料が多いH61ではクリを主体としてイネ科が混じる組成が確認された。クリは、重硬で強度・耐朽性が高いことから、強靱で腐りにくい木材が住居構築材に利用されたと推定される。イネ科は、カヤ状炭化物などに認められ、屋根材などの萱材に由来する可能性がある。H61以外の堅穴住居址は、試料数が少ないが、H56,H57,H60でもクリやイネ科が確認された。また、H19では、コナラ節やクリ、スノキ属、クヌギ節が確認された。H19試料は、炭化物層やなどより採取された炭化材片であることから、上記したクリを主体とする種類構成との差異は、用途などの違いを反映している可能性がある。クヌギ節やコナラ節、クリは、本遺跡周辺の二次林などに普通にみられる樹木であり、スノキ属も川沿い等に生育する。このことから、当該期の各住居址で確認された樹種は、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したと推定される。

本遺跡周辺における調査事例では、西一本柳遺跡の弥生時代後期とされる堅穴住居址から出土した炭化材にはコナラ節やクリが確認されている(株式会社古環境研究所,2003,2005)。また、腰巻遺跡の弥生時代後期後半とされる堅穴住居址では、炭化材4点のうちコナラ節(1点)とクリ(3点)が確認されている(パリオ・サーヴェイ株式会社,1988)ほか、後家山遺跡の弥生時代後期の堅穴住居址より出土した炭化材273点の分析調査では、コナラ節が250点と大部分を占め、クリは1点確認されたのみである(株式会社古環境研究所,2004;植田,2004)。これらの結果と比較すると、本遺跡のH61で確認されたクリを主体とする樹種構成は特異な傾向であることが指摘される。

古墳時代の可能性がある堅穴住居址(H34)では、カヤ状炭化物とされる試料はクヌギ節であった。このことから、クヌギ節の小径の枝等をカヤ材と共に利用した可能性がある。

中世の遺構のうち、堅穴状遺構(H16,H113,H117,H119,H127,H139,H140)から出土した炭化材からは、針葉樹のサワラ、広葉樹のブナ属、コナラ節、クリ、ケンボナシ属が確認された。コナラ節が全体的に多く、コナラ節を含め強度の高い広葉樹材の利用が目立つ。H16の炭化材に確認された針葉樹のサワラは、木理が通直で割裂性・耐水性の高いという材質的特徴を有する。一方、当該期の

土坑から出土した炭化材からは、ハンノキ亜属、コナラ節、クリ、エゴノキ属、イネ科が確認された。確認された分類群は、堅穴状遺構と異なるが、比較的強度が高く、周辺域で入手可能な広葉樹材から構成されるという点では共通する傾向と言える。これらの結果から、堅穴状遺構と土坑では木材の用途が異なると考えられるが、いずれも周辺域より入手可能な木材を獲得し、利用したと考えられる。

3.種実遺体分析

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の堅穴住居址や溝址などから出土した種実遺体および炭化物混じり土壌など13点（試料番号1～13）である。分析試料は、炭化種実のみからなる試料や炭化材を主体とする試料、炭化種実や炭化材が混じる土壌試料など、それぞれ異なる状況が観察された。

(2) 分析方法

本分析では、上記した各試料の状態を踏まえ、炭化種実や炭化材を壊さずに抽出することを最優先し、以下の方法を用いる。

1) 試料番号2 (H56 №1土器内)

試料中に多量のイネの塊状炭化物が確認されたことから、肉眼やルーペで観察し、炭化物を可能な限り抽出する。その後、試料を常温乾燥させて径4、2、1、0.5mmの各篩を通す。2mm以上の篩内の残渣をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実を抽出する。2mm未満の残渣は、一部（2-1mmは142.12gより20g、1-0.5mmは179.29gより10g、0.5mm未満は450.47gより5g）を観察し、イネ胚乳以外の種実（雑穀粒など）を抽出する。

2) 試料番号4 (H61 炭№1)・試料番号6 (H61 №2土器内)

試料番号4はマメ類の塊状炭化物、試料番号6はイネの塊状炭化物が確認されたことから、試料を肉眼やルーペで観察し、炭化物を可能な限り抽出する。その後、径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて径2mm以上の種実を抽出する。径2-0.5mmの残渣は、試料番号4はマメ類以外、試料番号6はイネ以外の種実を抽出する。

3) その他

肉眼観察では種実が確認されない炭化材を含む土壌試料に相当する。試料を容器に広げて常温乾燥させた後、肉眼やルーペで観察し、炭化物を拾い出す。乾燥抽出後の試料を水を満たした容器に投入し、浮いた炭化物をすくい取って回収する。容器を傾斜させて浮いた炭化物を径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20～30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの炭化物を抽出する。

以上の方法で抽出された塊状炭化物と種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。塊状炭化物は、而相筆を用いて表面に付く泥を可能な限り除去する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。塊状炭化物や炭化材等は、乾燥後の重量を表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

(3) 結果

結果を表3に示す。各試料からは、草本8分類群（イネ、キビ近似種、イネ科、タデ属、ザクロソウ科、スベリヒユ科、アカザ科、マメ類）の種実と、不明堅果類および炭化材、不明炭化物、土器などが検出された。このうち、栽培種は、試料番号2.6より多量のイネの胚乳が固結した塊状炭化物と、試料番号4より多量の炭化したマメ類の種子、試料番号10より炭化したイネの穎6個・胚乳4個、炭化したキビ近似種の穎・胚乳1個、試料番号11より炭化したイネの胚乳7個が確認された。以下に、

表3. 種実分析結果

番号	出土遺構	出土位置	分類群	部位	状態	数量 (個)	重量 [g]	備考*
1	H13	P20	スベリヒユ科	種子	変形 炭化?	1	-	
			不明炭化物		炭化	-	<0.01	
2	H156	No.1土層内	イネ	籾	破片 炭化	1	-	最大径19.6
				胚乳	完形 炭化	1033	10.39	放射性炭素年代測定(試料番号)15個
				穎・胚乳	塊状 炭化	(1)	2.79	籾付片1個
				胚乳	塊状 炭化	(1)	4.78	径5.5, 平均面(35×15), 土層内面反映
			イネ+糊状炭化物	胚乳	塊状 炭化	(1)	15.01	72×44×4.8, 炭化材径1.3, 土層内面反映
			イネ+糊状+炭化材	胚乳	塊状 炭化	(1)	2.76	77×49×16, 土層内面反映
			イネ+炭化材	胚乳	塊状 炭化	(1)	5.74	39×28×16, 土層内面反映
						(4)	5.74	
						(1)	0.03	径86
						(1)	2.30	
							211.87	主に20mm以上 (60%) 厚さ約15-17土層内面反映
							142.74	主に塊20mm未満
3	H56	No.11	イネ?	胚乳?	塊状 炭化	-	79.18	径4
					糊状 炭化	(1?)	0.42	最大径16
			アカザ科	種子	完形	1	-	
			不明糊塗	破片	炭化	1	0.03	径7.6, 厚さ約7, 糊状炭化物付着
			炭化材	破片	炭化	-	23.58	最大径27.3
			土器			11	-	
							-	17.78
4	H61	炭No.1	マメ類	種子	塊状 炭化	(19)	6.06	17粒以上, 最大24.8×19.9×15.4, 厚さ4個
					完形 炭化	136	11.02	厚さ6個, 放射性炭素年代測定(試料番号)2x1個
5	H61	同No.10	炭化材		破片 炭化	25	1.25	断面
					破片 炭化	-	1.35	径2mm以上
					破片 炭化	-	0.76	径2-1mm
6	H61	No.2土層内	イネ	胚乳	塊状 炭化	(1)	13.13	径66.1×52.4×24.3
					塊状 炭化	-	4.27	主に20mm未満
				完形 炭化	407	2.64		
				破片 炭化	1966	5.24		
7	M16	No.18	炭化材		破片 炭化	-	5.20	最大径39.3
					破片 炭化	-	4.05	最大径26.3
					破片 炭化	-	3.83	最大径19.3
8	M20	炭No.42	炭化材		破片 炭化	-	2.66	最大径20.0
					破片 炭化	-	2.66	最大径20.0
10	M20	炭No.122	イネ	穎	破片 炭化	6	-	
				穎・胚乳	完形 炭化	1	-	
					破片 炭化	1	-	
				胚乳	破片 炭化	2	-	
				胚乳	破片 炭化	2	-	
			キビ豆科種	胚乳	破片 炭化	2	-	
			タデ属	果実	完形 炭化	7	-	
				破片 炭化	3	-		
			アカザ科	種子	完形 炭化?	2	-	
			不明炭化物		炭化	-	<0.01	
11	M20	炭No.121	炭化材		破片 炭化	-	1.80	最大径12.7
					破片 炭化	-	1.80	最大径12.7
			イネ	胚乳	完形 炭化	1	-	
				破片 炭化	6	-		
			タデ属	果実	完形 炭化	12	-	
				破片 炭化	1	-		
12	M20	No.2土層内	スベリヒユ科	種子	完形	1	-	
			アカザ科	種子	完形	1	-	
			不明硬果類	果実?	炭化	12	-	
			炭化材	破片	炭化	-	5.63	最大径16.5
13	M20	No.121土層内	炭化材	破片	炭化	-	0.13	最大径5.4
			ザクロソウ科	種子	完形	4	-	
13	M20	No.121土層内	不明硬果類	果実?	破片 炭化	3	<0.01	
			不明炭化物		炭化	-	0.02	
			炭化材	破片	炭化	-	1.28	最大径11.3

*1 括弧内の数字は、炭状炭化物の数量を示す。

*2 備考中の計測値の単位は[mm]。

各分類群の形態的特徴等を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎(果)の破片が検出された。炭化しており黒色。やや扁平な長楕円体。胚乳は、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。また、表面に穎の破片が付着する個体もみられる。穎は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

試料番号2,6では、多数の胚乳が固結し、塊状となった炭化物が検出された。塊状炭化物は、最大約72mm×44mm×48mm(試料番号2)を測り、雑穀類などは認められない。イネ胚乳の個々の配列は不規則で、焼け膨れや密接する胚乳表面が直着するなど状態は不良。胚乳表面の多くは不明瞭であるが、一部に確認される表面の縦隆条が明瞭な点を同定根拠としている。試料番号2では、塊状炭化物中の胚乳1個の表面に穎の破片の付着が確認された。一方、試料番号6の塊状炭化物には、穎の付着は確認されなかった。

また、試料番号2の塊状炭化物は、部位によって保存状態が異なる。試料採取時の状況から土器内面の形状を反映するとみられる炭化物の外側は、個々の胚乳と空隙が識別でき、凹凸をなす。上面とみられる部位は、炭化した糊状(膜状)の物質に覆われ、表面に個々の胚乳や空隙は識別できず平滑である。また、炭化した糊状(膜状)の物質は、土器内面に接すると考えられる外縁部が内湾するほか、表面に炭化材が付着する状態が確認される。

・キビ近似種 (*Panicum cf. miliacum* L.) イネ科キビ属

穎・胚乳が検出された。炭化しており黒色。胚乳は、長さ1.8mm、幅1.7mm、厚さ1.0mm程度のやや扁平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線には、径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、穎(果)の破片が付着する。穎は薄く、表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ1.6mm、径0.7mm程度のやや扁平な狭倒卵針体。背面は丸みがあり、基部正中線には胚の痕跡が径0.5mm程度の楕円状に窪む。腹面は扁平。胚乳表面は粗面で、微細な縦筋がある。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ1.9mm、径1.3mm程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形で径0.3mm程度の弯が残る。果皮表面は粗面。

・ザクロソウ科 (*Aizoaccae*)

種子が検出された。黒色、径0.8mm程度のやや扁平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く、表面には微細なドーム状突起が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

・スベリヒユ科 (*Portulacaceae*)

種子が検出された。黒色、径0.7mm程度のやや扁平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・アカザ科 (*Chenopodiaceae*)

種子が検出された。炭化の有無は不明。黒色。径0.8-1mm程度のやや扁平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色。複数個が合着した塊状炭化物も確認される。塊状炭化物は、最大24.8mm×19.9mm×15.4mm程度。種子はやや扁平な広楕円体。遺存状況が比較的良好な98個の計測値は、長さが平均9.11mm(最大11.07mm、最小7.41mm)、幅が平均6.97mm(最大

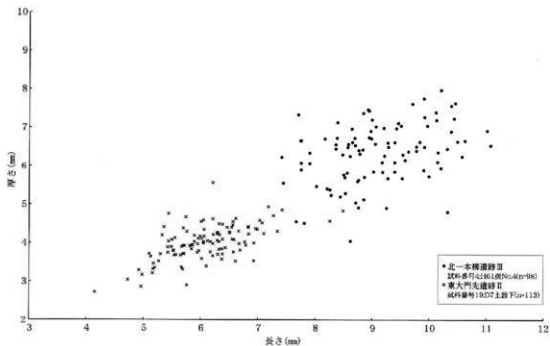
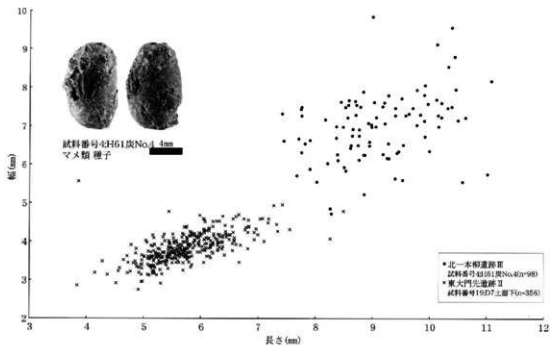


図1. 出上マメ類の大きさ

9.83mm、最小4.72mm)、厚さが平均6.324mm(最大7.96mm、最小4.04mm)を測る(図1)。遺存状況の良好な完形個体には、腹面の子葉合わせ目上にある細長い長楕円形の臍が確認される。種皮表面はやや平滑で、焼け膨れ、表面が崩れているなど遺存状態は悪く、密接する種皮表面が癒着する部分もある。

(4) 考察

弥生時代後期の竪穴住居址や溝址より出土した種実遺体群は、イネを中心として栽培種を主体とする種類構成を示した。試料番号2(H56 No.1土器内)と試料番号6(H61 No.2土器内)では、多量のイネの胚乳が固結・塊状化した炭化物が確認され、試料番号4(H61 炭No.1)では、多量の炭化したマメ類の種子が確認された。この他に、試料番号10(M20 炭No.122)では、炭化したイネの穎・胚乳と炭化したキビ近似種の穎・胚乳が、試料番号11(M20 炭No.121)では、炭化したイネの胚乳が確認された。イネやキビの胚乳、マメ類の種子は、主要な植物質食糧の可食部であることから、当該期における利用が推定される。

なお、H56は、焼失住居として検出されており、試料(試料番号2No.1土器内)は住居址北壁付近より出土した壺形土器内より採取されている。試料番号2のイネの塊状炭化物では、その形状から土器内面の輪郭が確認されたほか、イネの胚乳で異なる保存状況が確認された。炭化した糊状(膜状)物質が確認されたことから、土器内に水が入った状態で被熱したことが推定される。また、塊状炭化物には上記した土器内面を反映するとみられる面が確認されることや、多量の炭化した単体のイネの胚乳も確認されていることから、土器内における被熱の程度の違いも示唆される。

H61の床面より出土した炭化物(試料番号4)は、炭化材などを除くと、単体および固結し塊状となったマメ類の種子から構成される。マメ類種子は、種類の同定には至らなかったが、東大門先遺跡IIの縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑より確認されたマメ類との比較(図1)では、サイズ(長さ、幅、厚さ)は大型であり、形状はやや扁平を呈し、半割個体が少ないという特徴が看守される。これらの特徴から、本遺構で確認されたマメ類は、東大門先遺跡のマメ類と系統の異なる種類と推定され、サイズからみても栽培種の可能性がある。

栽培種を除く分類群では、草本のイネ科、タデ属やザクロソウ科、スベリヒユ科、アカザ科は、生態性を踏まえると、周辺の草地などに普通に生育していたと考えられる人里植物である。おそらく、確認された栽培種とともに被熱した、あるいは、何らかの過程を経て混入したものと推定される。

4. 骨貝類同定

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴住居址や溝址、古墳時代の竪穴住居址、中世の溝址や土坑などから出土した骨貝類16試料(試料番号1～16)である。

(2) 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。また、保存の悪い標本は、一般工作用接着剤を有機溶剤で溶かした溶液を塗布し、補強を行う。自然乾燥後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から種類および部位を同定する。

(3) 結果および考察

検出された分類群を表4、同定結果を表5に示す。試料からは、腹足綱1種類(オナジマイマイ科)、二枚貝綱1種類(フネガイ科)、鳥類、哺乳綱3種類(ウマ、イノシシ?、ウシ)が確認された。

弥生時代後期の竪穴住居址(H8,H19)からは、オナジマイマイ科の殻片(試料番号2;H8 ピット内)と、獣類の四肢骨片(試料番号4;H19 No.25)および部位不明破片(試料番号3;H19 炭化物層)

表4. 検出分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
有肺亜綱	Subclass Pulmonata
柄眼目	Order Stylmatatophora
曲輪尿管亜目	Suborder Sigmurethra
オナジマイマイ科	Family Bradybaenidae
オナジマイマイ類	Gen. et. sp. indet.
二枚貝綱	Class Bivalvia
翼形亜綱	Subclass Pteriomorpha
フネガイ目	Order Arcoida
フネガイ科	Family Arcidae
フネガイ類	Gen. et. sp. indet.
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
鳥綱	Class Aves
鳥類	Ord. et. fam. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
ウマ目(奇蹄目)	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	Equus caballus
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科?	Family Suidae?
イノシシ?	Sus scrofa?
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	Bos taurus

中世の遺構では、井戸址からウシの歯牙片 (試料番号6:D273)、溝址のうちM4からウマの第2後臼歯の可能性のある左上顎歯牙 (試料番号10:M4<9) およびウマ/ウシの橈骨・尺骨 (試料番号9:M4 No.2) と、ウシの左下顎骨、左下顎第2後臼歯、左下顎第3後臼歯 (試料番号8:M4 No.1)、獣類の四肢骨片 (試料番号7:M4 No.3) が確認された。試料番号8のウシの歯牙は、本来、下顎骨に植立していたと考えられる。試料番号9は橈骨の近位端側と尺骨の遠位端側が残るが、破損が著しい。また、M23からはウマの左下顎第4前臼歯～第3後臼歯が確認された。

中世の井戸址および溝址の試料は、ウマおよびウシなど大型獣類を主体とする傾向が窺われる。このうち、M23のウマ (試料番号16) は、第1後臼歯の臼歯高が71mm前後を計ることから、西中川ほ

が確認された。また、当該期の溝址のうち、M16からは鳥類の四肢骨片と獣類とみられる部位不明破片 (試料番号11:M16 え50・炭化物層)、M20からはイノシシの歯牙の可能性のある破片 (試料番号15:M20 え55・灰層) と獣類の部位不明破片 (試料番号12～15:M20) が確認された。

竪穴住居址 (H19) や溝址 (M16,M20) から出土した試料は、白色ないし黒色を呈するなど焼骨の特徴が認められた。イノシシの可能性のある歯牙のほかは種類・部位等が不明な試料が多く、古墳時代中期の竪穴住居址から出土した試料も、焼骨の特徴を有する獣類破片 (試料番号5:H34 II区) であった。これらの試料は、保存状態などから食糧資源等としての利用や、溝址内へ残渣が廃棄された状況などが推定される。また、オナジマイマイ科は、陸産の貝類であることから、周辺に棲息していたものが遺構の埋積過程において混入した可能性がある。

表5. 骨貝類同定結果

番号	出土遺構	出土位置	種類	種名	部位	左右	部分	数値	破損	備考
1	お83		二枚貝綱	フネガイ類	殻		破片	1		骨1
2	H8	ピット内	腹足綱	オナジマイマイ類	殻		破片	1		骨2
3	H19	炭化物層	哺乳綱	獣類	不明		破片	11	○	骨3
4	H19		哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	5	○	骨4
5	H34	II区	哺乳綱	獣類	不明		破片	1	○	骨5
6	D273		哺乳綱	ウシ	歯牙		破片	29+		LH283,骨6
								1		
7	M4		哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	13		
								10		
8	M4		哺乳綱	ウシ	下顎歯牙	左	第2後臼歯	1		
					左	第3後臼歯	1			
9	M4		哺乳綱	ウマ/ウシ	橈骨・尺骨		破片	1		他破片61+
10	M4	<9	哺乳綱	ウマ	上顎歯牙	左	第2後臼歯?	1		
11	M16	え50・炭化物層	鳥綱	鳥類	四肢骨		破片	1	○	骨11
12	M20		哺乳綱	獣類	不明		破片	多	○	37.1g
13	M20		哺乳綱	獣類	不明		破片	29+	○	骨12
14	M20	え55	哺乳綱	獣類	不明		破片	6	○	骨13
15	M20	え55・灰層	哺乳綱	イノシシ?	歯牙?		破片	1	○	骨14
					不明		破片	1	○	
			哺乳綱	ウマ	下顎歯牙	左	第4前臼歯	1		他破片1
							第1後臼歯	1		臼歯#571二
							第2後臼歯	1		
							第3後臼歯	1		
							歯牙			
							破片	9		
							破片	1		
16	M23		哺乳綱	ウマ	下顎歯牙	左	第4前臼歯	1		他破片1
							第1後臼歯	1		臼歯#571二
							第2後臼歯	1		
							第3後臼歯	1		
							歯牙			
							破片	9		
							破片	1		
							破片	1		

か(1991)によると3~4歳程度の若い個体と推定される。松井(1997)は、ウマやウシの出土例に関して、自然死・事故死、屠殺、犠牲に区分されるとしている。また、ウマやウシの頭蓋骨のみを井戸や土坑に埋設した例が各地で確認されていることから、頭蓋骨を用いた祭祀行為なども想定されている(金子, 1997; 松井, 1997など)。今回の分析結果から、溝址内にウマやウシの頭蓋骨や骨格が存在したことが想定されるが、その詳細については出土状況(出土試料の解剖学的位置)などから検討する必要がある。

また、グリッドお83から出土した貝類は、フネガイ科の殻片(試料番号1)であった。フネガイ科は、潮間帯、潮下帯の岩礁や砂泥底に棲息する2枚貝類である。佐久市周辺では、栃原岩陰遺跡(北相木村)や、石神遺跡や竹花遺跡(小諸市)などで海産の動物遺存体が確認されており、縄文時代頃より沿岸域と交流があったことが確認されている。本試料も、流通・交易等により持ち込まれたと考えられるが、その用途などは不明である。

5.X線回折分析

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の竪穴住居址や溝址、中世の竪穴遺構やピットなどから出土した赤色物質6点(試料番号1~6)である。

(2) 分析方法

各試料に認められる赤色顔料を採取し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について下記の条件で測定を実施する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K α)	Scattering Slit : 1°
Monochrometer : Graphite溝曲	Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 3~45°

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

(3) 結果

X線回折図を図2~7に示す。文中で括弧内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。因溶体やポリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを含む大分類の鉱物名を使用している。

1) 試料番号1 (H20 P13)

試料は、湿る暗赤褐色~赤褐色を呈する塊状物質である。検出された鉱物は、赤鉄鉱(hematite)および石英(quartz)、斜長石(灰長石: anorthite)、ハロイサイト(halloysite)である。

2) 試料番号2 (H58 No.1土器内)

試料は、暗赤褐色を呈する塊状物質である。試料番号1と同様に赤鉄鉱(hematite)や石英(quartz)、斜長石(灰長石: anorthite)、ハロイサイト(halloysite)が検出されているが、赤鉄鉱の回折線は弱い。

3) 試料番号3 (H117 No.14)

試料は、明赤色~赤褐色を呈する塊状物質であり、試料番号1・2と比較して鮮やかな色調を呈する。検出された鉱物は、水銀朱(cinnabar)および石英(quartz)、斜長石(灰長石: anorthite)、ハロイサイト(halloysite)である。

4) 試料番号4 (P650)

試料は、天目茶碗内面に付着した塗膜（漆？）状を呈する赤褐色を呈する物質である。本試料からは水銀朱（cinnabar）のみが検出される。

5) 試料番号5 (M20 No.5)

試料は、暗赤褐色～赤褐色を呈する塊状物質である。赤色顔料は土壌に取り込まれた状態にあり、単離するには至っていない。検出された鉱物は、赤鉄鉱 (hematite) および石英 (quartz)、斜長石 (灰長石: anorthite)、ハロイサイト (halloysite) である。

6) 試料番号6 (M20 No.55 高杯の中)

試料は、暗赤褐色を呈する塊状物質である。試料番号1～5と保存状態が異なり、砂粒などの混入が少なく、粘土塊状を為す。本試料からは、赤鉄鉱 (hematite) のほか、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石: anorthite) が検出される。

(4) 考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物には、ベンガラ（赤鉄鉱: hematite [α - Fe_2O_3]) のほか、水銀朱（辰砂砂: cinnabar [HgS])、鉛丹（鉛丹: minium [Pb_3O_4]) などがある。分析調査の結果、試料番号1,2,5,6では検出された鉱物に赤鉄鉱が含まれることから、これらの赤色物質はベンガラと判断される。一方、試料番号3,4は赤鉄鉱が認められず、水銀朱が認められたことから、いわゆる辰砂と判断される。

ベンガラは、天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状（塊状、球状、不定形など）構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄（いわゆる高師小僧）が出発物質であることが判明している（岡田,1997; 織藤・沢田,1997）。このような背景から、ベンガラ材料の産出地は無数に存在すると想定され、材料産出地を言及することは難しいが、本遺跡でも周辺で入手可能であったことが推定される。

一方、水銀朱は、ベンガラとは異なり産地が限られる。国内では、中央構造線沿いの大和水銀鉱床、

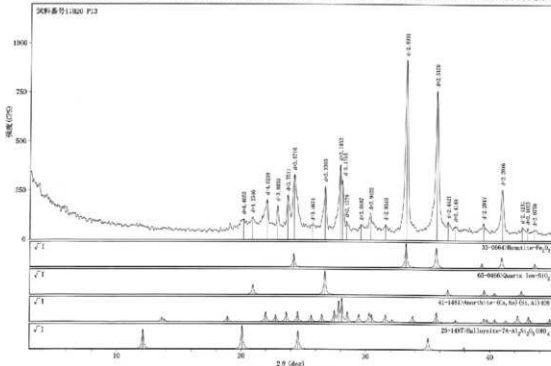


図2. X線回折図(1)

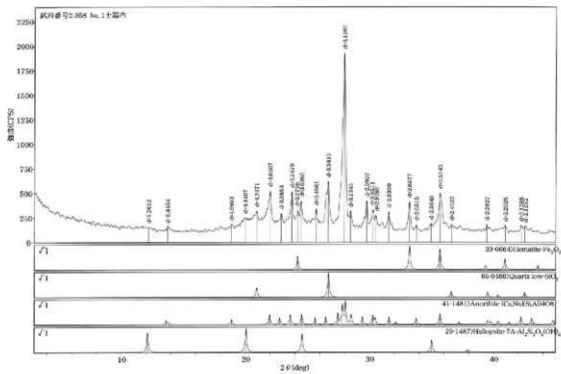


图3. X线衍射图(2)

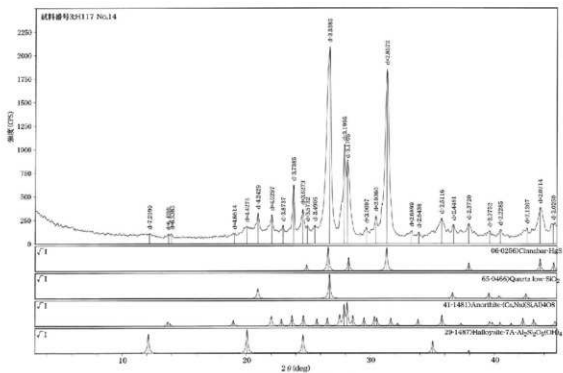


图4. X线衍射图(3)

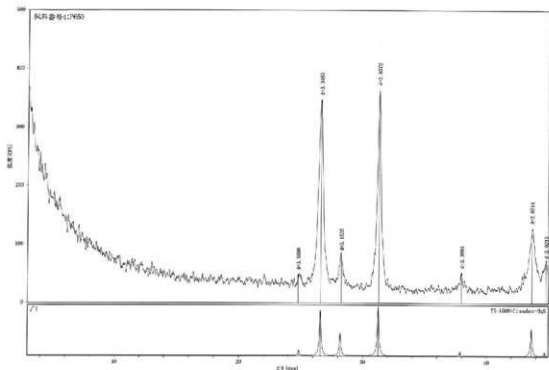


图5. X線衍折图(4)

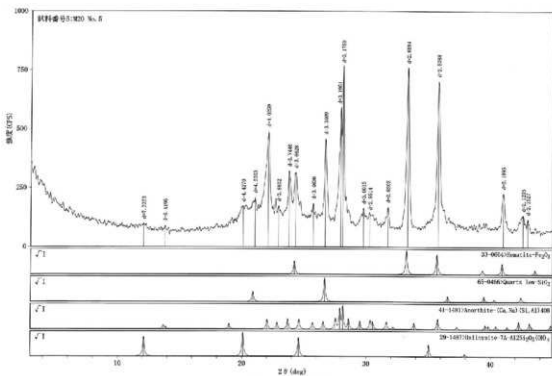


图6. X線衍折图(5)

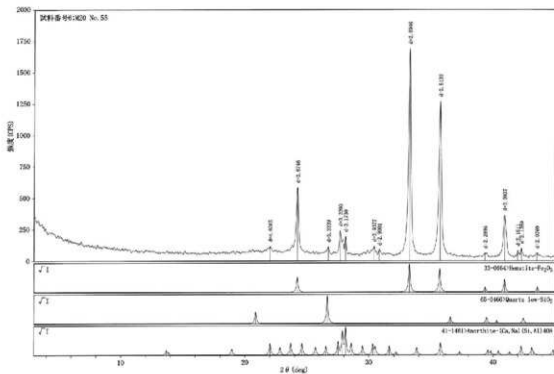


図7. X線回折図(6)

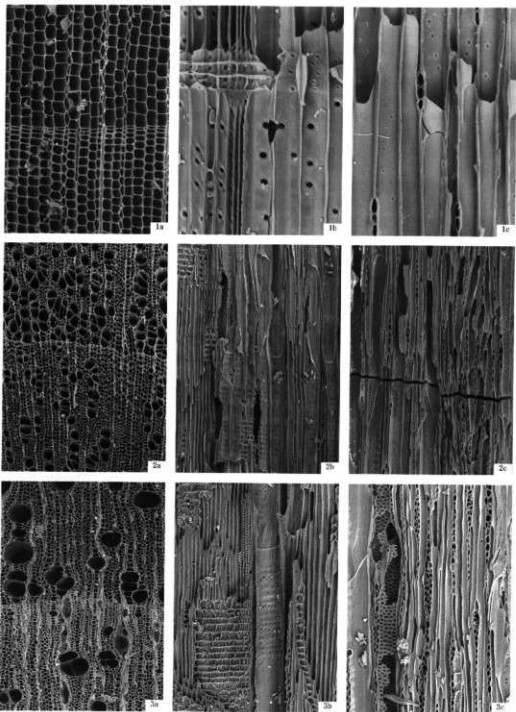
阿波水銀鉱床、九州南部水銀鉱床群、九州西部水銀鉱床群などが知られているほか、この他にも丹生の地名や丹生神社の存在が水銀朱の産出と密接に関わるとされている(市毛,1998)。本地域周辺では、群馬県富岡市や藤岡市(旧鬼石町)に丹生の地名があり、土壌化学分析の結果では、前者で0.0056%、後者で0.0073%と微量の水銀が含有されていることが確認されているが、いずれも実用できる含量ではない。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
 市毛 戴,1998,新版 朱の考古学,雄山閣,296p
 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p。
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所, 81-181。
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所, 66-176。
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所, 83-201。
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所, 30-166。
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所, 47-216。
 株式会社古蹟環境研究所,2003,西一本柳遺跡ⅤⅢにおける自然科学分析,「一本柳遺跡群 西一本柳遺

- 跡VⅢ」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第109集,佐久市・佐久市教育委員会,1-20.
- 株式会社古環境研究所,2005,佐久市西一本柳遺跡X出土試料の自然科学分析,「西一本柳遺跡X」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第127集,佐武建設株式会社・佐久市教育委員会,151-155.
- 加藤嘉太郎・山内 昭二,2003,新編 家畜比較解剖図説 上巻,養賢堂,315p.
- 松井 章,1997,考古学から見た動物利用,部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2-31.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 西中川駿・本田道輝・松元光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究,平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書,99p.
- 岡田文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39.
- 織幡順子・沢田正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1992,下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告,「国道141号線関係遺跡 長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書(本文編) 芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・芝宮遺跡群上高山遺跡・周防畑遺跡群下北原遺跡・近津遺跡群上宮原遺跡・下蟹沢遺跡・長土呂遺跡群上大林遺跡・長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集,佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター,355-391.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1998,根々井芝宮遺跡出土炭化材同定報告,「宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡 本文遺物編」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集,佐久市教育委員会・佐久市土地開発公社,350-362.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2005,聖原遺跡の自然科学分析,「長土呂遺跡群 聖原 長野県佐久市浅間山麓田切大地上における巨大古代集落遺跡の調査(第5分冊)」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集,佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会,140-206.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

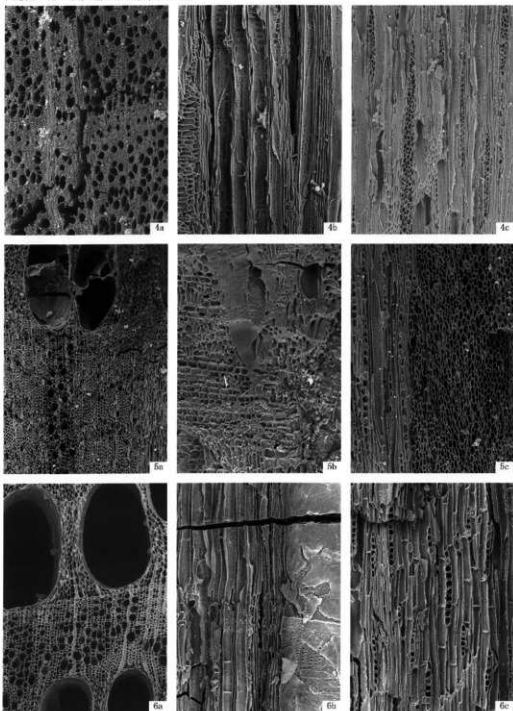
図版1 北一本柳遺跡Ⅲの炭化材(1)



1. サワラ(試料番号2)
 2. ハンノキ属ハンノキ亞属(試料番号3)
 3. アサダ(試料番号38)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2 北一本柳遺跡Ⅲの炭化材(2)



4. ブナ属(試料番号31)

5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号29)

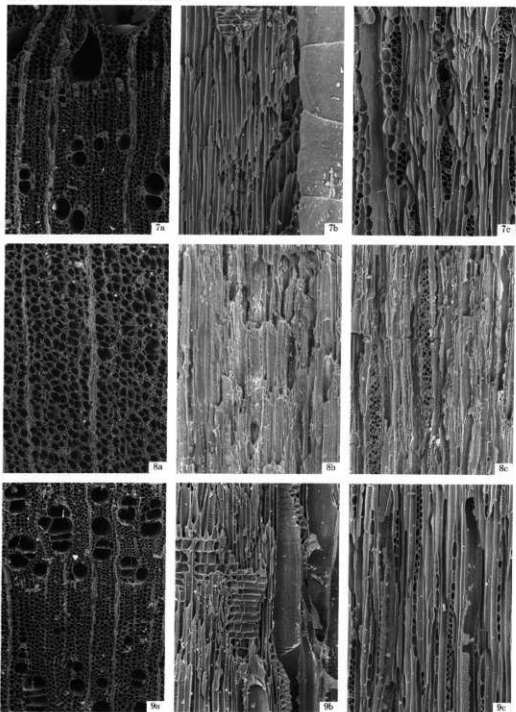
6. クリ(試料番号8)

a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a

200 μm: b, c

図版3 北一本柳遺跡Ⅲの炭化材(3)



7. ケンボナシ属(試料番号30)

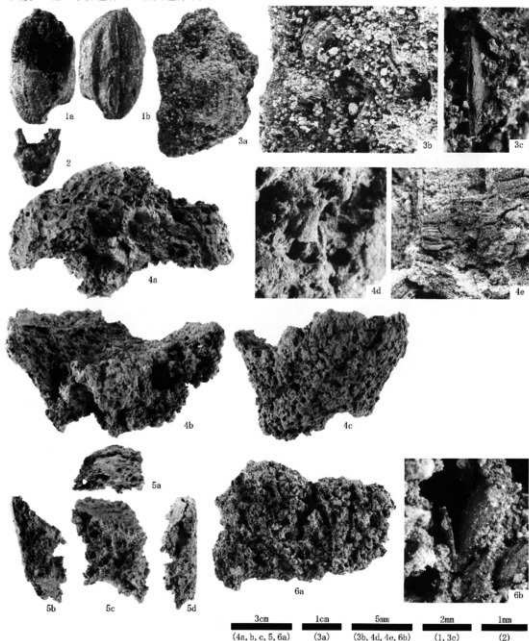
8. スズキ属(試料番号4)

9. エゴノキ属(試料番号32)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

図版4 北一本柳遺跡Ⅱの植実遺体(1)



1. イネ 胚乳(試料番号6:H61 No. 2土器内)

2. イネ 穎(試料番号10:M20 炭No. 122)

3. イネ (試料番号2:H56 No. 1土器内)

a:塊状炭化物, b:胚乳, c:穎・胚乳

4. イネ (試料番号2:H56 No. 1土器内)

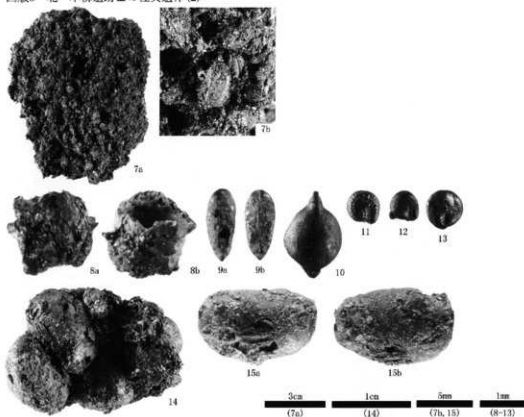
a・b:塊状炭化物(表面糊状), c:塊状炭化物(側面), d:胚乳(4b表面付着), e:炭化材(4a表面付着)

5. 塊状炭化物(表面糊状)(試料番号2:H56 No. 1土器内)

6. イネ(試料番号2:H56 No. 1土器内)

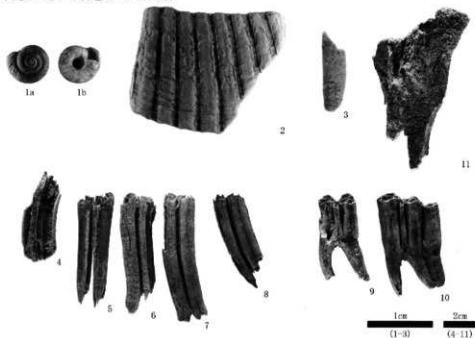
a:塊状炭化物, b:炭化材

図版5 北一木柳遺跡Ⅲの種実遺体(2)



7. イネ(試料番号6;H61 No. 2土器内) a:塊状炭化物, b:胚乳
 8. キビ近似種 類・胚乳(試料番号10;M20 炭No. 122) 9. イネ科 胚乳(試料番号6;H61 No. 2土器内)
 10. タデ属 果実(試料番号11;M20 炭No. 121) 11. ザクロソウ科 種子(試料番号13;M20 No. 121土器内)
 12. スベリヒユ科 種子(試料番号1;H3 P20) 13. アカザ科 種子(試料番号10;M20 炭No. 122)
 14. マメ類 種子 塊状炭化物(試料番号4;H61 炭No. 1) 15. マメ類 種子(試料番号4;H61 炭No. 1)

図版6 北一木柳遺跡Ⅲの骨貝類



- | | |
|--|---|
| <p>1. オナジマイマイ科(試料番号2;HSピット内)
 3. 鳥類四肢骨(試料番号11;M16 え50・炭化物層)
 5. ウマ左下顎第4前臼歯(試料番号16;M23)
 7. ウマ左下顎第2後臼歯(試料番号16;M23)
 9. ウシ左下顎第2後臼歯(試料番号8;M4 No. 3)
 11. ウマ/ウシ横骨・尺骨(試料番号9;M4 No. 2)</p> | <p>2. フネガイ科(試料番号1;J283)
 4. ウマ左上顎第2後臼歯?(試料番号10;M4 < 9)
 6. ウマ左下顎第1後臼歯(試料番号16;M23)
 8. ウマ左下顎第3後臼歯(試料番号16;M23)
 10. ウシ左下顎第3後臼歯(試料番号8;M4 No. 3)</p> |
|--|---|

Ⅲ.東大門先遺跡Ⅱの自然科学分析

1.放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、奈良時代の竪穴住居址から出土した炭化材(試料番号6:H9 No.1)と、弥生時代前期の土坑底面より検出された炭化種実(試料番号7:D7 土器下)の2点である。

(2) 分析方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比(確率分布)とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

結果を表1に示す。炭化材および炭化種実の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、試料番号6(H9 No.1 炭化材;ヒノキ科)が1,280±20yrBP、試料番号7(D7 土器下炭化種実;マメ類 種子)が2,430±25yrBPを示す。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果(測定誤差 σ)は、試料番号6がcalAD683-calAD769、試料番号7がcalBC537-calBC412である。

2.炭化材樹種同定

(1) 試料

試料は、古墳時代および奈良時代の竪穴住居址や、近代の可能性のある溝から出土した炭化材およびカヤ状炭化物など18点(試料番号54~71)である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断

表1.放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)	相対比	測定機関 Code.
試料番号6 H9 H9 F1 炭化材(ヒノキ科)	1,280 ± 20	-22.86 ± 0.17	1,280 ± 22	σ cal AD 683 - cal AD 718	0.566	PLD-14364
				cal AD 742 - cal AD 769	0.434	
				2σ cal AD 673 - cal AD 773	1.000	
試料番号7 山出 D7 土器下 炭化種実(マメ類 種子)	2,430 ± 25	-23.57 ± 0.17	2,429 ± 23	σ cal BC 537 - cal BC 528	0.056	PLD-14365
				cal BC 524 - cal BC 412	0.944	
				2σ cal BC 744 - cal BC 688	0.174	
cal BC 664 - cal BC 647	0.038					
cal BC 551 - cal BC 405	0.788					

面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(3) 結果

結果を表2に示す。炭化材は、針葉樹1分類群（ヒノキ科）、広葉樹4分類群（ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属）とイネ科に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・エノキ属 (Celtis) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁

表2. 樹種同定結果

番号	出土遺構	出土位置	種類	樹種	備考
54	H3		炭1	炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節
55	H3		炭2	炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節
56	H3		炭3	炭化物	コナラ属コナラ亜属コナラ節
57	H3		炭4	炭化物	ブナ属
58	H9		炭1	炭化材	ヒノキ科
59	H9		炭2	炭化材	ヒノキ科
60	I19		炭3	炭化材	エノキ属
61	H9		炭4	炭化材	クリ
62	H9		炭5	炭化材	ヒノキ科
63	H9		No.4	炭化材	ヒノキ科
64	H9		No.7	炭化材	ヒノキ科
65	I19	5層上		炭化材	エノキ属
66	H9	5層下		炭化材	エノキ属
67	H9		カヤ1	カヤ炭化物	イネ科
68	I19	P1		炭化材	ヒノキ科
69	H9	P11		炭化材	ヒノキ科
70	III6	カマド		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
71	M10			炭化材	クリ

にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、肉眼観察で潰れた円筒状を呈する。横断面では、道管の外側に篩部細胞があり、これらを厚壁の纖維細胞（維管束鞘）が開んで維管束を形成する。維管束は、柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。観察した範囲では放射組織は認められない。

(4) 考察

古墳時代中期の竪穴住居址（H3）と奈良時代の竪穴住居址（H9,H16,M10）、近代の可能性のある溝址（M7）から出土した炭化材からは、針葉樹のヒノキ科と、広葉樹のブナ属やコナラ節、クリ、エノキ属、さらに、イネ科が確認された。

古墳時代中期の竪穴住居址（H3）の炭化材4点からは、コナラ節3点とブナ属1点が確認された。コナラ節とブナ属は、比較的重硬で強度が高い材質を有することから、強度の高い木材が利用されたと考えられる。本遺跡周辺の当該期の竪穴住居址より出土した炭化材の調査では、西本柳遺跡株式会社古環境研究所,2003,2005)や下聖端遺跡などでコナラ節の利用が確認されている。とくに、下聖端遺跡では、住居構築材と考えられる炭化材401点のうち328点がコナラ節であったことからコナラ節を主体とした木材利用が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1992）。

奈良時代の竪穴住居址のうち、H9から出土した炭化材は、針葉樹のヒノキ科を主体とし、広葉樹のクリやエノキ属が混じる樹種構成を示した。炭化材の形状観察では、試料番号59(ヒノキ科)と試料番号60(エノキ属)は分割材状を呈する状況が観察され、試料番号59については角材状を呈していた可能性が推定された。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれ、木材は木理が通直で割裂性・耐水性が高い種類が多い。クリは重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。エノキ属は、強度は中程度とされる。古代の竪穴住居址より出土した炭化材については、聖原遺跡などでコナラ節やクスギ節が比較的多い結果が得られており(パリノ・サーヴェイ株式会社,2005)、この中にはヒノキ科やヒノキ属も確認されている。ただし、H9の炭化材試料に確認されたヒノキ科を主体とする樹種構成は確認されていない。ヒノキ科の木材は、前述したように割裂性が高いことや分割材状を呈する炭化材が観察されたことを考慮すると、板状の部材などに利用された可能性もある。

3.種実遺体分析

(1) 試料

試料は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の上坑や奈良時代の竪穴住居址などから出土した種実遺体4点（試料番号16～19）である。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、「一」で結んで表示する。炭化材や炭化物は、重量を表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて保管する。

(3) 結果

結果を表3に示す。試料番号16～19からは、木本3分類群（広葉樹のオニグルミ、コナラ亜属ークリ、ブナ科）167個、草本9分類群（エノコログサ属、アワ近似種、ヒエ近似種、キビ近似種、イネ、カヤツリグサ科、タデ属、マメ類、エノキグサ）2457個、計2624個の種実と、炭化物（イネ胚乳破片主体）、炭化材（最大径1.4cm）、地下茎と考えられる不明植物が検出された。このうち、栽培種は、試料番号17から炭化したアワ近似種の穎・胚乳7個、炭化したヒエ近似種の穎・胚乳18個、炭化

したキビ近似種の穎・胚乳22個、炭化したイネの穎38個・胚乳1594個が、試料番号19から炭化したマメ類の種子17個、計2398個が確認された。以下に、検出された分類群の形態的特徴を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば径2.5cm程度の頂部が尖る広卵体。破片は1本の明瞭な縦の縫合線に沿って半分に割れており、頂部欠損と表面の亀裂が確認される。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部は子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・コナラ亜属ークリ (*Quercus* subgen. *Quercus* - *Castanea crenata* Sieb. et Zucc)

ブナ科コナラ属-クリ属

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。破片は、主に果実基部の着点を確認される部分で、大きさは最大4mm程度。破片の全形は不明。果皮表面は平滑で、浅く微細な縦筋がある。基部の着点は、果皮と材質が異なり、粗く不規則な粒状紋様がある。大型の果実をもつコナラ亜属とクリとの区別がつかないため、「-」で結んでいる。また、全体の形状が不明の果実破片をブナ科 (*Fagaceae*) としている。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ2.3mm、幅1.9mm程度のやや偏平な半広倒卵-楕円体。果実の背面は丸みがあり、腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・アワ近似種 (*Setaria* cf. *italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎・胚乳が検出された。一部には、イネの穎・胚乳に合着して炭化した状態が確認される(試料番号17)。炭化しており黒色。胚乳は長さ1.3-1.5mm、幅1.0-1.3mm、厚さ0.8-1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑で、穎(果)の破片が付着する。穎は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。穎の走査型電子顕微鏡下観察によりアワと特定される可能性がある。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

穎・胚乳が検出された。炭化しており黒色。穎(果)が付着した胚乳は長さ2.4mm、幅1.5mm、厚さ0.8mm程度の狭卵-半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの2/3以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、穎の破片が付着する。穎は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・キビ近似種 (*Panicum* cf. *miliacum* L.) イネ科キビ属

穎・胚乳が検出された。炭化しており黒色。胚乳は、長さ1.9mm、幅1.7mm、厚さ1.0mm程度のやや偏平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上には、径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、穎(果)の破片が付着する。穎は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。表面に穎の破片が付着する個体もみられる。穎は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実柄柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の船殻を構成する。穎は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・カヤツリグサ科 (*Cyperaceae*)

果実が検出された。炭化の有無は不明、黒色。長さ2mm、幅1.6mm程度のやや偏平な倒卵体、頂部はやや尖り、基部は切形。果皮表面は平滑。

表3. 種実分析結果

番号	出土遺物	出土位置	分類群	部位	状態	個数	重量 g	備考		
16	H6	No.1	オニグルミ	核	破片 炭化	1		半分鳥製入る		
17	H16	炭化物層	コナラ垂実-タリ	実実	破片 炭化	8	0.01	基部		
			アブ科	実実	破片 炭化	158	0.33			
			エノキグサ属	種・胚乳	完形	炭化	40			
			アワ近似種	種・胚乳	完形	炭化	7			
			ヒエ近似種	種・胚乳	完形	炭化	18			
			キビ近似種	種・胚乳	完形	炭化	22			
			イネ	種	破片	炭化	38			
				種・胚乳	完形	炭化	81		0.56	
				胚乳	完形	炭化	874		4.60	
				破片	炭化	639	1.24			
			カヤツリグサ科	実実	完形	炭化?	5			
			タデ属	実実	完形	炭化	7			
				破片	炭化	2				
			エノキグサ	種子	完形		5			
			炭化材	破片	炭化				0.10	最大径10mm
			炭化材(イネ主体)	破片	炭化				0.84	土に径2mm未満
			炭化材	破片	炭化		7		0.13	最大径14mm
18	D2		不明植物	地下茎?		1	<0.01			
			マメ類	種子	完形	炭化	149	6.14	廣径25個,放射線炭素年代測定(試料番号7)2個	
			炭化材	破片	炭化		570	10.25	20個初生不明種	
			炭化材	破片	炭化		2	0.01	最大径6mm	
			不明炭化物		炭化			0.09		
			不明植物	地下茎?			1	<0.01		
19	D7	上層下	不明植物	地下茎?		1	<0.01			
			マメ類	種子	完形	炭化	149	6.14	廣径25個,放射線炭素年代測定(試料番号7)2個	
			炭化材	破片	炭化		570	10.25	20個初生不明種	
炭化材	破片	炭化		2	0.01	最大径6mm				
不明炭化物		炭化			0.09					
不明植物	地下茎?			1	<0.01					

・タデ属 (Polygonum) タデ科

実果が検出された。炭化しており黒色。長さ2.1mm、径1.5mm程度の三稜状広卵体。頂部はやや尖り、基部は切形。果皮表面は粗面。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子を検出された。炭化しており黒色、楕円体。保存状態が比較的良好な356個(完形113個、破片243個)の計測値は、長さが平均5.74mm(最大8.49mm、最小3.84mm)、幅が平均3.83mm(最大5.56mm、最小2.75mm)、厚さが平均4mm(最大5.55mm、最小2.72mm)を測る(図1)。保存状態の良好な完形個体には、腹面の子葉合わせ目上にある細長い長楕円形の臍が確認される。また、子葉の合わせ目から半分に割れた破片の一部には、子葉内面に北大基準(吉崎,1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する幼根や初生葉の状態が確認される。種皮表面はやや平滑で、焼け膨れ、表面が崩れている個体もある。

・エノキグサ (Acalypha australis L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒色、長さ2.1mm、径1.5mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

(4) 考察

縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑から出土した炭化種実(試料番号19:D7 土器下)は、炭化材などの破片を除くと、全てマメ類の種子であり、破片と完形を合わせると700個以上が検出された。これらのマメ類 種子は、種類の同定には至らなかったが、形状や大きさから、いわゆるアズキ類の可能性が高い。

アズキは、ヤブツルアズキを祖先野生種とする栽培植物であり、縄文時代の早い段階に西日本で栽培化された説や渡来説がある。現在のアズキとヤブツルアズキは、大きさに差があるが、中間のサイズもあり、大きさのみで野生種と栽培種を区別することは困難である。アズキ類(ササゲ属)は、縄文時代早期には報告例があり、前期には遺構からの出土例が増加する傾向があるとされる。これまでの事例から、関東・北陸・東北部地域では、縄文時代中期頃には栽培化されていた可能性が高いと指摘されている(小畑,2008)。今回確認されたマメ類は、土坑底面より炭化物集中として確認された資料であることから、当時利用されていた植物質食糧の可能性が高い。

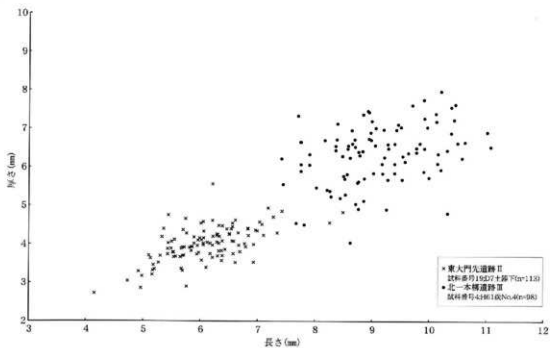
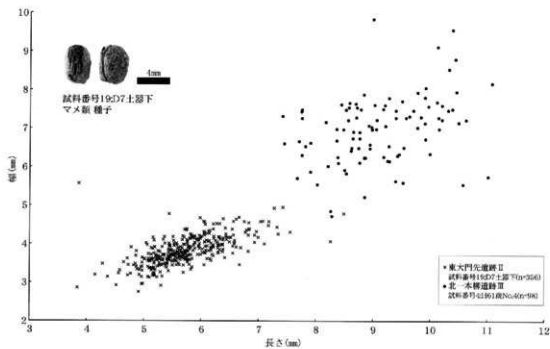


図1. 出土マメ類の大きさ

佐久市域では、マメ類の出土は各時期の遺跡で報告事例があるが、北一本柳遺跡の弥生時代後期の竪穴住居址では100個以上のマメ類の出土が報告されている（未公表資料）。北一本柳遺跡のマメ類とD7より出土したマメ類の大きさや形状を比較（図1）すると、D7出土マメ類は、長さ、幅、厚さともに小さく、丸みを帯びるという特徴が指摘できる。これらの特徴から、北一本柳遺跡より出土したマメ類とは系統の異なる種類と推定される。また、これらの特徴の差異は、佐久市域および周辺地域におけるマメ類の種類や、これらの栽培や利用を検討する上で重要な資料といえる。

奈良時代の竪穴住居址では、H6よりオニグルミの核、H16 炭化物層よりイネの胚乳を主体として、コナラ亜属-クリ、ブナ科、エノコログサ属、アワ近似種、ヒエ近似種、キビ近似種、カヤツリグサ科、タデ属、エノキグサが確認された。このうち、H16 炭化物層に確認された種実遺体群は、イネを主体とするアワ、ヒエ、キビなどの可食部である胚乳と、コナラ亜属-クリ、ブナ科の非可食部の核や果皮の破片から構成されるという特徴を示した。イネは、種実表面の模様が明瞭で、穎が付着した胚乳も確認されることから、生(米)や穎果(稲粃)の状態では火を受けたことが推定され、アワ、ヒエ、キビも穎が付着する個体が確認されており、これらも同様の状況が推定される。また、エノコログサ属やカヤツリグサ科、タデ属、エノキグサなどの人里植物も、明らかに炭化する個体も確認されたことから、上記した栽培種の種実等とともに火熱を受けた可能性がある。オニグルミは、河川沿いなどの適湿地を好んで生育する落葉高木であり、コナラ亜属またはクリなどのブナ科植物と共に周辺の森林に生育していたものに由来すると考えられる。

4.骨同定

(1) 試料

試料は、古墳時代以降の掘立柱建物址に伴う柱穴や奈良時代および中世の土坑、奈良時代の竪穴住居址から出土した動物遺存体4試料（試料番号21～24）である。これらの試料のうち、D2（試料番号23）およびD3（試料番号24）は土壌ごと骨が取り上げられた状態である。D3から出土した骨（試料番号24）は、土壌塊ごとに①～⑤の番号が付され、さらに③と⑤の間にも土壌塊が確認された。本試料については、上記した①～⑤のほか土壌塊より遊離したとみられる骨を一括試料として扱っている。

(2) 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。また、保存の悪い標本は、一般工作用接着剤を有機溶剤で溶かした溶液を塗布し、補強を行う。自然乾燥後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。人骨の計測は、下顎骨が馬場（1991）、歯牙が藤田（1949）に基づく。

(3) 結果

結果を表4に示す。検出された種類は、硬骨魚綱（Osteichthys）、ウマ目（奇蹄目:Perissodactyla）ウマ科（Equidae）ウマ（*Equus caballus*）、サル目（霊長目:Primates）ヒト科（Hominae）ヒト（*Homo sapiens*）である。

古墳時代以降の掘立柱建物址（F18）と奈良時代の竪穴住居址（H16）から出土した試料は、ウマの歯牙片であった。また、奈良時代の土坑（D2）からは、ウマの左上腕骨、左桡骨・尺骨、中手骨/中足骨などが確認された。上腕骨は両端が欠損した骨と橈骨・尺骨と関節する遠位端がみられ、橈骨・尺骨は遠位端が欠損する。

D2から出土したウマ（試料番号23）は、上腕骨遠位端および橈骨・尺骨近位端の骨化が終了していることから、少なくとも1.5歳以上に達していたと考えられる。なお、本試料からは、後肢や頭蓋が確認されなかったことから、遺体の一部が埋葬されていた可能性がある。

表4. 骨同定結果

番号	出土遺構	出土位置	種類	部位	左右	部分	数量	焼熟	備考
21	I16	ⅢK1西	骨1	哺乳類	ウマ	歯牙	破片	33 +	
22	F18	P3	骨2	哺乳類	ウマ	歯牙	破片	26 +	
23	D2		骨3	哺乳類	ウマ	上顎骨	左 両端欠	1	
						左 遠位端	1		
						脛骨・尺骨	左 遠位端欠	1	
						中手骨/中足骨?	破片	1	
						胸肋骨	破片	41 +	
						不明	破片	4	
						肋骨	破片	2 +	土塊状
						不明	破片	16 +	
24	D3		Ka①	哺乳類	ヒト	頭蓋骨	破片	27 +	
						側頭骨	溝部	1	
						顎骨	右 破片	1	
			Ka②	哺乳類	ヒト	頭蓋骨	破片	29 +	
						額頭骨	右 破片	2	
						上顎骨	左 破片	1	M1~M2橋立
							右 破片	1	P2~M2橋立
						下顎骨	左 破片	1	P2~M2橋立
							右 破片	1	M1~M2橋立
						上顎歯牙	破片	1	
						左 中切歯	1		
						左 側切歯	1		
						左 犬歯	1		
						左 第1小臼歯	1		
						左 第2小臼歯	1		
						右 中切歯	1		
						右 犬歯	1		
						右 第1小臼歯	1		
						下顎歯牙	左 中切歯	1	
						左 側切歯	1		
						左 第1小臼歯	1		
						左 第2小臼歯	1		
						右 中切歯	1		
			Ka③	哺乳類	ヒト	大腿骨	左 両端欠	1 +	
			Ka④	哺乳類	ヒト	脛骨	破片	7	
			Ka⑤	哺乳類	ヒト	大腿骨	右 両端欠	1 +	
			Ka③と⑤の間	哺乳類	ヒト	寛骨?	破片	1	
						不明	破片	1 +	土塊状
			低	硬骨魚類	魚類	鱗	破片	1	
				哺乳類	ヒト	上顎歯牙	右 犬歯	1	
						四肢骨	破片	7 +	
						不明	破片		15.6g
				その他	植物	不明	破片		0.3g

表5. 出土人骨の歯式および歯牙計測値

試料番号24②	左										右									
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3				
歯式 (近遠心径)	-	●	●	●	○			○	○	○		○	○	●	●	-				
歯長幅 (近遠心径)	-	11.28	11.54	7.20	7.93	7.21		8.79	8.94	7.16	7.44	7.91	7.51	11.16	11.46	-				
歯冠幅 (近遠心径)	-	12.84	12.00	10.51	10.55	8.48		7.39	7.44	7.33	8.76	10.17	10.46	12.04	13.61	-				
歯式 (近遠心径)	-	●	●	●		○		○	○	○		○	○	●	●	-				
歯長幅 (近遠心径)	-	12.96	12.56	8.00		8.26		5.49	5.66	6.20		7.86	8.06	12.19	12.67	-				
歯冠幅 (近遠心径)	-	12.02	11.55	9.51		9.36			6.17	7.23		8.89	9.89	11.62	11.92	-				

凡例：-：未出、●：歯冠、○：歯根、空欄：未確認

表6. 出土人骨下顎骨計測値

No.		右
69(1)	下顎体高	33.7
69(2)	下顎体高(M2)	34.1
69(3)	下顎体厚	16.2
69b	下顎体厚(M2)	16.0
71	下顎枝幅	36.8 ±
71a	最小下顎枝幅	36.1 ±

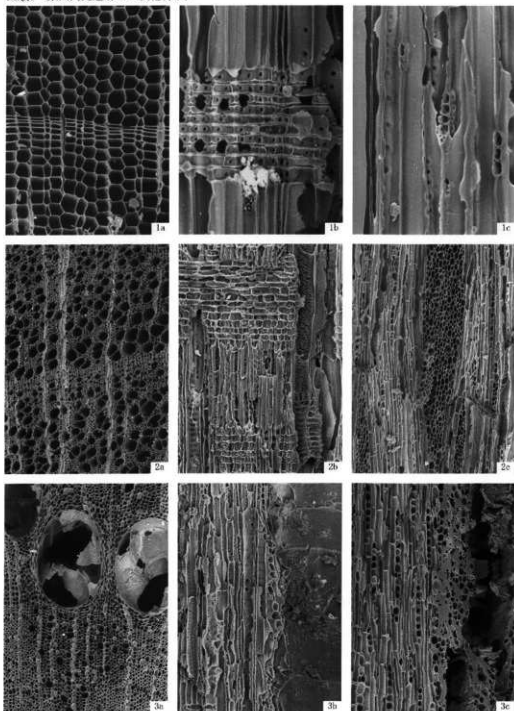
中世の土坑 (D3; 試料番号24) からは、ヒトの脳頭蓋、下顎骨、歯、左右大腿骨などが確認された。本試料では、第三大臼歯がみられないが(表5)、第一大臼歯の象牙質が点状に露出し、第二大臼歯でエナメル質の咬耗にとどまる程度であったことから、壮年(20~39歳程度)の可能性はある。ただし、片山(1990)によれば、歯の咬耗すなわち歯の歯冠部分の咬合面の摩耗は、食物の種類や調理内容に強く関係することから、

当人骨の推定年齢は壮年以上という程度にとどめておく。性差は、骨の破損が著しいため判断が難しいが、歯牙の大きさを権田(1959)と比較すると男性的である。また、左大腿骨遠位外側に病変状の変形がみられるが、接合および復元箇所であったため厳密な判断には至らない。なお、遊離骨の回収で検出された試料には、魚類の鱗片が確認された。

引用文献

- 馬場悠男,1991.人骨計測法.人類学講座別巻1 人体計測法.雄山閣,359p.
- 藤田恒太郎,1949.歯の計測基準について.人類学雑誌,61,27-32.
- 権田和良,1959.歯の大きさの性差について.人類学雑誌,67,151-163.
- 林 昭二,1991.日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄,1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31.京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫,1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32.京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫,1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33.京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫,1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34.京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫,1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35.京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 株式会社古環境研究所,2004.後家山遺跡における樹種同定.「後家山遺跡・東久保遺跡・宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ 後家山・東久保の丘陵上に営まれた弥生時代中期から後期の集落址と宮田の谷地に展開する中世村落と生産址遺構の調査」.佐久市埋蔵文化財調査報告書第121集.佐久市・佐久市教育委員会,184-194.
- 株式会社古環境研究所,2005.佐久市西一本柳遺跡X出土試料の自然科学分析.「西一本柳遺跡X」.佐久市埋蔵文化財調査報告書第127集.佐武建設株式会社・佐久市教育委員会,151-155.
- 片山 道,1990.古人骨は語る—骨考古学とはじめ—.株式会社同朋舎出版,210p.
- 加藤嘉太郎・山内 昭二,2003.新編 家畜比較解剖図説 上巻.養賢堂,315p.
- 松井 章,1997.考古学から見た動物利用.部落解放なら,8.奈良県部落解放研究所,2-31.
- 中山至大・井之口希秀・南谷志志,2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1988.腰巻遺跡試料炭化材同定調査報告.「腰巻・西大久保Ⅱ・曲尾Ⅱ」.佐久埋蔵文化財センター調査報告書第15集.佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター,55-58.
- 小畑弘己,2008.古民族植物学からみた縄文時代の栽培植物とその起源.日本学術振興会平成16~19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書.熊本大学,43-94.

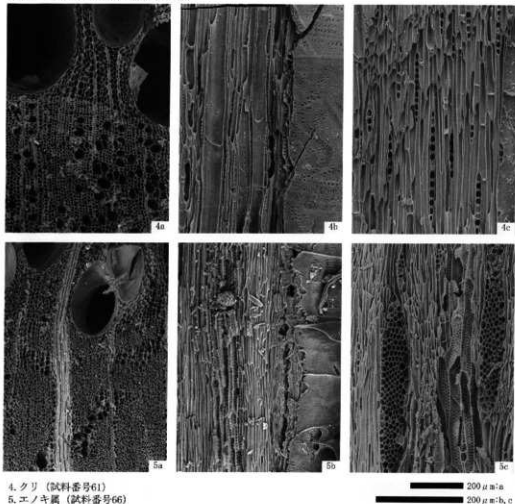
図版1 東大門先遺跡Ⅱの炭化材(1)



1. ヒノキ科 (試料番号64)
 2. プナ属 (試料番号57)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号54)
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2 東大門先遺跡Ⅱの炭化材(2)



4. クリ (試料番号61)

5. エノキ属 (試料番号66)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m/a

200 μ m/b, c

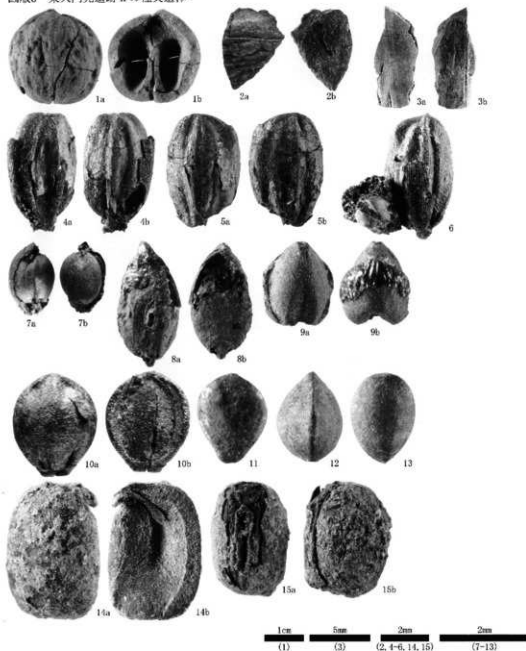
バリノ・サーヴェイ株式会社,1998,根々井芝宮遺跡出土炭化材同定報告,「宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡 本文遺物編」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集,佐久市教育委員会・佐久市土地開発公社,350-362.

バリノ・サーヴェイ株式会社,2005,聖原遺跡の自然科学分析,佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集,長土呂遺跡群 聖原 長野県佐久市浅間山麓田切大地上における巨大古代集落遺跡の調査 (第5分冊),佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会,140-197.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

図版3 東大門先遺跡Ⅱの種実遺体



- | | |
|---------------------------------|--|
| 1. オニグルミ 核(試料番号16:H6 No. 1) | 2. コナラ亜属-クリ 果実(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 3. ブナ科 果実(試料番号17:H16 炭化物層) | 4. イネ 穎・胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 5. イネ 胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) | 6. イネ(穎・胚乳)-アワ近似種(穎・胚乳)合着(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 7. アワ近似種 穎・胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) | 8. ヒエ近似種 穎・胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 9. キビ近似種 穎・胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) | 10. エノコログサ属 穎・胚乳(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 11. カヤツリグサ科 果実(試料番号17:H16 炭化物層) | 12. タデ属 果実(試料番号17:H16 炭化物層) |
| 13. エノキグサ 種子(試料番号17:H16 炭化物層) | 14. マメ類 種子(試料番号19:D7 土器下) |
| 15. マメ類 種子(試料番号19:D7 土器下) | |

図版4 東大門先遺跡Ⅱの出土骨 (1)

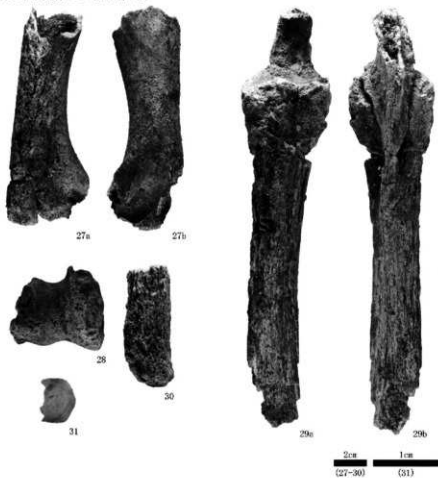


- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. ヒト右側頭骨(試料番号24:D3) | 2. ヒト右頬骨(試料番号24:D3) |
| 3. ヒト頭蓋骨(試料番号24:D3) | 4. ヒト側頭骨錐体部(試料番号24:D3) |
| 5. ヒト右上顎骨(試料番号24:D3) | 6. ヒト右上顎第1小白歯(試料番号24:D3) |
| 7. ヒト右上顎犬歯(試料番号24:D3) | 8. ヒト右上顎中切歯(試料番号24:D3) |
| 9. ヒト左上顎中切歯(試料番号24:D3) | 10. ヒト左上顎側切歯(試料番号24:D3) |
| 11. ヒト左上顎犬歯(試料番号24:D3) | 12. ヒト左上顎第1小白歯(試料番号24:D3) |
| 13. ヒト左上顎第2小白歯(試料番号24:D3) | 14. ヒト左上顎骨(試料番号24:D3) |
| 15. ヒト右下顎骨(試料番号24:D3) | 16. ヒト右下顎犬歯(試料番号24:D3) |
| 17. ヒト右下顎中切歯(試料番号24:D3) | 18. ヒト左下顎中切歯(試料番号24:D3) |
| 19. ヒト左下顎側切歯(試料番号24:D3) | 20. ヒト左下顎第1小白歯(試料番号24:D3) |
| 21. ヒト左下顎第2小白歯(試料番号24:D3) | 22. ヒト下顎骨(試料番号24:D3) |
| 23. ヒト左下顎骨(試料番号24:D3) | 24. ヒト右大腿骨(試料番号24:D3) |
| 25. ヒト左大腿骨(試料番号24:D3) | 26. ヒト脛骨(試料番号24:D3) |

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-14.

図版5 東大門先遺跡Ⅱの出土骨 (2)



27. ウマ左上胸骨(試料番号23;D2)

29. ウマ橈骨・尺骨(試料番号23;D2)

31. 魚類鱗(試料番号24一括;D3)

28. ウマ左上胸骨(試料番号23;D2)

30. ウマ中手骨/中足骨(試料番号23;D2)

IV.西八日町遺跡Ⅲの自然科学分析

1.炭化材樹種同定

(1) 試料

試料は、古墳時代および奈良時代の竪穴住居址から出土した炭化材およびカヤ状炭化物など23点(試料番号72~94)である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 結果

結果を表1に示す。各時期の遺構から出土した炭化材は、広葉樹10分類群(オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・モモ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・ウコギ属・イボタノキ属・ガマズミ属)とササ類・イネ科に同定された。なお、試料番号89,92の2点は、道管が認められたことから広葉樹と判断されたが、いずれも保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。また、試料番号85は、木材組織が全く認められず、試料の由来も含めて不明である。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・モモ (*Prunus persica* Lindley) バラ科サクラ属

環孔性を帯びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4-5列配列し、やや急激に管径を減じた後、単独または2-5個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-60細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合して散在し、年輪

表1. 樹種同定結果

番号	出上運構	出上位置	種類	樹種	備考
72	H1	カマド側方	炭化物	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
73	H2		炭化物	オニグルミ	
74	H2	Ⅱ区	炭化材	オニグルミ	
75	H2	カマド側方	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イボタノキ属 バラ科ナシ亜科	
76	H4	Ⅱ区床	炭化材	イネ科	
77	H4		炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
78	H4		カヤ状炭化物	ガマズミ属 イネ科	
79	H5		炭化材	ウコギ属 モモ	
80	H5	カマド	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
81	H8		炭化材	モモ	
82	H9	カマド	炭化物	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 サクランボ	
83	H16		炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
84	H16		カヤ状炭化物	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	3年牛程度の小枝(直径約5mm)
85	H20	検出	炭化材	不明	
86	H21	カマド	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
87	H21	P12	カヤ状炭化物	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イネ科	
88	H24	カマド	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
89	H25	カマド	炭化材	広葉樹	
90	H26		カヤ状炭化物	ササ類	
91	H27		カヤ状炭化物	イネ科	
92	H30		炭化材	広葉樹(節)	
93	H40	Ⅰ区	炭化材	ウコギ属	
94	H41	P3	炭化材	ヤナギ属	

界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-50細胞高。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae sifbam. Maloideae)

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2-5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・ウコギ属 (Acanthopanax) ウコギ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が斜～放射方向に複合してやや紋様状に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-8細胞幅、数細胞高のものから広放射組織まである。

・イボタノキ属 (Ligustrum) モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材で、年輪の始めにやや大型の道管が1列配列した後、やや道管を減じて単独または2個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・ガマズミ属 (Viburnum) スイカズラ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では円形～やや角張った楕円形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は上下縁辺部が直立細胞となる異性、1-3細胞幅、1-40細胞高。

・ササ類 (Bambusoideae) イネ科

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に節細胞がある。これらを厚壁の纖維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をな

す。

試料の外観や節の形状から、タケ亜科の中でも稈鞘が伸長しても節から脱落しないササ類と考えられる。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、肉眼観察で潰れた円筒状を呈する。横断面では、道管の外側に節部細胞があり、これらを厚壁の纖維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は、柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。観察した範囲では放射組織は認められない。

(4) 考察

古墳時代～平安時代の竪穴住居址から出土した炭化材は、広葉樹10分類群（オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・モモ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・ウコギ属・イボタノキ属・ガマズミ属）と、ササ類を含むイネ科が確認された。

古墳時代中期の竪穴住居址（H16,H30）からは、クヌギ節と広葉樹の節が確認された。クヌギ節は、重硬で強度が高く、住居の構築部材などとしてよく利用される樹種の一つである。H16のカヤ状炭化物に認められたクヌギ節は、径約5mmで3年生程度の小枝であった。このことから、萱材などにはクヌギ節の小枝なども利用された可能性がある。

古墳時代後期の竪穴住居址（H4,H9,H21,H25,H26,H41）では、炭化材およびカヤ状炭化物からはヤナギ属、クヌギ節、ガマズミ属、およびササ類を含むイネ科が確認された。一方、カマド出土炭化材には、クヌギ節とコナラ節、サクラ属が確認された。クヌギ節の利用は、古墳時代中期の樹種構成と同様である。また、カヤ状炭化物にはササ類とイネ科が確認され、H4ではイネ科と共にガマズミ属が認められた。ガマズミ属には、小径の種類も含まれることから、イネ科とともに萱材として利用された可能性もある。

奈良時代の竪穴住居址（H1,H2,H5,H8,H40）からは、オニグルミ、クヌギ節、モモ、バラ科ナシ亜科、ウコギ属、イボタノキ属が確認された。住居址単位では試料数が少ないため、木材利用の違いを反映しているかは不明であるが、モモとウコギ属が複数の住居址から出土している点は注される。また、カマド出土炭化材のうち、H2 カマドからは3種類が確認されたことから、複数の樹種が燃料材として利用されていたことが推定される。また、モモは栽培種であることから、周辺地域でのモモ栽培や木材の利用が推定される。同様の事例は、聖原遺跡でも報告されている（バリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。

2.種実遺体分析

(1) 試料

試料は、古墳～平安時代および中世の竪穴住居址や溝址などから出土した種実遺体11点（試料番号20～30）である。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

(3) 結果

結果を表2に示す。木本4分類群（落葉広葉樹のオニグルミ、アンズ近似種、スモモ、モモ）57個、草本3分類群（イネ、コムギ、マメ類?）19個、不明1個、計77個の炭化した種実と、炭化材18個（最大径11mm）、不明炭化物12個が検出された。栽培種は、スモモの核1個（試料番号27）、モ

表2. 種実分析結果

番号	出十遺構	出土位置	分類群	部位	状態	個数	備考
20	H2	I区	不明種実		完形 炭化	1	長さ7.32mm, 幅4.23mm, 厚さ1.87mm
21	H5	IV区	オニグルミ	核	破片 炭化	25	上層
22	H5	P8	イネ	胚乳	完形 炭化	16	
			コムギ	胚乳	破片 炭化	1	
23	H9	カマド	イネ	胚乳	完形 炭化	1	
24	H16	カマド	イネ	胚乳	完形 炭化	1	
			マメ類?	種子	破片 炭化	1	
			炭化材	破片	炭化	18	最大径11mm
25	H33	II区	オニグルミ	核	破片 炭化	1	
26	H36	III区	モモ	核	破片 炭化	2	
27	H40	IV区	スモモ	核	完形 炭化	1	
28	P6	P8	オニグルミ	核	破片 炭化	2	
			不明炭化物			炭化	12
29	F11	検出	オニグルミ	核	破片 炭化	25	
30	M1		アズナギ科	核	完形 炭化	1	炭35

モの核2個(試料番号26)、アズナギ科の核1個(試料番号30)、イネの胚乳17個(試料番号22-24)、コムギの胚乳1個(試料番号22)、マメ類?の種子1個(試料番号24)が確認された。以下に、検出された分類群の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の頂部が尖る広卵体で、1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。破片の大きさは、最大2.3cm程度(試料番号25)。

・アズナギ科(Prunus cf. *armeniaca* L.)バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。炭化しており黒色。長さ15.11mm、幅13.82mm、厚さ8.52mmのレンズ状球体。先端は鈍端、基部は切形で中央部に湾入した跡がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に鈍稜が、腹面正中線はやや鋭い稜となり、稜の左右に浅い縦溝が各1個配列する。内果皮は厚く硬く、表面には浅く微細な凹点が網目模様をなし、ざらつく。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley)バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。炭化しており黒色。長さ15.07mm、幅10.32mm、厚さ6.91mmのレンズ状楕円体。基部は丸く臍点がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch)バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば、長さ2-3cm、幅1.3-1.7cm、厚さ1.2-1.5mm程度のやや扁平な楕円体。頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した跡がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円形の窪みがある。破片は最大1.6cm程度。

・イネ (*Oryza sativa* L.)イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度のやや扁平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。長さ3.3mm以上、径3mm程度の楕円体。頂部を欠損する。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。一部焼き崩れて発泡している。

・マメ類 (*Leguminosae*) ? マメ科

種子と考えられる破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば(やや偏平な)楕円体で、腹面の子葉合わせ目上には、胚軸と細長い長楕円形の臍がある。種皮表面はやや平滑で、一部表面が焼き崩れている。破片は大きさ2mm程度。

(4) 考察

古墳時代～中世の遺構のうち、古墳時代中期の竪穴住居址(H16)カマドからイネの胚乳とマメ類?の種子、古墳時代後期の竪穴住居址(H19)カマドからイネの胚乳が検出された。この結果から、古墳時代におけるイネの利用が示唆される。マメ類も、前報の北一本柳遺跡や東大門先遺跡において栽培種と考えられる種実が多量検出されていることや、今回の試料はカマド出土試料であることから、当該期の植物質食糧として利用されていたと考えられる。また、古墳時代中期以降とされる掘立柱建物址(F6)から出土したオニグルミは、河川沿いなどの適湿地を好んで生育する落葉高木で、核内部の種子が可食可能であることなどから、古くから植物質食糧として利用されてきた有用植物である。今回の試料は、非可食部の核の破片のみが炭化した状態であったことから、利用後の残渣の可能性がある。

奈良時代の竪穴住居址(H2,H5,H36,H40)からは、オニグルミヤスモモ、モモなどの核、イネ、コムギの胚乳が検出された。また、平安時代の竪穴住居址(H33)からはオニグルミが確認された。これらの種実遺体群の検出から、古代頃にはイネやコムギなどの穀類とともに、栽培種のモモやスモモの果実も利用されていたと考えられる。このうち、モモは、奈良時代の竪穴住居址より出土した炭化材(試料番号79:H5,試料番号81:H8)にも確認されており、食用としてのほか木材も利用されていたことが推定される。

中世の溝址(M1)から出土した試料は、アンズ近似種に同定された。アンズは、中国から渡来した栽培種とされていることから、周辺でアンズの栽培が行われていた可能性がある。アンズは、加良毛(からも)の名で平安時代の文献に記載されており、この頃には日本に渡来していたと推定される。長野県では、近世松代藩に宇和島藩から興入れた姫が持ち込んだのが始まりとの説や、1556年に武田晴信に滅ぼされた窪寺平治右衛門が久保寺宇中山に居城を構えた際に植えたことに始まるとの説などがある(小林,1986)が、詳細は不明である。長野県内におけるアンズの検出例は少ないことから、今回の試料は県内におけるアンズ栽培の歴史を考える上で重要な資料と考えられる。

3. 併同定

(1) 試料

試料は、古墳時代～平安時代の竪穴住居址や中世の溝址などから出土した動物遺存体骨26点(試料番号25～50)である。このうち、試料番号31と試料番号46～48は、土壌毎取上げられた試料である。

(2) 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。また、保存の悪い標本は、一般工作用接着剤を有機溶剤で溶かした溶液を塗布し、補強を行う。自然乾燥後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。

表3. 検出分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
	巻貝類 Gen. et. sp. indet.
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
鳥綱	Class Aves
	キジ目 Order Galliformes
	キジ科 Family Phasianidae
	ニワトリ? Gallus gallus var. domesticus?
哺乳綱	Class Mammalia
	ウマ目(奇蹄目) Order Perissodactyla
	ウマ科 Family Equidae
	ウマ Equus caballus
	ウシ目(偶蹄目) Order Artiodactyla
	イノシシ科 Family Suidae
	イノシシ Sus scrofa
	シカ科 Family Cervidae
	ニホンジカ Cervus nippon
	ウシ科 Family Bovidae
	ウシ Bos taurus

(3) 結果および考察

検出分類群を表3、同定結果を表4に示す。検出された種類は、巻貝類、鳥類(ニワトリ?)、哺乳類4種類(ウマ、イノシシ、ニホンジカ、ウシ)である。

古墳時代の竪穴住居址(H4,H14,H21,H25,H43)からは、ニホンジカの末節骨(試料番号37:H25カマド堀方)、ウマ/ウシの四肢骨片(試料番号42:H43)のほか、巻貝類(試料番号38:H25カマド)や鳥類(試料番号38:H25カマド)、鳥類/獣類破片(試料番号29)、などが確認された。獣類破片は、四肢骨片(試料番号35)が確認できたほかは、いずれも部位不明である。また、試料番号32は、端部に穿孔とみられる痕跡が確認されたことから骨製品の可能性がある。本試料は、断面が扁平を呈し、穿孔が確認されないもう一方の端

部はやや湾曲する。長さ89.6mm、幅9.1~10.7mm前後を測る。なお、H4 1区とH21カマド、H25カマドから出土した試料には焼骨の特徴が認められた。

奈良時代の竪穴住居址(H1,H13)からは、ウマの左上顎第3後臼歯(試料番号25:H1 No.10)とイノシシの左下顎骨および左下顎第3後臼歯(試料番号31:H13 No.2)が検出された。H1で出土したウマの上顎第3後臼歯(試料番号25)は、西中川ほか(1991)を参考とすると、臼歯高が42mm前後であることから9歳程度と推定される。

平安時代の竪穴住居址(H3,H12,H20,H24,H27,H34,H35)からは、ウマ左上顎第3後臼歯片(試料番号34:H20 No.4)とニホンジカの右上顎第2前臼歯(試料番号40:H34 No.1)、臼歯片(試料番号41:H35 No.3)、さらに、大型獣類破片(試料番号33:H20)、獣類歯牙片(試料番号30:H12 III区堀方,試料番号39:H27 II区)、獣骨片(試料番号26:H3カマド,試料番号36:H24カマド)が検出された。このうち、H24カマドの獣骨片とH27 II区の獣類歯牙片には焼骨の特徴が認められた。

中世の溝址(M1)からは、ウシの右下顎骨(試料番号45:M1 No.3)およびウシの右下顎第3後臼歯(試料番号44:M1 No.1)、ウマ/ウシの部位不明破片(試料番号46:M1 No.4)、大型獣類四肢骨片(試料番号50:M1)、獣類の四肢骨片(試料番号49:M1 No.7)、獣骨片(試料番号47:M1 No.5,試料番号48:M1 No.6)が検出された。ウシの右下顎骨(試料番号45:M1 No.3)は、第1-3後臼歯部が残存し、第2後臼歯が植立する。

西八日町遺跡の古墳時代の竪穴住居址カマドでは、熱を受けたとみられる巻貝類、鳥類やニホンジカの焼骨が検出されたことから、これらは食糧資源などとして利用された後の残滓の可能性はある。

また、古墳時代および奈良・平安時代の竪穴住居址や中世の溝址からは、ウマやウシが検出された。このうち、中世の溝址(M1)からはウシの下顎が確認されたほか、種類の特定に至らないが大型獣類の四肢骨も確認されている。また、隣接する北一本柳遺跡の中世および中世と考えられる溝址においても、ウマやウシの下顎骨やある程度まとまった歯牙片の検出例があり、これらの試料の出土状況の検証により、松井(1997)による出土例などとの比較・検討が可能になると考えられる。

4.X線回折分析

(1) 試料

試料は、古墳時代中期の竪穴住居址から出土した暗赤褐色を呈する塊状物質(試料番号8:H16 P3)の1点である。

表4. 骨貝類同定結果

番号	出土遺物	出土位置	種類	部位	左右	部分	数値	被熱	備考
25	H1		No.10 哺乳類	ウマ	上顎歯	左	第3後臼歯	1	臼歯高42±
26	H13	カマド		哺乳類	顎頰	不明	破片	11 +	
27	H14	Ⅰ区		哺乳類	顎頰	不明	破片	1	○
28	H4		No.2 哺乳類	顎頰	不明	破片	1		
29	H4			脊椎動物門	鳥類/獣類	不明	破片	5	
30	H12	Ⅲ区堀方		哺乳類	顎頰	歯牙	破片	4 +	
31	H13		No.2 哺乳類	イノシシ	下顎骨	左	破片	1	土塊状
					下顎歯牙	左	第3後臼歯	1	
32	H14	カクラン		哺乳類	顎頰	不明	破片	1	穿孔有 縦9.1~10.7土長89.6
33	H20			哺乳類	大型顎頰	不明	破片	1	土塊状
34	H20		No.4 哺乳類	ウマ	上顎歯牙	左	第3後臼歯	1	
35	H21	カマド		哺乳類	顎頰	四肢骨	破片	33 +	○
36	H24	カマド		哺乳類	顎頰	不明	破片	15	○
				その他	不明	不明	破片	1	
37	H25	カマド堀方		哺乳類	ニホンジカ	木節骨	破損	1	○
38	H25	カマド		爬虫類	鱗	不明	破片	4	○
				鳥類	ニワトリ?	中足骨	遠位端	1	○
					鳥類	四肢骨	破片	3	○
				哺乳類	顎頰	不明	破片	11	○
				哺乳類	顎頰	歯牙?	破片	3	○
39	H27	Ⅱ区		哺乳類	ニホンジカ	上顎歯牙	第2前臼歯	1	
40	H34		No.1 哺乳類	ニホンジカ	上顎歯牙	歯牙	破片	21 +	
41	H35		No.3 哺乳類	ニホンジカ	臼歯	破片	7		
42	H43			哺乳類	ウマ/ウシ	四肢骨	破片	12	
43	準P134			哺乳類	ウマ	臼歯	破片	2 +	
44	M1		No.1 哺乳類	ウシ	下顎歯牙	右	第3後臼歯	1	
45	M1		No.3 哺乳類	ウシ	下顎骨	右	第1-3後臼歯部	1 +	第2後臼歯離立
46	M1		No.4 哺乳類	ウマ/ウシ	不明	破片	1	-	土塊状
47	M1		No.5 哺乳類	獣類	不明	破片	1		土塊状
48	M1		No.6 哺乳類	獣類	不明	破片	1		土塊状
							1		
49	M1		No.7 哺乳類	獣類	四肢骨	破片	21 +		
50	M1			哺乳類	大型顎頰	四肢骨	破片	1 +	

(2) 分析方法

各試料に認められる赤色顔料を採取し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について下記の条件で測定を実施する。

装置：理学電気製MultiFlex Divergency Slit：1°
 Target：Cu (K α) Scattering Slit：1°
 Monochrometer：Graphite湾曲 Receiving Slit：0.3mm
 Voltage：40KV Scanning Speed：2° /min
 Current：40mA Scanning Mode：連続法
 Detector：SC Sampling Range：0.02°
 Calculation Mode：cps Scanning Range：3~45°

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

(3) 結果および考察

X線回折図を図1に示す。試料番号8からは、赤鉄鉱 (hematite) のほか、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石：anorthite) が検出される。赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ (赤鉄鉱：hematite[α -Fe 2 O 3]) のほか、水銀朱 (辰砂：cinnabar[HgS])、鉛丹 (鉛丹：minium[Pb 3 O 4]) などがある。試料番号8は、赤鉄鉱が含まれているが、この他に赤色を呈する鉱物が見られないことから、ベンガラと判断される。

ベンガラは天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合もある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状 (塊状、球状、不定形など) 構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄 (いわゆる高師小僧) を利用したものであることが明らかとなっている (岡田,1997;織幡・沢田,1997)。

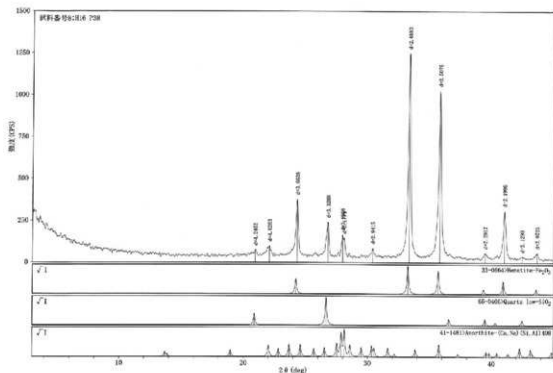


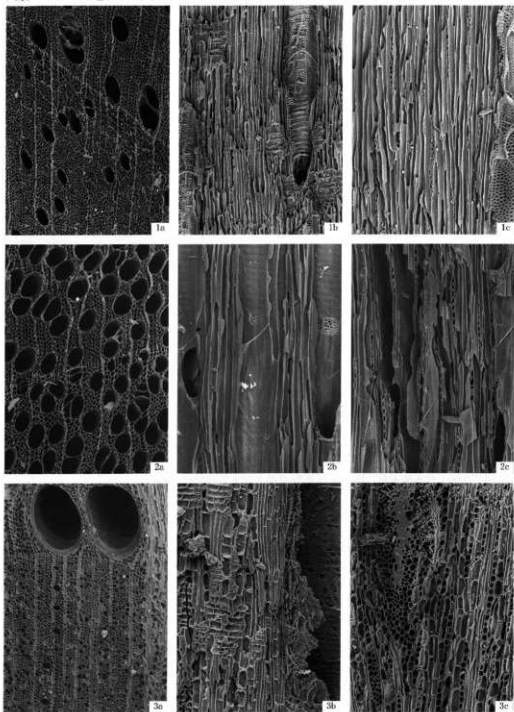
図1. X線回折図

このような背景から、ベンガラの材料となる赤鉄鉱は身近に普通に存在していることが想定され、本遺跡でも周辺で比較的容易に入手できた可能性がある。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p。
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所, 81-181。
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所, 66-176。
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所, 83-201。
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所, 30-166。
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所, 47-216。
 松井 章,1997,考古学から見た動物利用,部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2-31。
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p。
 岡田文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39。
 織幡順子・沢田正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77。

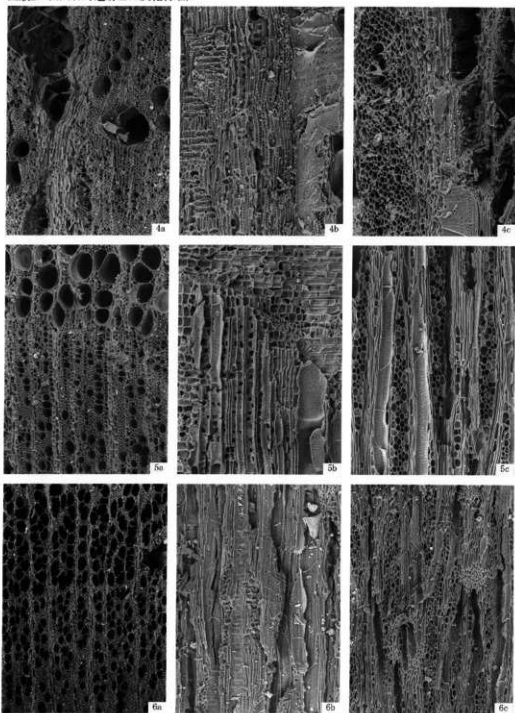
図版1 西八日町遺跡Ⅱの炭化材(1)



1. オニグルミ(試料番号73)
 2. ヤナギ属(試料番号94)
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節(試料番号87)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

図版2 西八口町遺跡Ⅲの炭化材(2)



4. コナラ属コナラ亞属コナラ節(試料番号82)

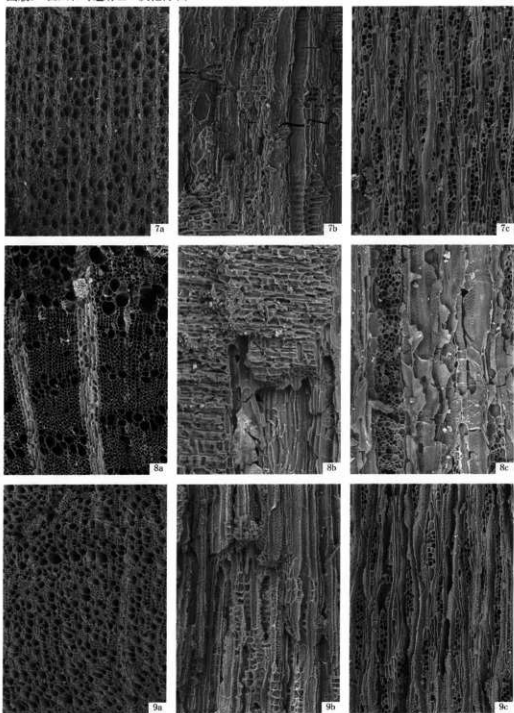
5. モモ(試料番号79)

6. サクラ属(試料番号82)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b, c

図版3 西八日町遺跡Ⅱの炭化材(3)



7. パラ科ナシ亜科(試料番号75)

8. ウロギ属(試料番号79)

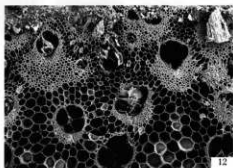
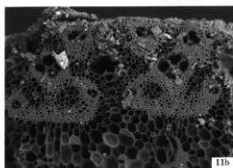
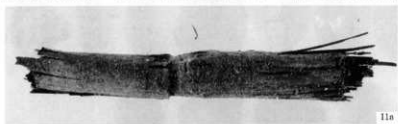
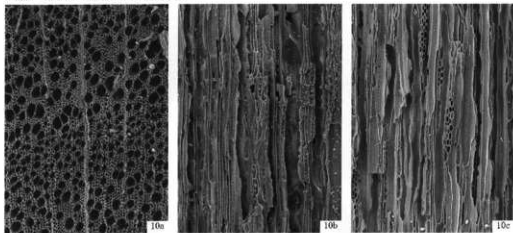
9. イボタノキ属(試料番号76)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: a

200 μ m: b, c

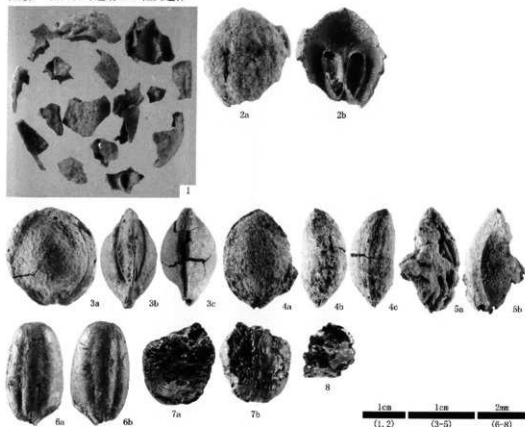
図版4 西八日町遺跡の炭化材(4)



10. ガマズミ属(試料番号78) a:木口, b:柀目, c:板目
 11. ササ類(試料番号90) a:全景, b:横断面
 12. イネ科(試料番号91) 横断面



図版5 西八日町遺跡Ⅲの種実遺体



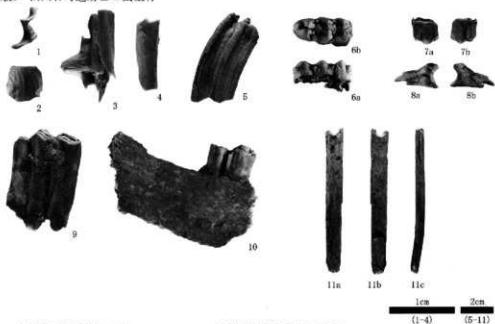
1. オニグルミ 核(試料番号21;H5 IV区)
2. オニグルミ 核(試料番号25;H33 II区)
3. アンズ近似種 核(試料番号30;M1)
4. スモモ 核(試料番号27;H40 IV区)
5. モモ 核(試料番号26;H36 III区)
6. イネ 胚乳(試料番号22;H5 P8)
7. コムギ 胚乳(試料番号22;H5 P8)
8. マメ類? 種子(試料番号24;H16 カマド)

バリノ・サーヴェイ株式会社,2005,聖原遺跡の自然科学分析,「長土呂遺跡群 聖原 長野県佐久市 浅間山麓田切大地上における巨大古代集落遺跡の調査(第5分冊)」,佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集,佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会,140-206.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版6 西八日町遺跡Ⅲの出土骨



1. 腹足綱(試料番号38;H25) 2. 腹足綱(試料番号38;H25)
 3. ニトリ?中足骨(試料番号38;H25) 4. 鳥類四肢骨(試料番号38;H25)
 5. ウマ左上顎第3後臼歯(試料番号25;H1 No. 10)
 6. イノシシ左下顎第3後臼歯(試料番号31;H13 No. 2)
 7. ニホンジカ右上顎第2前臼歯(試料番号40;H34 No. 10)
 8. ニホンジカ末節骨(試料番号37;H25 カマド掘方)
 9. ウシ右下顎第3後臼歯(試料番号44;M1 No. 1)
 10. ウシ右下顎骨(試料番号45;M1 No. 3)
 11. 骨製品(試料番号32;H14 カクラン)

東大門先遺跡ⅡではD7土坑の底部付近で弥生時代前期水Ⅱ式土器片に覆われる形でマメ類種子が破片、完形あわせて719点検出された。マメ類種子は炭化しており、黒色、楕円形で保存状態が比較的良好な356点(完形113点、破片243点)の計測値は長さが最大8.49mm、最少3.84mm、平均5.74mmを測るが、8mm以上の2点を除くと7.55mm~3.84mmの範囲に数値が分布する。幅は最大5.56mm、最少2.75mm、平均3.83mmを測るが、最大の5.56mmのもの1点を除くと4.95mm~2.75mmの範囲に数値が分布する。厚さが最大5.55mm、最少2.72mm、平均4mmを測るが、最大の5.55mmを除くと、4.93mm~2.72mmの範囲に数値が分布する。

保存状態の良い完形個体からマメ類の特徴である細長い長楕円形の臍が確認され、また子葉の合わせ目から半分に割れた破片の内面に北大基準(吉崎1992)で、幼根が臍の終わりから急に立ち上がり、胚珠中央に向かって延びるアズキグループに該当する幼根や初生葉の状態が確認され、それらはササゲ属(アズキ類)の可能性が高い。また、計測数値の分布のまとまりからして、同定に至らなかったマメ類種子の大半もササゲ属の可能性が高い。

マメ類種子1点の放射性炭素年代測定の結果、補正年代 $2,430 \pm 25$ yrBP〔(補正年代暦年校正用 $2,429 \pm 23$ (暦年校正年代 2σ calBC551-calBC405(78.8%) calBC744-calBC688(17.4%) calBC664-calBC647(3.8%))〕となった。佐久市東五里田遺跡で弥生時代前期水Ⅱ式土器が出土したD7号土坑出土の炭化物の放射性炭素年代測定では補正年代 $2,370 \pm 40$ ($\delta^{13}C$ 補正無し $2,360 \pm 30$)の数値が得られており、東大門先遺跡ⅡD7土坑出土のマメ類種子もそのほとんどが弥生時代前期の資料と推定される。

最近、縄文時代のマメ利用の議論が活発だ。縄文時代遺跡出土のマメ科種子出土事例やレプリカ法などで土器のマメ類種子圧痕の事例が蓄積され、マメ類種子の大きさと形状と臍の構造から新たな同定基準も提案されている。(小畑・佐々木・仙波2007)。特にダイズ属については、中部高地の縄文時代中期土器などから、現生種栽培ダイズサイズのダイズ属種子の種子圧痕が検出された。植物学側でダイズ属の栽培種ダイズは同じダイズ属の野生種ツルマメから進化したとする考えが定説であるが、この縄文時代中期の栽培ダイズサイズのダイズ属種子が管理なり、栽培なり如何なる過程で発生したか、その追究が課題となっている。ただ少なくとも、管理レベルで人が何らかの関与をした結果、これらの栽培ダイズサイズのダイズ属種子が発生した蓋然性は高そうだ。

一方、ササゲ属種子も出土種子なり、土器の種子圧痕では縄文時代前期からその存在が確認されている。2009年9月時点で縄文時代遺跡出土のササゲ属種子は29例、土器の種子圧痕は14例あるという(中山2009)。縄文時代遺跡出土のササゲ属種子はそのほとんどが栽培種アズキ、野生種ヤブツルアズキやノラアズキの仲間とまでは絞り込めるが、その明確な区分は難しい。なお、福井県鳥浜貝塚で縄文時代前期のササゲ属「栽培種」ヨクトウ」が検出された話題になったが、これは今日では野生種ヤブツルアズキかノラアズキの可能性が高い。

さて、植物学ではササゲ属の栽培アズキは野生種のヤブツルアズキが進化したとする考えが定説だ。しかし、前術の通り、遺跡出土のササゲ属種子や土器の種子圧痕ではそれが栽培種アズキなのか、野生種ヤブツルアズキかノラアズキなのかの判断が難しいならば、ここでササゲ属の栽培化を追究するにあたり、ある時期からのササゲ属の集中的利用を確認することが重要となろう。その意味では、中部高地の弥生時代前期の土坑から719点ものササゲ属と推定されるマメ類種子が出土した意味は大きい。栽培もしくは、それに近い形でこれらにヒトの手が加わっている蓋然性が高いのではないかと。

中部高地においては、長野県飯田市石行(いしぎょう)遺跡で縄文時代晩期後葉女鳥羽川式土器に稲糊圧痕、山梨県中道遺跡で縄文時代晩期末水Ⅰ式もしくは弥生時代前期水Ⅱ式土器にオオムギ圧痕、長野県松本市石行(いしご)遺跡で縄文時代晩期末水Ⅰ式新段階土器のアワ・キビ圧痕が確認されている。中部高地では、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけて、朝鮮半島起源の水稲耕作とともに

にアワ、キビなどの雑穀の畠作技術も体系だって伝播したと考えられる。本遺跡出土のササゲ属が仮に栽培種アズキである場合、栽培種アズキもアワ、キビなどとともに半島から畠作技術とともに伝播したと考えられる一方、列島内で伝統的に管理され、馴化したササゲ属が半島起源の畠作の対象物に組み込まれたと考えることもできる。本遺跡出土弥生時代前期氷Ⅱ式の上坑出土719点のマメ類種子から派生する問題は小さくなく、中部高知の弥生前期の生業を考える上で今後の基準資料と評価できる。

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖「2007「土器匠痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15-297
-114頁 日本植生史学会

小畑弘己 2008『樞東先史古代の穀物』3 熊本大学

佐久市教育委員会編 2004『東五里田遺跡』

佐々木由香・中沢道彦・那須浩郎・米田恭子・小泉玲子 2009「長野県石川遺跡と神奈川県中屋敷遺跡出土土器における縄文晩期
終末から弥生前期のアワ圧痕の同定」『第24回日本植生史学会大会 植物と人間の共生 植物は栽培化（ヒトの関与）でどう
変化したか』日本植生史学会・九州古代種子研究会

中沢道彦・林野毅 1988「レプリカ法による縄文時代晩期土器の糊状圧痕の観察」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会 pp.
1-28

中沢道彦 2009「縄文農耕論をめぐって」『弥生時代の考古学Ⅴ食糧の獲得と生産』同成社

中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和・柳原功一・佐野隆 2008「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析（2）-山梨県上
ノ原遺跡、酒呑場遺跡、中谷遺跡-」『山梨県立博物館研究紀要』2 1-10頁 山梨県立博物館

中山誠二・関岡俊明 2009「山梨県女夫石遺跡の縄文時代中期のマメ圧痕」『山梨考古学論集VI』山梨県考古学協会

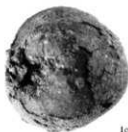
中山誠二 2009「縄文時代のアズキ（*Vigna angularis*）」『第24回日本植生史学会大会 植物と人間の共生 植物は栽培化（ヒ
トの関与）でどう変化したか』日本植生史学会・九州古代種子研究会

古崎昌一 2003「先史時代の雑穀：ヒエとアワの考古植物学」『雑穀の自然史』



1a

1b



1c

1a:正面
1b:側面
1c:背面



2



3

2:マメ類 種子内面
3:マメ類 種子内面

2mm



1a

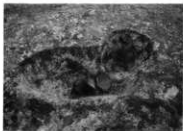


1b



1a: 側面
1b: 正面
1c: 断面

2mm



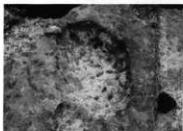
D4 完掘 (西より)



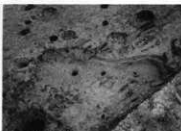
D5 完掘 (東より)



D6 完掘 (南より)



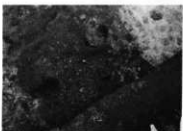
D7 完掘 (北より)



D9 完掘 (南より)



上 D10 完掘
下 D10 掘方 (南より)



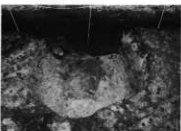
D11 完掘 (南より)



D12 完掘 (南より)



D13 完掘 (南より)



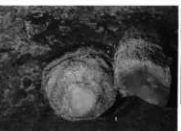
D14 完掘 (北より)



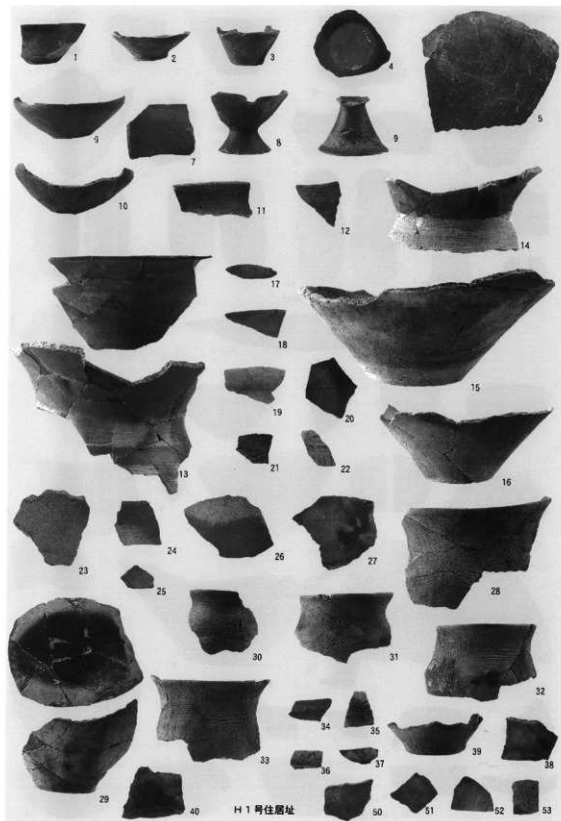
D15 完掘
セクション (南より)

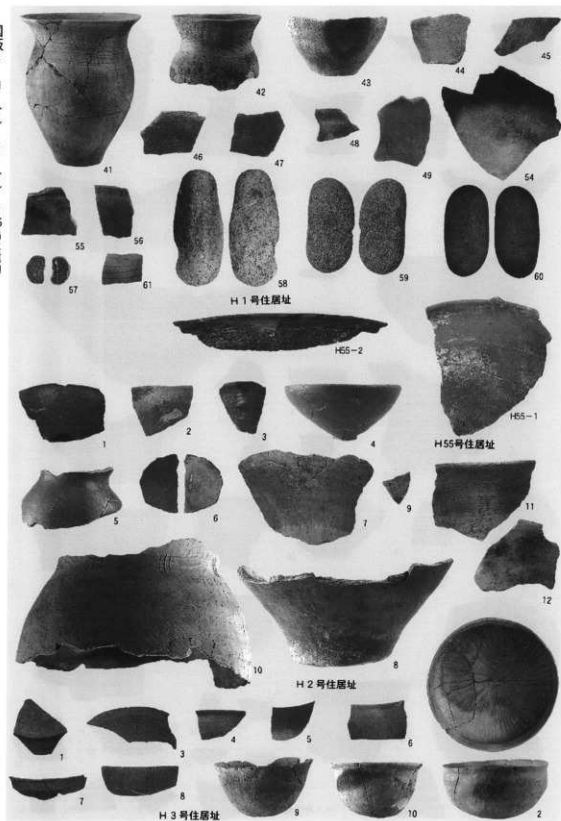


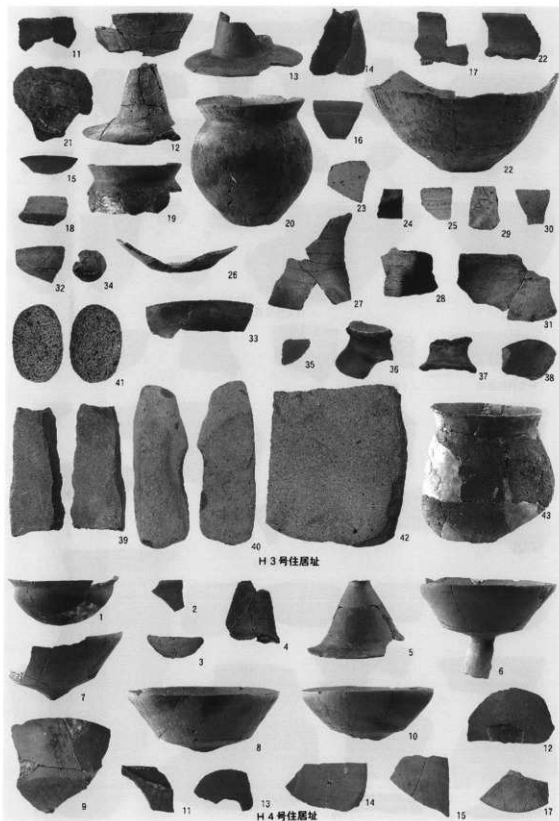
D16 完掘 (北より)



D17 完掘 (南より)

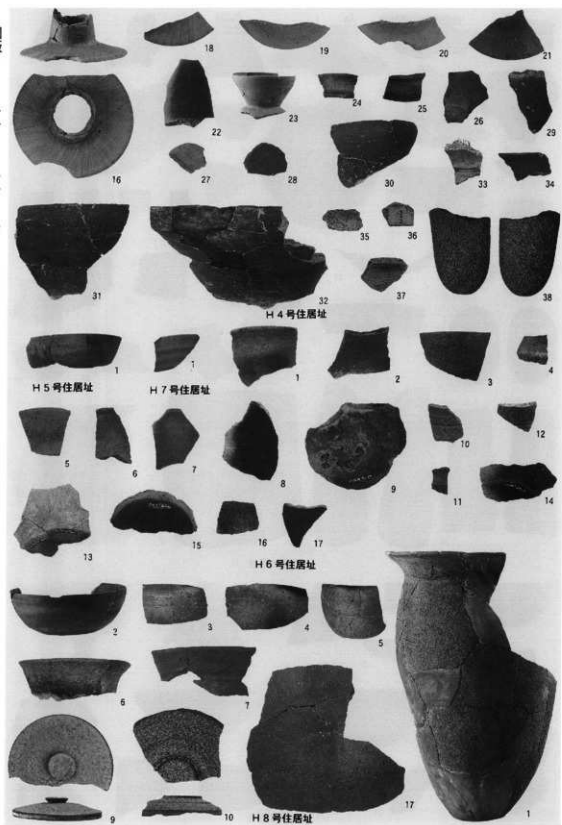


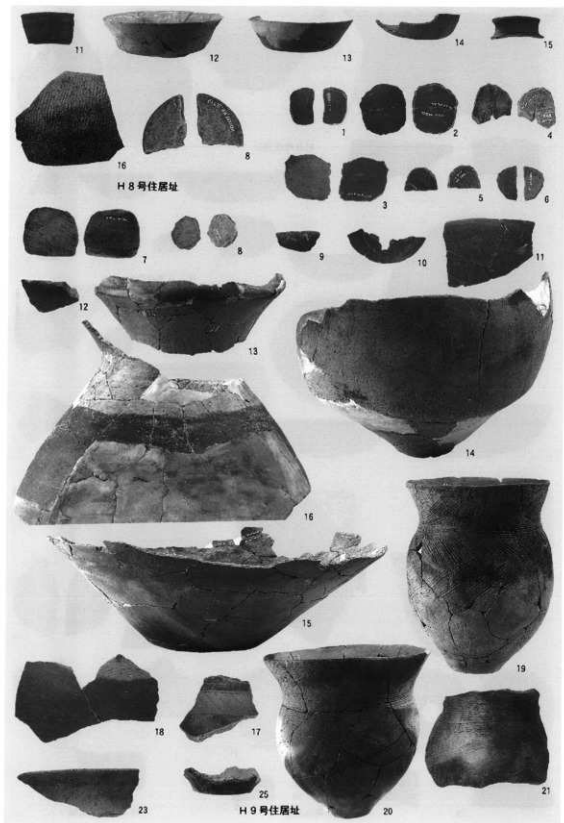


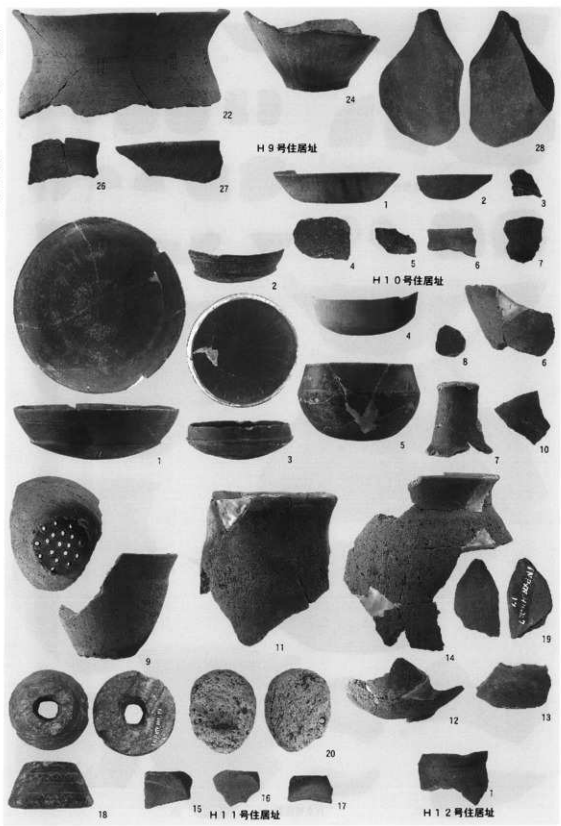


H3号住居址

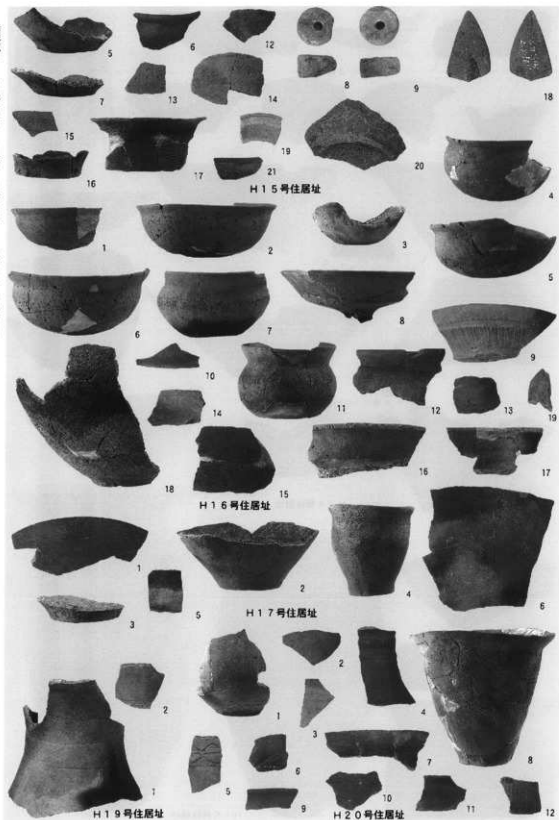
H4号住居址

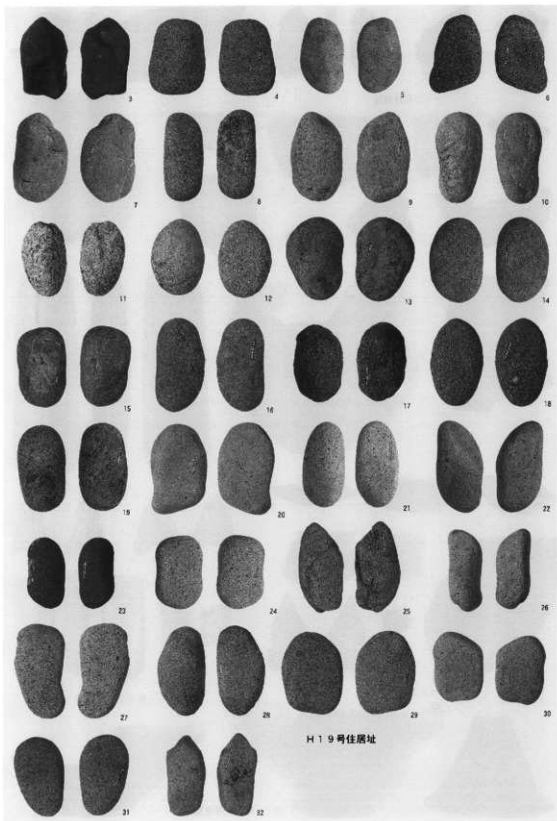




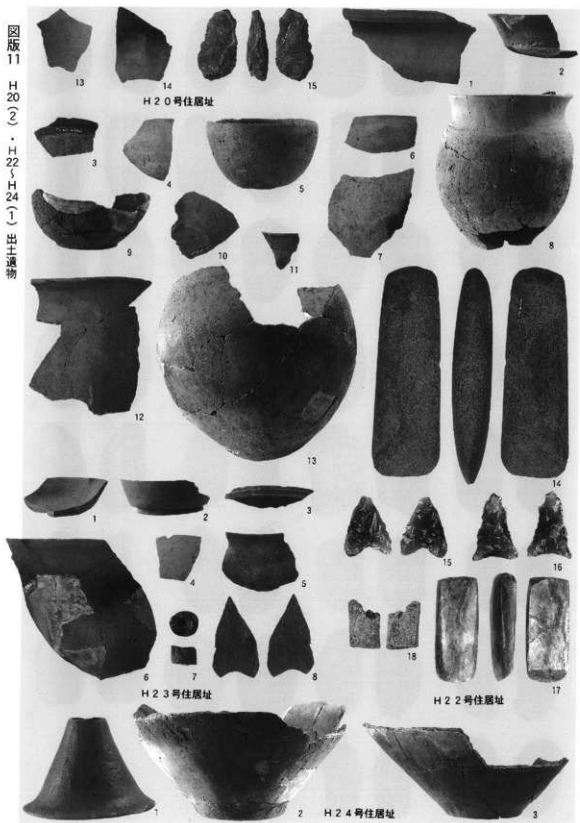




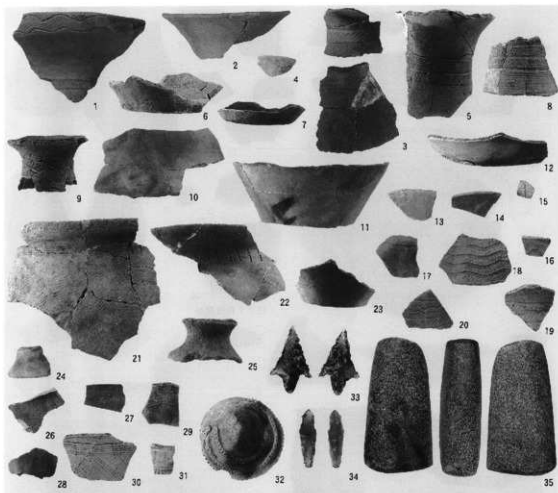




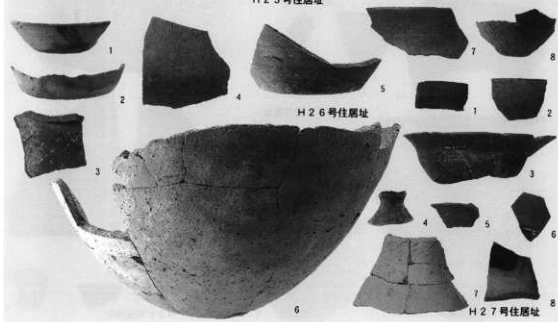
H 19 号住居址



図版 12
H 25、H 27 (1) 出土遺物

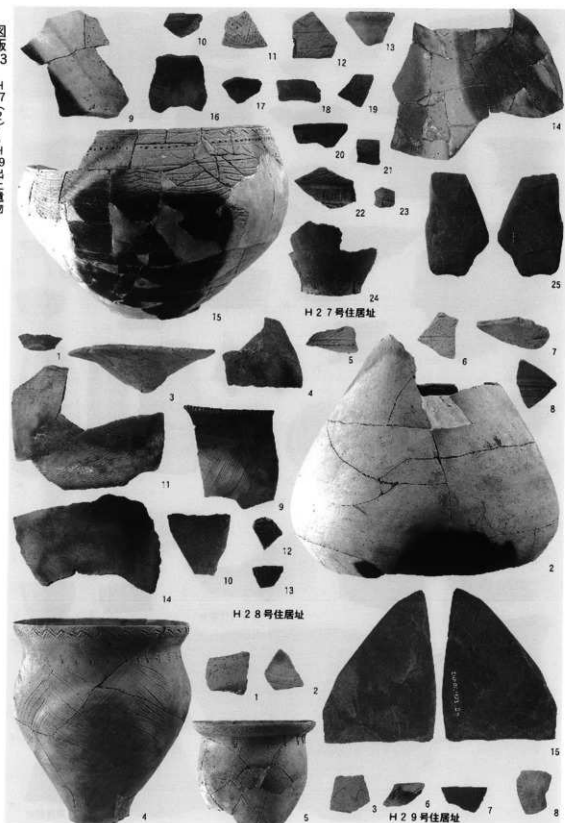


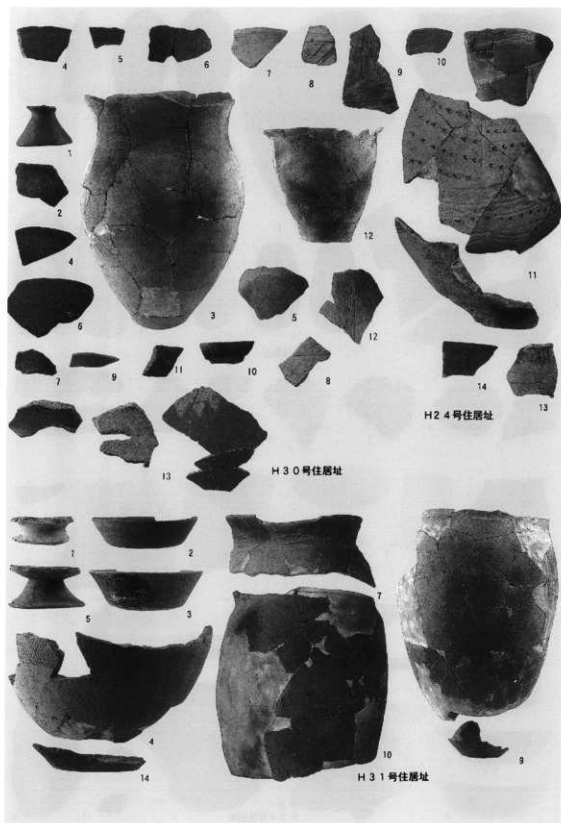
H 25 号住居址

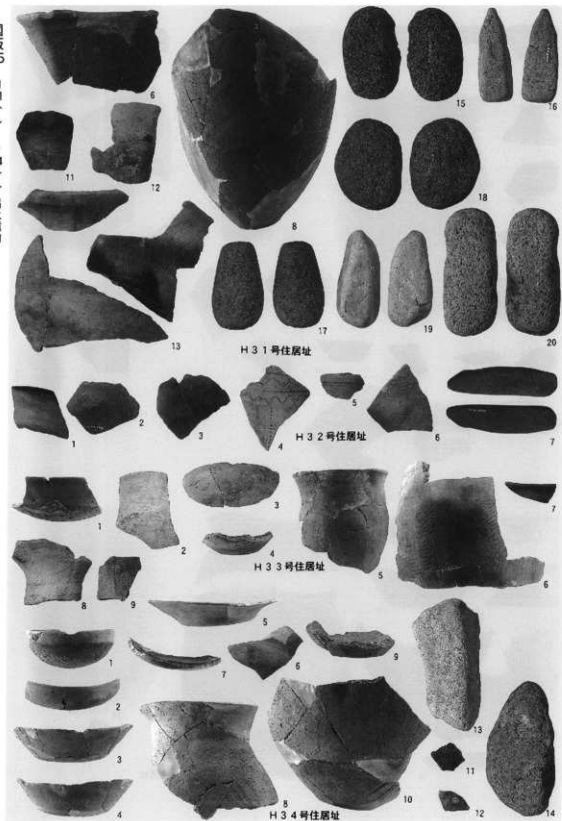


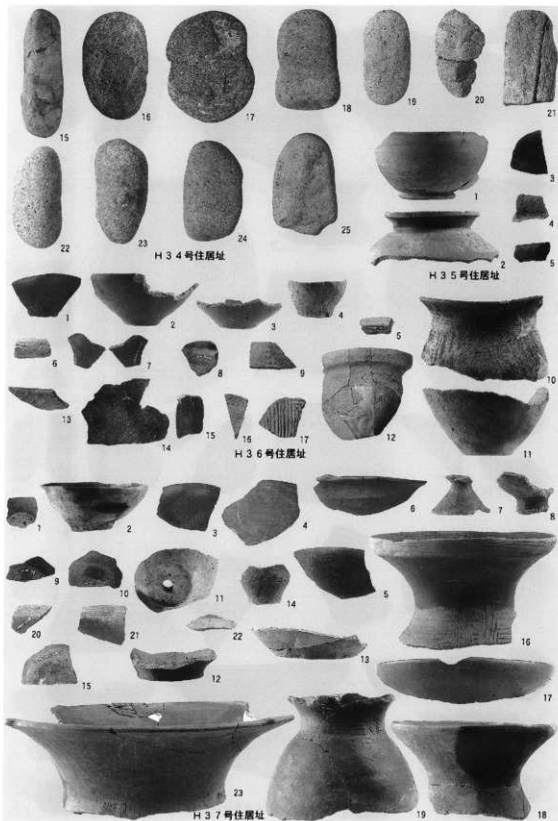
H 26 号住居址

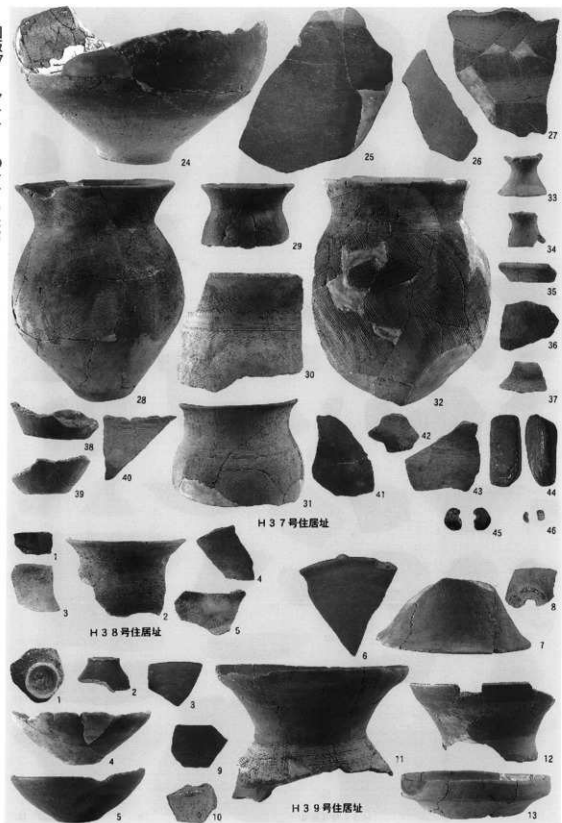
H 27 号住居址



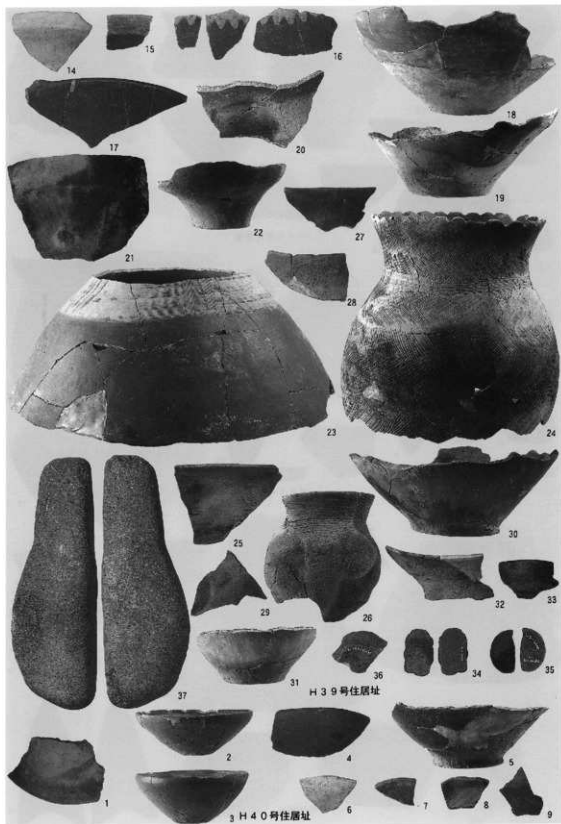


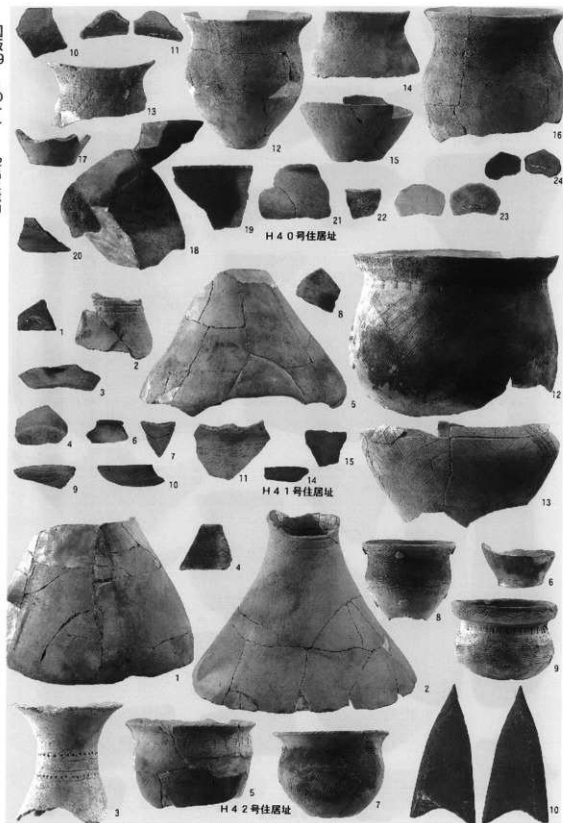


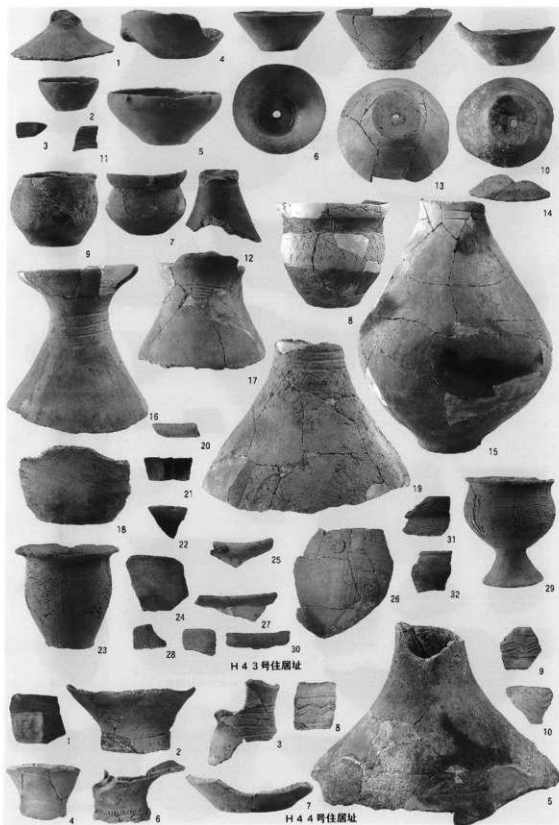


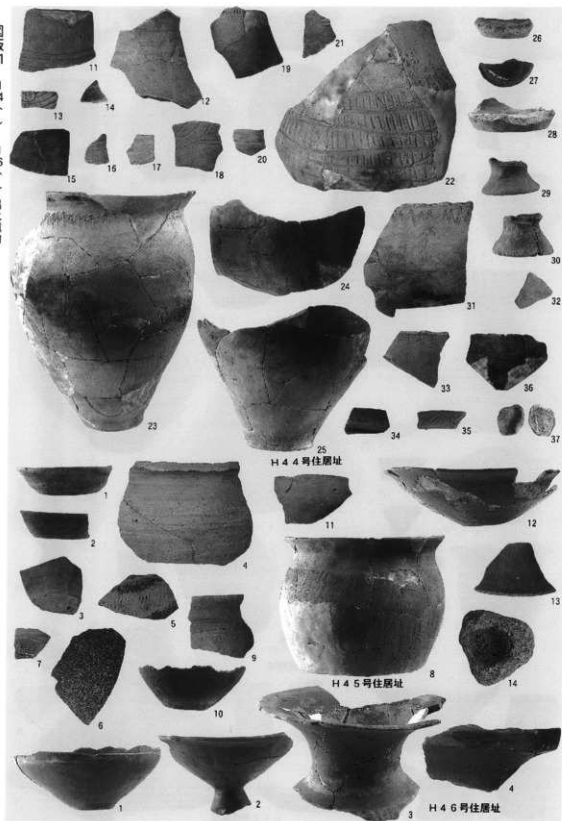


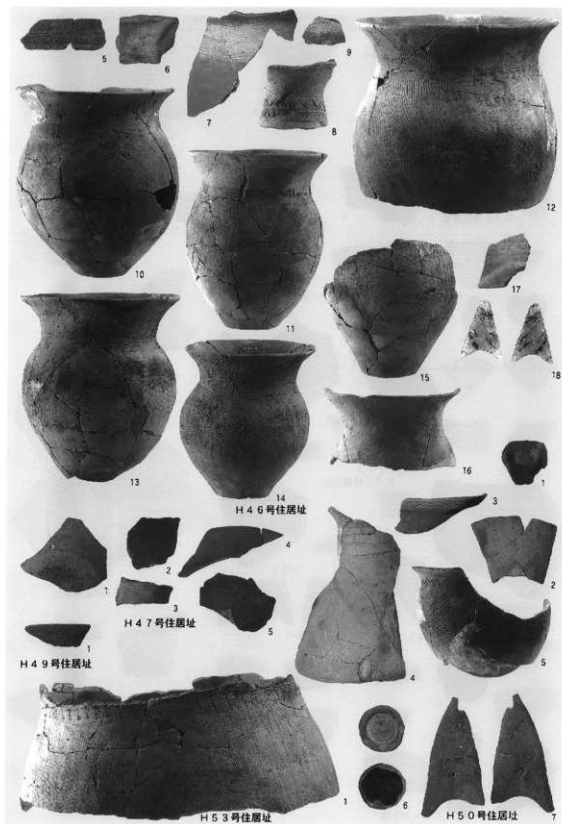
図版 18
H 39 (2)・H 40 (1) 出土遺物

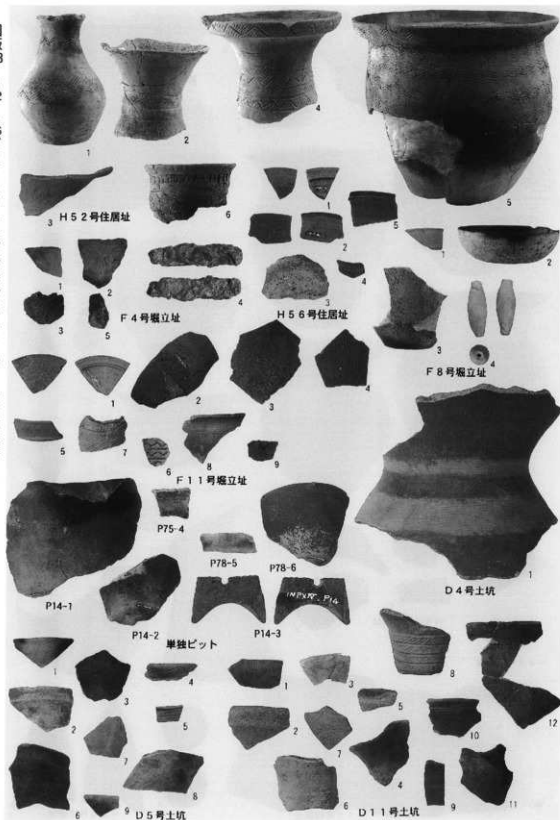


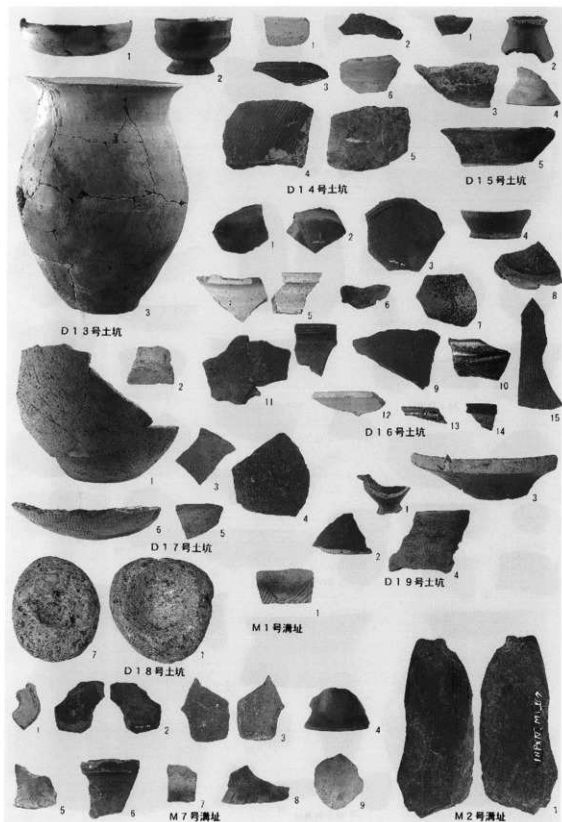


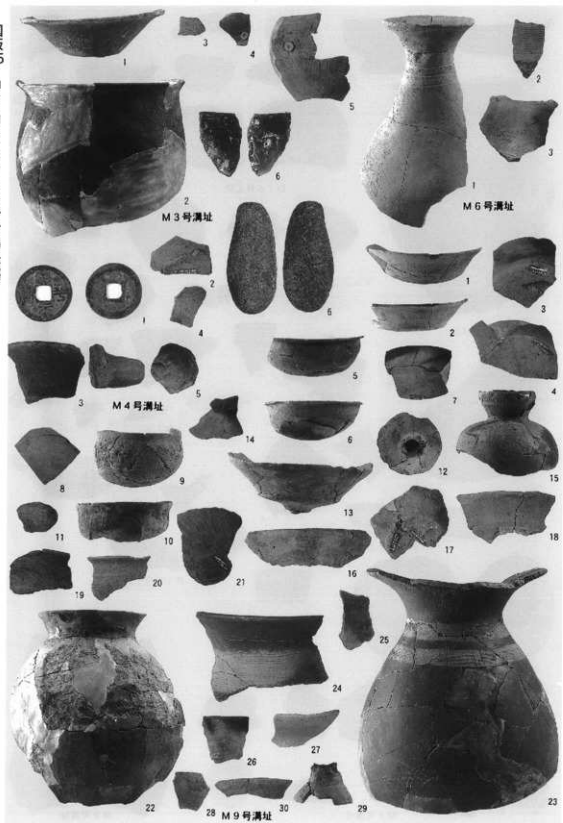


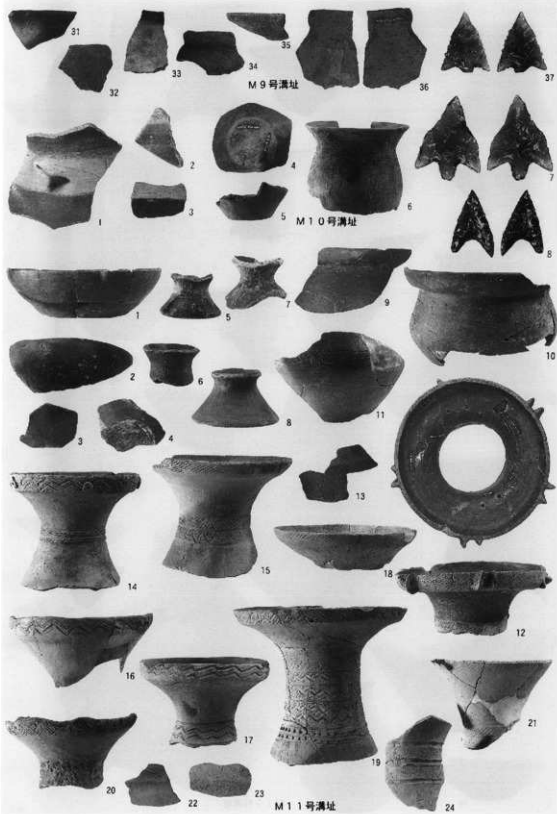


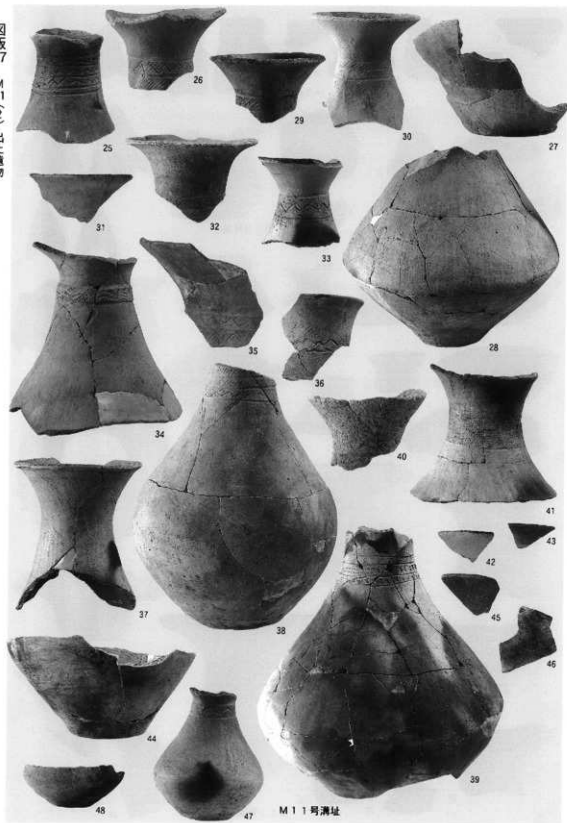


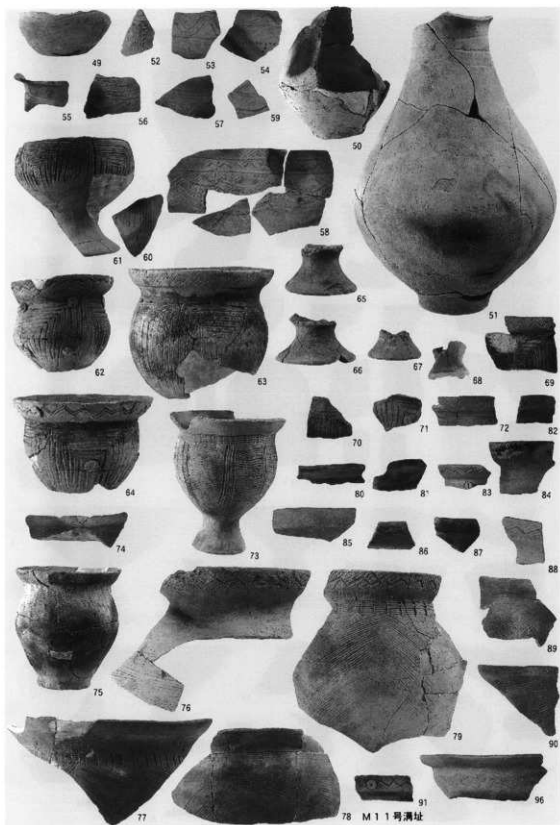


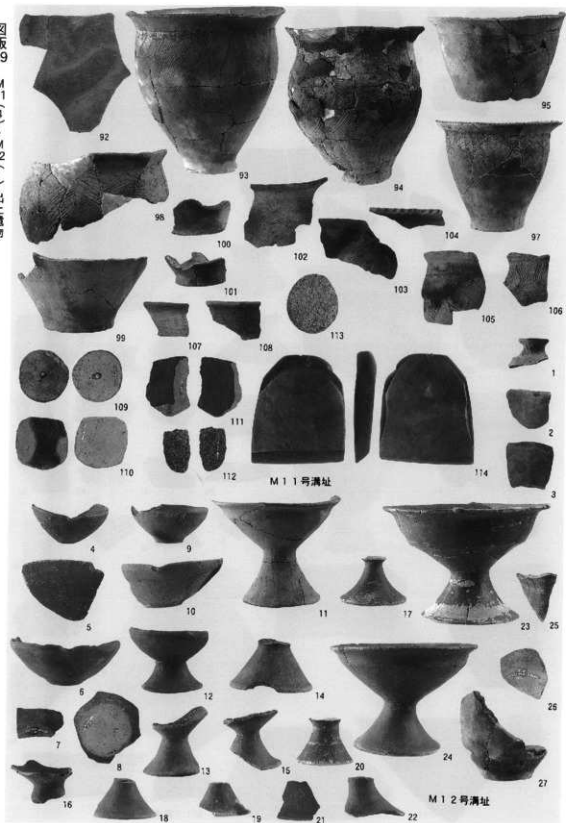


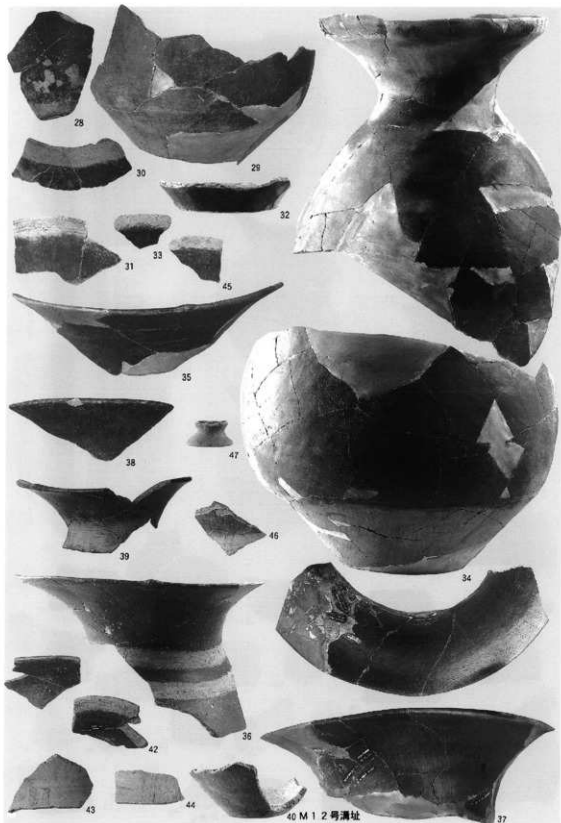




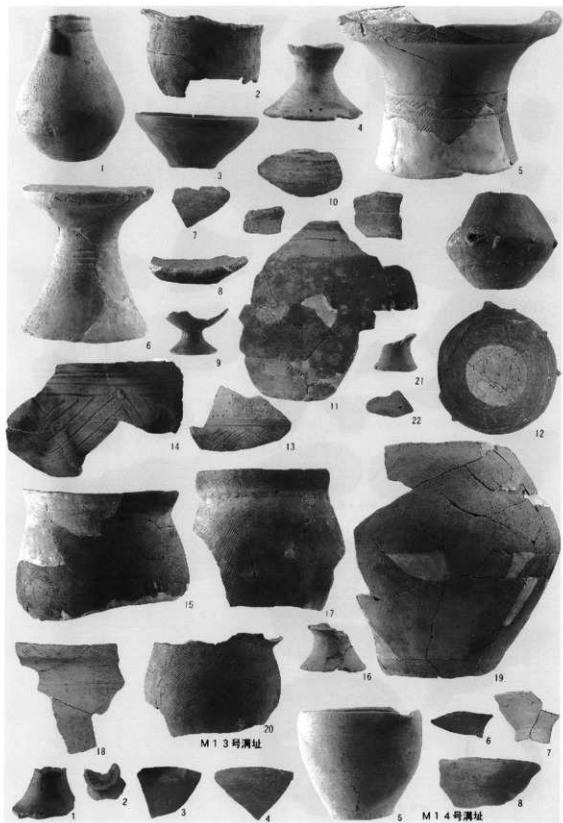














佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集 第1分冊

西一本柳遺跡XIV

——— 長野県佐久市岩村田 原東1号線発掘調査報告書

2010年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

報告書抄録

ふりがな	にしいっぽんやなぎいせき じゅうよん
書名	西一本柳遺跡XIV
副書名	
巻次シリーズ名	佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	175集 第1分冊
編者名	森泉かよ子
編集機関	佐久市教育委員会文化財課
発行機関	佐久市教育委員会文化財課
発行年月日	20100331
作成機関ID	
郵便番号	3850006
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな	にしいっぽんやなぎいせき じゅうよん
遺跡名	西一本柳遺跡XIV
ふりがな	ながのけんさくしいむらだにしいっぽんやなぎ
遺跡所在地	長野県佐久市岩村川字西一本柳
市町村コード	20217
遺跡番号	52
北緯	36° - 15' - 59" (世界測地系)
東経	138° - 28' - 06" (世界測地系)
調査期間	20060405 - 20070114
調査面積	4,700㎡
調査原因	まちづくり交付金事業 都市計画道路3.3.3. 原東1号線
種別	集落・環濠
主な時代	弥生中期・弥生後期・古墳中期・古墳後期・奈良・中世
遺跡の概要	集落-古代-竪穴住居址+掘立柱建物址+ピット+土坑+溝 -弥生土器+須恵器+土師器+金属製品+石製品 道路-中世-溝-付
特記事項	弥生中期から奈良時代までの集落変遷と環濠